

徳島の剣道

第18号



徳島県剣道連盟



平成13年度 後期剣道講習会 高橋俊昭教士八段をお招きして



第25回 徳島県剣道段別選手権大会各段優勝者

前列右より

- | | | | | | |
|--------|----|---|---|----|---------|
| 〈女子の部〉 | 初段 | 昇 | 志 | 穂 | (富岡東高) |
| | 二段 | 岸 | 香 | 織 | (富岡東高) |
| | 三段 | 山 | 恵 | 里子 | (徳島文理大) |
| 〈男子の部〉 | 初段 | 樫 | 圭 | 介 | (小松島西高) |
| | 二段 | 神 | 元 | 駿 | (阿南工) |
| | 三段 | 矢 | 野 | 俊夫 | (徳島大) |
| | 四段 | 高 | 橋 | 大和 | (警察支部) |
| | 五段 | 富 | 田 | 圭介 | (警察支部) |
| | 六段 | 佐 | 藤 | 佳宏 | (徳島支) |

題字
堀江幸夫

「腹」「腰」の充実を

徳島県剣道連盟会長 遠藤一美



世界的なテロ事件や狂牛病による食物

への不審、長引く景気の低迷と世の中の不安は尽きない昨今であります。しかしながら、昨年の我が剣道連盟に目を向け

ますと、全国警察剣道大会での徳島県警察の三部優勝、富岡東高校のインターハイ三位、叙勲、体育協会・防犯協会よりの表彰等々、それぞれの分野での活躍があり、うれしい限りであります。

剣道は、「大変に臨んで、生死を明らかにする術」であると言われております。言葉を変えれば、いざという時に、「腹」のできた、「腰」のすわった対応ができるよう、自分を鍛えることが剣道において、大切であると思えます。「腹」や「腰」が出来ているかどうかは、単に身体の安定状態だけではなく、精神的な充実と安定をも含んだ評価でもあります。

剣道の背筋が伸びた美しい構えは、まさに、「腹」「腰」が決まった形の上のできるものでありますし、私たちが日々稽古している気剣体一致の技も「腹」「腰」の充実なしには、決めることができま

せん。

この「腹」「腰」をつくるという剣道の捉え方こそ、二十一世紀における体育・スポーツを牽引していく力になり、青少年の健全育成になり得ると確信します。

きびしい社会状況ではありますが、「腹」「腰」を充実させながら、自ら強く正しく生き抜いて行く剣道修行を共々にやりきましょう。徳島県剣道連盟へ、会員の皆様の熱い思いと御指示を頂けますよう心よりお願い申し上げます、挨拶といたします。

『徳島の剣道 第十八号』 目次 (案)

巻頭言	遠藤 一美	1
顕彰一覧		
中学校剣道優秀選手		
高等学校剣道優秀選手		
剣道有功賞	西野 四郎	7
叙勲	堀金 實	9
防犯協会表彰	西岡 侃	11
防犯協会表彰	藤井 利一	12
特別寄稿		
さあ今度は初段	ホセ・イグナシオ	15
矢部武雄先生のこと	坂本 功	17
先生を偲ぶ		
横田武文先生	市原 博幸	19
柏原 浩先生	橋本 健蔵	22
柏原 浩先生	吉田 租	24
柏原 浩先生	福永 徳	26
清原 亨先生	有賀 秀敏	28
思い出の一枚		
インターハイ三位に入賞して	堀江 幸夫	30
私は誰でしょう	河田 清実	32
全国講習会報告	中山 啓男	34
西日本中央講習会	福井 軍二	36

居合道中央講習会	岸田 光博	41
柳生講習	藤本 雅史	43
全剣連社会体育指導員養成講習会 (初級)	近藤 浩文	46
全剣連社会体育指導員養成講習会 (中級)	岡本 茂	47
高橋俊昭先生の講習を受けて	藤本 雅史	55
徳島の剣道史		
心形刀流の道統	坂本 裕二	61
支部だより		
板野東支部		
三好支部		
丹生谷支部		
警察支部		
各種大会に参加して		
全国スポーツ少年団剣道交流会	塩田 伯大	99
全日本都道府県対抗剣道優勝大会報告	高木 壽史	100
四国四県剣道大会	佐藤 智	102
全国家庭婦人剣道大会	竹内佳代子	103
四国・全国矯正職員武道選手権大会	中村 稔裕	105
全国高校選抜大会富岡西高校 (男子)	樫福 顕生	106
全国高校選抜大会富岡東高校 (女子)	河田 美紗	108
全国居合道八段選抜大会 三位	原田 勝	110
四国高校新人大会	美馬真奈美	111
インターハイ富岡西高校 (男子)	星野 宣哉	113
インターハイ富岡東高校 (女子)	昇 葉子	116
全国教職員剣道大会	福多 博史	118
徳島大学医歯薬学部剣道部一年報告	大場 博史	120

全国少年錬成大会	笠井 恵之	122
四国中学校総合体育大会 文理中(男子)	中村 文人	126
全国中学校剣道大会	玉田 康朗	127
全国中学校剣道大会阿南一中(女子)	村井 正志	129
全日本女子剣道選手権大会	坪井さくら	130
全日本東西対抗剣道大会	平野 誠司	132
国民体育大会	中尾 正輝	133
全日本居合道大会	一宮 和雄	134
全日本剣道選手権大会	宮田 圭介	136
全国青年大会	西野 知成	137
全日本実業団	園田 慎吾	140
全国警察剣道大会	山名 信行	141
全日本高齢者武道大会	南 充美	144
高齢者武道大会優勝	遠藤 一美	146
ネンリンピック	早川 一也	147
高齢剣友会報告	有賀 秀敏	148
大会所感		
第三十回県下少年剣道錬成大会(モーターボート会)	寺西ひとみ	151
第三十回徳島県社会人大会	藤本 辰夫	152
第三十一回眉山ライオンズ大会	瀧川 正敏	153
随 想		
国体の思い出(続)	大沢 孝彰	158
私の剣道	田村 清憲	159
打たずして相手を退げる	西谷 肇一	160
剣道、出合と家族	森本 敦子	162
ドイツ訪問記	三牧 岳	163

称号・段位合格者	玉田 晋作	167
七段に合格して	岡島 茂雄	168
七段合格の道程	白木 崇	170
七段に合格して	手塚十三子	171
これからが正念場	増田 和広	172
七段に合格して	糸田川三千男	173
稽古続けて運を待つ	糸谷 文雄	173
七段への道のり	藤本 敏治	175
六段に合格して	佐藤 和久	177
六段に合格して	原田 進	178
立派な先生と良き仲間恵まれて	中川 正	180
剣道と私	森岡 利彰	181
剣道六段に合格して新世紀に挑戦	矢武 秀生	183
六段審査を受けて		185
称号・段位合格者一覧		
がんばろう徳島		
徳島清風館道場はこうして生まれ前進する	久保 隆司	190
続けていて良かった剣道	鈴木 達也	192
道場だより	青木 茂生	195
剣道における競技性と教育性に関する研究	福多 雅英	196
徳島県における剣道、段級審査の動向	三牧 岳	201
少年強化遠征		204
大会の記録		208
徳島新聞に見る戦いの跡		242
昇段審査学科問題・解答例		282
徳島県剣道連盟事務分掌		282
平成十四年度徳島県剣道連盟行事予定表		420
平成十四年度審査実施計画表		1196
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等		1951
編集後記		192

平成十三年度 顕彰一覽

剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○西野 四郎 (大正六年七月三日生れ)

徳島県剣道連盟の常任理事、審議員として連盟充実の発展に尽くされた。特に、少年剣道の発展に力を注ぎ、現在も支部相談役として、地域の剣道発展に努力されている。その功績は顕著であり、会員の範たりうる。

叙勲 (勲五等瑞宝章)

○堀 金 實 (大正十四年四月八日生れ)

三十五年にわたり、警察官として、地域社会の信頼を得るとともに徳島県剣道連盟において、理事・審議員として、剣道の技能向上と普及発展に尽くした。

優秀校表彰 (全国高等学校体育連盟)

○富岡東高等学校 (女子)

第十回全国高校剣選抜大会で開催十回を記念し、表彰が行われた。なお、富岡東高は九回連続出場。内三位二回。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○蝦名 久作 (大正四年一月二十二日生れ)

徳島県剣道連盟の審議員、相談役を歴任し、連盟充実発展に尽くされた。また、小松島新開剣道クラブにおいて、少年および高校・一般と幅広く剣道指導にあたる等、本県体育発展に寄与した功績は顕著である。

防犯協会表彰 (徳島県防犯協会)

○西岡 侃

○丸岡 偉人

○藤井 利一

少年強化錬成皆勤賞

秋月 孝太 (徳島錬心館)

西條 敏浩 (津田小学校剣道教室)

大塚 亮太郎 (上八万剣道教室)

宇津 恭輔 (大麻錬成館)

暮石 貴之 (小松島少剣クラブ)

鈴木 啓介 (勝浦剣道教室)

杉谷 玄矢 (日和佐剣道スポーツ少年団)

向原 紳悟 (日和佐剣道スポーツ少年団)

谷 尚弓 (小松島少剣クラブ)

平成13年度 徳島県中学校剣道優秀選手

男	子	学 校 名	女	子	学 校 名
大	石 洋 史	阿南第二	吉 岡 穰	阿南第一	
中	村 文 人	徳島文理	宮 崎 のどか	阿南第一	
玉	田 康 朗	徳島文理	米 田 三和子	阿南第一	
花	房 祐 希	徳島文理	石 井 由 美	入 田	
魚	里 晋 平	徳島文理	森 由 伊	入 田	
橋	本 拓	徳島文理	近 藤 三菜子	鳴島第一	
樫	本 臨 太郎	相 生	新 居 見 綾	鳴島第一	
福	永 晃 久	相 生	森 本 かおる	鳴島第一	
川	口 了 意	相 生	塩 田 美 雪	鳴島第一	
佐	川 洋 介	坂 野	齋 藤 梓	大 麻	
坂	本 和 人	坂 野	武 内 恵	大 麻	
立	石 春 樹	阿南第一	米 倉 みゆき	池田第一	
大	西 喜 雄	阿南第一	崎 川 礼 菜	池田第一	
樫	谷 伸 男	日 和 佐	谷 澤 鮎 美	相 生	
西	宇 真 之	北 島	中 島 悠 紀	坂 野	
山	本 義 裕	鳴門第一	市 谷 理 恵	海 南	
須	見 政 弘	土 成	佐々木 知 江	城 東	
三	木 良 平	鳴島第一	磯 田 沙 希	新 野	
白	木 健 一 郎	石 井	藤 川 由 貴	藍 住 東	
山	崎 真 司	海 南	武 知 真 理	石 井	
川	口 雄 大	大 麻			
笠	井 優 利	市 場			

平成 13 年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

男 子	学 校 名	女 子	学 校 名
横 手 裕 一	富 岡 西	昇 葉 子	富 岡 東
星 野 宜 哉	富 岡 西	河 田 美 沙	富 岡 東
檉 福 顕 生	富 岡 西	美 馬 真 奈 美	富 岡 東
森 貴 雄	富 岡 西	田 中 佳 代 子	川 島
山ノ井 徹	富 岡 東	高 木 麻 未	川 島
竹 亭 賢 一	富 岡 東	寺 井 あ ゆ み	川 島
河 井 一 甫	富 岡 東	北 川 希 依	川 島
坂 本 昌 幸	富 岡 東	竹 内 亜 紀	城 西
元 木 覚	富 岡 東	古 高 和 代	城 西
木 下 力 哉	富 岡 東	長 田 亜 希 美	城 西
前 川 剛 志	阿 南 工 業	堀 川 陽 子	池 田
井 本 航	阿 南 工 業	増 田 容 子	池 田
住 友 直 城	阿 南 工 業	崎 川 加 菜	池 田
岩 佐 健 太	阿 南 工 業	檜 里 美	池 田
昇 省 吾	阿 南 工 業	東 根 ゆ かり	富 岡 西
蔵 本 浩 一	阿 南 工 業	坂 本 裕 美	富 岡 西
元 木 高 志	阿 南 工 業	山 下 久 美 子	富 岡 西
原 田 大	那 賀	豊 島 亜 矢	鳴 門
西 和 輝	徳 島 東 工 業	宮 崎 加 奈 子	鳴 門
松 本 栄 一 郎	徳 島 東 工 業	粟 田 裕 子	鳴 門
折 坂 祐 一	徳 島 東 工 業	横 井 佑 実	城 東
平 田 慎 太 郎	川 島	池 添 葉 月	城 東
六 條 勝 仁	川 島		
畑 山 秀 明	川 島		
北 野 真 也	川 島		
吉 岡 陵 次	阿 波		
河 原 弘 樹	脇 町		

剣道有功賞を拝受して

徳島支部

西野 四郎



この度図らずも全日本剣道連盟の十一月三日の理事会にて、剣道有功賞受賞の栄に浴し大変嬉しく存じます。これ偏に剣道連盟遠藤一美会長を始め役員の方、そして大勢の剣友の方々の御指導御支援の賜であり、深く感謝申し上げます。

賞を戴いて直ぐに脳裡に浮かんで参りました事は、青少年時代に教わった剣道が先ず思い出されます。昭和六年四月に県立徳島商業学校に入学、山家雪藏先生に剣道の手解きを受けました。当時は戦雲急を告げていた時代で、剣道は大変盛んでありました。

吉本彦吉・近江佐久郎両元老を始め高島永吉・須見善富・石井隆介・松尾誠一・浜谷 晋・藤川一太郎・石丸米藏外立派な先生方から心身両面に亘り戴いた偉大な薫陶は決して忘れません。やがて昭和十六年十二月八日大東亜戦争が勃発。言うまでもなく戦争下の剣道は毎日厳しい稽古の連続。早朝からの寒稽古、真夏の午後二時から土用稽古は青少年にとっては正に熾烈そのものでしたが、それにも耐える事が出来、生涯剣道を続ける決心がついたのもこの青少年時代があったお陰です。

昭和二十年八月、終戦を迎え、占領軍から剣道禁止の厳命が下り、

折角剣道を志す者にとってこれく位大きな衝撃を受けた事はありません。

ところが大先輩の尾形郷一先生が山家雪藏・竹原常雄両先生・旧撫養中学校OBの山田武雄・河野照雄・三木只雄外有志の先生方の先頭に立たれ、早くから剣道復活運動に情熱を燃やされ、ご尽力下さって、戦後初めての稽古会が尾形貫心道場に県下各地より多くの先生方や有志が馳せ参じ、盛大に開催されました。昭和二十四年十月頃であったと思います。私は山家先生より連絡を受け、心を弾ませ、喜んで参加させて頂きました。三十一歳でした。

この稽古会が発端となり、各郡市が先を競うて、支部の再開復興の礎となったと思います。

翌二十五年九月、県下を魁けて竹原常雄先生が高島先生をお迎えして親道館を創設されました。剣友勝浦 守・熊本淳一・今は亡き石井克太郎・山田新六郎・稲木紀一と共に入門致しましたが、稽古するにも道場は無く、先生の自宅選果場が道場に早変わり、それでも稽古の出来る喜び、中野 清・大沼繁太郎・浜口市郎の先輩からまた遠方からも大勢来られ、火土週三回の稽古は大変盛況そのものでした。

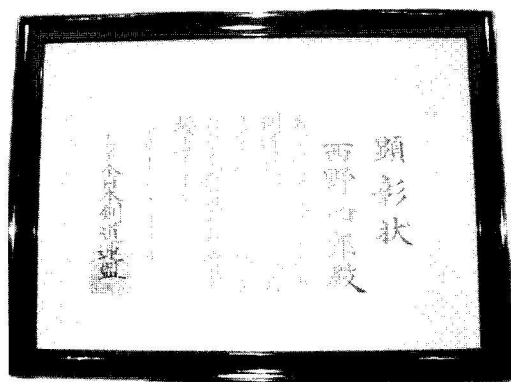
以来門下生も増え、私共六名の者は先生指導の下、中心となり後進者の指導育成に当り、逐次隆盛の一途を辿って参りました。

こうして剣道人生七十余年を回顧するに、何んと云っても、戦前の山家・戦後の竹原両先生に巡り会い、立派な師匠が得られた事、そして先人の優れた大先生に御指南が受けられたことに無上のよろ

こびを感じます。更には多くの剣友に恵まれた事が、少しは稔りのある充実した剣道人生となったと思います。

受賞に当り、茲に心から厚く御礼を申しあげ、御挨拶と致します。誠に有難度うございました。

徳島剣道界の最長老竹原常雄範士は御高齢ですが、大変お健やかで、来年平成十五年七月で満百歳をお迎えになられます。誠に喜びにたえません。



「ありがとうございます。」

小松島支部 堀金 實



入院先の病室で長男の嫁から「爺ちゃん叙勲表彰をしてくれるようでよ。しかし、内示の内示の様な連絡であった」と言うのが私の知った一報である。思えば長い月日の間で思いもよらぬ出来事を体験して来た事は何度かはある。

しかし、叙勲などは思いもしない夢物語で実感が湧いてこない。どちらにせよ、十一月三日がくれば判ると思ったのが実感である。そして、十一月三日の朝刊で勲五等瑞宝章の受章を確認しました。思えば、昭和二十年九月二十五日、徳島県警察官を拝命し、昭和五十六年四月一日までの三十五年七ヶ月の期間を無事勤め上げ、事故なく退職する事が出来ました。その約二十六年間は捜査関係の仕事にたずさわっていました。また、その間、上司先輩からのご支援で警察庁長官表彰そして警察功労賞を受賞する事が出来ました。今回表彰もこの功労賞が大きな要因となっている事をつくづく感じとったのが実感であります。

人として人生の中で大きな節目を見た時、自分自身の自立と社会への奉仕を考えるのが常道であろうかと思えます。江戸時代の儒学者であった斎藤一斉の教えをおかりするならば、「少にして学べば

則ち壯にしてなすことあり、壯にして学べば則ち老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず」。しかし、残念な事に、今の自分には体力的、精神的にも出来得ないのが実感でございます。

ここで今後とも皆様からの温かいご指導とご鞭撻、それに叱咤激励を心からお願ひ申し上げます。

最後に私を支えてくれました多くの皆様に対し衷心よりお礼を申し上げます。 合掌

堀金 實先生 主な経歴

職歴

東京陸軍少年飛行兵学校卒業

20年8月 復員

20年9月25日 徳島県警察官拝命

39年3月20日 巡査部長に昇任

42年11月22日 警部補に昇任

55年4月1日 警部に昇任

56年4月1日 警視に昇任

警察歴 三十五年七ヶ月

刑事警察 二十五年四ヶ月

56年4月から62年3月まで 徳島市市役所嘱託職員

62年4月から平成5年1月まで 警察学校術科専任講師

受賞歴

昭和41年9月7日 術科功労賞 四国管区警察局長

53年3月14日 警察功労賞 警察庁長官

63年10月10日 体育功労賞 小松島体育協会

平成9年2月11日 体育功労賞 徳島県体育協会

団体役職歴

昭和58年4月1日から
平成9年3月31日まで 徳島県剣道連盟理事

平成元年4月1日から
平成9年3月31日まで 徳島県剣道連盟少年部長

平成5年4月1日から
平成9年3月31日まで 徳島県体育協会スポーツ少年団本部委員

現在 小松島体育協会理事

剣道選手歴

昭和29年10月 県下警察剣道大会個人戦 準優勝

30年10月 " " 第三位

31年11月 " " 第三位

昭和27年10月 広島管区内剣道大会団体戦 出場

28年9月 " " 出場

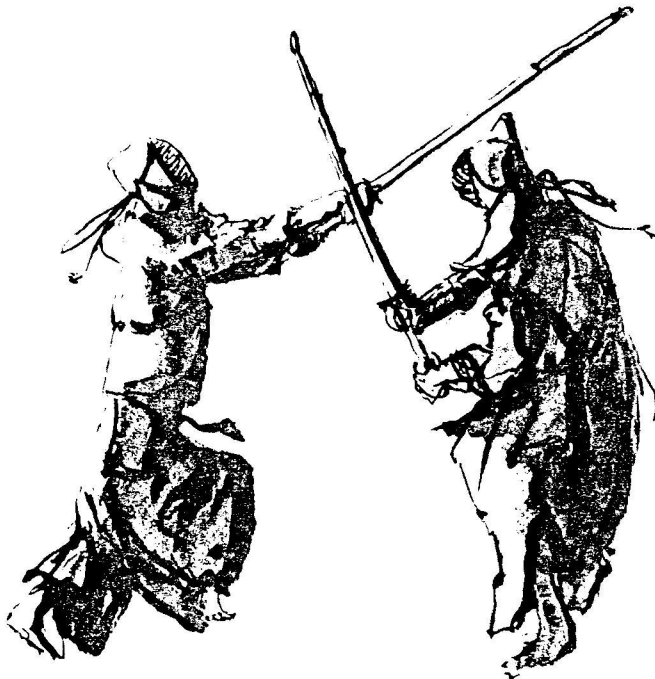
29年9月 四国管区内剣道大会団体戦 出場

36年9月 " " 八回出場

昭和33年10月 全国警察剣道大会個人戦 出場

34年10月 " " 出場

堀金先生は、この原稿を病室で書かれた後、平成十四年三月十六日にお亡くなりなりました。
心より、ご冥福を祈ります。



目的に向かつて

阿南支部 西岡 侃



平成十三年六月六日、徳島県警察本部で行われた徳島県防犯連合会(県知事・圓藤寿穂、県警察本部長・伴 敏之)総会で、防犯功労者として厳肅な雰囲気の中で感謝状をいただきました。受賞者の中に海部支部、丸岡偉人氏、阿波支部、藤井利一氏も同席でございました。この受賞者として本誌に原稿と依頼があり身にあまる光栄であり心からお礼を述べさせていただきます。

防犯功労者として、本当に価値ある活躍をしてきたらうかと思うと、これといった功績もございません。唯約三十年間、大野小学校剣道部の指導に携わって来たにすぎない、その間には、今は亡き範士七段・清原 栄先生、現県剣道連盟会長・教士七段・遠藤一美先生をはじめ、数多くの諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りました。その上、少年剣士の保護者の方に剣道を正しく理解していただき、計り知れない程のご支援も賜りました。お陰で大野小学校剣道部はよき成績と成果を納めることができます。

剣道は「剣の理法の修練による人間形成の道である」が剣道の目的であり、小学生の剣士に剣道の目的を充分理解させる事は、大

変わずかしく、保護者の方に「子供に剣道を習わしてよかった」と言ってもらえるむずかしさ。ある研修会で教わったことですが、教育とは「教え育てる」で教えた子供が育たなければ、ほんとうの教育とは言えないと教わり、「喜びの教育」は「育つ教育」につながると教わったことが、少年剣道の指導に大変役立ちました。

剣道の指導で「打たせ上手」「誉め上手」は剣道の上達と継続につながります。出来る限り子供のよいところを見つけて、そこを誉めてあげるように常に心掛けています。

今の世の中は「物が余って心が足りぬ」とも言われています。二十一世紀を担う青少年に、剣道を通じて、強い体力と豊かな心を養っていただけるように、これからも頑張りますので、よろしくお願ひ致します。

私自身もまだまだ未熟者でございますので、目的に向かつて一歩修行を重ね、自己を磨き成長させ、更に社会への役立ちをしなければと決意いたしておりますので、ご指導賜りますよう幾重にもお願いいたします。

後になりましたが、剣道連盟の益々のご発展と先生方のご健勝を心からお祈りいたします。お礼の言葉といたします。 合掌

藍より青し吉野川

阿波支部 藤 井 利 一



防犯協会の総会にあたり、図らずも知事より感謝状を頂く事となり、感激と言うより、私のような若輩者が表彰されてよいものか戸惑いました。これは私自身の力ではなく、阿波郡の先生方、諸先輩及び関係者の長年にわたってのご努力によるところと思われれます。私はわずか二十余年剣道教室のお手伝いをしてきたにすぎず、表彰されるべき方が大勢おいでになる事を思いますと恐縮するところです。

しかしながら、ずいぶん前倒しではございますが感謝状を頂き、推薦くださいました事を考えますと、これに見合う活動をしていかなければならないと思いを新たにするところです。まずは剣道をする事によって、すっきりした気分になり、元気で優しい子供に育ってくれることを願います。次に、保護者や関係者と連携して事にあります。そして、剣道が好きになり小学生よりは中学生、中学生よりは高校生、高校生よりは大学生、社会人と年を増やすことに興味や意欲を増していってくださることを望みます。どうか剣道連盟の皆様、この責務が果たせますようというより願望になりましたが、ご指導ご鞭撻よろしく願います。



阿波支部では春と秋の彼岸の中日に錬成会が恒例となっている。講師に坂下先生をお迎えしてご指導いただいている。

これからも剣道や郷土を愛する人が、たくさん育っていくことを希望して締めくくりに言葉とします。藍より青し吉野川。
なお、剣道教室や阿波支部の活動の一端ですが、写真を添えます。



平成13年2月11日で26回となった阿波ライオンズ大会に出場した阿波少年剣道教室の剣士





お盆（平成13年8月12日）に笠井先生への感謝の集いを開催時、成人した阿波の剣士とかつての保護者、及びお世話をしてくださった剣道教室の保護者、中央は笠井先生ご夫妻。



特別寄稿

さあ今度は初段!!

スペインビトリア美術大学学長

ホセ・イグナシオ・マルティネス・

デ・アルブロ

訳・同大学教授 本田 亘子

さる二〇〇一年八月二十六日に、剣道の一級昇級試験に合格することができました。この事は一見些細な事に思われるかもしれませんが、私にとりましては、ほとんど魔法にかかったみたいに変得がたいものでした。

外国人である私には、試験に臨めるよう稽古を重ねた成果を、日本人の剣道家の先生方の注意深い目のもとに評価される試験を徳島で受ける事が出来たことは、この上なく大きな喜びです。

スペイン人にとりましては、日本で剣道の教えを受けられることは、あまり容易ではありません。ましてや限られた一ヶ月間の集中レッスンで受験する機会を得ることなど思いもありません。もちろん剣道に対しての情熱や努力は疑いもなく私から出ているものではありますが、私の年令や不器用さや、剣道のある感じ方、在り方の文化と私の文化の距離にもかかわらず、最良の方法で剣道を教えて下さいました徳島の先生方のたゆみない熱心さがなければ、私の努力

なども何の役にも立たなかったでしょう。私の心からなるお礼を竹原先生に申し上げたいと思います。私たちがお知り合いになれました最初の日からしめされた彼のこの上ない寛大さ、利害を離れての大きな心がなければ決してこの美しい剣道の世界に浸ることはできなかったでしょう。同じく糸田川先生や矢武先生にも感謝いたしております。徳島の親道館道場での先生方の私に対しての強い忍耐力や献身的なまでの熱心な指導のおかげで、この剣道の世界の偉大さを垣間見始めることができました。

私の喜びはこの上ないものです。といいますのは、剣道は私に堅い絆で結ばれた交友を可能にしてくれました。そして又、その友情をとおして剣道の考え方、生き方、すなわち日本の精神の真髄にふれる事を可能にしてくれました。これらは、剣道を通じてでなくては得られなかったことでしょう。同様に、私の途方もなく大きな喜びは、この二年間、剣道をする事によって次のようなことに確信するに到ったことです。

つまり剣道を行なうことは、私の生き方の基盤となり、私の性格を形づくってきている事（人格の形成）。日常の出来事に対しての私の対処の仕方にプラスの影響をおよぼしてきている事。私の精神を健全にし、私の魂をさわやかにし、浄化している事。そして、ついには剣道は単なるスポーツの実行であるだけでなく、もつと遙かに高いもの、超越したものである事に気付くようになってきた事です。

それにもまして大きな喜びを申し上げますと、私の息子、十七才

になるアレハンドロも私と同じ日に二級昇級試験に合格することが出来ました。このことによって、確固とした足取りで、この素晴らしい剣道界という大きな家族の一員としてはいることができたことです。私は彼に大きな未来が待ち掛けられていることを確信しています。私の妻、亘子も私たちのこの大冒険に付き添って来てくれます。彼女もこの状況に巻き込まれた感じながらも、決してその状態にすることを放棄しないことを私は確信しています。

又、私の感謝の意の輪を徳島県剣道連盟のメンバーの皆様方にも広げたいと思います。私に対して片時も変らない非常なるご親切をいただきました。ありがとうございました。



矢部武雄先生のこと

東京大学大学院教授

剣道部長 坂本 功



中学校に入った時、兄に誘われて剣道を始めました。もともと、当時(昭和三十一年)の中学校では、まだ竹刀競技しか許されていませんでした。手ほどきは、乾寿夫先生がしてくださいました。乾先生は後に、川島高校の剣道部の女子選手

を率いて、全国三位入賞をなさいました。二年生になった時、その乾先生が転勤され、先生がいなくなってしまうました。そこへ、矢部先生が教えに来てくださるようになりました。今なら、ボランテイアというところでしょう。

矢部先生は、文字通り雨の日も風の日も吉野川の反対側から中央橋を渡って教えに来て下さいました。先生の稽古は厳しくて、掛かり稽古の時など、もう一本、それ一本と情け容赦がなく、終わりには道場代わりの教室の羽目板に何度も叩き付けられました。生来弱々しい私ですが、よく耐えられたものです。

さて稽古が終わって、黙想する前に、時々お話がありました。その中で、ひとつだけ今も覚えている言葉があります。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。」(注)もちろん、剣道の試合で一本を取りに

行く時の心構えですが、人生訓としても意味が深いと思います。もつともその後の人生で、そのような大胆なことは出来ていないのですが、未だに忘れず、折にふれて思い出します。

その後の黙想が終わり、礼を済ませたとたん、矢部先生は急に膝を崩して「おお、みんなよう稽古したのう。」とおっしゃって、それまでの厳しい先生とは、全く別人のような優しい好々爺のものになりました。仕事に厳しく、仕事を離れると優しいという人が確かにいるということを実感しました。また試合では、絶対に勝たないかんぞというような怖い顔をして送り出すのに、負けて引き上げてくると、よおやった、よおやったというように、大きくうなづいてくれました。

私が大学に行っている頃、先生は腸捻転を起こして亡くなられました。腹痛だったのに、稽古をすれば治るとおっしゃって、稽古をなさったのが悪かったようです。ちょうど冬休みで帰省していた時に入院なさっていたので、中学校の時の同僚七条勝美君と見舞いに行きました。先生は苦しい息の下で、かすかに「坂本か、七条か」と私たちの名を呼んで下さいました。それが、剣道が好きで好きで、弟子を大変かわいがって下さった矢部先生にお会いした最後でした。

その後も、剣道の先生に恵まれました。それなのにちっとも強くなれなかったのは、お恥ずかしい限りですが、しかし、いまだに下手ながら剣道を楽しめるのは、矢部先生を始め、諸先生のおかげだと思っています。

今にして思えば、矢部先生は、ちょっと変わっていて、剣道界では孤立していらっしやたのかもしれないと思います。しかし、弟子としての私にとっては、すばらしい先生でした。

(注) 道歌。全文は、「山川の瀬々を流るる朽殻も身を捨ててこそ

浮かぶ瀬もあり」



先生を偲ぶ

横田武文先生を偲んで

市原 博 幸



青年は未来を語り、老人は過去を語る
といわれています。齢八十歳を迎えよう
とする私が過去をふり返るとき、小中学
校で剣道に励んだときのことになつかし
く思い出されます。

私は旧学島村(現川島町)に生れ育ち
ました。私の小学校時代、学島村では青年団を中心とした剣道が非
常に盛んで、毎年の郡青年団対抗剣道大会ではいつも優勝していま
した。この青年団の指導をされたのが横田武文先生でした。

先生は明治四十五年、村長横田武一氏の長男として生まれ、徳島
中学(現城南高校)を卒業、川島登記所に勤務しながら、余暇にお
宅の道場で剣道の指導をなさいました。

私が小学校四年の時、父にせがんで剣道具一式を買ってもらい、
横田先生の道場に通うことになりました。小学生は同級生の市原二
三八君(奉天工大卒戦病死)その弟の市原亮平君(元関西大学経済
学部長)と私の三人稽古は週二回、夕食後一時間教えてもらうこと



昭和14年麻植中学5年

になりました。

一年ぐらい経ってから本格的な稽古がはじまりました。きびしい稽古でした。かかり稽古でくたくたになっても「切り返し」「切り返し」「まだまだ」とゆるしてくれませんでした。面の金具の奥の先生の顔が鬼のように見えました。稽古が終わると、一時間くらい先生と話しました。剣道のことはもちろん、先生の子供のときの話、社会のできごと等、稽古の時とうってかわって笑顔でやさしく話してくれました。道場へ通っているうち先生の話を聞くことが楽しみなようになってきました。

私は小学校を卒業し、麻植中学校（現川島高校）に入学し、石井隆介先生のご指導を受けていましたが、私が三年生の時に退職なさいました。後任の矢野先生もまもなく転任され、昭和十三年、横田先生が後任の先生として赴任され、再び先生のご指導を受けることになりました。不思議なご縁と思います。毎日放課後の練習、土用稽古、寒稽古、夏徳島武徳殿での合宿練習と熱心なご指導をいただきました。

五年生の夏休み、先生に連れられて、京都武徳殿での全国大会に出場しました。あまりよい結果は得られませんでした。中学生最後のよい思い出となりました。

私は教員の道を志し、子どもたちの教育にたずさわってきました。先生が私に教えてくれた教師像がいつも頭の中にありました。教えはきびしく、常にはやさしく、子どもの目線で考え話す。言うは易く行ないは難し、それでもひとつの教育観をもって子どもたちに接

することができたのは、先生のご薫陶のお陰だと感謝しています。先日、先生の奥さん（横田キヨさん）八十三歳とお話する機会がありました。

先生は麻植中勤務中、昭和十八年軍隊に召集され、太平洋戦争でも最も激戦地といわれたラバウルに派遣されましたが、九死に一生を得てポツダム少尉で復員されました。復員後しばらくして大阪の中学で英語教師として教鞭をとられた後、神戸の日新運輸KKの役員として迎えられ、以後会社経営に尽力されました。

この間、神戸で剣道の同志を集め稽古を欠かさなかったそうです。神戸代表チームを引き連れ、全国大会で準優勝をしたということもありました。

昭和五十三年に会社を退職し、故郷川島に帰る準備をされているさ中急逝されました。

享年六十七歳、心からご冥福をお祈りします。



前から2列目 座っている人

- 私
- 重井君
- 田中先生
- 須見先生
- 横田先生
- 滝下先生



剣友 柏原浩君の思い出

法政大学昭和三十七年度卒「辰巳会」

橋 本 健 蔵



彼との出会いは、昭和三十四年法政大学剣道部に入学した時でしたが、それから、四十三年間のつき合いです。その間の出来事が思い浮かんで来ます。彼は実に義理堅く、面倒見がよい人柄でしたが、又世渡り上手で要領の良さも持ち合わせていました。彼は大学時代、剣道部長丸山義一先生の世話で、剣道部員数名と一緒に大学構内の夜間警備のアルバイトをして、本校地下にある宿直室に泊まり、自炊をしていました。その当時は学生運動の活動が盛んな頃でした。

ある夜の事、見回り中に購買部に入った泥棒を捕えて、大学総長より表彰を受けて、丸山先生を大変喜ばした事もありました。一方、食事代も乏しくなると講内の池の鯉を捕まえては今日は鯉鍋のご馳走だと言ってみんなで食べていました。それも度重なると池の鯉の数も目立って減ってしまい、管理部より「どうしてかな？最近鯉が少なくなってきたようだが…」と尋ねられたこともありました。そんな食生活を続けている為か、毎年一週間の夏期合宿ではみんな体重が減っていく中、ただ一人体重をふやして合宿を終える彼

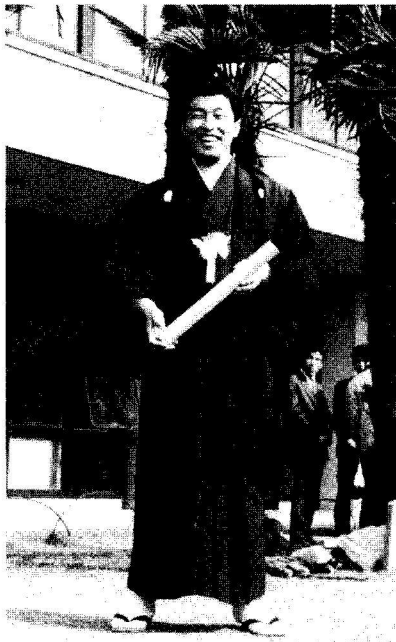
した。

卒業後は共に郷里に帰り、剣道から遠ざかっていましたが、稽古を再開したのも同じ頃からでした。それからは会う機会も多くなり、国体や都道府県対抗など、全国大会に県代表として出場して、その前夜には翌日試合する事も忘れて、剣友達とおそく訖語り合ったものでした。又四国大会では、幾度となく対戦し、彼の勝負に対する執念と闘志あふれた立合に苦戦を強いられましたが、それも楽しい思い出となりました。高知県の剣友とも交流が深く、来高の度にある小さなスナックであの騒々しい声を聞きながら飲んだことでした。数年前より、同期の稽古会を年二回行うようになり、彼といつも羽田空港で落ち合い、母校道場へ行くのが常でした。

昨年三月の稽古会へ圭子婦人を伴って来た時のことです。もう一人、夫人同伴で来ていましたが、婦人二人は約束をしていたようで空港で別れて二人は芝居見物に行き、我々は富士見台の母校道場へ、現役学生を交えての稽古、その後の神楽坂での懇親会も終わり、新宿のホテルに着きました。婦人達の帰りがありません。そこでホテルのバーで飲み直しをしながら二人の帰りを待っていました。そのうち彼が何か心配そうな素振りを見せていました。互に遠慮のない同期の友同士、「あの女二人は六本木のホストクラブへでも行っているぞ！今夜は帰って来ないぞ。」とからかっていました。その度、彼は苦笑いをしてごまかしていました。やがて帰って来たその姿を見て安心したように微笑んだ表情、夫婦愛を感じ心温まる思いが致しました。



柏原君が浪速国体に出場した時、法大同期と一緒に（岸和田市）



法政大学卒業式での柏原君

それから三ヶ月後の六月に東京の山崎偕子さん、神戸の松本潤也夫妻、そして柏原夫妻が連れ立って「高知で鰹のタタキを食う旅」と称して高知に来ました。ある料亭でタタキを「さわち」でおかわりを取り、腹いっぱいになるとホテルに移動して一室に集まり、昔話に花を咲かせ楽しい時を過ごしました。徳島に帰る車の窓越しに「じゃあまた」と言っただけなのが元氣な姿を見る最後となってしまいました。

あの騒がしい笑い声、話し声をもう聞くことが出来なくなりました。あの姿を見ることが出来なくなりました。しかし、剣友の心の中にはいつまでも生き続けることでしょうか。今はもう安らかにお休み下さい。

格されました。なお、橋本先生は、平成十四年五月、八段審査にみごと合格されました。

弔 辞

徳島県剣道連盟監事

吉 田 租

涙を払いながら、徳島県剣道連盟副会長剣道教士・柏原 浩先生の御霊前に捧げます。

御霊前に向かいますと、背筋を伸ばし正眼に構えられた偉丈夫の堂々たるお姿が迫つて来るように思えます。人に接するに公平無私、厳しさの中に温かい、何事にも全力を尽くす、几帳面な、そんなお人柄がそのまま、にじみ出ている剣風でございました。

先年、先生が堀江先生とご一緒に驚敷町の振武館へ来られた折、竹刀を合わせました。私が打った小手を見事な抜き面で私の面に決めました。それからお稽古願う事もなく私の生涯の負けとなつてしまいました。

先生はこよなく剣道を愛され、心酔する生涯の師を得、思う存分に羽ばたかれたことと思えます。嘗て東都で法政大学に「柏原あり」と言われ、社会人となり、しばらく休んでいた剣道を徳島へ帰りてより、やがて気迫に満ちた、真つ直ぐな剣は堀江門下で頭角をあらわし、国体をはじめ徳島県代表のチームの一員として出場した回数には到底数え切れない程ございました。

六段となり、七段となり、事務局長をし、副理事長、理事長、副会長と徳島県剣道の発展に筆舌に尽くし難い貢献をされました。中

でも四八国体では堀江会長、理事長の下でその片腕となり、準備の十年間寝食を忘れてのご努力がございました。その甲斐あって、小さな県であり乍ら全国優勝出来たのも縁の下の力持ちが有つての故と思ひました。

心魂を燃やし尽くしたのか、国体が終わりほつとしたのか、その頃から体調を崩し、初め奥様の懸命の看護が始まりました。東京の病院がよいと言えば東京へ何回となく、京都がよいと言えば京都へと、側で見る眼も涙が出るばかりの夫婦愛でございました。

先生は家庭にあつては、ほんとうにやさしきよき父であり夫でございました。お子さまの事を話される時には、よくよだれを流すばかりの可愛さ一杯でございました。その様なことで、先生が病気になるからには、ご家族の温かい愛に包まれ先生は幸せ一杯でございました。

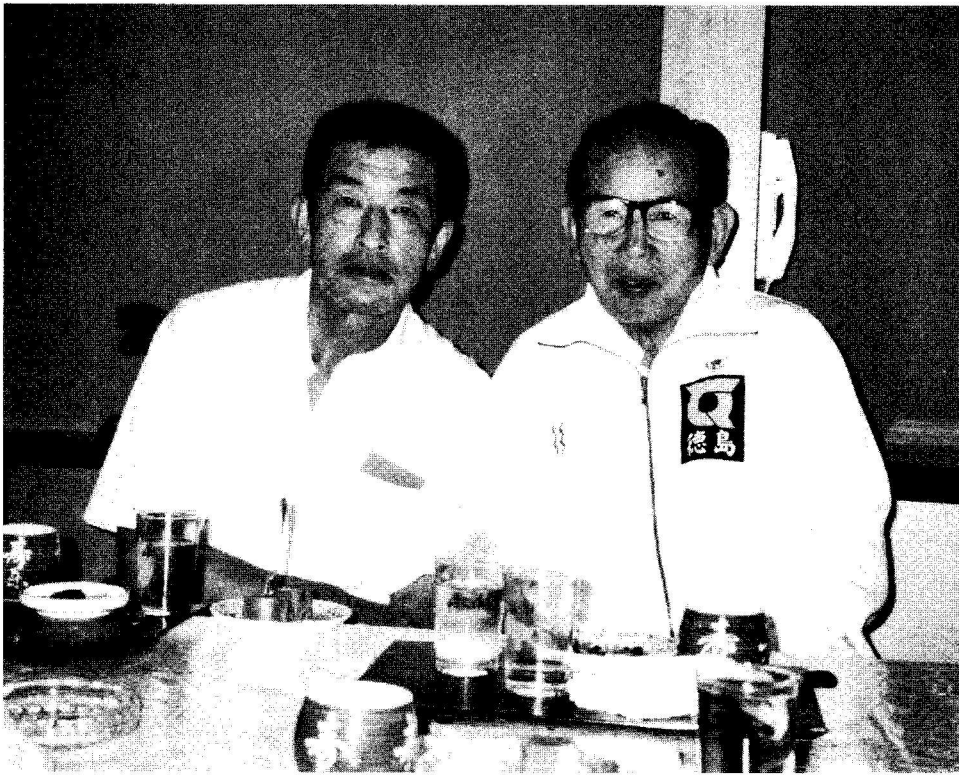
先生は亦お仕事にも先見の明があられ、今の家業を興され、生活を安定させ、お子様達の往く道も定められ、実に見事な一生でございました。

先生との交遊の日々を思うと惻々としたものがございます。

去年十一月、奥様の運転で、堀江先生、柏原先生の四人で、木頭村高の瀬の紅葉狩りは楽しい小旅行の最後の思い出となりました。御覧下さい。先生のいや果のお見送りに、剣道の老いも若きもの剣友が別れを惜しみに来ています。

先生、長い間ほんとうに有難うございました。では、安らかに、お休み下さい。

先生、さようなら
柏原先生、さようなら



柏原先生と私（左）



かながわ・ゆめ国体 秋季大会

平成10年10月24日～29日

徳島県剣道連盟副会長 柏原 浩先生を偲んで

板野西支部 福 永 徳

柏原先生としたためなればと思うのですが、柏原先輩と呼ばせて頂きます。

私と先輩とのお付き合いも早いもので、四十年余りにもなります。色々とお世話をかけ未熟な私共を御指導頂き誠に有難うございました。心より感謝しております。色々とたくさんエピソードもございしますが、いくつか思い出したいと思います。

あれは小雪がちらつく風の強い放課後でした。私達剣道部員は柏原先輩を先頭に稽古着、素足で一路木津金比羅神社頂上を目指しひた走り、先輩の掛声で階段を数回往復し、体育館に帰ると堀江幸夫先生御指導のもと素振り打込みと厳しい稽古が続いていたものでした。夏休み、冬休みには、自転車に防具を積み、徳農（現城西高校）へ練習試合をお願いに通いました。出発の時に、先輩が必ず防具竹刀の点検は勿論、自転車の空気圧、ブレーキと細部まで気を付けて頂きました。

卒業後は法政大学へと進み、大学でも目覚ましいご活躍をされました。帰郷の時は必ず母校に寄り私達に稽古を付けてくれました。大学を卒業と同時に㈱四国コココーラボトリングの第一期生として入社しました。当時コココーラなんて名も知らず、初めて四国へ

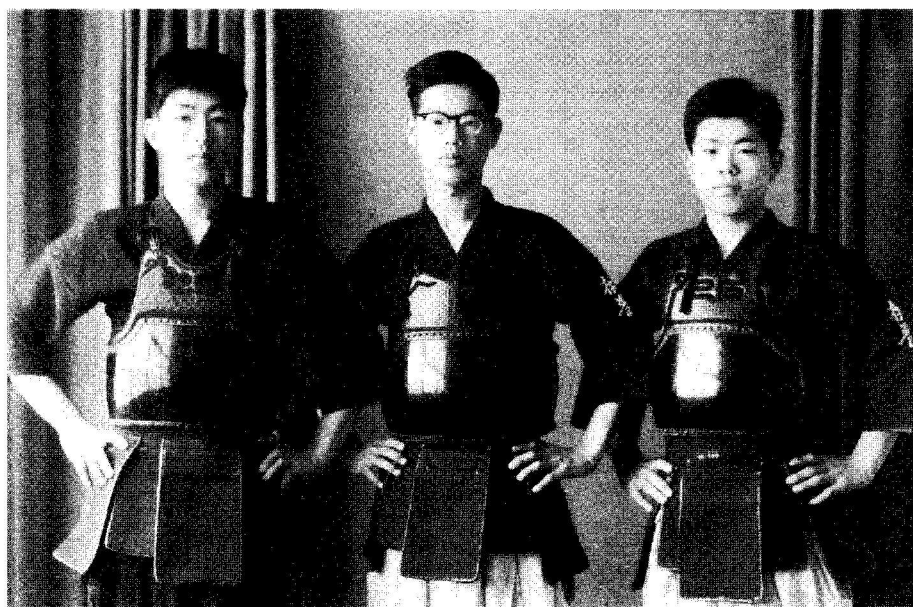
上陸したのですから当然でしょう。先輩は持前のバイタリティーあふれる行動力と統率力で県下各地にコココーラの名を広め、現在の㈱コココーラボトリングの基礎を作り上げました。

徳島支店長となり、社員も数多くなりましたが、先輩の起業家精神は之に満足せず、退社して、グリーンガーデンを設立したのです。当初は売り上げが伸びず、非常に苦労が多かったと聞いております。当然竹刀は一時置き、家業に専念されました。数年後には軌道に乗り、また竹刀を持ち始めたのです。その当時、私達撫養高等学校（現鳴門第一高等学校）剣道部OBが堀江先生を囲んで富雪会（富雪は堀江先生の書道の雅号）を作ろうとの声があり、柏原先輩が早く東奔西走し、設立の運びとなり、現在も二十八名で続いております。

竹刀を持ち始めると先輩の負けん気の強さが出て、家業の多忙にもかかわらず厳しい稽古を積み、県代表として数多くの全国大会に出場し、活躍されましたことは、皆さんのすでにご存じの通りでございます。

また、県剣道連盟常任理事、事務局長、副理事長、理事長、副会長と要職を歴任され、この間、平成十一年度には徳島県体育協会より体育功労者として表彰されています。

家庭でも最愛の奥様と三人のお子様に恵まれ、順風満帆の人生かと思われました。しかし、人生とは判らないものです。数年前に病に倒れ、日々療養の生活を余儀なくされ、奥様の献身的な看病も虚しく帰らぬ人となりました。奥様はじめ御家族の方は勿論私達後輩



撫養高三年時の柏原先輩（左）

にとりまして痛恨の極みであります。
柏原先輩、家業はご子息太介君が立派に守っています。どうか心
安らかにお眠り下さい。合掌



学生時代の柏原先輩（左）と恩師堀江幸夫先生（左より三人目）

清原亨先生を偲ぶ

阿南支部

有賀秀敏

三十七年間の教員生活を退き、退職後も、阿南市大野公民館長として、十年間、社会教育行政に生涯をささげられた清原亨先生がご逝去され、早や五ヶ月が過ぎました。

先生は、阿南市下大野町太平に生まれ、小学校五年生から、清原栄範士に師事、徳島師範学校に進まれ、本格的に鍛錬に励まれました。昭和三十三年五段、五十四年に教士号を授与されました。

昭和二十四年三月、徳島師範学校研究科を卒業され、教職の道に進まれ、阿南市吉井小学校教諭を振り出しに、相生町雄小学校、阿南市大野小学校、那賀川町平島小学校、他各小学校を歴任されました。

昭和四十九年に徳島県教育委員会社会教育主事。昭和五十七年から那賀郡木沢村、上那賀町木頭村、教育委員会社会教育主幹。

平成九年、阿南市大野小学校校長を最後に三十七年間の教職生活を終えられました。

又、大野小学校在職（昭和三十四年）から教職の多忙な中、剣道を通じて青少年の剣道育成に力をそそがれると同時に、大野武道同志会、阿南支部結成から事務局として、支部の組織運営に大変お世話下さいました。道場の準備から、会議、大会、昇段祝賀等、大変ご苦労されたことと思います。



在りし日の清原亨先生

先生は、お酒も好きで、剣道の稽古後、又宿直の時などよくお呼びいただき時間の過ぎるのも忘れ飲み、ごいっしょに宿直したのもなつかしい思い出となりました。その後、支部の事務局を引き継ぎお世話させていただきました。先生は温厚篤実な人柄で阿南支部の運営面においても、精神的な部分で大きな支えとなりました。

ご指導のお陰で、今日まで充実した支部の組織運営も着実に出来、後輩に引き継ぐことが出来ました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。

時も過ぎ、先生を知る会員も少なくなりましたが、先生の教えを無にしないよう支部活動の中に活かして頂きたいと思えます。晩年の先生は、地域の中でも、人を生かし人を助ける、活人剣の精神が社会に浸透すればと、公民館館長として、生涯学習の推進と共に、すべての人が尊重され明るい住み良い地域づくりの為に頑張られておりましたのに、平成七年頃から体調思わしくなく、家族の手当てもかainく七十四歳の生涯をとりられました。

お別れに臨み心からご冥福をお祈り致します。

合掌

思い出の一枚

堀江幸夫

珍しい写真です。この写真は、今から約四十年ほど前、鴨島町在住の富樫伊勢太教士が七段に合格された内祝いの記念写真です。昭和時代の本県剣道界をリードされた先輩がずらりと顔を揃えています。さすがに古武士（私だけ紅顔の美少年）の如き風ぼうでしょう。

3列目…ご家族…

中野教士

宮本教士

角瀬教士

高島範士

河野教士

富樫教士

堀江教士

河野県議

山本教士

居内教士



先生方の略歴（敬称略）

○高島永吉 ○山本忠蔵 ○角瀬豊夫
元県警師範 元軍人 尺八宗匠
警察学校講師 製材所社長

○居内勘五郎 ○河野照雄 ○富樫伊勢太
元軍人 元高校教員 元国鉄駅長
農業 会社役員 農業

○宮本仁平 ○中野清 ○堀江幸夫
元軍人 元警察官 県警師範
農業 高校剣道講師



インターハイ 剣道女子団体三位入賞して

富岡東高等学校

剣道部顧問 河田清実

今夏のインターハイで五年ぶりに三位に入賞することが出来ました。これも偏に御指導、御声援していただいた高体連の先生方、県剣道連盟の方々のご協力のお陰だと深く感謝を申し上げます。

今年大学を卒業して講師として勤務している坪井さくらさんが在学中の平成七年、八年に三位入賞して以来、予選、ベスト8、16、16とあと一步のところで敗れ惜しい思いをしてきました。三月の全国選抜でも、上位入賞を目指していましたが、予選で敗れ、インターハイでは、何とか上位入賞をしたという強い思いが生徒達も私もありました。昨年の全国選抜で三位入賞のメンバーの三年生が二人残り、二年生も勝負強く、波に乗れば、上位のチームと互角に戦える力を持っていると思っていました。

基本練習では、足の踏み込みと、手首が効いた強い打突を目標とし、試合練習では、九州各地へ遠征をして、強豪チームと対戦する中で、勝負の鉄則である、先行して試合の流れを作り繋げてゆくということを実習してきました。又、坪井先生も、先輩として毎日生徒に稽古をつけてくれて、生徒の地力をつける事が出来ました。生徒達も、大学時代にトップレベルで活躍した先輩と稽古することで

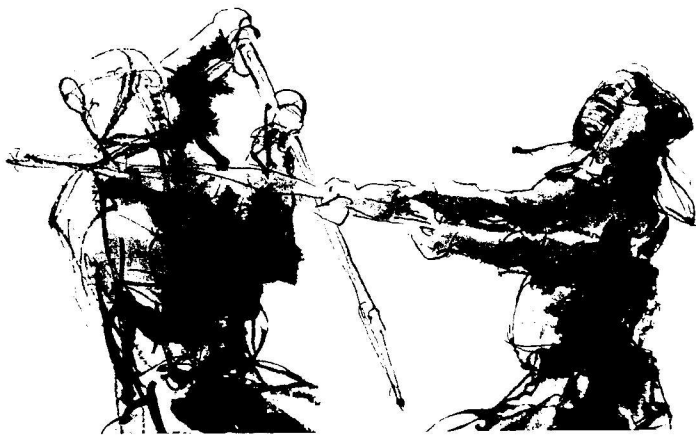


自信をつけたと思います。

春の全国選抜で不本意な負け方をしただけに、インターハイでは生徒達も気迫充分でした。試合の直前に言う事は、「いつもの稽古のつもりで行け、気迫で負けるな」と言うだけでした。一試合目こそ快勝でしたが、二戦、三戦、準々と接戦でしたが、三試合とも前三人で二勝一分けと思いつ通りの試合運びが出来、相手チームを振り切る事が出来ました。準決勝で三連覇を達成した阿蘇高校に敗れましたが、三位に入賞し、目標を達成した事で、感無量でした。

いつも生徒に言っている事ですが、「毎日の稽古は薄い紙を一枚一枚重ねると同じ、又その薄い紙は必ず目的や課題を含んだものでなければならぬ」と思っています。これからも生徒と共に薄い紙を重ねてゆきたいと思っています。

なお、河田先生は、平成十四年四月より、県教育委員会へ、転勤になりました。富岡東高校には、飯田栄一先生が赴任されました。



私はだれでしょう

昭和16年、小学校4年生当時。腕白小僧で、職員室で立たされた回数記録保持者。



日和佐中学校剣道部全盛時代。昭和46年県中総体優勝一四国大会へ・愛媛県立武道館・監督としての私（後列右端）・村井正志（その隣）中山繁輝（後列左より二人目）



現在の私 中山 啓男(72歳) 52年ぶりに訪ねた松山城、平成13年11月 愛妻と共に

講習会報告

第三十六回

剣道中央講習会（西日本）

に参加して

福井 軍 二

期日 平成十三年四月五日～七日

場所 神戸中央体育館



はじめに

多忙な現職時代は、自分の剣道についてあまり考えることなく、生徒の試合結果に喜怒哀楽を感じてきたが、退職してやや時間がとれるようになり、竹刀を一念に手入れすることが面白くなってきた。

最近稽古をして、自分は稽古をするた

びに剣道が弱くなってきているように思う。確かに足腰は弱くなりその上精神まで弱くなってきたようである。遠間の打ちができなくなり近間の打ち合いで楽しんでる上に、自己中心的な剣道になりつつあることに何か悲哀を感じてきた。理法の修練という事を考えない自分であったと反省する昨今であったと思う。そんな折り、県

剣道連盟よりこの講習会の案内をいただき、剣道講習会も七段を受けてからあまり参加していなかったこともあり、剣道を「初心にかえり学習したい」と思い参加した。講師の先生方も全剣連を代表される有名な立派な先生方で講話の話し方、剣道されている姿勢や態度諸動作についても本当に真剣に生きて、剣の理法の修練を積み重ねられているのだと思った。また、剣道についての知識はもちろん人生哲学的なことも学ぶことができた。剣道は即実践であり、行ないなくしては剣道は成り立たないことを身をもって学習することができたと思う。

なお、講習会は、理事長・藤本辰夫先生と共に参加した。以下ご指導いただいた講習内容の概略を報告します。

講習科目

(1) 「道歌にみる剣道の極意」

全日本剣道連盟副会長 剣道範士 森島健男先生

剣道の修行は、簡単なことの繰り返しであるが実行は難しい。そして知っていることと出来ることは全く別である。

「初めには素直に大きく技を持って、中はいろいろ、後は無駄なく。」

一、剣道修行の段階

初（守） 修練期 初心者三段くらいまで

中（破） 躍進期 四、五段位（死ぬ思いで稽古し体力、技術を生

かして活躍する時代）

後（離） 大成期 七段以上（離の境地をめざして心技共に円熟す

る時代。初太刀一本をめぎす。心気力一致。一本打てば必ず当たる。技の剣道から心の剣道に切りかえる。

三摩の位（良い師について習う事・工夫する事・錬磨する事）

二、「敵を討つと思うな身を守れ おのずから漏れる賤が屋の月」
実をもつて虚（隙）攻める。

①打っていけないときは打たない。

②打つべき時は打つ。

③打てなければ相手を崩して打つ「心で勝ってその証拠を技で示す」

三、心気力の一致（理合の極致）

心気力の一致は攻防の要諦は表現したものであって、心は精神作用の静的面であり、相手の動静を直感によって感知し判断する能力の事。剣道では、無心と言う。無心とは是非の分別がなく是非を知る心と言う。気とは、心の判断に従って外部の動作に現れるものであって、いわゆる気は、心に率いられて心の命令に従って活動する精神作用の動的面と言う。力とは、身体の力、転じて技を言う。心気力の一致とはある刺激に対して心の直感で知覚判断されたものが直ちに、精神の働きによって技に表現される。しかもこの三つが瞬間即一的に行われる状態を言う。

四、剣道の理合

①理合とは剣法上の理論筋道

②姿勢、呼吸、氣勢、目付、間合、機会、体制、手のうちの作用、

部位、残心等それらの要素の上に立って最大効力を引き出す法

③試合において勝と言う課題達成のための方法

④理合は、自分と相手の間にとり行われる動きが合理的であること、筋道に合っていること。

五、「切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ 踏み込みみれば後は極楽」
日本剣道の真髄は捨て身

間とは相手との時間、空間全ての状態、距離、技、心の働きすべての状態が自分に有利になるとき自分の間となる。

「古は術に留めし此の道を 拡げて説けや人道として」
人殺しの道——↓人道へと昇華されてきた

人の道を教えるのが良き師

技の修行だけでなく心の修行が必要（礼儀、謙虚、質素、愛情）

(2) 指導法 剣道教士 角 正武先生

一、昨今の青少年の技術的な乱れを正すために、指導者のあるべき姿

指導者自らが上位者の人から学ぶ、又下位の者へ胸を貸す。血の通った指導を行ない自らが修行者である姿示す。

二、指導方針

心気力一致の剣道を目指す（剣道の本質であり究極の目標）
気剣体一致はその為の具体的な手だてである。

三、日本剣道形を軽視してきたために刀法をないがしろにしていく。

腕が上らない。

前に運動を起こす——足と腰を出していく。

打突後左足が右足の前に出てしまう。

打ち込み稽古の打ち込みを受ける側の指導を行う。

切り返しの時の右面を打つとき、45度になっているか、手のうちがかえっているか。

打ち込み稽古の時の体当たりができていない。

刀法に準じた鏝迫り合いの指導であること。

四、個人指導と集団指導の違いをはっきりさせる。

何を（なぜ）どうするのかははっきりさせる。

五、実習と指導計画

目標を示して指導計画を立てているか？

年間・月間・週間目

標

解決されるべき課題を明らかにする。少し努力すれば手の届

く課題評価があつてはじめて次へ進める。指導者自身が自分の

指導の評価をする。

生徒と指導者双方の評価が必要（誉める事八分、叱る事二分）

剣道指導の本質 「師弟同行」修練者としての自分のあり方を

明らかにする。

(3) 審判法 剣道範士 後藤清光先生

はじめに講話があり続いて実技講習を実施、全員主審を経験する。

剣道は地味な稽古の積み重ねの修練である。

竹刀により剣道ではなく刀による剣道をめざす。

審判法第一条の目的を良く理解すること。

理とは心、法とは技、全うしつつとは（完全なもの・最良・最善）

〈使命・目的〉 試合者・選手は命をかけて戦っている。有効打

突を正確に判断する。・試合を上手に運営できる。

剣道を良い方向に導く。

〈審判〉 明らかにして裁く

① 公平であること

② 規則に精通していること

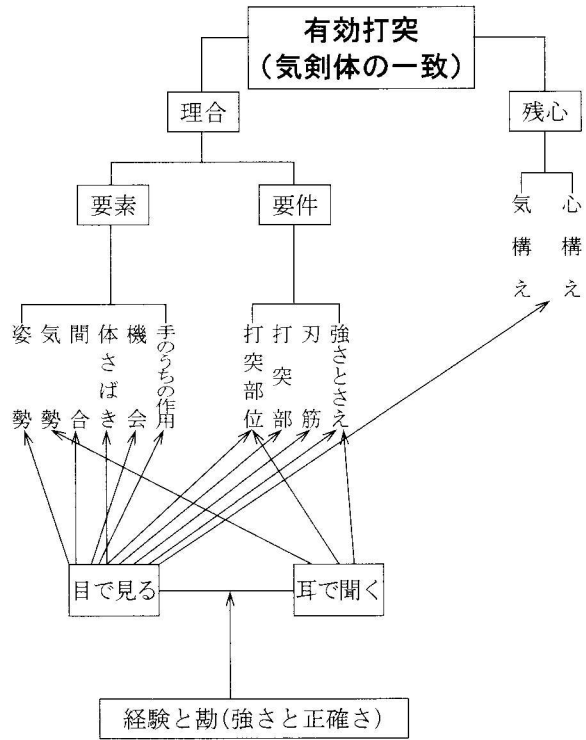
③ 剣理を熟知していること

④ 審判技術に熟達していること

⑤ 健康体であること、言語が正確であること

十二条 有効打突の適正とは（適法・厳正・妥当）

有効打突の図解



〈反則〉

不当な鏝せり合い…正しい鏝せり合いでないと分かれはかけられない。

場外…一方が場外に出た場合、打突、現実を厳しく見極める。原因と結果を把握する。

時間の空費…打突の意志があるか、ないか。

〈審判技術〉

始めと終わりは、二等辺三角形

移動の時、主審は早めに自分の位置を決める。選手の真ん中に

位置する。

旗の持ち方は手の内にはいるようにもつ。

取り消しているとき、一方が打った場合見逃す場合がある。

試合者が終了の礼をするまで旗を巻かない。

胴を打った者が回転すればとらない。

〈所作〉

姿勢・礼法・旗の持ち方、上げ方、巻き方

(4) 日本剣道形 剣道範士 西山泰弘先生

太刀、小太刀全般の理合を深めると共に、解説書講習会資料による指導上の意思統一を伝達できるように、解説と実習をした。

日本剣道形の重要事項

- ① 解説書で理法と正しい技能を知る。
- ② 立ち会いの所作を確実にする。
- ③ 五つの構え、小太刀(半身、入身)
- ④ 打太刀、仕太刀呼吸を合わせる。
- ⑤ 充実した気迫。
- ⑥ 機を見る、入身になろうとするところ。
- ⑦ 後足を残さず。
- ⑧ 前進は前足、後退は後ろ足。
- ⑨ 足はすり足。
- ⑩ すり上げ技は一拍子。
- ⑪ 両腕より相手が見える程度。
- ⑫ ものうちに打つ。

⑬ 充分な残心。

⑭ 残心を見届けてから次の動作。

⑮ 呼吸、構えるとき吸気し、息を止めて間合いに進み、呼気と共に技を出す。あとは腹式呼吸。

⑯ 最後まで気を抜かない。

おわりに

剣道はそもそも単純なスポーツであると思いますが、何事も単純なものほど複雑でどこまで追求しても限りがないものです。故人は「我以外みな師である。」という言葉を残している。それは指導する場合相手が子供・生徒・学生・一般の人、男性女性問わず、剣道の稽古をするときは「教えることは学ぶことである。」をモットーに指導者自身が謙虚に受け止めて真剣に対応していく必要があると思います。一度竹刀をもった子供や人が剣道を良き趣味として生涯継続して楽しむことができる指導方法の反省と改善、考察もこれらの剣道指導者にとって重要な役割を果たすときがきているように思います。

指導者として考えなければならないことは、常に師弟同行、同汗の精神で実践を行い、指導者自らが修行者である姿を示して、剣の理法の修練による人間形成の道を生涯続けることが肝要であると思えます。

講師の先生方は全員防具をつけられ懇切丁寧にご指導いただき、この上もない幸せな講習を受けることができました。この講習会を通して西日本各地で剣道に精進されている立派な先生方と親交を深

めることができたことも大きな収穫であったと思う。

お世話になった講師の先生方、派遣していただいた徳島県剣道連盟に心から感謝します。



第二十八回

居合道中央講習会に参加して

居合道錬士七段 岸 田 光 博



平成十三年九月八日(土)から九日(日)にかけて京都市武道センターに於いて平成十三年度の居合道中央講習会が開催され、本県からは、居合道部長教士八段、原田勝先生と私二名が参加させて頂きました。この講習会は都道府県の代表者、

二名又は三名で北は北海道、南は沖縄、受講者総数百二名が受講し、各都道府県に帰り伝達し全国統一した、正確な全日本剣道連盟居合の普及と、審判員としての心構え、正確な実技と技術の向上を目的として実施されています。受講生は居合道六段以上の者で、各都道府県に帰り、責任を持って伝達できる適格者でなければならないとされており、その責任は重大であります。

八日午前中は全剣連居合十二本を、大阪の範士九段、福田先生の解説で模範実技を、千葉の範士八段、岸本先生が行われました。特に重点的に今年平成十三年度よりの追加された技、十一本目(総切り)十二本目(抜き打ち)の趣旨、要義、動作実技の説明がありました。午後からは四班に分れて、居合道委員の先生が実技指導にあたられ、五時まで繰り返し稽古を行いました。京都府剣道連盟の配



慮で昼休み前、武道センター横の国宝、武徳殿前で講師、講習生全員の記念撮影がありました。

九日午前中は大阪、範士八段、池田先生による、居合道試合、審判規則等の解説があり、審判員の心構え、勝利の判定基準、審判の着眼点の説明がありました。勝敗の宣告、旗の表示要領についての説明のあと、審判実技を八段の受講生が審判し、七段受講生が演武を行い、演武者は想定されるいろんなケースで三本に短縮して演武し、毎回、審判演武者も交代して指導を受けました。午後は各流派に別れて古流の研究を行い、講習会を終了しました。

今回の講習会にはじめて参加しての感想は、講習生の真剣で熱心な受講姿勢と各地へ帰り、正確に伝達しなければという責任の重さを感じました。帰県後の九月十六日(日曜日)鳴門武道館に於いて伝達講習会を行い、原田先生が解説を行い、私が実技を担当して、全てを伝達しました。徳島県の居合道は諸先生の指導が的確に行われており、全国レベル以上であり、又過去長年にわたり、春、秋講習会に来県し講習して頂いて居る大阪、福田先生のおかげもあり、全剣連居合の再確認の講習でありました。六段以上による、審判実技は、経験の少ない講習生には、実のある伝達講習であったと、思います。

本県居合道は全国レベル以上であると実感しながら伝達講習を終了しました。



第三十九回

中堅剣士講習会に参加して

鳴門支部 藤本 雅史

前年まで東西に分かれて実施されていた本講習会も、今年度より統一され、全国より五十五名の剣士が、奈良市の鴻ノ池に集まった。講師の先生方も児島克範士を筆頭に熊本正、島野大洋、田口榮治、村上濟、川本三千弘、忍足功、上垣功、末野栄二、それに地元から井上茂明、西田照夫両先生方も加わり錚々たる顔ぶれである。日程は六月十三日～十七日まで四泊五日、場所は鴻ノ池にある奈良市中央道場で行われた。ちなみにこの道場の床板は徳島から運ばれたそうである。以下要点を述べて報告とします。

出発にあたり

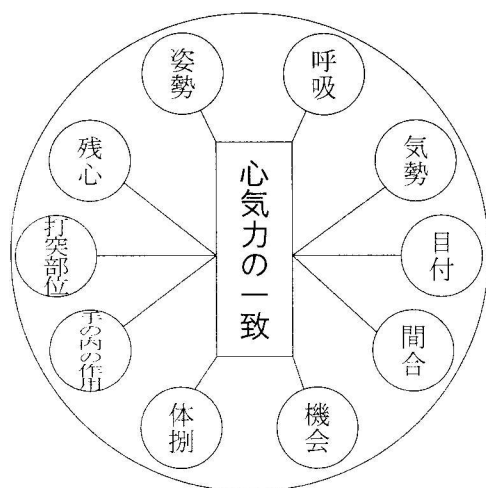
伝統ある講習会に推薦いただいた時、講師の先生方又は全国の剣士と交剣できる楽しみの反面、未熟者の私で稽古に指導についてけるだろうか不安であった。過去に参加された木原、松村先生にアドバイスを受けて、稽古着、籠手など三組、面ヒモの長さもチェック、竹刀の手入れもOK。それにすだちとすだち酒も忘れずに準備万端。そして当日授業を二時間済ませ、留守中をお願いして車で出発。途中身柄の引き受けを事務局の先生方にお願いをして鴻ノ池道場に三十分前に到着した。緊張の中十五時からの開講式に臨む。熊本先生の言葉で「皆様はここに居るのを当たり前と知っている。もっ

と家族の理解、職場の協力、全剣連、奈良県連の方々の協力があればこそ、ここに参加し稽古ができることをもつと感謝しなければいけません。」成程、家族の激励、職場の先生方に授業を頼み、県剣連より推薦いただいた事に感謝しなければと改めて意を強くした。

講話 森島健男副会長

開講式に引き続いて副会長の森島先生から講話がありました。受講生も真剣に聞き、ペンを走らせてメモを取っていました。私もその中の一人ですが、途中から「ん」これほどどこかで聞いた内容ではないかと思つた。そういつも堀江先生が仰っている事と同じではないか。つまり年を取ってからもできる理合の剣道。ごちゃごちゃといきなり近間になり打って当たったではなく、「初太刀一本千本の価値」「いかに無駄打ちを無くすか」「心が動いたら負けですよ」という事である。以下講話の内容をまとめてみます。

剣道の理合



1 理合とは剣法上の理論、筋道

(1)刀法 (2)心法 (3)身法

2 姿勢、呼吸……………右図

それらの要素の上に立って最大効力を引き出す法。

(姿勢と呼吸で大事であり中心である)

3 試合において勝つという課題達成のための手法、手段。

4 理合は自分と相手との間にとり行なわれる動きが合理的であること、筋道に叶っていること。

5 心気力一致について

心気力一致とはある刺激に対して精神の働きによって技に表現される。しかもこの三つが瞬間即一的に行なわれる状態をいう。

「心」とは精神作用の静的面であり、相手の動静を直感によって感知し、判断する能力のこと。剣道では無心という。

「気」とは心の判断に従って外部の動作に現れるものであり、心の命令に従って活動する精神作用の動的面をいう。

6 呼吸について

長呼吸丹田呼吸をする。一分間に順次次第に二、三回位にしていく。

静座とは正しく座することである。頭は天上を突き破る如く、耳は両肩と平行に、鼻の頭は臍が真下に、足の親指は重ね(短い時の足の裏を重ねると気合が入る)両手は楕円になるように臍前で。呼吸は口の中に空気を含まず、奥歯が自然にくっつき、口唇は自然にへになるように舌は上に軽くくっつくように腹をふくら

ませ、胃、みぞおちをスツと引込めると呼吸がスツと出来る。

黙想は近代の思想であり、静座とは古来儒教の教えを継ぐ日本
伝統文化の教えである。

7 間と間合について

間とは相手との間合、時間的、動作全ての状態。

・ 自分に有利な間合を取っておく

・ 攻防の理合(三殺法)

・ 心の使い方(四戒の心を起こさない)

8 機会について

・ 打ってはいけない所は打たない

・ スキがあつたら逃がさない

(心のスキ、構へのスキ、動作のスキ)

・ 打つ所がなければ崩して打つ

・ 「気で攻めて乗って機を打つ」

9 まとめ

武道家としての要素は誠実、質素、謙虚、愛情、礼儀が大切である。

三磨の位に留意し、技を教えるだけではなく、人間性を教える師匠、高段者を目指して欲しい。

稽古

準備体操で身体をほぐし、いよいよ稽古開始。お互いに相手を作り切り返し、廻り稽古を二十分間、その後二十分間元立ちによる指導稽古であった。講師の先生方も多いが受講生も多く二十分間は

一人の先生で終わってしまう。これでは徳島を出発する時に決めてきた全員の先生に稽古をお願いすることが不可能になってしまうと考へ、明日からは廻り稽古が終わると即先生の前に座る。又はお願ひしたい先生の前で廻り、稽古が終了するように位置取りを考へた。結果的に功を奏して全員の先生方に、そして、二回指導をいただく事ができ所期の目的を達成できた。

夕食、懇親会

同部屋の五人を卓で囲み、まずはビールで乾杯。話はずみ、段々と打ち解けてきた。そして大部屋（四国二人、九州八人）に戻り、二次会。持参のすだち酒もお役に立ちました。いろいろお国なまりの方言で自己紹介から剣道談義でも初日でもあるし、遠慮して十時に消灯、就寝。早朝六時に起床できるか不安であったが、大勢のたこ部屋では必ず一人、二人目覚し係がいるものである。徳島の高体連の合宿では大分鍛えられていたつもりだったが、未だく修行が足りないと思ふことしきり。お陰で四日間毎日、皆早く目が覚め我々の部屋が朝稽古到着一番の快挙となった。

朝稽古

七時前に準備体操が始まり、五分間の静座、十分間の切り返し、二十分間相互の廻り稽古、二十分間指導稽古、十分間切り返しで終了。しっかりと肚の稽古をと思つてきたので、やってみると相手の動きがよく観える。しかし先々と打って来られると、自分も負けじと打って行く、機会でも無いのに飛び付いてしまい反省することしきりであった。

終わりにあたって

二日目日本剣道形、三日目指導法、四日目審判法実技そして最終日午前三時スポーツ医学の講話へと続くわけですが、紙面の都合上省略します。しかし、中身の濃い、やはり中堅剣士の講習であり、将来の方向付けをしっかりといただいと感謝しています。三日目の指導法の実技ではアキレス腱断裂、肉離れを起こす者が三人出た訳ですが、日頃学校で稽古をし、剣連の稽古会で基本、打ち込みを熟してきたお陰で厳しい稽古にもついていくことができ、基立ちの先生方にも楽しくご指導をいただくことができました。今後はこの講習会で得た知識、体験、自覚を忘れることなく、練武に励み精進していくことが、御恩返しになると思い頑張っていきたいと思ひます。

感謝!!

第三十八回

全剣連社会体育指導員(初級)

養成講習会に参加して

海部支部 近藤 浩文

平成十三年九月二十八日(金)～三十日(日)までの三日間、愛媛厚生年金休暇センターに於いて第三十八回全剣連社会体育指導員養成講習会が開催され、本県からは私一人の参加となりました。四国四県はもとより遠くは、兵庫県からの参加者もいて四十五名程度が参加して始まりました。

午前中は、剣道の特性・指導法・歴史・集団指導法・体力トレーニング理論と講義が中心に行われました。岡村忠典先生の剣道の特性についての講義のなかで特に私が強く印象に残ったのは、その年代その人によつて常に最高の一本を求め続けることが大事であると言ふ先生のお話であり、剣道は年齢とともに上達し向上し続ける可能性を持つていふと言ふことです。向上するための要素とは、良き師を持つ事と良き仲間を持つ事であるとされています。注意すべき点として

一週間の稽古感覚がオーバーワークにならないように、四回ぐらいを三十分程度するのが良いとお話でした。

年齢が進めば呼吸を乱さない稽古をするのが良い、とお話もしていただきました。自分の事を言つて頂いているようで、目からう

ろこが落ちる思いで大変勉強になりました。

午後は、剣道形実習・指導法・基本技術指導法・審判実習・体力トレーニング実習と続き、翌日は朝六時三十分から、各講師先生による実技実習が約一時間行われました。ふだんでは稽古をお願いできない先生方との稽古は私にとってはなにものにも代え難い貴重な時間となりました。基本の大事さを身をもって体験させていただいた三日間でした。

講習三日目最後の日は、理論テスト・基本実技・形演技テストと続き最後の閉講式に結果発表が行われ、全員合格をいただき、緊張の三日間はあつという間に過ぎてしまいました。

この講習会で学んだ事を今後の少年指導、自分の稽古に生かして行くことが三日間懇切丁寧に指導していただいた先生方に対しての恩返しと思ひ、今後がんばつていくつもりです。

第六回

全剣連社会体育指導員（中級） 養成講習会に参加して

鳴門支部 岡本 茂



「社会体育指導員」について「何それ？」とか「そんなん取ってどうするの？」と周りから聞こえてきそうである。しかし、地域において、剣道活動を実施している学校・道場・クラブ・グループ・スポーツ教室等で剣道の実践的指導に当たっている指導者の資質の向上を図り、より高度な指導者を養成すること、およびより正しい剣道を普及・発展させることを目的とされている。なお、地域社会における剣道の指導者としての公的資格を得るための文部科学省令事業による「スポーツ指導者の知識・技能審査事業」における財団法人日本体育協会「スポーツ指導者剣道（中級専門科目）」の講習を兼ねるものである。参加資格は各都道府県剣道連盟の登録会員で年齢が満二十八歳以上・剣道五段以上の者で、全剣連社会体育指導員剣道（初級）認定後四年を経過した者で原則として合宿講習とするもので、称号・段位と違い恒久性はなく、有効期限は四年で、上の資格（現段階は中級）を得た場合を除き、更新講習を受けなければ失効してしまう。これは指導者個々の自覚や使命感

等を養い、技術水準を一定に保つことが可能になる。剣道関係の資料・雑誌・全剣連のHP等で探してみたが、全剣連が継続的な指導者養成を実施したことがなく、自分自身を本当に高めたいと言う意味では画期的な講習会といえよう。

平成十三年十二月十四日午前八時三十分、第六回の講習会場である愛知県・美浜少年自然の家主に中部・東海地方（主に愛知県・岐阜県・静岡県）を中心に九十五名が集まった。

開講式が始まり、講師を紹介の後に（別表による）日程に従い講習が始まった。前回（初級）の講習と大きく違ったのが平成十年十月の秋田講習会より「剣道・社会体育教本」が作成されこの本を中心に講習が行なわれる点と事前に通信教育で十単位分を自宅学習し講習会受付時に指定の論文を提出し、通信教育分の筆記試験を受験する点で、当然現在使用している「試合審判規則・審判細則」「日本剣道形解説書」「幼少年指導要綱」も使用します。中級となると理論はもちろんのこと指導法・実践での応用技術・審判技術についてもそれ相應の内容を問われる。当然中級程度の者を指導できる人が対象となるため、例えば技の実技指導の場合、初級は正しい基本動作、技を初心者示範できることが目的ですが中級となると更に実践的に技を遣えることが求められる。つまり相手の心を打つようなきちんとした技を出し、それを実際に指導者が自分で示さなければならぬ。その点に焦点をおいているため初級は原則としてすり足で中級は踏み込み足で行う点が大きく異なっている。

私はこの講習会を通して自分の剣道を向上させていくヒントを見

つけ、自分の剣道を将来どのように展開し、育てていくかという事をテーマに掲げて講習に臨んだ。社会体育指導委員会委員長の岡村忠典先生より「講習会で健康を損なわないように。自分の体力に合わせて実技講習を受けること。体が変だと思ったら遠慮なく休憩を取り見取り稽古をするように」との注意があった。

講義の内容は別紙スケジュールによるが、午前中に座学中心、午後は実技と前回の初級同様に頭と体をフルに使う講習会で、強行軍と思えるほど過密である。若干日程が変わり朝食前に形講習(田口先生・脇本先生担当)が加わった。全ての講習について述べたいが紙面の都合上、特に印象に残った講習について簡単に述べてみたい。

第一日目 剣道の特性と価値(担当岡村先生)で指導法について、あくまでも心気力一致の剣道が理想であるが、各級に重点項目が設けられた。

(称号・段位審査規則 審査細則による)

初級(初段から三段) 中級(四段・五段) 上級(六段から八段)に整理された。

・初級 正しい着装と礼法

適正な姿勢(体)

基本に則した打突(剣)

充実した氣勢(気)

←

気剣体の一致

・中級 初級の項目に下記の項目を加えたもの

応用技の練熟度(練れた具合、相手の関係をよく考えているか?)

鍛錬度(総合的に練れているか?稽古の質・量)

勝負の歩合(勝っているかどうか?技の種類・数だけでない)

・上級 初級・中級の項目に加え、理合・風格・品位がそなわっているかなどと従来との違いを説明してくれた。

三時限目の通信教育テストは、事前に有効打突・トレーニングの効果・トレーニングの負荷・剣道の基本的な指導目標・評価・日本剣道形について勉強してこることとの指示があり何とかクリアできたと思われる。(問題は○×式・記号挿入式の問題です)

昼食後は実技講習でまず日本剣道形の講習です。(日程が変わったため)

初級は大太刀三本目でしたが中級は太刀七本・小太刀三本全てが要求される。

初めは恐る恐る講習を受けていたが、講師の田口・脇本両先生の熱のこもった講義に講習生(特に私は)は引き込まれていった。特に小太刀一本目・二本目の中断半身の構え、三本目の下段半身の構えの目の付け所、剣先の付け所、太刀四本目く七本目までの最初の構えなど。四本目打太刀の八相の構え、仕太刀の脇構え等の構えをしつかりすること、との指示があった。引き続き剣道の応用技術指導法の講義は基本打突・連続技・仕掛け技・かつぎ技等の講習があった。特に自分の間合に入ってから飛び込み面・小手すりあげ面・面返し胴・飛び込み面からの鏝ぜりあいからの引き面・打ち落とし

面は最終日の実技テストの課題で特に注意して実技を行った。実技の講習が終わると嵐のような指導稽古が始まり、あつという間に一日が終わった。

第二日目、午前六時三十分起床で朝の集い、ラジオ体操終了後(少年自然の家の掟で必ず出席)剣道形の朝稽古が行われた。一番寒い時期にあつたため、少々辛いものがあつたが、そこは頑張つて稽古に励んだ。(この日は社会体育指導員剣道(初級)の更新講習会が別室にて行われていた)

個人・集団指導法(担当脇本先生)で

- ・優秀な指導者は、学習者に好かれる指導者であること。
- ・剣道具についても安価で自分に合わない防具をつけている人を散見するが、きちんとサイズの合ったものを使用すること。させるように指導すること。

声掛けの大切さについて

- ・熱心な子供には熱心に指導する。
- ・できない子供には、工夫して興味を持たせるように、萎縮させてはいけない。

・技は大きくのびのびと、等

正眼↓まん中(のど)

青眼↓相手の左目

晴眼↓目と目の間

星眼↓額の中心

目付は相手全体を見渡すように。相手の眼をよく見て相手をよく

観察するように。発声についても声を出す意味をよく理解させる等々の説明があつた。

剣道の礼法と基本打突技術論・対人技術指導法(担当福本先生)指導法の工夫

- ・独善的になりがちである
- ・理にかなつたものとする
- ・個人個人に合わせる
- ・共学・共有の世界(共に問題解決)
- ・子供だからといってないがしろにはできない
- ・指導者は嘘をついてはいけない
- ・試合の勝利に導いた指導者は名指導者とはいえない。(必ずしもそうと言いきれない)
- ・体得させる(興味を持たせる)
- ・どんな時でも目の高さを一定に保つように(遠山の目付)すれば、自ずから左足もついてくる
- ・線ではなく点である(打突したときには振り切ること。上体を一定に保つ)

・左膝の方向は常の相手に相対するように

・竹刀操作について常に鎧を意識するように

等である

審判法の理解・含む操作・模範審判(担当松永先生)

守破離の考え方
初級(守)知る段階

今までは戦術論であったがこれからは技術論(戦略論)へ

経験則十規則十調和でなければいけない

昼食後は審判技術実習・審判技術指導及び実技テストが行われた。初級とは違い、作法は出来ているものとして、有効打突の見極めがきちんと出来ているかに焦点が絞られている講習でした。九十五人を四組に分けて立ち会い・選手係・審判の順で行った。程良い緊張と、熱気を帯びた中でテストが行われた。講師の鋭い視線が講習生の動き一つ一つをチェックしていくのだが、講師の先生方は、我々の動きを短時間で評価できるものだなと感心させられた。(この評価については後日送られてくるとのこと)引き続き応用技術の指導法についての講義であるが昨日発表された実技テスト課題の練習の時間となり昨日よりもさらに熱を帯びた講習となった。その後は昨日同様嵐のような講師の指導稽古が待っている。実際に稽古をお願いしてみても迫力に圧倒された感がある。見取り稽古だけでも十分満足できるのでと思った。夜は講師の先生方や全剣連の事務局スタッフ・講習生入り乱れての懇親会で剣道談義を肴に杯が進んだのは言うまでもない。

第三日目、昨日同様朝の集い・ラジオ体操終了後、剣道形の朝稽古が始まった。午後より実技テストを控えているだけに、昨日以上に緊張した雰囲気と熱気を帯びた稽古で、実際に防具をつけた稽古同様に疲労感を感じた。朝食後体力トレーニング応用の実技指導と体力トレーニング論の講義の後、剣道における傷害疾病の理解の講

義で特に興味深い講義が聞けたので述べてみたい。

審判規則第三十条に「負傷又は事故に際しての試合継続の可否判断は医師の意見を徴し審判員の総合判断とする」とするとあり、その処理に要する時間は原則として五分以内である。医師不在の大会が多く、審判の任に当たる指導者の責任は重く、機敏な医学的対応を要求される場合もあるとのこと。わからない疾病・傷害の時は迷わず救急車を呼ぶようにとのことであった。

また個々の健康管理と定期的なメディカルチェックをお勧めしたい。

天候についても、特に熱中症について要注意のこと。

熱中症はご承知の通り高温環境に高湿度が加わると、うつ熱(体の熱の放散が妨げられた状態)によって体温上昇が助長されて体温調節機能が障害される状態を総称して熱中症と呼び、熱疲労・熱痙攣・熱射病の三型に分類され、その中で最も重症で致死率の高いのが熱射病である。

オーバートレーニングによる傷害についても

- ・ 大きすぎるトレーニングの負荷
- ・ 急激なトレーニングの負荷
- ・ 過密な試合スケジュール
- ・ 不十分な栄養状態
- ・ 栄養不足
- ・ 仕事・勉強・日常生活の過剰なストレス
- ・ 風邪等の病氣回復期での不適切なトレーニング

オーバーユース(使いすぎ)による傷害は競技大会(各種大会)でよい記録・成績を出すために過剰なトレーニングを行った結果、オーバーユース・シンドローム(使いすぎ症候群)が発現することがある。(剣道選手では靭帯損傷や変形関節症 アキレス腱断裂・アキレス腱痛等である)

アンチ・ドーピング(禁止薬物の使用禁止)の教育指導についても、剣道の特性を通じて人間形成を求める剣道においてドーピング物質である筋肉増強剤や興奮剤の付け入る隙はないが、真摯な選手の権利を守るためにドーピングの弊害を説きアンチ・ドーピングの教育指導が必要であることであった。(抜き打ちでドーピング検査も実施されるであろう)

以上で全ての講義が終わり、理論テスト(日本剣道形・審判法・剣道の歴史等々)で最後の設問に「剣道の理念を述べよ」との出題がありました。これはいつも徳島県剣道連盟主催の大会のプログラムに必ず載っていて、いつも目にして覚えていました。(剣道を修行しているものとしては当たり前だが…)思ったよりも出来はよかったと思いますが、昼食後、技術・形演技テストが行われ講習生を三組に分け日本剣道形(太刀四本目・七本目・小太刀一本目・三本目)・実技(前述)の順にテストが緊張した中で行われ講習会の全日程が終了した。

全日程が終了し帰り支度を整えた後、直ちに閉講式が行われた。岡村先生より講習生全員の合格が発表され「剣道活動が世直しの一助になれば」との話がありました。後日に今回講習会の結果と認

定証が送られてくる予定である。前回同様結果に添えられてあるワシントンアドバイスが私にとって大変ありがたいものになるのはいうまでもない。

他県の先生方と、いろいろな話をさせてもらったが、前回の初級の講習を受けた時期は、この資格が発足したばかりで認知されるのにかかりの時間がかかると思っていたが、資格そのものが徐々に(私が思っている以上に)機能してきている。

具体的には、東京都では今回(中級)の資格取得者が都立高等学校の外部指導者に採用される動きができていくらしい。(もう動いているのかも…)また他県の先生方に聞くと、県剣道連盟・小学校(道場)・中体連・高体連など主催の試合は今資格の初級以上の有資格者が必要とのこと。(県によっては審判もさせないし公認しない動きがあるとのこと)道場・少年剣道教室等の指導者についても同様で初級以上の指導者が必要との話しもあった。

聞くところによると、徳島県でも「社会体育指導員剣道(初級)」の講習会が行われるようになるということだが、徳島県剣道連盟の現在第一線にてご指導いただいている諸先生方、少年剣道教室において少年を指導されている先生方、中学校・高等学校などの剣道部の顧問の先生方には得にお勧めの講習会であると思われ監督に就かれています先生方には得にお勧めの講習会であると思われ。私のような一般の剣道愛好家が行っても講師の先生方が分かりやすく解説して下さい、内容についても期待を裏切るところか、それを上回る講習内容ですので、是非この講習会に参加されることを

お勧めします。

これは講習会には直接関係ないが、全剣連より、私宛に「全剣連社会体育指導員剣道（中級）認定者の剣道錬士称号申請における加盟団体での受審要件免除の取り扱いについて」と「剣道錬士称号審査・能力認定免除の証」の二通が送られてきました。免除対象者は、全剣連社会体育指導員剣道（中級）認定者のうち、剣道錬士を取得していない者となっており免除要件は「日本剣道形・審判法・指導法等の知識・実技についての能力」で免除対象者が「剣道六段取得後一年経過した後」で錬士申請の手続きができる者で、全剣連剣道錬士称号審査要項による自筆申請書及び小論文は提出するものとして、加盟団体で剣道錬士申請に当たり、「日本剣道形・審判法・指導法等の知識・実技についての能力」の認定以外に定めのある場合は、その部分については登録剣道連盟の方式に従うとのこと。このことから本資格が機能してきているのを実感した。

最後に、今回の講習会を機会に、日々努力し、向上心を持ち続け何事にも、（仕事・剣道等に）積極的に取り組んでいきたい。



第6回全日本剣道連盟社会体育指導員 中級講習会 講師一覧

氏 名	職 業 ・ 役 職 (平成13年10月現在)
岡 村 忠 典	{ 全日本剣道連盟常任理事 社会体育指導員委員会委員長 全国高等学校体育連盟専務理事
松 永 政 美	全日本剣道連盟常任理事 玉川大学客員教授
福 本 修 二	全日本剣道連盟常任理事 慶應義塾大学総合政策学部教授
田 口 榮 治	{ 社会体育指導員委員会委員 警視庁剣道名誉師範 衆議院講師
林 邦 夫	社会体育指導員委員会委員 中京大学体育学部教授
網 代 忠 宏	{ 社会体育指導員委員会委員 東海大学大学院体育学研究科主任教授
山野辺 辰 美	{ 全日本剣道連盟理事 社会体育指導員委員会委員 青森県剣道連盟理事長
脇 本 三千雄	{ 社会体育指導員委員会委員 全日本剣道連盟参与 国士舘大学非常勤講師
鈴 木 康 生	{ 全日本剣道連盟理事 社会体育指導員委員会委員 和歌山県立那賀高等学校教諭
百 鬼 史 訓	全日本剣道連盟参与 東京農工大学工学部教授
大保木 輝 雄	埼玉大学教育学部教授
吉 田 泰 将	慶應義塾大学体育研究所専任講師
武 藤 健一郎	社会体育指導員委員会幹事 成蹊大学工学部助教授
羽田野 徹 夫	羽田野医院院長 スポーツドクター

第6回全剣連社会指導者養成講習会（中級）日程表

[平成13年12月14日(金)～16日(日)於・愛知県 美浜少年自然の家]

時限	時刻	第1日目(12/14(金))	第2日目(12/15(土))	第3日目(12/16(日))
1	6:30 ↓ 8:00		6:30起 床 朝のつどい 清掃・朝食	6:30起 床 朝のつどい 清掃・朝食
	8:30 ↓ 9:15	8:30受付開始 9:00ガイダンス 9:10開講式	個人・集団指導法 (脇本三千雄)	体力トレーニング応用 (林 邦夫)
2	9:25 ↓ 10:10	剣道の特性と価値 (岡村忠典)	剣道の礼法と 基本打突技術論 (福本修二)	体力トレーニング論 (百鬼史訓)
3	10:20 ↓ 11:05	剣道の捉え方の歴史 (大保木輝雄)	対人的技術指導法 (福本修二)	剣道における 障害疾病の理解 (羽田野徹夫)
4	11:15 ↓ 12:00	通信教育テスト 論文審査	審判法の理解 含む旗の操作・模範審判 (松永政美)	理論テスト
5	12:00 ↓ 13:00	昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・休憩
	13:00 ↓ 13:45	剣道の応用技術指導法1 (田口榮治・鈴木康生)	審判技術実習1 審判技術指導及びテスト (全講師)	技術・形演技テスト (全講師)
6	13:55 ↓ 14:40	剣道の応用技術指導法2 (網代忠宏・山野辺辰美)	審判技術実習2 (全講師)	
7	14:50 ↓ 15:35	剣道の応用技術指導法3 (網代忠宏・岡村忠典)	剣道の応用技術指導法4 (網代忠宏・山野辺辰美)	着替え・休憩 判定会議
8	15:45 ↓ 16:30	剣道形実習1 (田口榮治・脇本三千雄)	剣道の応用技術指導法5 (林 邦夫・岡村忠典)	閉講式 (結果発表)
9	16:40 ↓ 17:25	剣道形実習 (田口榮治・脇本三千雄)	剣道の応用技術指導法6 (林 邦夫・鈴木康生)	
10	17:30 ↓ 18:00	夕食休憩	懇親会	
11	18:15 ↓ 19:00	剣道形実習3 (田口榮治・脇本三千雄)		
12	19:15 ↓ 22:00	～21:30入浴自由時間 22:00消灯	～21:30入浴自由時間 22:00消灯	※ ()内は講師名

平成十三年度後期剣道講習会

教士八段、

高橋俊昭先生をお招きして

事務局長 藤本雅史

師走の十二月二日、肌寒い日曜日、平成十三年度後期講習会が鳴門武道館において開催されました。

講師の先生は、明治村大会、京都大会、東西対抗等で活躍され、その威風堂々した剣風が脚光を浴びている実力No.1の教士八段高橋俊昭先生（京都府警）である。

九時から開講式が始まり、引き続き講話がありました。「師弟同行」「剣道を志す人のために」……等資料に基づいてのお話の中に、先生の生き様、剣道観がひしひしと伝わって来、いつの間にか先生の気に圧倒され引き込まれていました。そして十分間、休憩の後実技指導に入りました。素振りから面を着けての基本、三組の立ち合い指導等、高橋先生との基立ち指導と行われました。先生の氣迫溢れるご指導に受講生も額に汗を流し、武道館に大きく響き渡る気合に、まさに氣を發し、氣を受け止め、講師先生と受講生が一体、合気となり充実した内容でありました。次の日、身体の節々が痛かったのは私一人ではなかったようです。

立ち上がった姿、構えは微動だにせず、そこから振りおろされる一本の打ちは、全身全霊、試合の一本であり、審査の一本でなければ

ばなりません。そういう気持ちで妥協を許さず、毎日の稽古を、一本一本を真剣に取り組んでいけば、必ずや将来の展望は明るいものとなると確信しました。受講生の皆様、この時の気持ちを忘れずに頑張りましょう!!

最後に平尾勝美先生のお言葉を紹介して報告とします。

「近年まれに見る、立派な実のある講習生でありましたね。」

以下に高橋先生が用意されました資料を転載します。

講演『吉田松陰に学ぶ』

松下村塾からのメッセーじ

楳ルネツサンス・ユニバーシティ代表取締役会長

小田全宏

松陰の教育に向き合う態度

吉田松陰がどういう感じで講義をしたかという記録が残されています。「忠臣、孝子、烈婦が身を殺して道理の実現に立ち向かっていく姿を話されるときは、決まって眼に涙を一杯ため、声をふるわせながら話をされる。甚だしいときは、熱涙がぼたりぼたりと書物の上に落ちるほどであった」

つまり、吉田松陰は「人間とはこういうものです」と教えた

のではなく、自分の心の波動を伝えていったのです。だから、彼の意識の根底には「みだりに人の師となつてはならない。本当に教えなくてはならないことがあって、はじめて人の師になるのである。また、みだりに人の弟子になつてはならない。師を求める前に、まず自分の心に目標が定まつて、それに応えてくれる師を求めなくてはならない。学問する上で一番大切なことは、思うことがありながら、その方法が明らかでないために戸惑っている状態にあることである。この時こそ、学を求め、師を求める時である」というのがありました。私達にとつて師匠とは、ポーっとして与えられるものではないということです。自分にある考えや自分の中に欲する気持ちがあつて、はじめて師匠を求めて師匠が見つかるのです。

その考えについて、松陰は「師弟ともに昔の賢人たちの弟子でしかなかった。道理は、昔の賢人達がすでに言い尽くして、めつたに彼等を取り越えるほどの新しい見解や見識を発見することは無い。とすれば、同じ弟子の中で、軽々しく師といひ、弟子といひのは誤つている。私は師になることはできないが、一緒に学ぶことができる」と言っています。すなわち、いふろんなことで「人間かくいきるべし」と言われています。その人間がいかに生きるかという道理は、すでに昔から言われ尽くしてあることです。「多少あなたより私の方が先に生まれたからといつて、私が道理を知っている師で、あなたが弟子ということはいえない。同じ道を学ぶ弟子である。同じ弟子として学

ぶことができる」というのが、吉田松陰の態度です。

彼は、自分の全身全霊を込めて相手に話していました。だから、一人ひとりの本当の自己が開いていったのだと思います。自己を知れば、自分が仮に死んだとしても、そのことにおいて、何ら恥じることはないし、その人の人生というものは、全て全開であつたという考え方です。

自分で悦びを見出す

「もつとすべきことがあるのではないか」と、自分の心の中で迷うことがあると思います。しかし、そういつた中でこの『志』や『天命』について言うならば、まずあなたが生きてきた道を全て心の中で肯定的に受けとめることです。そして、今している仕事の中に喜びを見いだすということが、一つの天命に対するメッセージです。「あの人はいいな」など、隣の芝は青く見えますが、本当はそうではなくて、自分がしている仕事、今取り組んでいる仕事に、どれだけ喜びを見つけることができるかだと思ひます。

人間は、自分のことを、こうすれば運が良くなるだろうと思ふことがあります。その運とは何でしょう。運が良くなつたらいい事がある、競馬に当たるといふことではないと思ひます。もしかしたら、その結果が自分としては大変な苦しみに合うことになるかもしれせん。しかし、「こういふことをすれば、自分の心に嘘偽りのない人生を送れる」と、自分の心で確かめ

ることができたときに、どんな人生も甘受することができるのです。

今の日本の現状をみると、あまりにも自分のエゴを追求しすぎたのかもしれない。自分を捨てて、もっと大きなものに分を合致させるということ忘れて、自分だけ良ければいいという時代になってきた気がしてなりません。私は当時の人を見てみると、「自分という小さな殻から離脱して、もっと大きなものに自分をあわせていこう。天の意志にのっとって生きていこう」としていたのではないかと思います。これは今の時代では難しいことです。しかし、こういう時代だからこそ、自分たちは何をしていかなければいけないかということ、心の中にもう一度聞いてみる必要があると思います。

幕末には、四隻の黒船がやってきましたが、今は見えない大きな黒船が押し寄せてきています。このままでは、みんな沈没してしまいかもしれません。私は、自分の力を見たときに、あまりの小ささに愕然とします。

吉田松陰の言葉に「一燈照隅 万燈照国」があります。これは、「一人ひとりの灯は片隅を照らす。その人の地域で、その人なりのキラッと輝く、そんな灯となろう。そして、すべての人が思えば万となり国を照らす」という意味です。私は、このことを痛感しています。日本は、何千年という歴史を持っていきます。その中で、一人ひとりの思いの積み重ねが、時代をつくり日本をつくっているのだと思います。もし、幕末の時代に坂

本龍馬、勝海舟がいなかったら、今のような日本にはなっていなかったでしょう。

教育は学びである

私は以前、滋賀県にある、重度の知恵遅れの子がいる学園に行きました。そこで聞いた話です。ある時、女の子が学園に入ってきました。重度の知恵遅れで、ずっと寝たきりでした。だから、布団の中で排便をします。しかし、学園で一番に訓練をしなければいけないことは、トイレで排便することでした。彼女は、ずっと寝たまままで排便をしていましたので、なかなかトイレで排便ができません。半年間、保母さんが毎朝、トイレに連れて行きますが、できませんでした。あきらめて、園長さん(福祉活動で有名な福井先生のことです)に「もうダメです」と言いました。しかし、いつもはやさしい先生でしたが、この時は「ばかなことを言うな。今ここであきらめたら、あなたも私も彼女も、皆ダメになる。あきらめるな」突き放されました。そして、また次の日からは保母さんは、毎朝トイレに連れて行きました。そして、四ヶ月後、早朝に先生の玄関のドアをドンドンと叩く音が聞こえました。先生があわてて出ると、保母さんが「彼女がトイレで排便ができた」と泣きながら報告に来たんです。

先生も保母さんも、一緒に泣いたそうです。私は、これを見てハッとしました。私達は、正しい自分が足りない相手に対

して、ものを教えていくのが教育だと思っていました。実は、そうでないんです。私達が生きていく中で、多くの人との出会いがあります。自分にとって嫌な人もいれば、迷惑をかける人もいます。そういった人につきあうことが大きな学びであると感じました。

吉田松陰が、人生をかけて教えてくれたことは「一回きりの人生なんだから、その一回の人生を精一杯生きなさい。その精一杯生きる中で、人とのつながりによって、もっと大きなものに導かれていく」ということです。実際に生きて行くにあたり、学びはあくまでも行動であり、実践であり自分自身が感じたことを行動していくこと。これが学びなんだということです。それが、吉田松陰の思想ではないかと思えます。『天命』と『教育』ということ、吉田松陰の生き様を交えて話してきました。吉田松陰が与えたものが、皆さんの心に響けばと思えます。ありがとうございます。

(文責…府中商工会議所事務局)

剣道を志す人のために

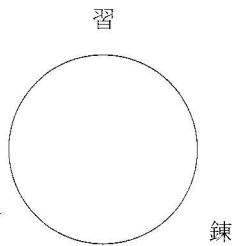
一 理業兼備ということ

この言葉は、幕末の剣客、千葉周作が用いたものであります。彼の遺稿録を見ると、「上達の場に至る道あり、…考えては稽古をなし、稽古をなしては理を考え、必死に修行すべし、理業兼備は車の車輪の如し、故に理業兼備の修行、日夜怠慢なければ十年の修行は五年に終わり、上手、名人の場に至るべし」と言っています。

剣道の動作や技術そしてそれらの根源となる心の働きの理を常に考えての稽古は上達の捷徑です。つまり数稽古、工夫稽古が大切です。

二 三磨之位ということ

上図は、柳生流(連也口伝伝書)の三磨之位の図です。一円相上に三点を劃し、(習い、稽古、工夫)で、三磨と言います。



剣道を学ぶ者は、祖師、先哲の教えをよく習うことから始めます。

即ち篤信、積習が第一点です。二点目は、師から習ったことを鵜呑みでなく工夫してみる。工夫は、自己の心中に求める修行で、真諦の追求です。三点目は、工夫したら実際に稽古、鍛練を積み重ねるといふことです。そしてこの三点は、何処までが

習いか、稽古か、何処から工夫かその境がなく、この三位を一円相上に追求して、循環して端無き位として、その円成に出精せよとの教えが三磨之位です。以上何点か修行上の要諦をあげましたが、いずれにしても、高い志と大勇猛心、大疑団を持って、朝鍛、夕錬不断の修練を怠らぬ前向き姿勢こそが大切かと思えます。勉旃、勉旃。

三 構えについて

(1) 心構え

剣道に限らず他の競技でも同様ですが、場に臨み、事に従う際、私達は多少なりともそれに対する準備をしたり、肚を決めてかかるのが普通です。それは来るべき結果をより良き方へ導く為に必要なからです。剣道の試合に臨み、いざ戦いを開始せんとする時、先ず攻防に有利な態勢を整える、これは構えであります。しかも構えは固定した身体的形ではなく、千変万化する心身則一の態勢であることとは言うまでもありません。構えは、説明の便宜上、無形、有形の構えとに分けて考えることができますが、前者を心構え或いは気構えといい、後者を身構えと言っています。そこで剣道における心構えを、先人の著述を紐解きながら考えてみたいと思います。「夫剣術は敵を殺伐する事也。其殺伐の念慮を驀直端的に敵心へ透徹するを以て最要とすぞ」これは近藤重蔵、間宮林蔵と共に「蝦夷の三蔵」と呼ばれた幕末の奇傑平山行蔵の「剣説」の劈頭の言葉です。

即ち剣術とは生死を決し、勝敗を明める武道であって、そこには妥協など微塵もなく、ただ身を挺して打倒するだけである。と恐ろしいばかりの気魄をもって剣の道を説いています。もつとも行蔵はかりでなく、古来の剣道書では異口同音に「剣術とは生死を決定する道である」というのが定説のようです。

剣を志す諸兄、剣道の心構えは、即日常生活に直結するものと銘記し、日頃の稽古には大勇猛心をもって励んでいただきたい。

(2) 身構え

剣道における身構えとは、上体と頭、足の踏み方(姿勢)、刀の握り方及び呼吸等を包含し、然も機に臨み変に応じて素直に静から動へ移行できる体勢を言いますが、今回は剣道において基本とも言うべき姿勢に焦点を合わせて語りたいと思います。

かつて昭和の剣聖と謳われた、故持田盛二範士十段が歩いている姿を、ある踊りの師匠が見て「どこにも力んだ所がなく、極めて自然で、その姿が美しい。踊りの姿勢であるようになれば良いなあ」と見惚れたという話があります。私達は、剣道に限らず他のスポーツのフォームを見ても、それがそのものの効用を増し全体の力動的関係が生きていくとき、それは正しく、また美しく感動すら覚えます。これは、正しい心構えのもとに、長い間、躰をずっと鍛えた

その結果得られたものと思います。

剣道では、姿勢について厳しく教えられ、又多くの文書が見られます。宮本武蔵の「五輪書」が一番詳しく述べているようですので、暫、原文を眺めて見たいと思います。

「一、兵法の身なりの事、身のなり、顔はうつむかず、あふむかず、かたむかず、ひざまず、目をみださず、額にしわをよせず、眉間にしわをよせ、目の玉の動かざるやうにして、またたきせぬやうに思いて、目を少しすくめるやうにして、うらやかに見ゆる顔、鼻すじ直にして、少しおとがひを出す心也。首はうしろのすじを直に、うなじに力を入れて、肩より総身ひとしく覚え、両の肩さげ背筋を陸(まっすぐ)に、尻を出さず、ひざより足先まで力を入れて、腰のかがまざるやうに腹をはり、くさびをしむると伝いて、脇差のさやに腹もたせて、帯のくつろがざる様にくさびをしむるといふ教あり。総て兵法の身に於いて、常の身を兵法の身とし、兵法の身を常の身とすること肝要なり、能々吟味すべし」と至れり尽くせりの解説です。これを読みながらその通りの姿勢を調べると、正しい兵法の身のかかりなるものはどういうものかが良く分かります。その姿勢は、日医大教授、故斎藤一男博士が三万六千余人について姿勢に関する広範囲な整形外科学的見地から発表した「良い姿勢」に全く合致しているようです。しかも武蔵の言う常の身とは自然の身と言うことであり、この自然体は、ただ剣

道の姿勢の基礎ばかりでなく、常習化により日常生活に転移され、生活上の基礎的な姿勢にまで発展せねばならないと言うことも教えています。姿勢が健康に深い関係を持ち、剣道の根源なることを思うとき、私達は、正しい姿勢を常に心掛けたいものです。



徳島の剣道史

心形刀流の道統

剣道史担当 坂本裕二



目次

はじめに

一、心形刀流シンギョウトウリユウの意味

二、江戸心形刀流伝系

三、阿波心形刀流伝系（阿波心形刀流を担った剣客の伝系）

一、広岡五左衛門由親

二、露木此太郎

三、多田三次右衛門當恒タダサイサウヱモントウコ

四、岩桐宮八富格

五、笹田甫作徳夙ササダフサクトクソク

六一一、加古清太旨備カコシヨウ

六一二、西条軍八郎卯八

七一、佐藤丞左衛門信忠

七一二、佐藤五郎兵衛篤信

七一三、佐藤丞三郎

七一四、佐藤永太郎

七一五、佐藤李太郎

八一、大島 半作

八一二、大島寛太郎

九、井後哲五郎

十、秋山 甚平

十一一、三木与吉郎正貢

十一一二、三木与吉郎順治

おわりに

はじめに

心形刀流シンギョウトウリユウは延宝九年（一六八一）に伊庭想左衛門秀明が志賀常

理子如見齊から免許を授与されて創始した流派である。

当流の宗家は江戸にあり、天和二年（一六八二）頃からの新興流儀であつたが、初代伊庭秀明以来、門弟中代々実力随一の者を後継者とした。そのため流勢は衰えることなく、幕末期幕府の創立した講武所には一門の松下誠一郎、三橋虎藏、湊信八郎らが剣術師範として出仕し、江戸下谷の伊庭道場は、千葉周作の北辰一刀流玄武館、

齊藤弥九朗の神道無念流練兵館、桃井春藏の鏡新明智流士道館と共に江戸四大道場の一つに数えられた。

今ここに江戸の心形刀流伝系と阿波の心形刀流を担った人物像を伝系によって記す。

一、心形刀流の意味

心形刀流は松浦静山の『心形刀流目錄序弁解』によると『心とは己が心、形も同じ躬の形。刀はその用る所の刀なり。然らば何流といえども、その理を離れるに非ず、之に依れば心形刀とは剣技の総名にして、吾が流のみを是を流儀とすべからず』とこれを要約すれば心形刀は心は己が心、形は己の身の形、刀は己の用ふる刀である。剣術はこの三つの要素より成り立っている。『心形刀』は単一流儀の名称ではなく『気剣体一致』剣道の真理を現すものであって、究極の目的は『本心を錬る』ことである。このことより敢て創始者が己の剣術の名称を心形刀流としたか、その真諦が窺える。

二、江戸心形刀流剣術伝系

元祖

初代

志賀常理子

伊庭是水軒秀明

藤原如見齋

藤原常吟子

正徳二年（一七一二）没六十五歳

二代嫡子

三代養子

伊庭軍兵衛

伊庭軍兵衛直保

是水齋秀康

藤原常備子

藤原常全子 宝暦二年（一七五二）没六十五歳

元文四年（一七三九）没六十五歳

四代 二代秀康次男 五代養子

伊庭八郎治秀直 伊庭軍兵衛秀矩

藤原常勇子 藤原常明子

宝暦十二年（一七六二） 文政九年（一八二六）

没四十五歳 没八十三歳

六代養子 七代秀長次男

伊庭八郎次秀長 伊庭軍兵衛秀淵

藤原常球子 源常成子

天保十三年（一八四二） 天保元年（一八三〇）

没七十二歳 没四十二歳

八代養子 九代養子

伊庭軍兵衛秀業 伊庭軍兵衛秀俊

源常同子 源常心子

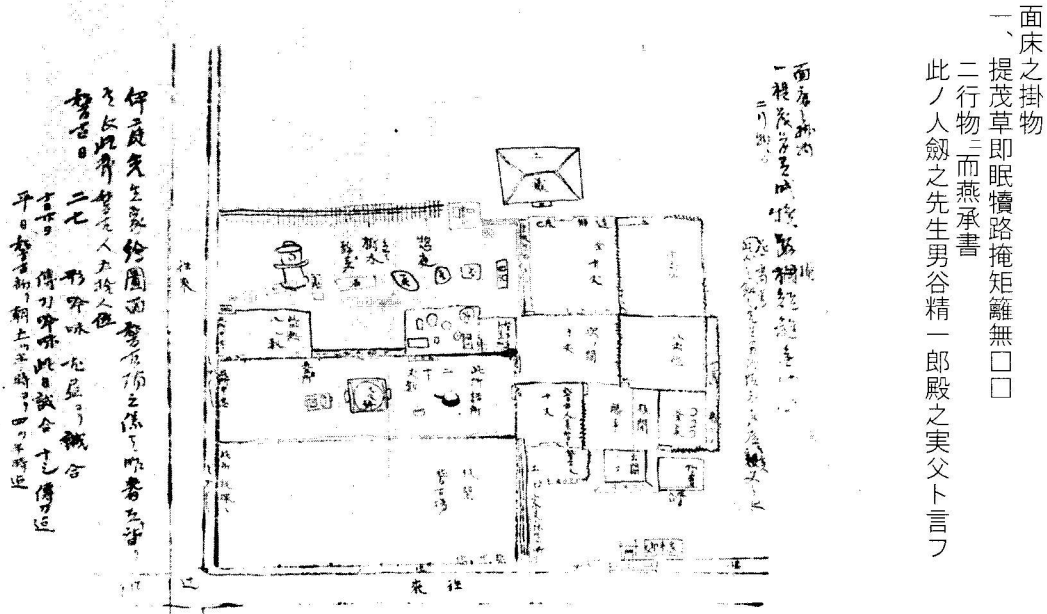
安政五年（一八五八） 明治十九年（一八八六）

没四十五歳 没五十七歳

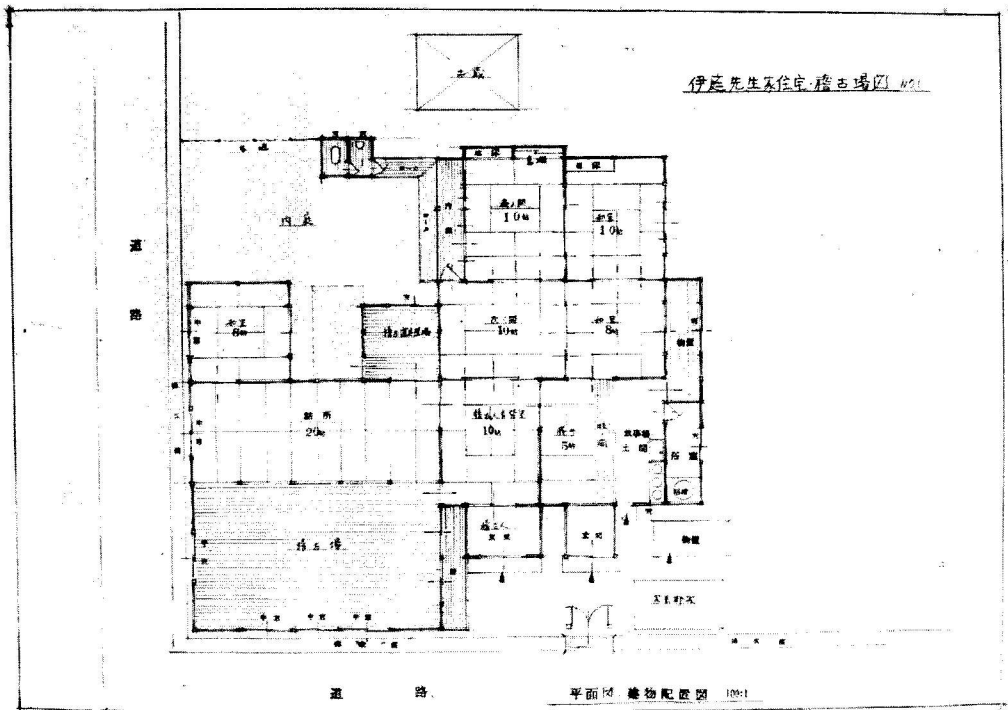
十代

伊庭想太郎

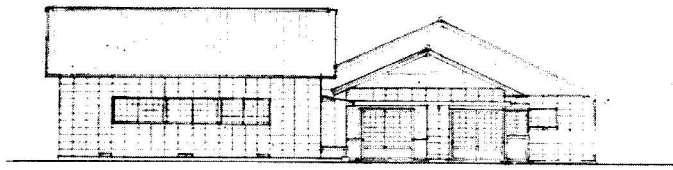
明治四十年（一九〇七）没



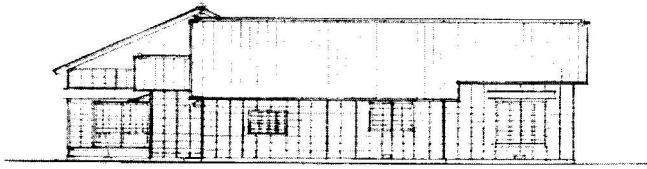
弘化二年 井後哲五郎が描いた伊庭道場入門時の道場見取図



伊庭道場間取図



正面図 (100)



側面図 (100)

弘化二年頃の伊庭道場の復元図

初代伊庭秀明常吟子は信濃国、或いは江戸で生まれたとも言われる。天性外柔、内剛で幼少より剣術を好み、長じて諸国を廻り他流を学び、最後に志賀常理子如見斉に師事して、大に悟るところがあり、天和二年（一六八二）に江戸に帰り下谷に道場を開き、本心刀流を中心にして、その他の技を取り入れて『心形刀流』と唱え一流を創立した。

二代伊庭秀康常全子 天文四年（一七三九）没六十五歳

秀康は秀明の長男で教養もあり、技も優れ、流儀の体系化の確立に務め、宗家の後継者は一子相伝を廃して、門人中技術人格共に最優秀者とし、印可を授与し、免許皆伝者には祖師常理子の称徳劍号『常□子』とし、第一字の常、第三字の子を入れることを家憲とした。

三代伊庭真保常備子 宝暦二年（一七五二）没四十五歳

真保は秀康の娘婿である。

四代伊庭八郎秀直常勇子は宝暦十二年（一七六二）没四十六歳
八郎秀直は、二代秀康の二男であるが、叔父の秀之（初代秀明の四男）に子供がなかったので養子になっていたが幕府より別の家をおこすことを許され、更に伊庭家四代を継ぐことになった。このことにより旗本の列に加えられた。以後、伊庭家は旗本となる。

五代伊庭秀矩常明子 文政九年（一八二六）没八十三歳

秀矩は村松藩の林家より迎えられて後継者となる。

六代伊庭八郎次秀長常球子 天保十三年（一八四二）没七十二歳

八郎次秀は秀堅という実子がいたが幕臣青山家より養子を迎えて六

代目に据えた。

七代伊庭秀淵常成子 天保元年（一八三〇）没四十歳

秀淵は、六代秀長の長男が本家より独立したため、秀長の次男総太郎秀淵を七代目当主に据えた。

八代伊庭秀業常同子 安政五年（一八五八）没四十五歳

秀業は旧姓三橋銅四郎といい、門人中最も剣技が優れていたもので、秀淵の娘ユウとめあわせて婿養子となり、八代目を継いで伊庭軍兵衛秀業と名乗った。秀業は老中水野越前守忠邦に抜擢され、留守居与力に昇格し、下谷和泉橋通りに約三百坪の屋敷を拝領し、道場を拡張し、旗本や御家人をはじめ、多くの門人を取り立てるよう命ぜられ道場は隆盛期を迎えた。

九代伊庭秀俊常心子 明治十九年（一八八六）没五十七歳

秀俊は前旗本蒔田左衛門の家来塀和総太郎といい、八代秀業の養子となり、九代を継ぐ、安政三年（一八五六）幕府の講武所教授となり出仕し、さらに奥詰めとなり、將軍上洛の時警護役として三度随行す。

十代伊庭想太郎 明治四十年（一九〇七）没

想太郎は八代秀業の四男であるが、兄八郎が戊辰戦争に身を投じ転戦の末二十六歳で、函館五稜郭で戦死した。それで想太郎が十代を継いだ。想太郎は東京市長星亨が東京市政の腐敗の元凶だといって刺殺した。その罪で在獄中に病死した。

これで兵法家として伊庭家は断絶するが、心形刀流は前述のように新興流派にかかわらず四大流派の一つに数えられた、これは初代

より十代の間、五代が養子である。これは剣の道に対しては飽くまで無垢の姿勢を崩さなかったこと、当主は剣技のみでなく人格的に優れておったことに起因するのでなかろうか。例えば、九代秀俊が養子に行った時、伊庭家の家族構成を『明細短冊』によれば、下谷和泉橋通りに二百七十五坪の拝領屋敷に、養父母の秀業夫妻、秀業の実子八郎らの五人義姉弟、秀業の甥の三橋兄弟、自分の妻、実子伊蔵と礼子の二人、秀業の姉清月院、これらの大家族の上、大勢の塾生を抱えていた。道場の指南は秀業が健在な間は任せておけばよいというもの、大家族の統制や道場の運営は尋常の者では出来そうもない、その上旗本としても出仕もあるし。門人達は『相応の面倒なことも有りましたが、何れもよく気を配り長い間少しも、いひ草もなく穏やかに過ごして、稽古に専念する事が出来ました』と言った。これ偏に秀俊の人格に負う処大と考えられる。要は歴代の当主は剣の道に徹した故に、煩雑な家庭もよく治めた。反面家庭をよく治めなければ剣の道に徹することが出来なかつたのである。

三、阿波の心形刀流の伝系（剣客の伝系）

二代 (一) 藩士二〇〇石

伊庭軍兵衛秀康

常全子

天明元年（一七六一）没

(二) 六人扶持十石

露木此太郎

寛政十二年（一八〇〇）没

(三) 四代藩士一四〇石
多田三次右衛門當恒

常契子

享和三年(一八〇三)没

同嫡子

多田増六吉勝

常衞子

(五) 藩士二九一石

笹田甫作徳夙

文化四年(一八〇七)没

常覃子

(四) 伊庭四代 藩士一〇〇石

伊庭八郎治秀直

常勇子

岩桐官八富格

寛政十二年

(一八〇〇) 没

辛見 半後

岩佐 富吉

住谷寿三郎

(六一) 六代藩士一四〇石

加古清 太旨備

文化元年(一八〇四) 没七十五歳

七代同

加古静馬宜美

常毅子 文政十三年

(一八三〇) 没

八代同

加古源十郎保寛

九代

加古清太直勝

天保八年(一八三七) 没

(六一) 原士三町五反

文久元年(一八六一) 没

同

西條軍八郎卯八

西條軍八郎信友

天保六年(一八三五) 没

明治二十四年(一八九一) 没

現代

常三郎 — 新三郎 — 新吉 — 隆明 — 良治

五代同

多田三次右衛門多寛

常見子

天保五年(一八三四) 没

(七一) 六代原士三町五反

佐藤丞左衛門信忠

常勇子

天保七年(一八三六) 没

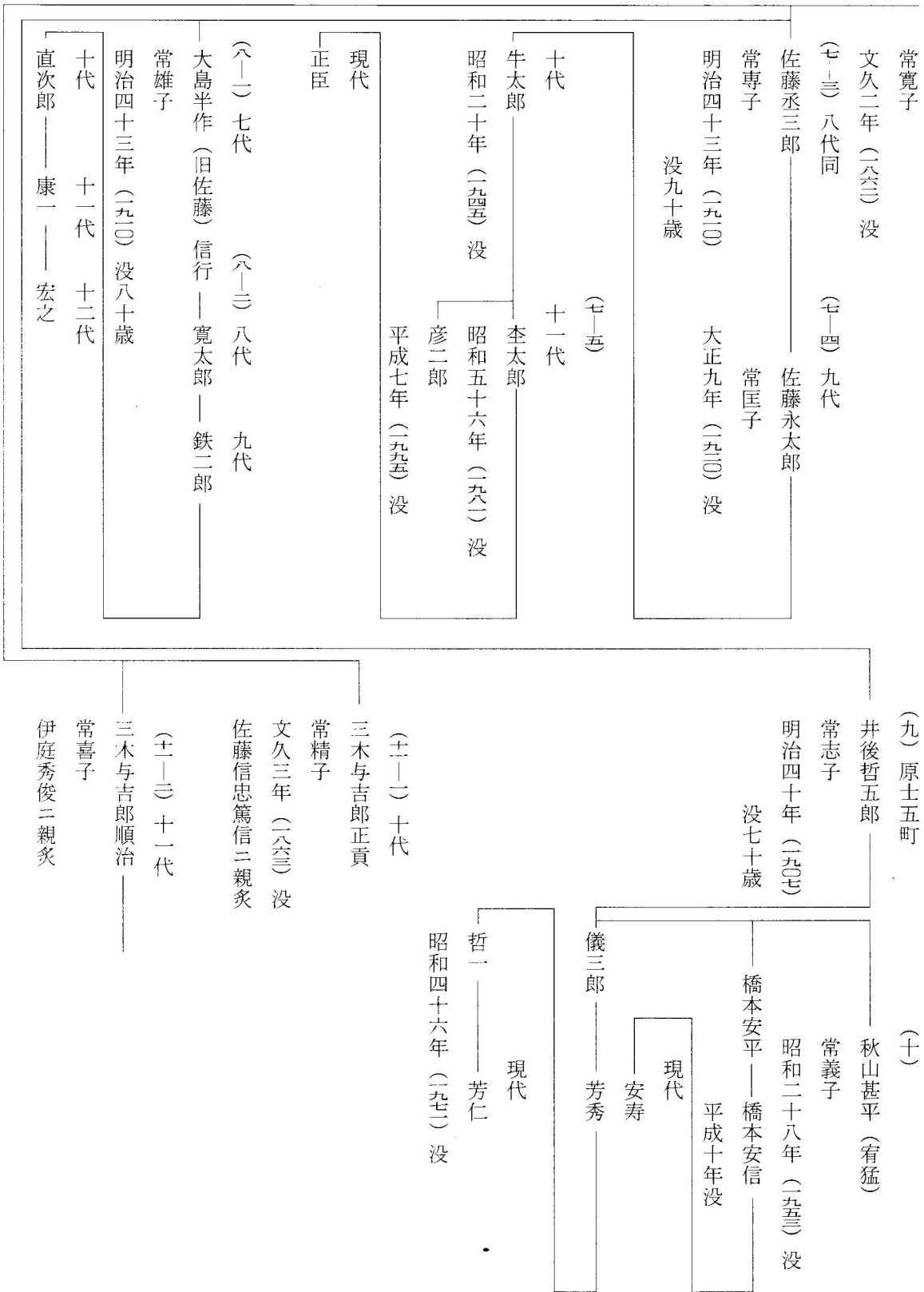
六代同

多田幸衛當時

常賢子

(七二) 七代原士同

佐藤五郎兵衛篤信



阿波の心形刀流を担った剣客

(一) 広岡五左衛門由親 天明元年(一七八一)没由親

は広岡家四代で、江戸屋敷御奏者本^々加判 芝御屋敷留守居役等を歴任して、江戸の勤務が長期であった。この間に伊庭道場に藩士十石露木此太郎と共に入門して、二代秀康に親炙した。これが徳島藩と伊庭道場を関係づける端緒となり、さらに藩主蜂須賀公が伊庭道場を庇護するようになった。その後広岡由親の取り立てにより、藩士一二〇石多田當恒が伊庭道場に入門し、当主二代秀康に親炙し、免状を受け、帰郷すると、藩命により心形刀流の師範に任命された。これにより阿波に於いて、当流が大々的に普及し伝播する嚆矢となった。

(二) 藩士十石露木此太郎元珍 寛政十二年(一八〇〇)没

元珍は広岡由親と共に伊庭道場に入門して、二代秀康に親炙し、宝暦四年(一七七四)免状を授与され、豊前様(十一代藩主重喜公の三男 文化四年六月没)小姓役、寛政五年(一七九四)豊前様劍術御相手役になる。

(三) 多田三次右衛門當恒常契子 享和三年(一八〇三)没

多田家家系は左の通りである。

初代

二代目

三代一二〇石

多田右兵衛致起 — 多田九兵衛致業 — 多田三次郎致易

月江院様附仰付

享保十四年

江戸住

(一七五) 没

四代

嫡子

五代

多田三次右衛門當恒 — 多田増六吉勝 — 多田三次右衛門

享和三年(一八〇三)没

常杉子

多寛

徳島住

天保九年

(一八三) 没

六代目

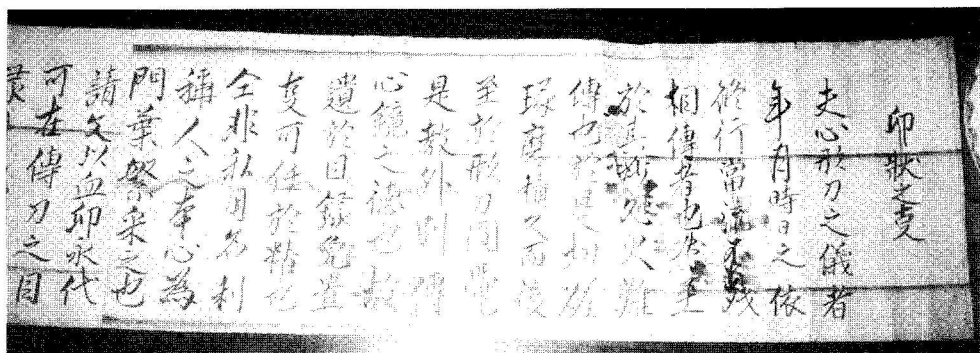
多田幸衛當時

文久元年(一八六一)没

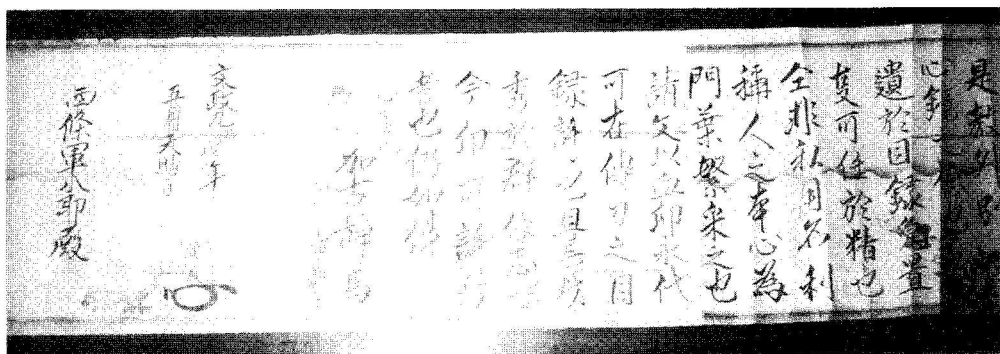
多田家の初代多田致起は三代藩主忠英侯に召し出され、四〇〇石拝領し柳生新陰流指南者として出仕した。三代致易は父致業が病死の砌二才であったので石高減せられ一二〇石になった。四代多田當恒は広岡由親の取り立てにより伊庭道場に入門し、二代秀康に親炙し、元文四年(一七三九)に目録を、宝暦五年(一七五五)に四代秀直から免状を受け、さらに安永八年(一七七九)に印可を広岡由親(蜂須賀文書のまま)より授与され、寛政元年(一七八九)には藩より心形刀流師範に命ぜられた。五代多寛は五代秀矩に親炙し恒見子を授与され、六代多田當時は八代秀業に親炙し常賢子を授与された。このように多田家は代々江戸伊庭道場に入門して学んだ武門の名家である。

(四) 藩士一〇〇石岩桐官八富格 寛政十二年(一八〇〇)没

富格は江戸御作事奉行、三田屋敷御留守居役を歴任する。その間



加古静馬宜美常毅子が原士西條軍八郎に授与した印状



伊庭道場に入門し、四代八郎治より皆伝を許され、指南者となり、その後老齢のため、道場の指導を門弟の辛見半作、岩佐富吉、住谷寿郎に託した。(蜂須賀文書による)

(五) 藩士二九一石 笹田甫作徳夙 文化四年(一八〇七)没

徳夙は多田當恒の三男で笹田家を継ぎ、江戸御屋敷留守居役を努めた。その間伊庭道場に入門し、五代伊庭秀矩に親炙し、常單子を授与された。

(六一一) 五代藩士一五〇石 加古清太旨備 文化四年(一八〇七)没

旨備は多田當恒に親炙し、指南者となり、その後裔六代静馬宜美は常毅子を授与される、静馬の門弟が原士西條軍八郎卯八であり、九代真勝は明治二年(一八六九)徳島城内の西の丸に長久館を設立した時剣術教授として出仕した。代々心形刀流の武門の家である。

(六一二) 原士西條軍八郎卯八 天保六年(一八三五)没

西條軍八郎卯八の先祖は板野郡西条の城主で長宗我部の侵攻に遭い中富川の合戦に討ち死にした、西条志岐守清貞の曾孫が慶安三年(一六五〇)原士に取り立てられ三町五反拝領し、柿原村広永に屋敷を構えた。その六代目が軍八郎卯八である、卯八は加古静馬に指導を受け、更に江戸伊庭道場に入門し、五代常明子伊庭秀矩に親炙し日録を授与され帰郷して門弟を指導した。広永で心形刀流を紹介したのは最初の人物である。軍八郎は号を風観舎といい、歌人であり学問も教えた。辞世の歌に

『迷ふたり恥ずかし水の涸をしみ』

法号 清翁院風觀常盛空袋居士 墓は自宅裏の墓地にあり卯八には倅がないため原士野口勘右衛門の次男信友を養子に迎え嗣とした。信友は原士七条武十郎に解龍流馬術を学び更に藩の師範岩田七左衛門に師事し蘊奥を極めた。劍術は加古静馬の指導を受け自邸に三間に五間の道場を建設して子弟を指導した。

(七一) 六代原士三町五反 佐藤丞左衛門信忠常勇子

天保七年(一八三六)没

六代佐藤丞左衛門信忠の先祖初代佐藤治右衛門真宗は戦国の乱世から続いた豪族佐藤四郎太夫の嫡子で、慶安三年(一六〇〇)に原士に召し出されて、三町五反の土地を拝領し阿波郡香美村藤太夫須賀に屋敷を構えた。その後裔六代信忠は幼少より武技を好み、心形刀流の藩士藩多田當恒常契子に学び、免許皆伝、劍号『常勇子』を授与され、指南者となり、門弟を教えた。

法号 徳宗院哲道圓照居士 墓は徳島市吉野本町万福寺墓地
(七一) 同 七代同 五郎兵衛篤信常寛子

文久二年(一八六二)没七十歳

篤信は父信忠に劍を学び、長じて藩士藩多田多寛常見子に親炙し、劍号常寛子を授与された。自邸に六間に八間の稽古場と母家の裏に座敷(春別晩居と言ふ)を建て、学問を教えた。万延元年(一八六〇)卯月(旧四月)十六日徳島藩の武庫監高木真蔵二〇〇石が煙硝製造所視察の途次篤信の屋敷に立ち寄り、裏座敷で一休みした。その時真蔵の旅行記に『庭畔 木深くして、一室風雅なり』その後『家柄のおもむき深き茂みかな』の句を記し、また稽古場で大勢の

弟子達の稽古をみた。その中で特に目覚ましい、丞三郎、半作、哲五郎の劍術をみて『ひとさかり蝶のまたたる新枝かな』と詠んでいる。これによって原士の劍術家佐藤の家柄が窺える。

法号 修徳院頭光院常寛居士 墓は万福寺墓地

(七一) 八代同

佐藤丞三郎信尹 明治四十二年(一九一〇)没九十一歳

信尹の号は棟斎、佐藤篤信の長男として生まれる。赤松藍州に漢学を学び、長じて江戸伊庭道場に入り、伊庭秀業に親炙し、弘化二年(一八四五)五月免許皆伝、常専子の劍徳号を授与される。帰郷後門弟を指導する。嘉永六年米艦浦賀に来航の時藩命により大森陣地に出陣する。その後阿波の南方の海岸に外国船が出没するや、日和佐の奉行となつて警備にあたる。その後明治の新政府となり、西民政所より大里長補、学区取締役等の要職に命ぜられた。

徳光院真楽常専子居士 墓は徳島市万福寺墓地
詳細は「徳島の剣道第三号」参照

(七一) 九代

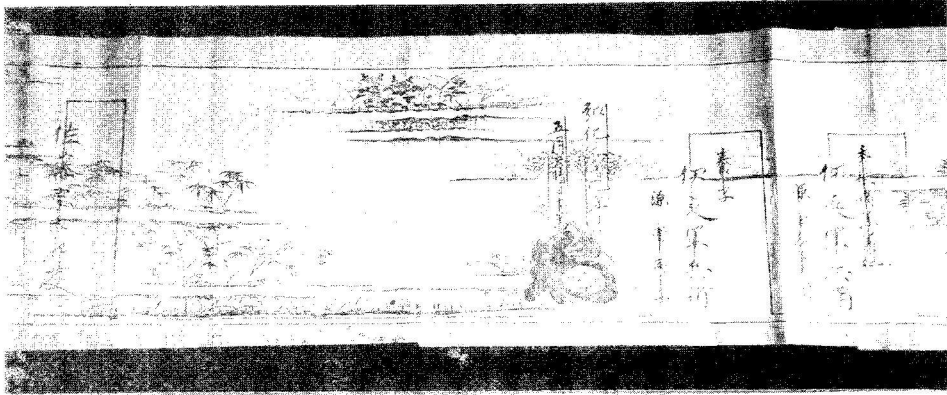
佐藤永太郎信秀 常匡子 大正九年(一九二〇)没

信秀は先祖代々三百余年住み慣れた阿波郡香美村藤太夫須賀より徳島市中吉野町一丁目の土地に移住した。家居は全部善入寺島で処分したが、道場だけは移築して門弟を教えていた。惜しいかな、今時昭和二十年七月の米機の空襲により貴重な記録諸共灰燼に帰した。

(七一) 十一代

佐藤李太郎 昭和五十六年(一九八二)没

卯狀之事
 夫心形刀流之儀
 昔年月時日之儀
 後符當流末後相
 傳者止然至於其
 妙處更難傳止於
 見初破環廢後久
 而後至於形刀圓
 窺見教不別傳
 心鏡之德也故遠
 於月時日之儀可
 任於精之非私
 用名利相人之
 心為門草葉
 常之也諸文以
 魚斤永代丁在
 傳之同不詳也



伊庭軍兵衛秀業源常同子が
 佐藤宗太郎（丞三郎の幼名）に授与した印状

心形刀流居合

大正 五三郎

心形刀流居合 初本の順
 十二段一分の撮影
 常流と合一傳の古上
 居合の神は是の鏡
 居合の神は是の鏡
 居合の神は是の鏡
 居合の神は是の鏡

佐藤奎太郎の心形刀流居合初本



一



二



三



四



五



六

李太郎は長らく旧制徳島中学校の教師をしていたが、この間「李さん徳中の大目付」と言われる程生徒に尊敬され、精神的陶冶に當時に偉大な力があつたと未だに語り継がれている。一方阿波では唯一の心形刀流の正統保持者であつたが、昭和五十六年に没し、当流の後継者が出来ず、終に心形刀流は消滅した。それだけでなく、李太郎の弟彦二郎は長らく東京帝国大学に勤務して、剣術と当流の形の蘊奥を極めていたが平成六年九十七歳で没し、武門の佐藤家から姿が消えた。

(八一) 大島半作信行 明治四十三年(一九一〇) 没七十八歳

信行は龍淵と号す。佐藤五郎兵衛篤信の二男、佐藤丞三郎の弟として阿波郡香美村藤太夫須賀に生まれる。長じて伊庭道場に入門して、伊庭秀業に親炙し、安政四年(一八五七)称徳剣号、常雄子を授与される。徳島県武徳会設立に尽力する。

法号常淳院殿雄懷龍淵居士 麻植郡川島町大字字二つ森の墓地に葬らる。詳細は「徳島の剣道第九号」参照。

(八二) 大島寛太郎栗軒

寛太郎は佐藤丞三郎の二男として阿波郡香美村で生まれる。半作に男子なきため養子に迎えられて大島家を嗣ぐ、寛太郎の時吉野川改修工事で善入島は遊水池となり、住民家居全部立ち退きになった。この立ち退き者の移転者惣代長となり世話をする。大島家は徳島市掘川前の七百坪の屋敷に移転した。この屋敷の家屋、諸道具一切を昭和二十年七月の戦災で失った。特に武徳会関係の記録を灰燼に帰したことは返す返すも惜まれる。

常志子
井後哲五郎



常志子

明治三十七年

三月四日

日記

井後哲五郎

湯浅宗一

明治三十六年

五月五日

秋山甚平

同年七月十日

秋山甚平

常志子

松永隆七郎

伊坂彌平

古川富重

(九) 原士五町

井後哲五郎信俊 明治四十年(一九〇七)十月没七十一歳

哲五郎は原士佐藤篤信の三男として阿波郡香美村藤太夫須賀で生まれる。赤松藍州 佐藤香雪に漢学を学び、長じて江戸伊庭道場に入門し、伊庭秀俊に親炙し、常志子の剣号を授与される。

帰郷後阿波郡柿原村(旧名)の原士井後道五郎の養子となり、井後家を継ぐ。幕末の動乱期には藩命により京都御所守護。東征軍に従い会津戦争に参加する。新政府となり西民政所の役員、郷学校、剣術、読書、助教等の要職につく。明治二十二年一切の公職を辞し、屋敷に伊庭道場に模し、道場や付属建物を設立し、専ら文武両道を教える。特に文に意を用いたので県下一円は勿論のこと遠く東讃より多数の門弟が集った。その門弟の中には讃岐の白鳥の橋本安平や北海道の秋山甚平が有名である。

徳光院煤雪常志大居士 屋敷の裏墓地に葬らる

没後以後屋敷に門弟と有志相計り岡本斯文の文と書による高さ二メートル八〇センチメートル、幅一メートル三〇センチの頌徳碑が建立された。

詳細は「徳島の剣道第四号」参照

(十) 剣客 秋山甚平 昭和二十八年七月没

甚平は阿波郡市場町二百五十五番地で明治六年(一八七三)に生まれた。家は藍作も行う裕福な農家であった。甚平は生まれつき、頑丈な体で、武技を好み、家の近所に那須与一の後裔の那須一族が開いた玉心流武術の道場があり、ここに入門した。

権大僧正秋山宥猛



玉心流武術は柔術を主体とするが棒、杖、鎖鎌、剣術もする総合武術であった。ここで幼少よりこれらを一応習った。

その後二里ほど東にはなれた、阿波郡柿原村広永(旧名)原士井後哲五郎の心形刀流剣術の道場に入門した。ここは武術だけでなく学問にも意を注ぎ、文武両道に優秀な門人が多数輩出していた。甚平は頭脳明晰で能弁の上に宗教こころの強い特異な性格の持ち主であったと、古老たちに未だに語り継がれている。三十歳の時、井後哲五郎より免許皆伝さらに『常義子』の剣号を授与された。

甚平は父と共に農業に専念していたが、明治二十五年頃、阿波麻植両郡に北海道入植の機運が高まり、明治三十年(一八九七)入植することに意を決し、三十一年北海道仁木町に渡った。それより北海道の生活が始まるのであるが、一般の入植者のように鋏を振るっ



秋山家祖先供養碑
市場町の生家の裏に、秋山甚平が建立す。



秋山甚平ノ生家 市場町市場岸ノ下116

て開拓に従事するのではなく、仁木町、札幌、樺太と転々と移り、専ら警察署、軍隊、一般人に銃剣術を指導していたようである。

甚平はまた事業家としての素質があり、最も留意していたのは洞爺湖周辺を観光地として開発することであった。時代の流れに翻弄された讃岐琴平の金比羅大権現の遷座を願ひ、之を中心として門前町を作ることに着目した。常人で思いもよらない発想である。このため四国に度々帰り、琴平の金比羅大権現の別当寺、象頭山金光院松尾寺永原有堯師に逢ひ、その他関係の協力者を得て、明治四十一年（一九〇八）七月計画発表の段階となった。その計画とは、洞爺湖畔に金比羅大権現を遷座し奉り、敷地十萬坪に七百七十戸を入植させ、学校、病院、銀行、歓楽街などを作る構想である。直ちに寺の本堂を建築し、入居者を募集して計画は着々と進み四十二年暮れには、略計画は完了し、四十三年二月十五日に永原有堯師により奉遷式を行うことが出来た。

『好事魔多し』というが、同年七月二十二日洞爺湖周辺は地震、烈震、激震と続き、最後の有珠山の大爆発によって苦心惨憺して出来た門前町は凡てを失った。しかも甚平はそれでも挫けず、寄寓先の加藤子爵の別邸で再起の計画を立て、先ず移転先を『北門の京都』と言われる俱知安に定めた。幸にも五千坪の土地を寄付する篤志家があった。土地は出来たが資金がない、今度は自ら各地を巡錫して金集めに奔走した。その結果大正元年（一九一二）十月十日廢墟と化した洞爺湖畔より俱知安の仮本堂に遷座することが出来た。

甚平の宿願は仏門に入り、僧籍を得ることであった。大正三年（一

九一四）四月永原宥堯師によつて得度し、『宥猛』と名のり、さらに大正四年四月八日より大正五年八月まで高野山南院で玉野諦住師により受戒を受け、これで完全に仏弟子秋山宥猛が誕生し、今まで『執事秋山甚平』の名で行つた伽藍建設のことは『秋山宥猛』の名で出来ることになった。

俱知安の金比羅寺は着々と整備し発展したが洞爺湖周辺の開発の計画が忘れられず、俱知安より立地条件のよい小樽に進出計画をたてた。この計画も多くは協力者を得て、大正十一年（一九二二）に小樽天狗山に本堂建設に着工した。四年の歳月を経て十五年八月に完工し、高野山管長泉智等猊下を、特別に請うて遷座式を行つた。長らく健康で活躍した、甚平も年には勝てず八十歳で昭和二十八年（一九五三）遷化し、権大僧正を贈られた。

秋山甚平は幼少より武術を習い、長じて北海道に渡り、仁木町、札幌、小樽、樺太と各地の警察署、軍隊、一般人に柔剣術を指導してまわる一方、生来の宗教心により伽藍を建立し、最後は仏門に入つて仏の法を説き、善男善女に安心立命を与え、建立した伽藍を武術修練の場とし、寺の会式には武道大会をするを常例として青少年の健全育成に務めた。このことは、秋山甚平の面目躍如たるものがあるといえるのではなからうか。

（十一―）三木与吉郎正貢 文久三年（一八六三）没三十歳

正貢は板野郡松茂村中喜来浦小高取格三木家の惣領として、天保四年（一八三三）に生まれる。長じて心形刀流剣術を原士佐藤信忠、篤信の父子に学び、万延二年（一八六一）に免許皆伝、続いて常精



起請文之事

一心形刀流兵術授受之
旨趣謹而承焉假心雖
濟先父心契之友不可有
他見他言且以此術於為
無益之殺生者直可蒙
天神地祇就中卓爾
魔利支天尊神之罰者也
仍起請文如件

明治三十四年

辛丑春五正月

心形刀流師範

井後哲五郎

藤原常三子孫
馬

免杖授典

子の剣号を授与される。文久三年（一八六三）三十歳の若きで将来を嘱目されていたが没した。

（十一—二）十一代三木与吉郎順治 明治四十二年（一九〇九）没

順治は幼名助三郎 兄正貢と共に佐藤信忠、篤信父子の心形刀流剣術を学び、長じて伊庭道場に入門し、九代伊庭秀俊に親炙し、万延元年（一八六〇）に常喜子の剣号を授与される。

帰郷後自邸に剣道場を建設し、心形刀流剣術の普及発展に尽力する。晩年は勅撰議員（貴族院議員）に選ばれ、国政に尽くす。

おわりに

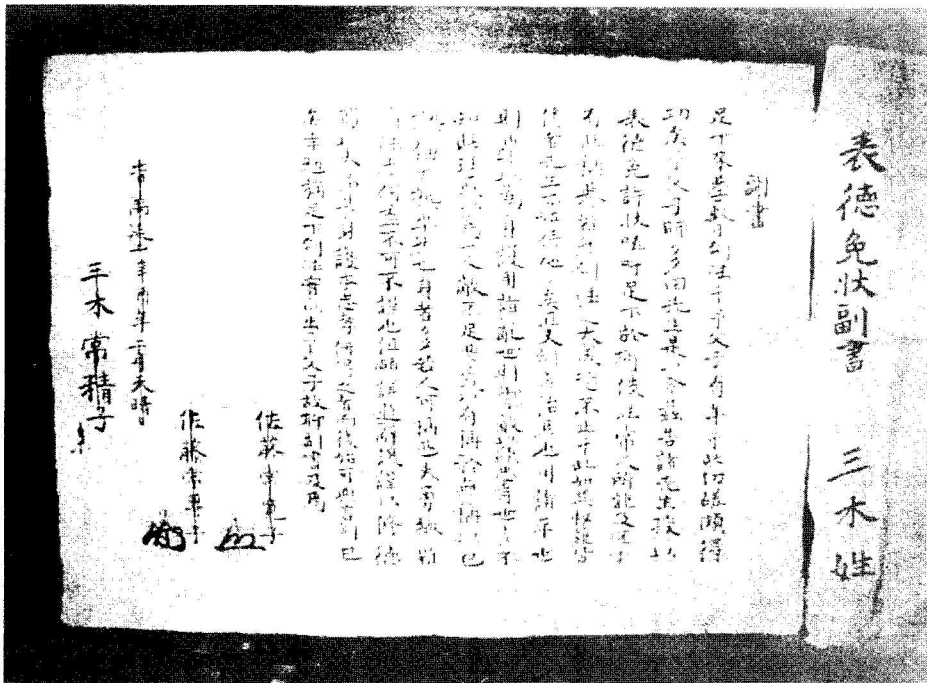
阿波の心形刀流の道系を担った人物像を時代によって記述したが、調査漏れがあると思われる。之は今後の調査に委ねることとする。

さて、阿波藩士広岡由親、同露木此太郎、同蓼常常が伊庭道場に入門して二代常全子秀康（元文四年一七三九没）に親炙した。これが伊庭道場と阿波に因縁が出来た嚆矢となった。

その上藩主蜂須賀侯は肥後松浦藩、竜野、亀山、林田の各藩と共に伊庭道場を庇護したので、阿波藩の江戸屋敷詰めの藩士は入門して修練した。一方阿波藩士多田當恒を心形刀流剣術師範に任命して当流を藩内に普及させた。幕末期、藩士や原土が度々上京する機会あり、その都度、伊庭道場の門をたたいた。

そればかりでなく、柿原村の原土西條軍八郎、香美村の原土佐藤兄弟、松茂村の小高取三木ら私費で江戸伊庭道場に入門する者も出て来た。彼等は帰郷して道場を開き子弟を指導したので、徳島は貫心流、関口流が主流であったが、之を凌駕するまでに発展した。

萬延二年二月
三木与吉郎正貢に授与した表徳免状副書
佐藤常寛子信忠 佐藤常専子篤信より



このように心形刀流が原土達に発展したのは、伊庭道場の当主は初代より十代まで代々剣の道に対しては真摯な態度で指導したことによる。

その指導内容は、時代に適応して、旧態依然とした形稽古を主体にせず、竹刀打ち込み稽古と試合を取り入れ、他流試合を積極的に行った。これが有事に即応する武術の修練をすることを信条とする原土達に合致した故でなからうか。

備考

- ①豊前様 十一代重喜公三男幼名恒之助 文化四年正月没四十八歳。
- ②月江様 四代光隆公の弟万之助寛楽 新田五万石与えられ分家、延宝四年二十四日 七十四歳没。
- ③親炙 師匠に直接指導を受けること。
- ④明細短冊 幕府に提出する略履歴書。
- ⑤林田藩 播州播磨国林田に藩庁をおく外様大名。一万石拝領す。
- ⑥蜂須賀文書 寛政元年(一七八九)武芸指南面々芸方名目書控
- ⑦加藤子爵 伊予大州藩主十六代春秋。
- ⑧泉智等 徳島県麻植郡鴨島町で嘉永二年一月十一日生まれる。万延元年十二歳で得度。大正三年高野山処管長、同十四年三派合同古義真言宗管長、昭和三年九月没八十歳。
- ⑨原土三町五反 三町五反を拝領する原土のこと。

参考文献

- 国史大辞典 吉川弘文館
- 日本剣道史 山田次朗吉
- 徳島藩士譜 宮本武史編
- 日本武道体系 今村嘉雄 同明舎
- 剣道日本 スキージャーナル
- 大島家一族 大島康一
- 武道の系譜 南条範夫
- 伊庭八郎のすべて 新人物往来社

表徳免状副書の解読

足下は撃剣の法を予の父子に來たり学びて、此に年有り、切磋して頗る功を得たり

予の父子の師多田先生は是を以て、今ここに諸先生に告げて、授くるに表徳免状を以てす

ああ、足下はここに於いて技は常人に非ず、能くこのことを誉めて表徳号を授与されたのである

然りと雖も剣法の大成は、是れの正しからざるを恐る、秘蘊皆伝の如きは先生も暫く他日を待てと言えり

且つそれ剣は天下を治める道具である、これは世を太平にするために用いるものであり、則ち学びて身を護る道具とす

乱世には則ち敵をふせぎ以て忠孝を顕す、このことわりを世人は知らず

或は剣は一人の敵たるを以て学ぶに足らず、或は称あるを以て称なき者に誇り、己の熱なるを以て 未熟を侮り、率然として身を亡ぼすもの多し、これを匹夫の勇と言う

たとえ法を得ると雖も亦何にか益せんや、謹まざるべけんや、但し、願わくは謙遜辞讓して謹んで以て徳を修め、苟も以て夫

れ世を治め身を護り忠孝を本として、之を得る者にして後、始めて共に剣道人と言えるのである

幸に勉旃足下の剣法は実に予の父子より出たものであるを以て免許状に副え、副書を呈す

佐藤常寛子

佐藤常勇子

時万延二辛酉二月天晴日

三木常精子参る

支部便り

板野東支部

一、はじめに

徳島県剣道連盟板野東支部は現在川田武志支部長以下約三十名の会員を擁し活動しています。支部の主な活動は、月例の支部稽古会のほか、十月の県社会人大会への参加、十一月の支部錬成大会、二月の支部総会です。

今回の支部便りでは支部内の剣道教室・道場からの活動状況の報告を紹介させていただきます。

二、支部内の道場・教室の紹介

①北島剣道教室

当剣道教室は、北島町西高房の誠武館道場の分家として故伊丹要先生（当時剣道五段）が発起者となり、昭和五十二年四月に村長始め町有志の方々のご協力によって開設されました。練習場所は北島北小学校の講堂をお借りして、初代会長に伊丹先生、

顧問に三木只雄先生・故中谷智好先生、指導には有段者五名で当たり小学校三年以上の男子生徒を対象として希望者を募集し、開講の運びとなりました。

稽古内容としては、毎週月・木を練習日

として指定し、午後七時～八時三十分の間、稽古に励んでいます。最初に出席者の点呼、道場訓（五箇条）の斉唱、準備運動、素振り、その後お互いに切り返し・基本打ちまで六年生の生徒に交替で指揮を取らせています。上級生及び先生方の掛かり稽古、また時としては、お互いの試合稽古・円陣稽古等も織り交せて実施しています。また、毎月第一月曜日には板野東支部の先生方に掛かり稽古をお願いしております。次に現在の生徒数ですが、昭和六十年末期には約四十五名程度でした。しかし平成五年以降他の球技系のスポーツ少年団の活動により減少し始め、現在では男女合わせて二十名で非常にさびくなりました。指導者数も仕事の関係で常時有段者で五名～六名です。

次の年間事業計画について記録します。

四月 総会入門式

五月 教室のトロフィー争奪戦

六月 体力検査

七月末 一泊研修旅行

八月 土用稽古（座禅を三十分程度組み入れる）

九月 トロフィー争奪戦

十二月 寒稽古

一月 天満神社初詣でお祓いを受ける

初稽古鏡開き

二月 トロフィー争奪戦

三月 卒業試合、卒業生感想文、一年間の足跡の発行

なお、当剣道教室の会計および事業計画は会長と指導部長と後援会の役員で計画し先生の承認を受け実行しています。

②誠武館道場

館長 二代目 中谷善一郎

代表指導者 五段 大野 義則

指導者 錬士 六段 西宇 康治

四段 亀田 秀雄

練習場所 誠武館道場 火曜日

町立武道館 木曜日・土曜日

稽古時間 午後六時三十分～九時

練習生 幼稚園から六年生まで二十名

創立者中谷智好（教士六段）先生は昭和四十四年に道場を開設され、指導は基本的に厳しく送り足の習得、すべるような面の打ち込みに終始されました。中谷先生は昭和六十三年に亡くなられ、早や十四年になります。亡くなられてからは先生の遺志を受け継ぎ、子供の指導に汗を流しています。

当道場は道場の広さの関係上、練習を二部に分け、六時三十分から新人の稽古に入り、最初は三十分送り足の練習で二ヶ月くらい続けます。次には四十分と次第に時間を長くするようにしています。規定は八時三十分終了ですが、子供と後援会の熱心さに指導者が押され、もう一人、もう少しと九時を廻ることが多くなります。また昨年までは週二日が今年から週三日の練習と指導者はうれし悲鳴です。

特に喜ばしいことは、お母さんが三名とも始められ子供と一緒に汗を流していることです。来年、再来年には、有段女性剣士が生まれるのを楽しみにしています。子供

たちの練習ぶりも変わってきて、競争心が出てきたように思われます。

「稽古の信念」

永遠に続く下りのエスカレーターを反対に登るようなものである。ちよつと怠けたり油断するとどんどん下がってしまう。

③松茂少年剣道教室

剣道教室の母体は松茂町体育協会剣道部です。町内の三つの小学校の児童を対象に稽古を通じて子供たちが元気に育つてくれることを期待して開講しました。

教室では、何の知識もない五歳や六歳の子供たちを指導するのに専門的で難解な言葉を使ったり、はじめて手にする竹刀の操作方法や技術の押し付けはありません。

一度、剣道に接した子供たちが長い期間、剣道と過ごせるような環境を作り、途中で嫌いになってやめたり嫌々稽古に通わせることなく幼児の稽古も集中できる時間を考慮し、子供たちの「やる気」を継続させることに注意しています。

また、子供たちの剣道の上達だけを評価せず、稽古で学んだ「やる気」を日常生活

でも役立つことと信じて指導しています。

ただいまの受講生は十六名。男子十二名、女子四名が毎週火曜日と金曜日の夕方六時から二時間松茂町総合体育館でみんな元気に稽古しています。

平成十四年度事業計画

四月 開講式

七月 夏季錬成大会

八月 合宿

十一月 支部錬成大会

一月 稽古始め、春季錬成大会

二月 一日研修

三月 閉講式

三、支部稽古について

板野東支部は北島町に二道場、松茂町に一道場と計三道場で各々少年少女を指導した後、各先生方で練習に励んでいます。月に一度、第一月曜日に三道場の先生方が北島少年剣道教室（北島北小学校体育館）に集結し、午後八時三十分～十時の一時間半程度汗を流しています。稽古人数は毎回十～十二名と規模は小さいですが中身の濃い稽古と自負しています。

「剣道の稽古」は単に技術の向上を図ったり身体を丈夫にすることばかりでなく、

全日本剣道連盟の「剣道の理念」に述べられているように「すべての道に通ずる真理を探究し、人間を作りあげる」という意味をもっていることから次に述べる練習方法を取り入れています。

まず一つ目は剣道では「打ち込み三年」などといって基本の稽古に重点が置かれているため「切り返し（打ち返し）」をしています。初心者はもとより高段者にとっても欠くことのできない最も大切な稽古法として用いています。次に、「約束稽古」は互いに攻め合う気持ちで「氣」を充実させて行っています。また「打ち込み稽古」は、元立ちの打突の機会を捉え氣力を充実させて大きく全身運動で打ち込んでいます。さらに「掛かり稽古」は、短時間のうちに氣力・体力の続く限り全身を使って大きく打ち込んでいます。

二番目は互角稽古ですが、技術や氣力の互角な者同士が「間合」、「隙」、「技」など剣道の全ての条件を發揮し、初太刀を大事

にして一本一本をおろそかにしないように稽古しています。

三番目はどの道場でも相手と対峙したら真っ先にするのは「試合稽古」です。これは勝敗のみにとらわれて姿勢・動作・態度などが崩れやすくなるので当支部では先に述べた基本稽古に重点を置き、全員が一丸となって剣道の修練・修行に励んでいます。

（道場・教室からの報告、および支部稽古は分担執筆。文責・本村）

三好支部

一九八三年四月発行の「徳島剣道三十年の歩み」(P149からP153)に、当時の支部長(故)国金唯義先生執筆の三好支部だよりが掲載されている。三好支部沿革の中に「……道場数の多いこと、人員の少ないことは地域性による」又、「山間の三好支部はあせることなく、質実剛健、剣道の心を堅持し、基本を大切に、地味に歩み続けたい」と書かれている。

やがて、県剣五十年史が発行される。三好の現況(現在支部の構成、会員名簿、沿革など)は五十年史にゆずるとし、①山城②川崎③佐馬地④箸蔵・剣正童⑤井川⑥三好⑦三加茂(剣徳館)⑧三野の八道場のうち六道場と、①池田一中②山城中③三好中④三加茂中の四中学校と、①池田高校一校の活動状況を報告したい。

今や学校教育の大改革がなされている時、剣道指導のあり方も考えなおさなければならぬ。加えるに少子化の波は続く時、他に面白いスポーツは沢山ありいよいよ剣道

は見向きもされない、剣道人口が大幅に減少する危機感さえ覚える。こんな時、指導者の心こそ大切であると考える。

各道場代表者は、「個性を大事にしたい。発達段階、のみこみの早い子、遅い子、身体発達などの個人差を考慮した指導、勝敗を抜きにして、基礎の基本を気長く徹底指導したい。目標を昇級審査合格において頑張らせ、楽しみながらやる気を育てたい」と口々に言う。

指導者は、それぞれ職業をもち、不景気のいたみを感じながらも、青少年健全育成のため時間をさき、ボランティア精神で頑張っていられる姿に敬服する。

子供の指導や、同僚との稽古では、無明(無知の知)謙虚に己を省み、お互い同志、或いは己(指導者)と子供の間に「認め合い、支え合い、励まし合って磨き合う」そんな心の交流がみられ嬉しい。

三十年史当時の支部長(故)国金理事・(故)松浦評議員・橋本(現顧問)・会計(故)大森事務局・平田照男・笠井憲次朗の先生方は、支部発展に貢献され、国金支部長の遺志を実

現すべく並々ならぬ努力をされ今日に至っている。



川 崎 小 学 校 剣 道 教 室				道 室 場 名
(男)		(女)	(計)	小 学 生
(小) 6		6	12名	教 員 数
(中) 2		3	10名	
毎週 水、土曜日 川崎小学校体育館				稽 古 日 と 場 所
(小) 午後 7:30 ~ 9:00 (中・一般) 午後 7:30 ~ 9:30				時 刻
藤 本 常 巳 (四 段)	堀 川 修 (四 段)	喜 多 一 幸 (四 段)	◎山 下 敏 雄 (三 段)	指 導 者
15名				中 ・ 高 ・ 一 般
(男)	15名	(女)		常 時 参 加 者 数
山下 敏雄 0883-74-1325 保護者会長 山邨 74-0191				連 絡 先

佐 馬 地 少 年 剣 道 ク ラ ブ				道場名 教室名
(男) 11名		(女) 2名	(計) 13名	小学生 会員数
馬路小学校体育館 毎週水曜日				稽古日と場所
午後 7:00 ~ 8:30				時刻
山田 泰弘 (三段)	武内 雅史 (四段)	井口 憲綱 (四段)	◎笠井憲次郎 (四段)	指導者
				中・高・一般 参加者数
(男)		(女)		
笠井憲次郎 0883-74-0036 保護者会長 峰本 康博 0883-74-5602				連絡先

<p style="text-align: center;">箸 蔵 ・ 剣 正 童 (合併道場)</p>				道場名 教室名
(男) 20名		(女) 5名	(計) 25名	小学生 会員数
<p style="text-align: center;">火曜日 池田警察道場 金曜日 池田町総合体育館 尚、郡合同稽古日で もある。 但し、冬休(年末・年 始)春・夏の長期休暇 日中の火・金曜日と火 金が祝日と重なった日 は休み。</p>				稽古日と場所
<p style="text-align: center;">(小)午後 7:00～8:30 (中・高・一般)午後 8:30～9:00</p>				時刻
高橋 和宗 (四段)	伊月 操 (二級)	山下 春夫 (二級)	田岡 哲二 (二段)	徳永 賢二 (五段)
				指 導 者
10名				中・高・一般 常時参加者数
(男)	10	(女)	0	
萩田 奉弘 0883-72-1599 保護者会長 影本 好弘 0883-72-5650				連絡 先

三 好 町 剣 道 ク ラ ブ				道場名
(男)		(女)	(計)	小学生数
8名		10名	18名	
月・木 三好町柔剣道場 祝祭日と重なった日は 休み				稽古日と場所
(小) 7:00～8:00 (中) 8:00～9:00 (高校・一般) 9:00～10:00				時刻
大西 健太 (三段)	堀川 修 (四段)	藤本 常巳 (四段)	◎増田 和広 (七段)	指導者
22名				中・高・一般参加者数
(男)	13名	(女)	9名	
増田 和広 0883-79-3704				連絡先

山 城 剣 道 修 錬 ク ラ ブ				道場名 教室名
(男) 4名		(女)	(計) 4名	小学生 会員数
		夏休み・お盆 冬休み(年末・年始) 但し 山城中学校剣道場	月曜日と木曜日	稽古日と場所
午後 7:30～9:30				時刻
合田恵美子 (三段)	島尾 眞且 (四段)	合田 秀実 (六段)	平田 照男 (六段)	指導者
10名				中・高・一般 常時参加者数
(男)	9名	(女)	1名	
平田 照男 0883-83-1161 保護者会長 土橋 克晶				連絡先

三 野 少 年 剣 道 ク ラ ブ				道場名
(男) 0		(女) 1	(計) 1	小学生 数
毎週土曜日 三野中学校体育館 尚、土曜日が祝日の時 は休み				稽古日と場所
午後 7:00 ~ 9:00				時刻
田中 伸 (三段)		久保 和雄 (三段)	◎大池 年裕 (三段)	指導者
9名				中・高・一般 参加者数
(男)	4名	(女)	5名	
大池 年裕 0883-77-4113				連絡先

13 年度中参加大会での活動状況				山城中学校				学校名		
三好郡中学校 防犯新人大会	三好郡中学校 総合体育大会	大会 名	初段・古谷 勇人	初段・富岡 胤人	初段・吉川 絢	初段・宮本 貴人	段位 取得者 氏名	8	男	部 員 数
								3	女	
8	14	男	参加者数				月～土		部活稽古日	
3	3	女					部活稽古時間			
男子個人優勝 宮本 貴人		個人戦(氏名と成績)	特筆すべき成績(12年以前のことでも結構です)				月～金 15:45～18:00 土 10:00～12:00			
準優勝(男子団体)		準優勝(男子団体)	団体戦				●加藤 良光(四段)	部活担当教員 氏名(段位)	指導者	
								部外者 氏名(段位)		

13年度中参加大会での活動状況		池田第一中学校				学校名
(六月十日) 県中学校剣道選手権 川崎剣道大会 郡中夏季総体 県中夏季総体 穴吹剣道大会 三好町剣道大会 尽誠淳風館剣道大会	大会名	初段・寺野 和也	初段・大西 佑弥	初段・峰本 博彰	段位取得者氏名	部員数
		10	10	4	4	
10 10 10 10 20 20 7	男	毎日 (平成14年度より 週一回休み)				部活稽古日
4 4 4 5 8 8 5	女	平日 15:40 ~ 18:00 土曜 13:00 ~ 15:30 日曜 9:00 ~ 12:00				部活稽古時間
三年・黒下 光 ・H13郡夏季総体優勝 三年・米倉みゆき ・H13郡夏季総体優勝 二年・山下 千昭 ・H13郡新人大会優勝 一年・喜多 一哉 ・H13郡新人大会優勝	個人戦(氏名と成績)	特筆すべき成績(12年以前のことでも結構です) 山田 泰弘(三段) ●中川 浩幸(初段)				指導者
	県中学校剣道選手権大会女子 ベスト8 ・郡中夏季総体 男女優勝 ・県中夏季総体 男女ベスト8 ・郡中秋季新人大会男女優勝 ・尽誠淳風館剣道大会	団体戦	氏名(段位) 氏名(段位)			

13年度中参加大会での活動状況		三好中学校			学校名
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校剣道選手権大会 (鳴門武道館) ・ 郡中夏季総体 ・ 県中夏季総体 ・ 三好郡スポレク大会 ・ 県新人剣道大会 ・ 錬成大会 	大会名	段位取得者氏名 7 7	男	部員数	
			女		
7	男	参加者数	月～土		部活稽古日
7	女				部活稽古時間
<ul style="list-style-type: none"> ・ 横関由記子 ・ 郡中夏季総体 個人第三位 		個人戦 (氏名と成績)	夏期 18:50～18:30 冬期 15:20～17:00		指導者
		団体戦	高橋千奈美 福田 陽子	部活担当教員 氏名(段位)	
				氏名(段位)	部外者

13 年度中参加大会での活動状況		三 加 茂 中 学 校				学 校 名					
三好郡防犯新人大会	大 会 名	三級・桃井 芳樹	三級・黒島 未来	三級・三好 英華	三級・森本ハツ子	一級・白川 敬司	一級・園尾洋平	段位 取得者 氏名	9	男	部 員 数
									14	女	
8	男	月～土						部活稽古日			
10	女							部活稽古時間			
森本ハツ子 第三位	個人戦 (氏名と成績)	特筆すべき成績(12年以前のことでも結構です)						月～金 15:50～17:30 土 13:00～14:30	部活稽古時間		
女子 準優勝	団 体 戦							近藤 心仁	部活 担当 教員 氏名 (段位)	指 導 者	
									部 外 氏 名 (段位)		

13年度中参加大会での活動状況		池田高校			学校名
県総体 団体男女ベスト8 春季県大会 団体女子三位 阿北地区大会 団体女子優勝	大会名	二段・喜多由美子 二段・三井美穂 二段・山下真里香 二段・高尾美智子 二段・咲川航志 二段・松端佑一郎 二段・大西直人 二段・藤原アキラ 二段・西前香織			部員数
		参加者数	5	男	6
10	男	月～土			部活稽古日
12	女				部活稽古時間
高木 誠 県段別選手権(H13) 三段の部 第三位		個人戦(氏名と成績)	月水金 16:30～18:00 木・火 15:30～17:30 土 13:00～15:00 又は 9:00～11:00		
H13年2月11日 四国新人大会 女子団体出場		団体戦	住友 克彦(二段)	部活担当教員 氏名(段位)	指導者
			増田 和広(七段)	氏名(段位)	

丹生谷支部

吉田 租

北川小学校剣道クラブ

の八教室があり休止状態の所もあるが、週二〜三回の稽古を続けている。

上那賀町 竹友館道場

木頭村 大和錬心館道場

がある。この外、各学校の武道館体育館、

町村立の体育館があるのはどこも同じと

思う。右の各道場では週三回の稽古を続

けている。

(四)大会

(1)阿土剣道大会

県内の数ある剣道大会でも他府県と

の連続した交流大会は珍しい、阿土大

会は阿波の徳島と土佐の高知との交流

大会である。最初は物部川流域と那賀

川流域とで交流し始めたが今は拡大さ

れて来た。二回や三回の単発ではない。

今年は何と三十回目の大会となる。毎

年名高い「木頭盆おどり」の翌日の八

月十七日を定日としている。夏休み中

であるので高校の剣道合宿組の加わり

大会前日から来ている者や地元の者で

はげしい稽古を行い、夜は盃を交わし

木頭おどりを楽しんでいる。

試合は小、中、一般で高知の大柵明

親館、野市、安田、明德義塾、高知至

(二)中学校

驚敷町 驚敷中学校

相生町 相生中学校

上那賀町 宮浜中学校

平谷中学校

木頭村 木頭中学校

右の五校がそれぞれ盛衰あっても、よき

指導者を得、よきライバルとして競い合

い、県大会ではどこかが何時も上位に進

出している。

(三)高等学校

管内に一枚、那賀高校が驚敷町にある。

嘗ては県下に覇を唱えた時期もあり栄光

の賞状がずらりと掲額されている。今年

一月の新人戦では三位を争うまで復調し

て来ている。また中高一貫教育の一環と

して中学校との交流もしている。

(四)道場

驚敷町 振武館道場

相生町 龍虎館道場

〈活動の状況〉

(一)少年剣道

驚敷町 驚敷スポーツ少年剣道教室

相生町 延野少年剣道教室

日野谷龍虎館

上那賀町 上那賀少年剣道教室

平谷少年剣道教室

海川竹友館

木頭村 大和錬心館

誠館などは特に親しくなった。

(2) 山家旗大会

この大会は合宿して二日間行うを原則としている。初日は錬成と稽古を二日目は朝稽古と試合としている。京都大会の良い所を取り入れている。初日の錬成は合宿している各校が入り混じって行い、指導者が多いので実が上がつている。稽古は県下中から先生方が参加して下さり殊に近年は国体、都道府県大会出場予定選手、指定選手など監督ともに参加して頂き、いよいよ充実して来た。

試合は中学・高校のみで高校の試合は勝技法であるのが特徴である。

会期は会長杯大会直後の土、日曜日とし今年は二十七回目である。

(3) 丹生谷剣道大会

丹生谷支部管内のみで行う大会で小学生、中学生、一般の団体戦個人戦がある。海上は各町村持回りでの大会。歴は古く昭和二十八年度を第一回とし、本年一月十三日第四十八回を木頭村で

行った。

(4) 防犯剣道大会

驚敷警察署主催による管内防犯意識高揚の剣道大会が毎年六月に行われる。会場は相生町と驚敷町が交互に担当している。

(5) 丹生谷ライオンズ主催剣道大会

大会名通り丹生谷ライオンズクラブが主催して毎年一月または二月に開催され、会場はこれも驚敷町と相生町が交互に担当している。

(6) その他の錬成大会

各町村毎、適当な時に町内の大会をしている。例えば驚敷町では振武館館長杯大会

相生町では町内剣道大会

(六) 歴代支部長

初代	七段	山家	雪蔵
二代	五段	原	貢一
三代	六段	藤本	幾久
四代	七段	松本	英雄
五代	六段	山脇	隆志
六代	六段	助岡	克則

七代 現四段 佐々木武夫

(七) 剣友

丹生谷支部会員総勢九十二名

(平成十四年一月)

右の内六段以上の者

(平成十四年四月一日高段者名簿による)

七段教士	吉田	租	西谷	肇一
六段教士	松本	英雄	富田	正
六段教士	助岡	克則	新田茂理雄	
六段教士	西浦	新	山脇	隆志
六段錬士	雄西	義春	加藤	哲裕
六段	井村	雅人	野々宮眞佐夫	
六段	松本	繁嗣	岡田	豊
丹生谷出身の高段者(支部外で活躍されている先生方)				
範士八段	大澤	孝彰		
教士七段	西山	勝喜	福井	軍二
	近藤	亘	大石	正志
	西岡	金若		
錬士七段	榎本	英夫	岡崎	明
	福多	雅英		
錬士六段	吉田	博文	白木	崇
	吉田	茂生		

六 段 佐々木和人 曾根 徳治

(八)居合道

木頭村で、居合道教士八段原田勝先生を師範として四、五名の若者が稽古を続け、時には高知を始め近隣の有志と共に錬成をしている。阿土剣道大会などの大会に披露演武を行っている。

(九)練武養徳

先師故山家雪蔵先生 故大澤善二郎先生は練武養徳を旗印に山深い丹生谷に剣道の花を咲かせて下さり、阿波の柳生谷と呼ばれた時期もあった。皆仲よくよく稽古し、よく呑んだ。今も温かく仲よく稽古熱心の伝統を守り、老も若きもが丸となって剣道発展に情熱を燃やし続けられている。

平成十三年の悦び

警察支部

三 木 毅



平成十三年は警察支部会員一同にとつてこの

上ない満悦の気分となった年でありました。

一つには、堀金顧問先生が勲五等瑞宝章を受章されたこと

二つには、県警剣道チームが四国管区内で優勝したこと

三つには、県警剣道チームが全国警察剣道大会の第三部で優勝したことであります。

であります。

堀金先生の勲五等瑞宝章の受章は、先生が警察に三十五年余奉職されそのうち二十五年余の刑事警察官として大きな功績を残されたこと、そして警察剣道や徳島の剣道界において、伝承や発展に大きく寄与さ

れその功績が認められたので御座います。堀金先生はいかなる事柄にも誠心誠意取り組まれていることはすべての方々を知るところであります。

ご受賞はその証であり、それが社会的に証明されたということでもあります。

先生のこれまでの一步一步にはその時その時に様々な情勢や障壁、そしてご苦勞なことが存在したと思われませんが、それをつずつ克服され今日を迎えられたのでありまして、私も後輩は先生のこれまでの生き様を深く、そして広くご推察いたし、学び取らなければならないと感じているところであります。

堀金先生におかれましては、機会ある毎に私どもに、更なるご指導いただけることをただただお願いを申し上げるのみであります。先生誠におめでとうございました。

次に、県警剣道チームが警察の四国大会と全国大会での優勝という快挙であります。詳しい内容につきましては、別項でのご披露がありますので、私からはこれまで県警剣道チームの一人一人が本県剣道界の多く

の方々に大変お世話になり、その延長線上に優勝という結果があったというところでお礼の意を込めまして述べたいと存じます。

徳島県警では、剣道特錬生を支援するために県警剣道部会というのを結成しておりまして県剣道連盟には警察支部という名称でお世話になっているところであります。

私どもは、多くの大先輩が営々と築き上げて参りました歴史と伝統を誇りに思い、今を担う者達は日毎に錬磨を重ねておりますが、県剣道連盟の各先生方にお世話にならないければ到底、錬磨の成就是なし得ないのであります。

連盟の各先生方は遠路ながら寸暇を惜し去れ道場に足を運ばれ、剣道への情熱を心技体でみごとに表現されている姿を目の当たりにして部員達は頭を垂れ、その中で自らがなすべきことを学び取っていることと思いました。

県警剣道部員達は、これまでは上を向いて果敢に取り組んで参りましたが、これからは、上位維持という新たな経験に立ち向かうことになりましただけに、剣道連盟の各

先生方により細やかなご指導とご鞭撻を戴きたいということが本音であります。これまでの錬磨修練に対しましてお礼を申し上げます、本年もどうぞよろしくお願いを申し上げます。

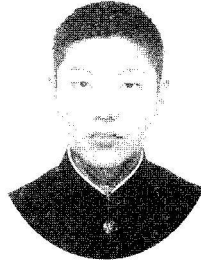


各種大会に参加して

全国スポーツ少年団 剣道交流大会に出場して

鴨島第一中学校

塩田 伯大



平成十三年三

月二十八日から

三日間、僕は宮

崎県立武道館で

開かれた第二十

二回全国スポー

ツ少年団剣道交流大会に出場しました。厳

しい県大会予選を勝ち抜いて、徳島県代表

選手に決まったとき、僕は心の底から「よ

うし、全国大会でも勝つぞ。」という気持ち

がわいてきました。

代表選手達は監督である中山繁輝先生の

道場「徳島至誠館」で、大会までの約二ヶ

月の間、毎週木曜日に集まって、七時から

十時まで厳しい練習をしました。木曜日以外は自分達の道場で、それぞれが全国大会に向けて充実した練習ができました。

出発当日はお天気にめぐまれ、ぼく達選手と中山先生、そして家族で大阪から飛行機に乗りこみ、気分は高まるばかりでした。会場についたのは、徳島県のぼく達が一番

乗りでした。まず、最初に思ったことは、武道館の広さ、設備の良さ、本当に今まで見た内で一番立派な武道館だと思います。

一日目は入場行進で始まり、引き続き指導者による、他県の選手との基本錬成で汗をかき、交流会ではゲームや踊りなどをして、楽しい一時を過ごしました。

二日目には、いよいよ試合が始まりぼく達の番がやってきました。予選リーグの一試合目は兵庫県との試合で、僕は二本を取られてしまいました。次の大分県との試合では、二本勝ちをしました。しかし、緊張していたのか、体が思うように動きませんでした。チームとしては勝ち数が一番で予選リーグを突破しました。三日目の決勝トーナメントに残ることが出来て良かった

です。決勝に上がるとさすがに強いチームが目につきました。すばらしい足さばき、早い振り、やっぱり決勝に残るチームは違うなと思います。ぼく達は、岡山県と対戦し三対一で負けてしまいました。岡山県はけっきょく準優勝しました。相手はやはりすごく強いチームでした。一生懸命戦ったので、悔いはないけれど、僕としては、



もう少し他県の人達と試合をしたいと思いましたが。

この三日間の体験は僕にとって何ものにも代えがたい宝物となりました。他県の人達との交流、いろいろな先生方へのかかり稽古、また全国から集まった強い剣士達の中に、いま僕はいるのだと思うと胸が熱くなりました。

最後に、いっしょに参加したチームの仲間や細かい指導をおしみなしてくださった中山先生、そして、ぼく達を最後まで応援してくれた道場の友達や、いろいろと指導してくださった鴨島少年剣道教室の先生方、本当にありがとうございます。僕はこの体験を生かし、これからも剣道の練習に励み、より多くの人達との交流を深め、自身の剣道を益々充実させたいと思っています。

出場選手

団体戦（小学校）

監督 中山 繁輝（至誠館）

先鋒 岩雲 祥吾 四年（鴨島）

次鋒 河田 紋 六年（至誠館）

中堅 玉田 越大 六年（至誠館）

副将 長地 千景 六年（那賀川B&G）

大将 塩田 伯大 六年（鴨島）

個人戦（中学校）

男子 玉田 康朗（文理中）

女子 山田 愛（那賀川中）

○団体戦試合結果

予選リーグ

徳島3（5）―（2）1兵庫

徳島4（8）―（1）1大分

決勝トーナメント

徳島1（1）―（4）3岡山

※敢闘賞受賞

○個人戦試合結果

男子個人予選リーグ

玉田メメ 山中（大阪）

玉田 一 菅原（岩手）

女子個人予選リーグ

山田 メメ藤田（岐阜）

山田メメ 興水（長野）

第四十九回

全日本都道府県対抗

剣道優勝大会報告

小松島支部

高木 壽史

第四十九回都



道府県大会が五月三日大阪舞州アリーナで行われました。この大会は、年齢・

職業・称号段位等によって区分され、各ポジションが決まっています。本大会の予選は、二月二十五日に警察学校体育館で行われ、本県代表は監督近藤亘先生を始めとし、

先 竈土 恵子 20歳 会社員

次 佐藤 智 23歳 講師

五 竹内佳代子 39歳 教員

中 福多 雅英 41歳 教員

三 山室 雅幹 27歳 警察官

副 高木 壽史 39歳 自営

大 白木 洋一 40歳 教員

以上で出場することとなりました。私は、公式戦に出場するのは実に十七年ぶりでした。

一回戦は不戦勝、二回戦は埼玉―青森の勝者。四対一で埼玉が勝ち、本県は埼玉と戦うこととなりました。私が出場する副将は、本大会の鍵と言われています。(副将は、教員・警察・刑務官を除く三十歳以上の社会人、稽古量の差が出るポジション) 三将戦までの結果は一勝一負三分であり、「ここで勝たねば」と試合に臨みましたが、終始相手のペースで自分の剣道が出来ず、やっとの思いで引き分けにもっていくことができました。全体の試合結果は、一勝一負五分けて残念ながら本数差で敗れてしまいました。

大 白 木	副 高 木	三 山 室	中 福 多	五 竹 内	次 佐 藤	先 竈 土
				⊗	⊗	
				⊙		⊗ ⊗
新 井	佐 々 木	菊 地	栗 原	金 子	佐 々 木	大 坪

決勝戦は、大阪府と本大会初めて決勝まで上がってきた三重県の戦いとなり、四対二で大阪府の勝利。実に三連覇、十二回目の優勝を飾りました。

さて本大会を振り返ってみると勝ち負けにもいろいろな形があり、そして一本一本がどれだけ大切なものかという事を身を持って、改めて知らされました。最後にこの大会に向けて、稽古ならば多くの指導をいただいた先生方に御礼を申し上げ大会の報告とします。

第五十三回四国剣道大会に参加して

阿波支部

佐藤 智

平成十三年五月十三日、香川県立高松武道館において開催された、第五十三回四国四県剣道大会に初めて参加した。昨年度徳島県はこの大会で優勝しており、今大会も優勝を目指し臨んだ大会であった。

前日の五月十二日に合同稽古会があり、それに参加する予定だったが、私は仕事の都合で遅れてしまい、稽古終了五分前くらいに面をつけ、結局一人としか稽古が出来なかった。それも、体も重く、集中力の欠けた稽古であった。幸先の悪いスタートとなったのだが、懇親会でおいしいお酒を頂き、讃岐うどんを食べ終えた頃には、昼間の稽古の事は忘れ、明日の試合だけに集中する事ができた。

試合当日、天気も良く、すがすがしい朝を迎える事ができ、いよいよ試合開始となっ

た。

一試合目は愛媛県との対戦。私の相手は大学の先輩で、私が一回生の時の四回生、安岡先輩であった。大学を卒業し、全く別の所で先輩と試合をするという事を考えると、何か楽しい気持ちになり、整列時には先輩も私もニヤニヤしてしまった。しかし試合が始まると笑ってはいられない。私は立ち上がりから先輩の胸を借りる気持ちでおもいきって技を出していった。結局、積極的に技を出せたのが良かったのか、面を二本連取することが出来、チームも5(6)―1(2)で勝利した。二試合目は香川県。私の相手は一つ年下の小川選手。高校時代からよく試合をしたこともあり、負けられない相手だ。しかし小川選手は香川県警で鍛えられているだけあって簡単に打てる相手ではない。互いに有効打はなく引き分け。チームは1(3) 4(7)で負けてしまった。

昼食を取り三試合目は高知県。徳島県の優勝は高知県を下し、愛媛県が香川県に勝ち、勝者数勝負に望みをかけるしかない。気合を入れ直し試合に臨んだ。私の相手は

石川選手。初めての対戦だ。序盤、ちょっと消極的な感じになってしまったが、私のペースで試合ができ、面の二本勝ちをする事ができた。しかしチームは4(6)―6(9)で負けとなった。香川県は三勝で優勝、一勝二敗の愛媛・高知・徳島の三県の中で、勝者数から徳島県は準優勝となり、その後高知県、愛媛県の順となった。

大学を卒業して二年目。稽古量は学生時代に比べ、雀の涙程しかできていないが、その分稽古・試合に対し、その時を大事に思えるようになった。一期一会、その時、その時を大切に、悔いの残らない稽古・試合が出来るようにこれからも精進していこうと思う。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった先生方や関係の皆様方に深く感謝し、お礼を申し上げ、簡単すぎると思いますが、終わりとさせて頂きます。

第十八回

全国家庭婦人剣道大会

平成十三年八月七日(火)

於 日本武道館

大森中学校教諭

監督 竹内 佳代子



手塚先生の、

後輩に勉強する

機会を与えたい

というご配慮か

ら、全国家庭婦

人大会のチーム

監督という役目が、不肖私に回ってきまし

た。初めは、手塚先生の代役など自分には

向いていないと、その荷の重さに不安ほか

り感じていました。

そんな私が、どうにか無事監督の任務を

果たすことができたのは、手塚先生をはじめ

め選手の皆様の温かいご支援のお陰だと感

謝しています。ありがとうございます。

試合に先立ち、五月から毎週月曜日午後

七時、徳島商業高校の剣道場での稽古会を

手塚先生が計画して下さいました。木原先

生や平野先生のご指導も加わり、基本を中

心とした充実した練習を積み重ねることが

できました。また、選手相互の親睦をはか

ることができたのも、大きな力になったと

思います。主婦にとって夜の一時間は、捻

出に大変な努力が必要です。選手のご家族

のご協力や、選手自身のご努力にも、敬意

を表したいと思います。

往路の航空機の中、前日の夕食会。緊張

の中にも、家庭を離れた開放感も手伝い、

リラククスした楽しい雰囲気、当日の試

合に臨むことができました。

今回、予選で選ばれた選手は次の方々で

す。

先鋒 山田 美枝選手(阿南支部)

昨年は、出産・育児のため出場できませ

んでしたが、一昨年の家庭婦人大会での全

国三位入賞に大きく貢献した選手です。一

年のブランクがあるとは思えないほどの軽

快な動きで相手を攻めていき、得意の面技

上段の選手と対戦し敗れたものの、すばら

しい健闘ぶりでした。

次鋒 玉田 真理選手(徳島支部)

昨年に続いている出場となります。持ち前

の度胸を発揮し、攻撃中心で試合を展開し

ていきました。身体もよく動いており、緊

張感を感じさせない伸び伸びとした戦いぶ

りで、鮮やかなメン、コテが決まりました。

決勝トーナメントでは、相メンで敗れたも

の、思い切りよく打ちに出ているので、

今後の活躍が楽しみです。

中堅 平野 悦子選手(鳴門支部)

本大会に四年連続の出場となります。安

定した実力を発揮し、チームのポイントゲッ

ターとして活躍しました。落ち着いた試合

運びで相手の動きを確実にとらえており、

出端や、相手が居ついたところでの面技が

冴えていました。気持ちよきれることがな

く決勝トーナメントでのメンも鮮やかでし

た。

副将 岸野 訓子選手(徳島支部)

本大会初出場となります。最初は緊張し

第18回 全国家庭婦人剣道大会結果報告

<予選リーグ>

徳島	山田	玉田	平野	岸野	森本
3 (5)	⊗ ⊙	⊗ ⊗	⊗ 一本勝		
2 (2)				⊙ 一本勝	⊙ 一本勝
富山	青山	白石	大島	尾塩	開

徳島	山田	玉田	平野	岸野	森本
2 (3)	⊙ ⊗	⊙ 一本勝			
1 (1)	⊙				
島根	宮廻	竹元	三原	高井	糸原

<決勝トーナメント 1回戦>

徳島	山田	玉田	平野	岸野	森本
1 (1)			⊗ 一本勝		
4 (6)	⊗ ⊗	⊗ ⊗		⊙ 延長	⊗ 一本勝
神奈川	黒沢	山口	大山	糸山	鞠子

徐々に試合の雰囲気にも慣れてきて、長身からのメンが何度も相手をとらえていました。もう一步の所で一本に結びつかなかったものの、試合を重ねるにつれ、実力があがっていたようです。

大将 森本 敦子選手（板野西支部）

本大会五度目の出場となります。肩に力が入りすぎ、チャンスに乗り切れなかったのが残念です。持前の気迫、力強い打ち、思い切りのよい引き技など、すばらしい実力を持っている選手だけに、惜しまれる結果となってしまいました。でも、チームの大将として常に心配りをしてくださいました。

本大会に参加して、全国レベルの高さを改めて感じました。しかし、今回予選リーグを突破し、決勝トーナメントへ進めたことは大きな自信となりました。それぞれが持ち帰った課題を、今後の練習の中で生かしていかれたらと思います。学生時代と違って、家庭や仕事との両立困難な中で、尚かつ剣道が続けていくことの意義をかみしめ、年齢相応の目標を持って、地道に歩んでい

きたいものです。

今も月曜日の女子の稽古会は続いています。手塚先生を中心に、剣道を愛する女性たちが集まって、生涯剣道を目指して稽古に取り組んでいます。まだご参加でない方も、ぜひいらっしゃって下さい。一緒にさわやかな汗を流しましょう。

全国矯正職員

武道選手権大会報告

徳島刑務所支部 中 村 稔 裕



平成十三年十月十一日（木）

大阪刑務所体育館において、平成十三年度の全国矯正職員武道

選手権大会が開催され、全国八管区代表三十六選手によって熱戦が展開された。

毎年のことながら全国大会への連続出場はむつかしく、今年も新旧の交代がみられたが、出場回数四〜五回といった中堅選手が最も充実した実力を発揮し、見応えのある大会であった。

高松矯正管区からは

片上 拓也 四段（松山刑務所）

井口 雅博 五段（高松刑務所）

小野 雅史 五段（高松刑務所）

の三選手が出場したが、徳島刑務所の代表

選手は管内予選において、今一步のところで敗退し、残念ながら四年連続の全国大会出場が途切れる結果となった。

全国大会では、今年も前評判の高い優勝候補選手の名前は聞けず、まさに戦国時代といった感が強かったが、結果として過去に団体戦で全国大会の優勝経験をもつ広島拘置所の奥森貞夫選手（七段）が延長戦の末、東京拘置所の佐藤彰選手に面を決め出場五回目にして初優勝を飾った。

幸いにして、高松管内代表の小野選手がベスト8進出の活躍をし、技術優秀賞を獲得したことは喜ばしいことであり、来年度に向かって各選手の励みになることと思えます。

ところで、近年の矯正界をとりまく状況はまことに厳しいものがあり、社会の不況を反映し被收容者の著しい増加により各施設ともに收容定員を超過しての收容状況にある反面、公務員の定員削減と全く反比例の現象がおき、刑務官の職務は非常に厳しい時を迎えているものの、全国の武道を志す者の熱意は旺盛なものがあり、今後矯正

界からも日本選手権等に多数の選手が輩出されることを期待している。

最後に、これまで矯正武道の教官として長年に渡り指導されてきた

下村 清範士八段 菅波一元教士八段の両氏が定年退官となり、まことに寂しい感がするが、長年の御労苦に対し心からお礼を申し上げ大会報告とします。



全国選抜大会に出場して

富岡西高校三年 櫻 福 頭 生



平成十三年三月二十七日〜二十八日に愛知県春日井市で全国高等学校剣道選抜大会が行われた。

選抜大会は、新チームとして初めて挑む全国大会だった。

県予選を僅差で勝ち抜き、県の代表となった喜びやプレッシャー、全国の強者との試合に対する期待や不安など様々な思いが交错する中、ついにその日を迎えた。チーム一丸となり、自分達の力を精一杯出し切ろうと全員で気合を入れ試合に挑んだ。

予選リーグ第一試合は、昨年度の選抜大会優勝校であり千葉県代表の習志野高校と対戦した。昨年度の覇者というだけあり総合力の高さや試合のかけ引きのうまさには、「さすが」の一言に尽きる。同じ高校生と

して相手に不足はなかった。先鋒戦は両者ともスピードがあり激しい試合になったが足の止まった一瞬をつかれ二本負け。次鋒戦はうってかわり、粘りのある試合で互いに譲らず引き分け。中堅戦は両者とも一歩も引かない互角の戦いだったが、相手は居ついたので見逃さず鋭い面を決め一本勝ち。副将戦は強気な攻めを見せたが一瞬の隙をつかれ二本負け。大将戦は両者攻めきれず引き分け。結果一―二で敗れた。

第二試合は、山形県代表の酒田商業と対戦した。すでに一敗していたが、諦めず最後まで全力で戦おうともう一度気合いを入れ直し、試合に臨んだ。先鋒の原は面を取られたが、面、小手を取り勝ち。次鋒の横手は面を二本取られ負け。中堅の星野は面を二本取り勝ち。副将の的場は引き分け。大将の樫福は面、小手を取られ負け。結果は二―二の本数勝負となり四―五で惜しくも敗れた。

予選リーグを突破することはできなかったが、自分達の力を出しきることはできた。二試合とも後一歩と言うところで勝ちをつ

かめなかったが自分達の力が十分に通用することを実感した。そして新しい課題ができた、次の目標も見つけることができ良い経験になったと思う。

僕達がこのような経験を得ることができたのも全て御指導して下さった山田先生を始め諸先生方や沢山のOBの方々、いつも温かい応援とお世話をして下さった保護者のお陰です。今までやってきたことに誇りを持ち、これからも努力を惜しまずがんばっていききたいと思います。

第一試合					
白 浜	○小 谷	三 平	岩 崎	○小 泉	習志野 (千葉)
	メメ	メ		メメ	(4) 2 (1) 1
樫 福	的 場	星 野○	横 手	原	富岡西

第二試合

○齋藤	太田	渡部	○梅木	土門	酒田商業 (山形)
メコ	—	—メ	メメ	メメコ	(5) 2 (4) 2
榎福	的場	星野○	横手	原○	富岡西

全国高等学校
選抜剣道大会

富岡東高校三年

河田 美 沙



平成十三年三月二十七日・二十八日に全国高等学校選抜剣道大会が愛知県春日井市総合体育館

で行われました。新チームに代わって初めて踏む全国大会という大きな舞台。私たちは予選リーグを突破し、そして前年度の成績に続く上位入賞という大きな目標を持ち、この大会に臨みました。

自分たちの力がどこまで通用するのか、私たちがチームを一つにまとめてやってくることができるのかと不安がありました。初戦が勝負なのだから一試合目から全力で試合をしてこい。」と監督の指導を受け、試合に挑みました。予選リーグ一試合目は

富山県、高朋高校。いざ試合が始まると不安も消え、試合に集中しました。先鋒の一本勝ちで流れに乗り五―〇で勝つことができました。予選リーグ二試合目は東京都、修徳高校。相手は有名校で力強い剣道をしてくるチームです。そう簡単に勝たせてくれるような相手ではありません。しかしそこで相手に圧倒されないように気持ちを入れかえて試合に挑みました。先鋒戦は面の一本勝ちで一勝し、続く次鋒戦はお互いゆらず引き分け。一勝でリードしているけれどこの後勝利はどちらに転ぶかからない緊張感の中続く中堅戦は時間間際に相手に引き面を奪われ、両チーム同数で迎える副将戦は引き分け。次で勝負が決まる。誰もが見守っていた中での大将戦は面を奪われ、終わってみれば一―二で負けてしまいました。自分自身コートの中に立っていかなくても悔しくて残念な結果になりました。私たちはこの大会で改めて全国大会の厳しさを感じました。私たちの目標を達成することはできませんでしたが、この大会で学んだことは私たちにとって大きな力にな

ると思えました。この経験を無駄にしないようこれからの稽古や試合などに活かしていくことが大切だと思えました。

今まで熱心に指導して下さった監督、坪井先生、試合、練習試合のたびいつもお世話して下さった保護者の方々、応援してくれる友達、そして嬉しい時も苦しい時も共に分かち合い、励まし合ってきたチームメイト。多くの人に支えられ、最後まであきらめずに剣道が続けることができました。心から感謝の気持ちでいっぱいです。この富岡東高校剣道部で学んだ事は私の一生の思い出です。

〈予選リーグ 第一試合〉

昇	橋本	美馬	岸	瀬口	富岡東 (徳島)
メー	メコーメ	メメー	メメー	メー	(8) 5 (1) 0
中△ 野	寺△ 井	菊地	新△ 鞍	岡本	高朋 (富山)

〈予選リーグ 第二試合〉

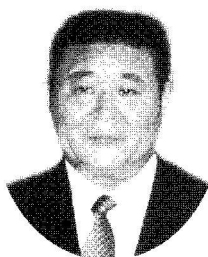
美馬	橋本	昇	瀬口△	岸	富岡東 (徳島)
メー	メー	メー	メー	メー	(1) 1 (2) 2
原口	大竹	石森	中△ 山	白石	修徳 (東京)

第九回居合道

全国選抜八段戦

箱根大会に参加して

原田 勝



平成十三年五

月二十八日(月)

前夜来の雨が上がり神社境内の草木にとまった雨露が朝日を浴

びてキラキラと輝くなか、箱根神社武道場において第九回を迎えた居合道全国八段戦箱根大会が開催されました。選手は全国から選抜された教士八段、九名、荘厳な雰囲気のもとに開会式が始まりました。

箱根神社の濱口進宮司の挨拶の中で、この五月二十八日という日は建久四年(一一九三)五月二十八日、箱根権現ゆかりの曾我十郎裕成と曾我五郎時致の兄弟が実父の仇討本懐を遂げた日であり、この日を二人の霊を慰めるための例祭日と定めて、それ

にちなんだこの大会は曜日に関係なく毎年同じ日に開催されるのだそうです。また箱根神社は古来より関東総鎮守箱根大権現と尊崇されてきた由緒ある神社であり、人皇

第五代孝昭天皇の御代「二千四百余年前」聖占上人が箱根山の駒ヶ岳より同主峰を神体山としてお祀りをして以来、関東における山岳信仰の一大霊場となっております。また鎌倉期には源頼朝が深く当神社を信仰し、二所詣「箱根権現と伊豆山権現参詣」の風儀を生み、また執権北条氏や徳川家康など、武家による崇敬の篤い御社として栄えてきたそうです。濱口宮司が最後に万葉集から大伴家持の『海行かば』と題する「海行かば水浸く屍、山行かば草生す屍、大君の辺こそ死なめ顧みはせじ」という歌を引用され、私たち選手に「覚悟の程を箱根大神様奉納して下さい」と激励を受けました。

その後、範士九段、福田一男審判長よりの説辞となり、試合方法は昨年同様に一人ずつ演武し、演武開始位置や時間には制限なくすべて古流で行い、予選は初伝、中伝より五本、決勝は奥伝五本を抜き「観る人に感銘を与える居合を抜いていただきたい」と言葉を結びました。このような山緒ある神前において抜かせていただけることに感激すると共にその荘厳な雰囲気や圧迫感、いつしか戦意も消え失せ、いかんともしがたいと腹を決め、自分がこれまで修業してきた古流居合を未熟ながらも箱根大権現に奉納させて頂く気持ちで気力を振り絞り精一杯抜かせて頂きました。

選手として選抜されただけでもありがたいことだと思っていた上に三位ではありましたが、入賞する事が出来ました。これもひとえに今までご教導頂いた各先生方のお陰であると深く感謝するのみです。この八段戦を顧みて自分が負けた心境でした。心の弱さ、技の未熟さを痛感しこれを機に再度初心にかえり、心の鍛錬、技の錬磨の向上を目指しより一層精進することを箱根大神様に誓い、大会を終えました。

四国高校新人 剣道大会に優勝して

富岡東高校三年

美馬 真奈美



平成十三年二月十八日に香川県琴平高校で第一回四国新人大会が行われました。第一回とい

うこともあり、私たちは絶対優勝したいという気持ちで、日々練習してきました。

予選リーグ一回戦は、香川県代表、高松南高校と対戦しました。結果は、二〇〇でまず一勝することができました。二回戦日は、愛媛県代表、東温高校と対戦し三〇〇で二勝目をあげることができました。三回戦目は、高知県代表、高知高校と対戦し、四〇〇で三勝することができ、決勝トーナメントに進むことができました。

決勝トーナメント一回戦は、香川県代表、

高松商業高校との対戦でした。予選リーグから全員がよい感じで試合できていたので、五〇〇で勝つことができました。次は、決勝戦です。対戦相手は、高知県代表、土佐塾高校でした。私は、今まで大将で出ていましたが、決勝戦だけ中堅で出ました。先鋒、次鋒と引き分けてしまい、私は少しでも有利な形で後に回したい、流れを変えたいという思いで試合をしました。初めは、引き分けてしまいそうな試合をしていましたが、途中からは、いつものような動きができ、二本勝ちすることができました。副将、大将も勝って、終わってみれば三〇〇で勝ち、優勝することができました。優勝が決まった時は、すごくうれしかったです。第一回大会で優勝した経験なんてなかったので、いい思い出になりました。また、この大会では、一回戦から、一人ひとりが自分の役目を果たし、お互いが助け合いながら試合ができたと思います。

私たちが優勝できたのは、日々熱心にご指導してくださる顧問、監督、コーチの先生方、また、応援やお世話を下さった

保護者の方々のおかげだと思います。本当にありがとうございます。今まで学んできたことを忘れず、これからも頑張りたいと思います。



美馬	河田	昇	瀬口	岸	富岡東	△予選リーグ▽
		メコ	ドメ		(4) 2 (0) 0	
森	多田	國方	山下	多田	高松南 (香川)	

美馬	橋本	昇	瀬口	岸	富岡東	
メメ			メメ	メド	(6) 3 (1) 0	
芝△ 田	樋口	中川	谷田	河野	東温 (愛媛)	

美馬	河田	昇	瀬口	岸	富岡東	
メ		メ	メ	メ	(4) 4 (0) 0	
濱田	元久	藤井	近森	谷本	高知 (高知)	

美馬	橋本	昇	瀬口	岸	富岡東	△準々決勝▽
ド	メ	メ	ド	メ	(6) 5 (0) 0	
大西	星野	都倉	福光	笠井	(香川) 高松商	

昇	橋本	美馬	瀬口	岸	富岡東	△決勝▽
メ	コ	メ	メ	メ	(4) 3 (0) 0	
秋山	濱口	東村 △	山本	岡崎	(高知) 土佐塾	

インターハイに
出場して

富岡西高校三年

星野 宜哉



『このとき君

が輝き風になる』

のスローガンの

もと、平成十三

年八月二日から

四日にかけて熊

本県菊池市で、ひのくに新世紀総体が開催
されました。

県総体では、七連覇がかかっていたこと

もあり、周囲からの期待が大きく、プレッ

シャーもありましたが、運よくインターハ

イの切符を手に入れることができました。

それからインターハイまでの二ヶ月間は、

日々の厳しい練習に耐え、精神的にも強く

なりました。そして、大会直前は九州で強

豪チームとの練習試合も重ね、また玉竜旗

でベスト64といういい成績を残したことで

全員が自信をつけ、良い状態で大会に臨むことができました。

大会当日、対戦相手は、島根県代表大社高校と東京都代表國學院久我山高校でした。試合前に皆で「このメンバーで試合するのは最後だから、今までやってきたことを全て出し切り、悔いの残らない試合をしよう。」と心に決め、チーム一丸となって試合に臨みました。

予選リーグ第一試合は、過去に何度か剣を交えたことがある大社高校でした。その前に久我山高校が大社高校に勝っていたので、この試合は負けられませんでした。そのためか、先鋒は動きが固くなってしまい引き分けましたが、次鋒、中堅と勝ち、副将が引き分けたためチームの勝ちが決まりました。そのおかげで、僕はプレッシャーもなく思い切った試合をすることができ、勝つことができました。

第二試合は、決勝トーナメントをかけて久我山高校と対戦しました。昨年度のインターハイで優勝した高校を破って今大会出場しているということで、周りから注目さ

れた高校でした。僕たちは、この試合に引き分けたとしても、予選リーグを突破することができたのですが、引き分けは考えずに勝つことだけを考えて試合しました。先鋒は初めに一本を奪い、そのまま勝つと思

いしましたが奪い返されてしまい引き分けました。続く次鋒は、延長で一本奪われ、中堅も二本奪われ負けてしまい、後がなくなりました。副将は、引き分けでは負けが決まってしまうので初めからどんどん攻めていきました。しかし、相手はそこを狙っていたかのように二本奪われてしまいました。そして、○対三と負けている状況で大将の僕の所までまわってきました。高校生最後

となる試合で、悔いだけは残したくありませんでしたが、気持ちで相手に劣り、一本奪われてしまいました。結局○対四で負け、チームの目標であった予選リーグ突破は果たせませんでした。この大きな舞台で自分たちの力を十分発揮することができました。そして、三年間剣道を通して経験したことは、無駄ではなかったと思い、これからの生活の中で活かしていきたいです。

最後に、僕達がこうしてインターハイに出場し、貴重な経験ができたのも、これまで指導して下さった山田先生、OBの方々、また、陰ながらお世話して頂いた保護者の方々やマネージャーのおかげです。そして、共に苦しさや喜びを分かち合えた仲間に出会えたことを心から感謝しています。

山田	嘉山	山本	○渡辺	○佐藤	久我山 国学院	予選リーグ △第一試合▽
⊗ × メ	 メ	 ⊗	⊙ メ 	⊗ メ 	(5) 2 (3) 2	
障子	佐藤○	高木○	飯塚	石飛	大社	

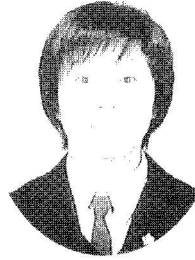
○星野	檜福	○的場	○横手	原	富岡西	△第二試合▽
⊗ メ 	×	⊗ メ ド	⊙ 	×	(5) 3 (1) 0	
障子	佐藤	高木	宇賀	石飛	大社	

○山田	○嘉山	○山本	○渡辺	佐藤	久我山 国学院	△第三試合▽
⊗ 	⊗ メ 	⊗ メ 	メ 	メ × ⊙	(7) 4 (1) 0	
星野	檜福	的場	横手	原	富岡西	

ひのくに新世紀 総体に出場して

富岡東高三年

昇 葉子



「このとき君
が輝き風になる」
のスローガンの
もと、第四十八
回全国高等学校
剣道大会が熊本

県菊池市で盛大に開催されました。私達は
この日のために日々の練習の中で自分の技
を磨き上げてきました。

一回戦目は石川県の羽昨高校と対戦し、
四対〇で快勝しました。二回戦目の広島県
の沼田高校とは、試合や練習試合で何度か
対戦したことがあり気迫で負けないように
と思い切った試合をした結果、二対一で勝
つことができました。三回戦目の相手は東
京の成徳高校でした。成徳は今年の選抜で
私達が負けた修徳に県予選で勝った高校で

す。選抜での予選リーグ敗退という悔しさを
思い出し試合に臨みました。粘りのある
試合をし、三対一という結果で私達の準決
勝進出が決定しました。

準々決勝の相手は全国選抜大会では三位
に入っている静岡県の磐田西高校でした。
実力があり力強い動きの剣道をする相手の
ペースに合わせたら負けてしまうと思いま
した。お互い三位入賞がかかっているし、
相手もそう簡単に勝たせてくれるような相
手ではありませんでした。

しかし、「ここまでできたら入賞せな意味な
いよな。ベスト8や絶対嫌じゃ」と全員一
致団結し、最高の体勢で試合に臨みました。
その結果、私達は二対一で勝つことができ
ました。しかし熊本県の阿蘇高校との準決
勝は一对三で敗退。入賞できた安心感と阿
蘇は強いという思いこみで負けたように思
います。

三位が決定した時、誰かに「三位は今ま
でもあるんやけんそれより上を狙わなあ
かん」と言われました。私はその通りだと
思いました。阿蘇は確かに実力のあるチー

ムですがかなわない相手ではありませんで
した。三位入賞に満足するのではなく二位、
一位を狙うことが大切だったと思いました。
私はもうインターハイに出場することが
できませんが、常により上を目指す向上心
と、強い相手に臆することのない精神力を
培い、来年こそは後輩達が全国の頂点を目
標とし頑張ってもらいたいです。

対戦表および試合結果

一回戦目					
大将	副将	中堅	次鋒	先鋒	
美馬	河田	昇	瀬口	岸	富岡東
⊗		⊕	⊕	⊗ メ	
 本勝ち	延長	 延長	 延長		
堀野	澤田	番坂	大谷	宮下	(羽石川) 昨

二回戦目					
大将	副将	中堅	次鋒	先鋒	
美馬	橋本	昇	瀬口	岸	富岡東
		⊕	メ	⊗ コ	
延長	 延長	 本勝ち	延長		
阪田	香川	重森	中川	森	(市立沼田) 島田
	⊗		⊗		

三回戦目					
大将	副将	中堅	次鋒	先鋒	
美馬	橋本	昇	瀬口	岸	富岡東
⊕ メ		⊕	⊗		
		 延長	 延長	延長	
山下	牛之濱	米山	河村	安西	(成東京) 徳
	メ ⊗				

四 回 戦 目					
大 将	副 将	中 堅	次 鋒	先 鋒	
美 馬	橋 本	昇	瀬 口	岸	富 岡 東
		☉ コ	☒		
	橋本		 <small>延長</small>	岸	
ド ⑤					(磐 田 西)
三 矢	伊 藤	小 島	岩 本	永 井	

五 回 戦 目					
大 将	副 将	中 堅	次 鋒	先 鋒	
美 馬△	橋 本	昇	瀬 口	岸	富 岡 東
⑤ メ					
		 <small>延長</small>		岸	
	メ ③	☒	メ ☒		(阿 熊 本 蘇)
古 賀	椎 葉	宮 川	野 口	谷	

(結果) ベスト4

第四十三回全国教職員 剣道大会に参加して

伊島中学校教諭 福 多 博 史

六月九日、城西高校において全国教職員剣道大会の予選会が行われた。参加者十名「稽古ができていないから、参加するのをやめようかな。」大会前このようなことを思うときがある。現在勤務の都合上、あまり稽古や試合に参加することができないが、私自身と剣道との関わりが薄くならないように、そして、少しでも稽古になればと予選会に参加をしている。

本県の教職員大会の特徴は四十歳以上の先生方の活躍が目立つことである。全国大会においても他県と比べ出場者の平均年齢が高い。こうした諸先輩方の剣道に取り組む姿勢を私自身もつと見習っていかなければいけないと思う。私を含めた若手が自覚を持って稽古会や大会に積極的に参加することが大切だと感じた。

さて、予選会の方は、二組のリーグ戦で

代表者を決定した。私は試合を重ねるうちに少しずつ体が動きはじめ、何とか全国大会に出場することができた。

八月九日、高知県民体育館において全国教職員剣道大会が盛大に開催された。夏休みに入ってから短い期間ではあったが、内容のある、納得できる試合ができればと剣道連盟の稽古会や阿南市の稽古会に参加させて頂き、本大会に臨んだ。結果は一回戦敗退。対戦相手は千葉県の選手であった。相手の攻めに、居着いてしまいメンをとられた。残念ではあったがよい経験をする事ができた。また、試合の楽しさを実感することができた。

来年度は今回の反省を生かし、稽古を積んで予選会に参加をしたい、今年は十名の参加であったが、来年度はぜひ沢山の方々に参加をして頂き、にぎやかな、盛り上がりのある大会になればと思う。

試合結果は次の通りです。

団体戦は、埼玉県と対戦した。終始優勢に試合を進めていたが、あと一步のところまで惜しくも敗退した。このあと埼玉県はベス

ト4に入賞した。

一回戦 徳島県 一対一 埼玉県(代表者)
(団体戦メンバー)

先鋒 長井 薫 (川島高校教諭)

次鋒 玉田 晋作 (徳島文理高校教諭)

中堅 白木 洋一 (石井中学校教諭)

副将 福多 雅英 (城北高校教諭)

大将 塩田 善人 (阿波高校教諭)

個人戦、高校・大学・教育委員会の部。

佐々木選手が出場した。二回戦からの出場
で神奈川県の月岡選手と対戦した。堂々の
攻めで相手を圧倒していたが、延長でメン
を取られ敗退した。

二回戦 佐々木 (阿南工業高校教諭)

一 メ 月岡 (神奈川県)

個人戦、幼・義務教育の部。

一回戦 福多 (伊島中学校教諭)

メ 藤林 (千葉県)

個人戦、女子の部では、坪井選手が出場
した。優勝候補のひとりであり、我々徳島
県選手団もその試合内容に注目していた。

試合は相手の動きを冷静にとらえ、素早い
攻めを繰り出しながら順調に勝ち進んだ。

しかし、三回戦鹿兒島の有馬選手に惜しくも敗れてしまった。坪井選手は試合内容が評価され、見事優秀選手に輝いた。

一回戦 坪井 (富岡東高校教諭)

メ 門間 (滋賀県)

二回戦 坪井 ド 荒川 (秋田県)

三回戦 坪井 一 メ 有馬 (鹿兒島県)

徳島大学医歯薬学部 剣道部一年報告

主将 大場 博 史



厚い雲に覆われた大空に一筋の光が私たちを照らす。その時、全試合会場の時間が止まり、た

だ彼の竹刀だけが無限の時間の中で美しい弧を描いた。全会場の人たちが彼の竹刀に酔いしれた。心地よい竹刀音と共に再び時間は動き出す。三本の旗があがった瞬間、私たちは数年ぶりの優勝に輝いた。静かに微笑む優勝旗が、私たちの中で熱き光を放ち、その光の中で私たちは抱き合った……

こんにちは。改めて自己紹介させていただきます。私、徳島大学医歯薬学部剣道部主将の大場博史です。私たち医歯薬学部剣道部は現在三十三名で週に四回（月・一八・三〇）、火・一八・三〇）、木・一七・

三〇）、土・一四・〇〇）徳島大学蔵本地区の体育館一階で稽古に励んでいます。女性、初心者も多く、少ない稽古量であるので、基本を忠実に守って更に日々の稽古を楽しめるようにとがんばっています。逆に基本を大切にすることで中高で覚えた悪い癖を直すことができ、徐々に結果を出すことができてきました。

時は六月。中四国医歯薬大会が山口で行われました。主将として、また新入生にとつても初試合であり、緊張と不安の中ホテルへと着きました。夜は多くの他大学の学生たちとお酒を飲み交わしながら、道中の疲れをとるとともに久しぶりの再会に喜び楽しみありました。（試合前日にお酒？と思うかも知れませんが伝統です）。翌日、二日酔いの頭痛と吐き気の中試合が始まりました。個人戦。初心者から経験者まで全員（大学から始めた一年はまだ応援ですが）力を出し切り相手を尊重しながら試合をし、四年の大場が優勝、二年の越智が三位、新人戦では松島が準優勝に輝くなど各人が満足のいく結果を出したと思います。団体戦は七

人で行われ個人戦の勢いのまま予選、決勝トーナメントともに自分たちの剣道を信じ抜き、準決勝へと進むことができました。

準決勝の相手は高知医科大学。ここ数年、もう十年ぐらいだろうか、公式戦では勝つたことがない相手でした。全員で力を合わせ三年生の活躍が特に大きく、何とか本数で勝利を納めることができました。その勢いは止まらず、決勝も先・次・五で三勝を上げました。中堅私大場はあっさり一分程度で敗れ去りましたが、後ろの三人が好試合をし、見事優勝を味わうことができました。数年ぶりの優勝に私たちは抱き合い喜び合いました。厚い雲に覆われた大空からうっすらと光が照りつける六月の日のことでした。涙を流す高知の姿を見て十一月に行われる四国大会では更に力をつけて私たちの目の前に立ち塞がることを予感し、兜の緒を締め直す必要を感じました。女子の方はまだまだ初心者の数も多いせいもあり皆がんばってはいいましたが、残念ながら入賞にまでは至りませんでした。

二週間後。今度は福井にて春期関西医歯

薬大会が行われました。昨年秋では優勝しているだけ驕り高ぶっており、予選では一本もとれずに負けた試合もありました。苦しい思いを味わい、有頂天になっていた心を入れ替え、リーグ突破を目指し全力を出しきることに努めました。結果予選は二位で抜けることができ、トーナメントへ進むことができました。そして一試合一試合を後悔のないように自分たちの剣道に努め、再び優勝を味わうことができました。一方女子の方も初心者二年の豪快な面がさえ、三人制であるにも関わらず強校たちを次々と倒し、準優勝に輝きました。大学から始めた人を二人も含みながらも日々稽古に励み継続してきたことの結果であり多くのことを教えられました。

好成績のまま春の大会を終え、各学部に分れて夏の大会がやってきました。医療系といっても高校時代にインターハイに出場され更に入賞している人もおられ、非常にレベルの高い大会です。

医学部は福岡で西日本医科大会が行われました。数多くの方と竹刀を交えることが

できました。準々決勝では高知医科大学を代表戦で破りましたが、続く準決勝では惜しくも敗れてしまいました。しかし、三位入賞し、全医体の切符を手に入れることができました。二・三年がチームを引っ張りチームが一つにまとまったためであり、特に二年の越智はオール二本勝ちをおさめるなど大活躍でした。

歯学部は北海道で全日本歯科大会が行われました。個人で四年の大場が四度目の決勝に進出するも二度目の優勝はできず惜しくも二位でした。団体は初心者二人を含む五人で毎戦毎戦苦しみながらも勝ちあがり初優勝に喜びました。

薬学部は福岡でのコメディカル、大阪での関西薬科大会に参加しました。高校時代にやってた人が少ない中、関薬では昨年の最下位から今年は四位まで成績を伸ばし確実に力をつけていることを感じました。また、女子もコメディの個人で三年竹内が三位、団体でも四位に輝くなど良い成績を残せたと思います。薬学部は四年制であり、稽古量が少ない中、それだけ集中して稽古

してきた結果であると思います。特に女子は来期も同メンバーでの出場も可能であり、今年以上の活躍に期待しています。

夏の大会を終え、数多くの経験、互いが全力でぶつかり合い尊敬の念をもって試合することの経験が更に私たちを成長させてくれました。そうはいっても全大会入賞するのは難しいもので秋の関西ではベスト8に、四国では高知に破れるなど結果を残せませんでした。春からの努力の差を感じ、そしてまた来期への目標ができました。

最後になりましたが勝沼先生、大澤先生をはじめ多くの先生方が稽古に来てくださり御指導いただきましてありがとうございます。そしてこれからも先輩方が築いてくださったこの道を歩いていきたいと思えます。そして私たちも後輩のために道を築いていきたいと思えます。先生方、これからも御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

全日本少年武道（剣道） 大会に臨んで

鴨島少年剣道教室

道場長 笠井 恵之



平成十三年七月二十八日、今年も夏恒例の「全日本少年剣道錬成大会」が、東京・日本武道館

において開催され、わが鴨島少年剣道教室も、最高学年の集大成として本大会に出場しました。

この錬成大会は、二回戦までが基本判定試合と一本勝負で勝敗を決します。

基本錬成は、四十秒間で切り返すと、応じ技を二本以上交えた打ち込み稽古で判定を行います。判定基準も、礼法・着装から始まり竹刀の振りが正しいか、足運びは正しいか、間合は適切か、気剣体一致であるか、残心ができているか等と、沢山の課題

の中、対戦する二チームのそれぞれの監督が元立ち、先鋒から大将まで五人の切り返すと、打ち込みを受け、掛かる子供達の姿形が評価され、三名の審判員の旗の教で勝敗が決められます。

わが教室の、出場メンバーは、六年生が三名、五年生が三名という苦しい状況であり、また、現在中学校一年生である先輩が、昨年の本大会で「優秀賞」を取っているだけに、そのプレッシャーは私を含め子供達選手も大変なものでした。

大会に向けての練習を始めた頃は、四十秒間の基本錬成中に、息が上がって最後まで気剣体一致の打ちが出来ず、練習日毎、苦しい日々の連続であったと思います。

しかし、気を抜くことなくひた向きに、ひたすら、自分と四十秒間という大きな壁との戦いの末、大会前には、私達指導者の不安も払拭するほどの堂々たる基本錬成が出来るようになりました。

この苦しい稽古により、学年は違っても共に切磋琢磨し、互いの信頼を築き、技術・チームワーク共に最高のチームがで

き上がり、いよいよ日本武道館へ出発の日が来ました。

日本武道館の太鼓が鳴り響き、薄暗い場内が一瞬にして目を覆うばかりの別世界に姿を変え入場行進が始まりました。

今年の入場行進曲は、サザンの「つなみ」という曲で、行進の先頭は、昨年の本大会で優秀チーム（八チーム）が、優秀旗を持ち、誇らしげに堂々と場内へと入って来ます。わが教室もその中の一チームとして、苦しい稽古を克服した子供達が、清々しい顔をして行進しており、その後から、四百十二チームの選手たちが、途切れることなく、次から次へと行進して来ました。

開会式が始まり式典が進むうちに、アナウンスで「続きまして、武道優良団体の表彰を行います。この賞は、少年武道に関係して非常に大きな成果を上げた団体を表彰します」と説明があり、次に「徳島県・鴨島少年剣道教室、静岡県・尚道館、大阪・竹の子剣道クラブ、佐賀県・鳥栖少年剣道クラブ」と呼び出され、全国で四チームという身に余る賞を頂き、身の引き締まる思

いがしました。

一回戦…(東京) 高島警察少年剣道会

A

二回戦…(兵庫) 宝塚少年剣道錬成会

と、基本錬成及び一本勝負の試合を勝ち進み、いよいよ、三回戦からの二分三本勝負となりました。

三回戦…(新潟) 夏戸剣友会、試合内容

は結果表の通り、子供達も良く攻め良く動き、五対〇という圧勝で勝ち上がりました。

四回戦…(東京) 保谷剣友会、このチー

ムの先鋒は大変強く、これまでも、先鋒が勝って波に乗るといふ勝ちパターンで勝ち進んできましたが、その相手にわがチーム先鋒の新居が、臆することなく戦い、引き分けとして次につなげ、二対一という僅差で勝ち上がりました。

五回戦コート決勝…(和歌山) 北少年剣

道クラブ、このチームは、次鋒欠の四人のメンバーでここまで勝ち上がってきた実力者揃いでありませう。副将が終わった時点で、一体二の一本負けとなり、大将が二本を取って勝ちという厳しい状況となりましたが、

大将の中山は、さすがわがチームの大将だといふ試合内容で期待通り①と③の二本勝ちでこのピンチを救ってくれました。

この時点で「優良賞」という賞を手中に収めることができ、次はいよいよ決勝戦となるブロック決勝です。次の試合に勝てば、再び優勝旗を持つて帰ることができるのです。

六回戦ブロック決勝…(千葉) 柏武道館

A、このチームの戦いぶりを隣のコートで見えていましたが、その剣道たるや小学校レベルを遙かに超越したものでありました。

そのことは子供達も十分感じていたと思えますが、ここまで勝ち上がって来たからこそ、この様な全国レベルの強いチームと竹刀を交えることができるのです。子供達は、悔の残らないよう精一杯戦いましたが、○対五という完敗となりました。しかし、子供達の顔には、東京大会の稽古を始めてから、今現在までよく頑張ったという満足感と、「優良賞」という受賞の喜びが満面の笑みとなっていました。

本大会で、六年生の三人は最後となりま

したが、その先輩方が五年生の三人に残したものは、指導者が決して教えることのできないすばらしい財産であり、その三人を含めた子供達が、また来年この日本武道館で、全国優良団体賞に恥じない堂々とした剣道をしていくことと信じております。

最後になりましたが、過去対戦した少年剣士の諸君を始め、ご指導下さった全ての先生方に心から感謝すると共に、今度共よろしくご指導のほどお願いいたします。

表彰状

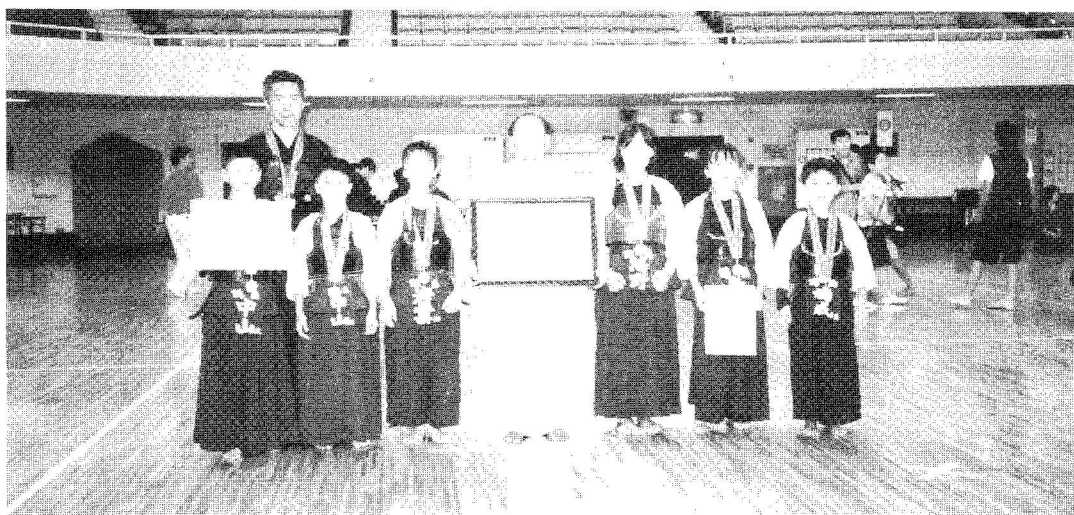
鴨島少年剣道教室殿

貴団体はわが国武道の発展を遂げ、
鋭意多年にわたる少年剣道の
育成と振興に多大の功績を挙げ
たこと、その功績をあげ、
よってその努力をたたえ、
全日本少年
武道錬成大会の開催にあたり平成
十三年度少年武道優良団体として
表彰いたします。

平成十三年七月十八日

日本武道協会

会長 塩川平郎



一回戦

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山 <small>健</small>	中山 <small>大</small>
	基本判定	3	2	3	3	0
	一本勝負		メ	コ	X	
高島平 警察署少年 柔剣道会	一本勝負	メ			X	
	基本判定	0	1	0	0	3
	選手名	納	望主	北村	遊喜	野村

二回戦

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山 <small>健</small>	中山 <small>大</small>
	基本判定	3	3	0	0	0
	一本勝負	メ		メ	X	
宝塚少年 剣道練成会	一本勝負		コ		X	
	基本判定	0	0	3	3	3
	選手名	平井	前田	瀬頭	久米	上村

三回戦

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山健	中山大
		メメ	メメ	コメ	メメ	コド
夏戸 剣友会						
	選手名	谷地	佐藤	門藤	竹内	門藤

四回戦

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山健	中山大
		X		コ	コ	X
保谷 剣友会		X	メ			X
	選手名	片桐	杉本	保谷	斉藤	林

コート決勝

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山健	中山大
			不戦勝	コ	X	ドコ
城北少年 剣道クラブ		メメ		コメ	X	
	選手名	安久	金谷	森口	寺西	土井

決勝

対戦チーム		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鴨島少年 剣道教室	選手名	新居	鴻野	岩雲	中山健	中山大
				コ		
柏武道館		ドコ	メコ	メメ	メコ	ドメ
	選手名	安川	勝沼	堀川	米村	大林

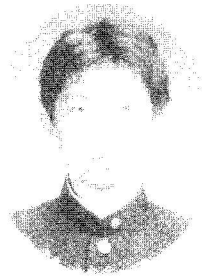
第三十九回

四国中学校総合

体育大会に出場して

徳島文理中学校三年

中村 文人



平成十二年八月五日、第一回四国中学校総合体育大会が徳島県立武道館で行われました。

前日に高知に移動し、大会が行われる県立武道館に向かいました。四国四県の出場校が集まり、練習が行われましたが、さすがに四国の強豪校だけあって、練習の時から迫力が違うと感じました。

「ドン、ドン」という大きな太鼓の合図で、団体戦第一試合が始まりました。初めての四国大会で少し緊張しましたが、試合直前の練習で本来の自分を取り戻すことができていました。予選・試合日は、香川県

大川中学校と対戦し、三対一で勝利し、さい先のいいスタートをきりました。予選二試合日の愛媛県久万中学校との対戦は、一試合目に勝つことで少し油断してしまっただけで、二対一の僅差で惜敗。予選リーグ二位までに入らなければ、決勝トーナメントに進出することができません。従って、次の高知学芸中学校との対戦がとて重要になってきました。もう一度みんなの心を一つにまとめ、試合に臨み、胸裏で完勝予選リーグ一位で決勝トーナメントに進出することができました。

決勝トーナメント一回戦は、もうひとつのリーグを一位で勝ち上がってきた、香川県山田中学校でした。山田中学校は個々の剣道の基本ができていて、非常に強いチームでした。しかし、僕は自分の剣道を見失うことなく立ち向かい、二対一で競り勝ち、決勝戦へ進出することができました。

決勝戦の相手は、この大会で何度も優勝している高知中学校でした。結果は、前人が惜しくも負けてしまい、ぼくが二本取り返したのですが、副将、大将も負けてし



まい、終わってみれば四対一のスコアで完敗。ぼくたちと高知中学校の差は、一本に対する執念が違っていたことだと思いません。高知中学校は、一本を取るとその一本を大切にし、無理に二本を取りに行かず、取ることができたら取るという感じです。だからといって消極的ではないのです。ぼくは、この試合で基本も大切ですが、剣道に対しての心構えが何より重要だと思いません。

決勝戦が終わってすぐ個人戦が始まりました。暑さと疲れで一回戦は、相手に一本取られてしまいました。しかし、気を取り戻して落着いて一本を取り返し、それから二本目もすぐに取り返し逆転勝ち。二回戦は何とか一本勝ち。三回戦の相手は、身長も高く、この大会の優勝候補の選手でした。結果はあっさり二本取られて敗退。少しも自分本来の剣道を出せないままに打たれてしまい、とても悔しかったです。

改めてこの大会を振り返ってみると、団体準優勝、個人ベスト8という結果でした。このような結果を残すことができたのも、

中山先生、玉山先生を始め、これまで指導していただいたたくさんの方々の先生方や、応援してくださった保護者の方々、そしていっしょに剣道をしている素晴らしい仲間達のお陰だと思えます。本当にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。

試合結果

団体 準優勝

一回戦 徳島文理 3 1 大川中

二回戦 徳島文理 1 2 久万中

三回戦 徳島文理 4 1 高知学芸中

決勝トーナメント

準決勝 徳島文理 2 1 山田中

決勝 徳島文理 1 4 高知中

個人 ベスト8

一回戦 中村ドメ メ 深田(今治南)

二回戦 中村ドメ 一本勝 松原(大川)

三回戦 中村ドメ メ野本(城辺)

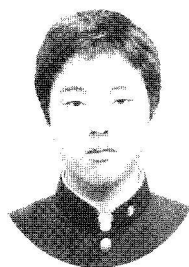
第三十一回

全国中学校

剣道大会に参加して

徳島文理中学校三年

玉田 康朗



『新世紀 夢と希望の炎を燃やせ ここ山口の地で』をスローガンに第三十一回全国中学校剣

道大会が、平成十三年八月二十日〜二十二日、山口県スポーツ文化センターで開催されました。

徳島文理中学校は県総体で悲願の初優勝、続く四国大会でも勢いに乗って準優勝することができ、この調子で全国大会も予選リーグはなんとか突破したいと思っていました。しかし、大会を三日後に控えた日の練習後に先生より対戦校を知らされ呆然としました。対戦校は近畿大会優勝校PL学園中

学校と関東大会優勝校国士館中学校とのことでした。正直言って、予選を勝ち上がるには少し厳しいリーグだと思いましたが、全国屈指の強豪校と同じリーグで試合ができるなんて二度とないことなので、自分たちの力かどれだけ通用するのか試す絶好の機会だと思いました。

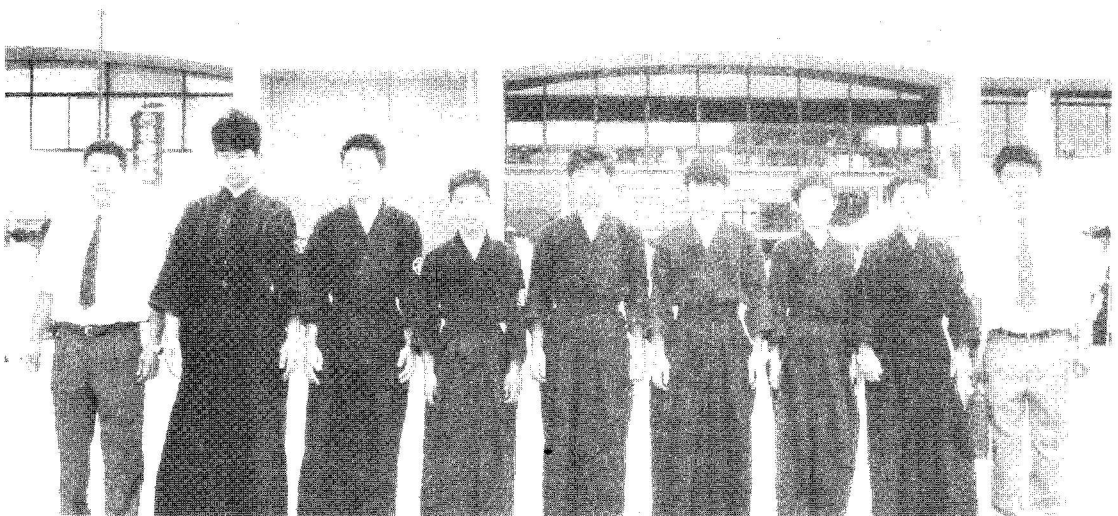
いよいよ本番、団体戦が始まりました。文理中は第五コート二番目の試合でPL学園との対戦でした。このリーグはやはり注目されていたのか、第五コートの周りにはたくさんの方が集まり、異様な雰囲気の中で試合が始まりました。先鋒から大将まで、相手は開いていた通り真つ直ぐな剣道で、攻め崩すことができず、相手のペースで試合が進みました。終わってみれば四対〇と完敗でした。

続く予選リーグ第二試合日、国士館との対戦が始まりました。第一試合と同じような展開で相手の応援もすごく、会場の雰囲気と相手の気迫に圧倒されて、全員力を出し切ることもないまま三対〇で破れました。

ぼくたちの夢の舞台であった全国大会は、

二試合だけの短い時間だったけれど、みんなの胸の中に強烈な印象を残していきました。強豪といわれるチームは、まず勝利に対する執念がすごいと思いました。そして、一本、本を打ちきっていました。また、いい機会をとらえて打っていました。どうしたら、あのような打ちができるようになるのかをみんなで考え、話し合いました。その結果は、やはり基本を大切にして、繰り返し練習するしかないということでした。この貴重な体験を今後に生かし、また高校になってもこの同じメンバーで全国大会を目指し、この次は予選リーグ突破ができるよう頑張りたいと思っています。

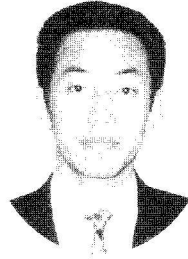
最後になりましたが、ここまでご指導くださいました中山先生、玉田先生をはじめ、出稽古でお世話になった室誠館の諸先生方、そして、応援してくださった保護者の皆様、本当にありがとうございます。



四国・全国中学校 剣道大会に参加して

阿南第一中学校剣道部顧問

村井正志



七月二十二日、

県中学総体が鳴門武道館で行われ、女子団体戦で幸運にも昨年に引き続き全国大会出場の切符を手に入れることができた。今年のチームは三年生二名を核としたよくまとまったチームであった。

八月五日の四国中学総体は高知県での開催であった。昨年は三位、本年度は選手と共に優勝を目指した。本大会マークするチームは、城辺中（愛媛）、高知中（高知）であった。本大会までに四国の数多くのチームと練習試合を行ったことはあったが、その中でも特に城辺中、高知中は実力のあるチームであった。特に城辺中はまとまりのある

素晴らしいチームで、このチームだけでは何度練習試合をやってもなかなか勝てなかった。さて大会であるが、予選リーグでの対戦は白鳥中（香川）、重信中（愛媛）、鏡野中（高知）であった。初戦に対戦した白鳥中には予想外の大敗、早くも残り二試合を勝たなければ決勝トーナメント進出の可能性も非常に薄くなり、目標の優勝どころか予選リーグ敗退の危機に追い込まれてしまった。

しかし残りの二試合には圧勝することができ最終的には予選リーグ二位ということが決勝トーナメントに進出することができた。決勝トーナメントでは高知中同様、実力城辺中との対戦となった。

最終的には2(3)対2(4)の本数負けで敗れはしたが選手たちは非常に素晴らしくいい試合をしてくれた。昨年同様三位というところで目標としていた優勝には届かなかったが、悔いのない試合をすることができた。個人戦は本校から女子三名の出場であったが、吉岡のベスト8が最高であった。しかし吉岡は優勝した選手以上に堂々とした素

晴らしい試合ができていた。

全国中学校剣道大会は八月二十日、二十一日の三日間、山口県のスポーツ文化センターで開催された。会場内は大変広く、コートにも余裕があり思い切った試合ができる雰囲気があった。二十日は開会式のみで二十一日から予選リーグがあった。その為選手たちは時間的にも余裕を持って試合に望むことができた。予選リーグの対戦チームは湖東中（鳥取）、三瀬中（佐賀）で第四試合場の第七試合目（湖東中）、第十一試合目（三瀬中）での対戦であった。三瀬中は本大会優勝候補であった。しかしこの三瀬中を倒せば上位進出も十分可能であると思っていた。まず湖東中との対戦、三瀬中と湖東中との対戦を見るかぎりでは、本校がいつもの力を発揮すれば勝てる相手であることが予想された。また、三瀬中の戦いぶり（湖東中戦）を見るかぎりでは確かに一人一人は試合巧者ではあったが、そんなに迫力も感じられなく本校でも十分戦えそうな雰囲気があった。

予選リーグ第七試合目湖東中戦、試合が

全日本女子剣道選手権

新野高校教諭

坪井 さくら



五回目の出場

となった今大会、

社会人として初

めて迎えること

となった。この

大会はどの一戦

をとっても忘れることのない出来事やエピソードがある。今回は二試合しか出来なかったが、いろんな思いが残った。

一回戦 坪井 ③ 緒方(宮崎)

緒方選手は大学時代に団体戦で一度対戦(その時は引き分けだった)したことのあ
る一学年上の選手である。個人戦では初の
対戦であったことや、お互いの剣風を知っ
ていたせいもあり、試合は膠着状態が続い
た。延長戦に突入し五、六分程経過したぐ
らい、急に緒方選手がタイムをとった。見
た感じや試合の流れ的にはタイムをかける
ところではなかったので、私は一瞬きよとん

は阿蘇中、準優勝は三瀬中、いつもながら九州勢のレベルの高さには驚かされる。とにかく試合運びが上手で、剣道をよく知っていると感じた。九州の各県の激戦区を勝ち抜いてきたチームは日頃の取り組みは勿論、剣道とは何かをよく知っている。

本県中学校の剣道レベルをあげる為にはやはり九州の剣道を大いに参考にすべきであるとあらためて感じた。個人戦においても本校から島田が出場していた。二年生ながら健闘よく三回戦まで勝ち上りベスト32まで進むことができた。

最後になりましたが、県中総体で優勝し、四国大会、全国大会に出場させて頂き、たくさんの方々にあたたかいご支援や心遣いを頂きまして本当にありがとうございます。次回出場する機会がありましたら是非とも九州勢を倒し上位進出できるよう選手と共に頑張りたいと思います。

始まり先鋒戦、なかなかいいすべり出しで難なく二本勝ち、このままスムーズに行くと思っていたが中堅戦、大将戦でひやりとさせられる場面があり終わってみれば二対一の辛勝であった。湖東中の戦いぶり(三瀬中戦)を見るかぎりでは十分勝てる相手であると思っていたがやはり全国大会の初戦、特に二年生に肩の力が入っていたのかも知れない。予選リーグ十一試合目三瀬中戦、先鋒戦が特に勝負どころと踏んでいた。試合内容は非常によく途中まで相手と五分以上の戦いぶり、「ひよっ」として、これはいけるかも!」と思っていたが終盤小手に對して相小手面にのられてしまい一本負け。続く次鋒戦は完全に押されてしまい一本負け、終わってみれば0(0)対2(2)で負けてしまい中堅戦からそのまま完全に逃げられたような試合内容であった。試合前の予想通り先鋒戦が勝負の分かれ目になってしまった。昨年同様九州勢の試合巧者ぶりと勝負にかける執着心に敗れてしまったという感じである。女子団体戦決勝は阿蘇中(熊本)対三瀬中(佐賀)九州勢同士の対決、優勝

としてしまった。緒方選手はコートの外で面をはずし、目をさわりながら、困惑しているようだった。どうしたのかと思いつめていたら、コンタクトレンズが外れたことが分かった。結局、片目だけコンタクトレンズをつけた状態で試合は続行されたが、その直後に決着がついた。一本決まった瞬間ほっとした。

しかし、コンタクトが外れてなければ勝負の行方は分からなかったと思う。また、不利な状況になっても相手に必死に立ち向かう緒方選手の姿勢は立派だった。

二回戦 坪井 ②馬場（大阪）

馬場選手は中学時代からの友人であり、各地の大会や練習試合で何度も対戦してきた。結果は勝ったり負けたりであったが、負けのほうが多かったと思う。その後、高校で対戦することなく、私は進学、彼女は就職（大阪府警）を選び、四年間別々の道を歩んだ。そして社会人になって七年ぶりに試合する時が来た。四年間の間で馬場選手は警察大会で常に上位入賞したり、前回の世界選手権の代表に選ばれるなど、日本

のトップ選手になっていた。しかしやるからには勝つぞという気持ちで臨んだが、やはり警察で鍛えられた力は強く、時間内で一本先取され反撃もむなしく試合は終わった。

負けて悔しい気持ちはもちろんだが、それと同時に剣道を頑張って続けているといろんなめぐり合わせを知った一戦であった。

今回は、対戦相手のアクセシデントや、久々の対決など、とくに思い出に残る大会となった。そして自分の剣道に関しても良い勉強となった。

大会終了直後、私の試合を見た大学の先輩に「稽古不足だろ？」と言われた。卒業後、母校の富岡東高校で生徒と一緒に稽古させてもらい、自分の中で稽古は十分だと思っていただけにこの言葉はショックだった。けれども、よく考えてみると、量（時間）だけに満足してしまい、一番大事な質（内容、心がまえなど）に関しては前より雑になっていた気がする。

この先、仕事の関係などで稽古時間が、

少なくなってしまう場合。量が足りないので質でカバーせざるをえない。今のうちから量に関係なく質を大事にするくせをつけておかなければならない。

来年も、この大会に出場することを目指し、「稽古不足」と言われないように日々努力していきたい。

第四十七回

全日本東西対抗 剣道大会に出場して

警察支部

平野 誠 司



全剣連が主催

する全日本選手権、都道府県対抗、東西対抗は、日本剣道界を代表する大きな大会であり、それぞれに特別な思いがあります。

奇しくも私は今年の第四十七回全日本東西対抗剣道大会に西軍の二十六将として出場することとなりました。私にとっては二度目の出場であります。

東西対抗といえは東軍、西軍それぞれのチームとしての優勝と、個人的勝敗、更には各都道府県の代表ということで個々にはこの大会の重みに自然と包み込まれます。優先順位はないにしろ、各選手は自分の思

惑の中でこの大会を捉えているように見えます。

私の対戦相手は、東京都代表で警視庁主将も務めた同級生の出崎忠幸選手であります。遠征・合宿等で何度か対戦した経験はありますが、公式戦はこれがはじめてでありました。

西軍1ポイントリードのうち、いよいよ出番です。ここは群馬県前橋市、剣聖といわれた持田範士の故郷。正々堂々と構えて対峙する気持ちはよかったです。やはり少し堅かったようで、二度三度担がれた後、初太刀の面を見事打ち込まれてしまいました。しかし、これで目が覚めたかのようには一本を返すことに集中ができ、試合時間も後少しのところ、ようやく手元を浮かすことができ小手を打つことができました。続く残り時間内にも、絶妙のタイミングで放った双手突きには旗は一本。惜しい技でしたが有効打突とはならず、そこで時間となりました。

延長になると、こちらは外さず詰める、そして相手はその詰めを外し裏を打とうと

する両者の思いがうまくかみ合わず、しばらくの間膠着状態が続きますが、十六分間の延長戦を制したのは初太刀と同じような拙き面でした。相手も決め損じていただけに、両者に後味の悪さが残りましたが、反省材料も多く大変勉強になった試合でした。

この大会を通じて、日々修練している自分の姿を表現しよう、自分の力を出し切ろうとしたことは、試合には負けはしたものの修行上得たものは非常に大きかったように思います。

試合というのはそれぞれ大会によってその違いもあるでしょうが、本来的には自分が日々修練してきた方向性を確認するための道しるべ的通過点であり、現段階での自分に不足することはいったい何なのか、自己を見つめ直す上でとても大切なことなのです。

試合をやる以上、まずは勝つことをもってよしとするのは当然であるし、勝つことによって自分を表現することは自然な考え方です。しかし、勝負に拘って勝ちに過大評価をし過ぎると、いつまでたってもそこ

から抜け出せない稽古しかできなくなるものです。単に勝つためにはどうするかではなく、自己を耕す、自己の剣道を前へ進めることをやりながらも勝ちに拘っていくことが大切なことではないかと思うのです。

今現在の私の課題は「捨てる」ことであり、一つの技を「入り」から「打突」に至るまでを「捨てる」ことによって終結させていくこと、その精神作用を自己の問題としてとらえていくことであります。

これからの時代に剣道を生かすものは、そういう目前の現象だけではないもっと大切なものを育んでいく修行体が必要なのかもしれません。

剣を振るといふことがただの棒振りに終わらず、自分の剣道はいったい何を大切にしているのか、そして何を表現しようとしているのか、それらを立ち合いの中にどのように凝縮していくか……。

「たかが剣道、されど剣道。蓋し、剣は深く、世界は広し」

剣道の本質に迫るにはまだまだ奥深いところがたくさんありますが、その本質を見つ

める限り、……剣道は無限なのです。



国民体育大会に 出場して

監督・大将 中尾正輝



第五十六回国

民体育大会秋季

大会剣道競技会

(成年男子・成

年女子)は、十

月十六日(火)〜

十七日(水)、「水と緑の里」宮城県河北町

総合センター「ビッグバン」を会場として

開催されました。

本県からは、

監督兼 大将 中尾正輝 (徳島県警察)

副将 七段 近藤 亘 (徳島県警察)

中堅 七段 福多雅英 (城北高校教諭)

次鋒 五段 富田圭介 (徳島県警察)

先鋒 四段 佐藤 智 (穴吹高校
美馬東部寮)

の五名の選手が郷土の代表として出場いたしました。

今年の国体選手選考は、各クラスから二

名を選考（試合）し、強化期間中の県外試合の結果、訓練参加状況等を参考として強化委員会で検討され選考されました。

今年こそ「ベスト8」を目標に選手それぞれが、ひたすら稽古に励んでまいりました。

試合は、初戦となる二回戦で昨年の覇者・富山県と対戦しました。

富山は、金沢市での合同稽古で稽古をお願いした相手でもあるし、メンバーのうち警察職員が三名を占め、ある程度やりよいチームであると考えていました。

先鋒戦は、佐藤四段が奥村三段と対戦、両者積極的な攻め合いの末、面・小手を取られ、更に、次鋒富田五段も富山のポイントゲッター、重富五段（富山県警察）に鏝迫り合いから引き小手、続けて引き面を連取され二敗を喫し、もう後がない。中堅勝負師の福多五段に引き継ぐ、相手は高瀬七段、福多選手上段から積極的に攻撃し、中盤追い込み小手を先取、その後、時間切れとなり一本勝、一勝二敗となり、副将近藤七段に繋ぐ、近藤選手、大門七段（富山

県警察）の上段からの攻撃を凌ぎ積極果敢に、技を繰り出すが有効とならず、中盤に大門選手の誘いに間合いに入ったところを面を先取される。逆転勝利に望みをかけるが時間切れとなり、三回戦への夢を絶たれる。

私も、勝負は決しているものの、一矢を報いんと攻撃したが、出小手・小手と連取され敗北した。

今年の国体は、以上のような結果に終わってしまいました。が、選手個々は、強化訓練等を通じて、いくつかのすばらしい成果を修得したものと思われまます。

最後になりましたが、ご指導ご支援を頂きました掘江幸夫先生・遠藤一美先生をはじめ県剣道連盟の諸先生方に心からお礼を申し上げ大会の報告とします。

全日本居合道大会 に参加して

居合道部 一宮 和雄



第三十六回全日本居合道大会が、平成十三年武田信玄公ゆかりの地、山梨県甲府市において開催されました。

今年の当大会は、徹心道場より、五段・高野靖宏選手、六段・私、七段・岸田光博先生と、同門で出場する事となりましたが、私には初めての全日大会です。他の二人は、数回出場しておりいろいろアドバイスを受けることができました。選手に選ばれてよかったです。強化練習会を開いてくださり、また、道場では、師匠の平尾勝美先生

をはじめ徹心道場同僚の人達のご指導、ご助言をいただき練習場にも恵まれ、集中して稽古ができました。

大会前日の十九日に、徳島より、平尾勝美先生、監督の原田勝先生、前田健志先生、吉岡修一先生と選手三名の計七名で甲府へ出発しました。同日午後二時前に甲府市に着きました。甲府までの列車の窓から見る風景はぶどう畑の連続でした。さすが山梨県はぶどうの産地だ。駅からは時間があるので甲府市内を見て歩きながら宿舎へ向かいました。徳島市と同じくらいの人口らしいが、案外静かな町だ。夜、監督会議より帰った。原田先生より試合のプログラム、いろいろの注意、会場への出発時間などの打ち合わせがあり明日へ臨む。

大会当日。会場の小瀬スポーツ公園武道館へ向かう。会場は広い公園の中に体育館、陸上競技場、テニスコート、他いろいろな建物があり、その中で武道館はひときわ立派でした。全日本ともなると、こんな立派な所で試合ができるのかと感激しました。会場の二階に設けられた徳島県の待機場所

に荷物を置き、開会式を待つ間に六段の部のトーナメント表で、自分の試合を確認しました。私は一回戦、六番目で対戦相手は沖縄の選手です。開会式後サブ道場へ行くも満員でした。あまり時間がないので、体ならしの練習で止め会場へ帰り出番を待つ。待機位置に着き前者の試合の間自分の演武種目を、目を閉じてイメージでおつてみる。

いつの間にか胸の高鳴りがおさまってしまいました。試合が始まり、開始線に立ったとき以外におちついていました。大会の演武種目は古流二本と、全剣連居合三本で行われます。私は、古流一本目「前」と立膝の部「鱗返」を、そして指定技は四本目「柄当」六本目「諸手突」十二本目「抜打」の計五本を抜きました。試合時間は六分以内です。二人共、それぞれの技を終わり、立って判定を待つ。結果は二対一、初勝利を得ました。二回戦の対戦相手は岩手県の若手選手だ。勝敗を考えず、無心で行こうと思いましたが。演武をすませ判定を待つ、結果は二対一の惜敗でした。

徳島県選手、五段の高野選手は、一回戦

シード、二回戦埼玉県の選手と対戦して二対一で惜敗。七段の部、岸田先生は、二回戦二対一、三回戦一対二で惜しくも敗れベスト16という成績でした。徳島県の全国順位は18位で優勝は地元山梨県でした。いつか又、出場できるようにこれからも一層の上達を目指し、修練を積んでいきたいと思えます。

第四十九回

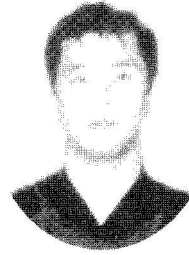
全日本剣道選手権

大会に出場して

夢の舞台

警察支部

富田圭介



平成十三年七

月一日、鳴門武

道館において第

四十九回全日本

剣道選手権大会

の徳島県予選が

行われた。私は今回で六度目の挑戦であったが、自分でも信じられないくらい体も良く動き、何よりも集中力が最後まで持続できた。一戦、戦敵しい試合ばかりであったが、何とか決勝まで勝ち進んだ。決勝の相手は福多雅秀先生である。(相手は福多先生、負けてもともと)という気持ちと、(ここまできたからは、絶対勝ちたい)という気持ちとが交錯する中、試合直前には、(とにかく

集中、粘り強く。)という気持ちで試合に臨んだ。試合は延長となり私の打った面が一本となった。この瞬間、十一月三日、日本武道館で行われる第四十九回全日本剣道選手権大会の出場権を手にすることができた。その日の試合を終え帰宅する間、心臓は高鳴り、また夢ではないのかと、賞状をチラチラ見たりとなかなか興奮がさめなかったのを覚えている。

それから四ヶ月間、機動隊の稽古、連盟の強化稽古、国体の熊本遠征、石川遠征等、充実した稽古ができた。私はその稽古の中で、あえて全日本を意識せず、とにかく稽古、試合に集中しようと心に決めていた。技術面ではなく自分はこれだけやって来たという自信を持って大会に臨みたかったからである。

さて、いよいよ十一月となり大会当日、各都道府県の代表六十四名、独特の雰囲気と緊張感の中、開会式が行われた。

そして試合開始、私の試合は四試合目である。一試合目が始まると同時に、係員に促され私も試合の準備にとりかかる。この

時ばかりは他の人の試合を落着いて見る余裕もなく、とにかく自分の集中力を高めることで精一杯であった。そしていよいよ私の試合が始まった。鍋山隆弘選手、鍋山選手は本大会八回目の出場、世界大会出場の経歴を持つ有力選手である。相手にとつて不足なし、思い切り、そして粘り強く、という気持ちで試合に臨んだ。お互い初戦ということもあり、慎重な試合運びが続いた。

そして試合中盤、私が面に飛ぶと鍋山選手も面、両者ともに部位はとらえなかったもののタイミングには私の方が良かったように思われた。この瞬間私は、(もしかしたらいけるかも。)と思った。試合は延長となり、さらに慎重な試合が続く。もう一度、あのタイミングで技を出せばとチャンスを探すが、私の攻めは鍋山選手の剣先によってほとんどが殺されてしまった。決め手がないまま鏝迫り合いとなり、一瞬のことであった。鍋山選手の引き面が私の竹刀越しに部位をとらえた。試合終了。体中の力が抜け、どっと疲れがでてきたような気がした。



その日の夜、宿舍のベッドで一人今日の試合を振り返った。そしてあの時一瞬でも勝てると思った自分に勝負に対しての甘さがあったのではないかと反省した。多少の悔しさは残ったが、それ以上にこの舞台上に立つことができた喜びを感じていた。それと同時に日々までご指導いただいた先生方、県警の剣道特練の皆様方、剣道通じて知り合った友人達そして両親、家族、様々な人に支えられ、一つの目標、夢を実現するこ

とができ感謝の気持ちでいっぱいであった。今年の全日本選手権はこれで終わったが、私の剣道は終わったわけではない。この大会に出場した経験を生かし、さらに新しい目標に向かって一歩一歩努力していきたいと思う。

全国青年大会を

ふりかえって

阿南支部

西野 知成



二十一世紀幕開けの年の十一月、記念すべき第五十回全国青年大会が東京で開催されました。

全国青年大会の起源は今から五十六年前、終戦を迎え荒れ果てたふるさとへ帰ってきた若人たちが「青年は再び銃を持たない」と誓いのもと日本青年団協議会が結成され一九五二年にサンフランシスコ講和条約の発効を記念して第一回大会が開催されたそうです。その理念は、平和でなければスポーツも文化も花開かない。地域発展のために若人たちの手で未来を切り開いていこうというものです。

本大会には、我々阿南支部が県代表として出場させて頂きました。この五十回大会

から二名までに限り学生の参加も認められるようになり、敦賀選手と福島選手の二名をメンバーに加えさせて頂きました。あとの三名は小学時代に同じ道場で剣を交えていた仁木選手と谷口選手と私とで、歳の近い言わば小学時代からのライバル同士だったドリムチームでの出場となりました。

剣道の部は九日、十日の二日間に亘って行われました。メンバー五人全てがこの日のために稽古を積んできました。けれど共に積み上げてきているはずの私自身は試合直前まで、正直言つて心と剣と体の歯車がポロポロと音をたてて崩れているような焦りと不安の泥沼でもがいていたままでした。そんななかで団体戦がはじまりました。一回戦の相手は岡山県でした。先鋒戦・谷口選手は持ち前のフットワークで相手を翻弄するかと誰もがそう思っていました。ところが一本相手に先制された後、明らかにそれまでの動きが変わってしまい結局、相手に一勝されてしまいました。次鋒戦・敦賀選手が立ち上がり鮮やかな小手を決めこ

後半で取り返され延長の末、わずかな隙を捕らえられ二敗。中堅戦・仁木選手も踏ん張り、先制はされたものの際どいところで抜き胴を決め、延長に持込んだが勝負に急いだところを見切られ決定打を許してしまい三敗。勝負はついたものの副将戦・福島選手は相手との意地と意地の熱戦を繰り広げ、時間いっぱい接戦がつづいたが時間切れ。本人は延長で絶対一勝を挙げる気であったが、団体の勝負がついた時点で延長がないことに気づくと悔しさがこみ上がっているのが見えているこちらにも伝わるほどでした。大将戦・私は勝負がついた試合ではあるが、何とか意地を見せたい思いで望みました。しかし、先にも述べたとおりの状態は「始め」の宣告を耳にしても変わらぬままでした。そんななかでも何かを求めつつもりで這い上がろうと気迫で自身を奮い立たせたが、付け焼刃に過ぎず相手には見抜かれていたようでした。片手技にも伸びがないのが自分でもはつきりと感じられ、結果は惨敗でした。

団体戦の終わったその日の晩、居酒屋で

の出来事。大津監督・金久コーチにアドバイスを受けたと言うべきだろうか。私の心を透かし見たような話に戸惑いを隠せませんでした。その話とは端的には私の剣が「迷っている」ということでした。四戒のひとつだけに痛い思いをしましたがよく考えるとそれが他の三つの戒めにも波紋を広げているのではないかと、考えさせられました。

翌日の個人戦も誰一人入賞にはならず悔しさの残る結果でしたが、それぞれの課題とさらなる精進への意気込みを得、大会を終えました。

大会の後、敦賀と谷口から私の試合について一言尋ねられました。それはやはり同じチームで戦ったもの同士。技がどうこうというのではなくメンタルな部分に対する問いでした。おそらく私の剣に対して、異変を感じてのことだったのでしよう。このままの気持ちでは火の位に値しないと感じていた私は個人戦では中段で戦っていましたが。ほかにも理由はあったのですが。敦賀に「先輩、どっちも同じですよ」と聞かされたときは見抜かれていたかと思いつつも

徳島の剣道

一回戦
 福島(不戦勝)
 仁木ド — コ(判定) 中武(宮崎)
 西野コ — ココ関根(福島)
 二回戦
 谷口 — ココ富山(茨城)
 敦賀メメ — 林田(長崎)
 福島ツメ — 渡辺(山形)
 三回戦
 福島コメ — 栗城(福島)
 敦賀 — メ岡田(愛知)

「やっぱり」と思う気持ちが大きかった。
 この大会で試合からフィジカルな部分で得るものもありましたが、私自身にとってはもっと奥の深い何かを得られたように思えます。その何かを解きほぐすことが、今後の課題と感じながらの帰省でした。
 最後になりましたが、今回の青年大会出場にあたり県剣道連盟をはじめ、阿南支部の先生方また各道場の皆様方の厚いご指導ご激励に深く感謝いたしまして、ご報告とさせていただきます。

個人戦

四回戦
 福島 — メ佐藤(宮城)

団体戦 一回戦 ○—四

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
徳島県	谷口	敦賀	仁木	福島	西野
		コ	ド	コ	
岡山県	コ反	ココ	メメ	コ	コメ
	白神	植田	渡辺	重本	渡辺

優勝・茨城 準優勝・東京
 三位・岡山 愛知



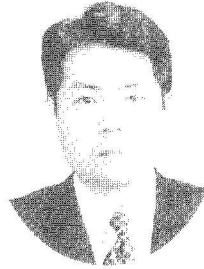
第四十四回

全日本実業団

剣道大会に参加して

日亜化学工業

園田 慎吾



私たち日亜化

学剣道部は、今

年四月に発足し、

現在、部員十五

名で週一回、阿

南市大潟武道館

で稽古しております。

今回、発足して間もない九月十五日、日

本武道館において開催された全日本実業団

大会に、日亜化学剣道部として初めて出場

いたしました。この大会は、実業団で剣道

をしている者にとって最高の舞台であり、

目標としている大会であります。今回も、

全国から三〇〇チームが参加し活気あふれ

るものでした。その時の結果を、簡単では

ありませんが報告させていただきます。

《出場選手》

監督 小川 智滋

先鋒 横手 慶人

次鋒 山本 泰史

中堅 呉羽 貴志

副将 園田 慎吾

大将 中尾 幸雄

補欠 谷口 智映

《試合結果》

一回戦 不戦勝

二回戦

日亜化学 5 (10) 0 (10) 阪急電鉄

横手メメ 田村

山本コメ 佐々木

呉羽メコ 大内山

園田コメ 龍田

中尾コメ 経広

三回戦

日亜化学 0 (1) 2 (4) 三井住友銀行

横手 コメ矢野

山本メコ 鶴田

呉羽メコ 松井

園田 × 泉

中尾 コ田 中

二回戦の阪急電鉄戦では、序盤少し硬さは見られたものの、終わってみれば相手に一本も与えず勝利することができました。三回戦の三井住友銀行戦は、日亜化学が押し気味に試合を進めている場面もありましたが、最後は詰めのみから負ける結果となりました。

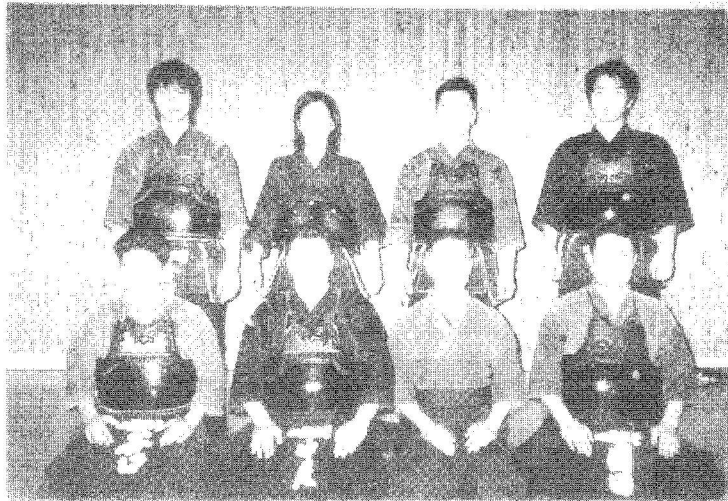
当初の目標は、「三回戦の三井住友銀行に勝ち、四回戦で前回優勝の住友海上火災と対戦する」というものでありましたが、今回の大会では、この目標を達成することができませんでした。この試合で改めて感じさせられたことは、他のチームや選手に比べて、一本に対する執着一心が足りないことでした。

実業団チームとして、また一社人として剣道と関わっていく以上、仕事と稽古の両立は簡単ではありません。私たち日亜化学も、夜勤に就いている者が多くおり、週一回の稽古には、平均で五・六人しか参加できていない状態で、全員が集まることは無理なところがあります。この様な状況下

で、私の頭に浮かんだのは、大学時代の恩師がよく言っていた「剣道の稽古は、どんなに忙しくても、やろうという気さえあれば、稽古の種類はいろいろあるのだから、時間を見つけてできるものである。稽古ができないというのは、言い訳に過ぎない」という言葉でした。今後は少ない人数、限られた時間でも充実した稽古となるように、部員一人ひとりが高い目的意識を持ち、日々稽古に取り組んでいきたいと思えます。

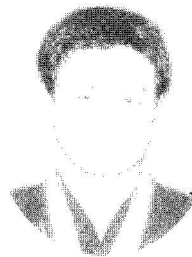
私たちが日亜化学剣道部は、まだまだ微力ではありますが、今回の大会で得た経験を生かし、県内の実業団チームとして徳島県剣道連盟発展のために精一杯頑張っていきますので、今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

以上で、日亜化学剣道部の紹介を兼ね、全日本実業同大会の結果報告とさせて頂きます。



自信と稽古

警察支部 山名 信行



全国警察官剣道大会優勝の瞬間、選手としてその場に居合わせたことの幸運に本当に感謝したいと思えます。

優勝が決まった瞬間、心地良い達成感が体中に広がって行くのを感じました。

ある本で『達成感とは最後まで頑張り抜いた者にたった一瞬だけ与えられる貴重な栄誉である。』と書かれているのを読んだことがあります。

昨年の二部から三部降格という屈辱を受け、その雪辱を晴らすために頑張った一年。この月日は私にとっても先輩方にとっても本当に長い月日であったと思います。

さて今回、全国大会の文章作成の依頼を受けたわけですが、私自身、文章を書く

いうことが苦手、何を書けば良いのか悩みましたが、選手として出場していたことを活かし、その場面場面で思っていた事を書かせていただく事にしました。

今回、四国管区大会に引き続き副将として全試合に出場しました。私自身この全国大会の重さを経験し、よく知っているだけに何とも言えない緊張と不安に押し潰されそうになっていました。

昨年私は次鋒として出場したのですが、ここ一番という大事な場面で先制しながらも、二本取り返されてしまいチームの敗因の引き金を引く流れの一端を作ってしまった苦い経験があります。それだけにもろに勝負の流れを左右もしくは決定づける副将というポジションを監督の近藤先生から言い渡され時の気分はまさに死刑宣告のような気分でした。

第一試合目 対 山梨県警戦

四(六) 対〇(一)で勝利

この試合私に回ってきた時点では二対〇でリード。最初に思ったのは「ここは手堅く引き分け狙いで勝負を決めてしまいたい。」

と思ったのですが、試合コートに入る寸前、昨年の失敗が頭をよぎり、昨年は一本先取したあと気持ちが「このまま一本勝ちでいい。」と消極的になったため、逆転されてしまったあの苦い経験です。そこで「勝負を決めるなら勝って決めたい。」と思い直し積極的にせめたところ、ドウとコテを連取しチームの勝利を決めることができほっとしました。

第二試合目 対 福島県警戦

三(四) 対一(二)で勝利

今大会私たちに取って一番重要な一戦と言っても過言ではない試合でした。この一戦に勝利すれば二部への復帰ができます。しかし、相手の福島県警は二年前三部での優勝経験を持つ強敵です。自ずと先輩方の顔にも緊張が見えましました。

試合は誰もが思った通り一進一退の攻防が続き、私に回ってきた時点では一対一。しかし本数差でリードされていきました。この場面自分のすべき仕事は一つしかありませんでした。チームの流れを引き寄せる一本を何が何でも奪い取ることです。いつも

の私ならこの場面慌ててしまい何もできずに終わってしまうのですが、この時は不思議と落ち着いていました。それは試合の始まる前、頭の中では昔に平野コーチが言われた「ピンチの時には自分がヒーローになるチャンスだと思え。ピンチを楽しめ。試合中熱くなくてもかまわなわいが必ずクルな自分を持って勝負に挑め。」という言葉思い出していました。

試合は終始、自分のペースで進めることができました。試合中盤思い切って出したコテが一本となりそのまま時間となり一本勝ちで逆転。その後大将戦で一度逆転されるのですが、チーム全員の執念とも思えるメンが二本決まり福島県警戦に勝利しました。

この勝利は本当にチームの執念の勝利と言っても過言でない勝利だったと思います。

第三試合目 対 和歌山県警戦

三(四) 対二(二)で勝利

今回も私に回ってきた時は一対二でリードされていましたが、試合に臨む前、不思議と試合の流れがこちらに傾きだしている

ような感じを受けていました。「なる、それを引き寄せるために倒え敗れなくとも向で勝負をしよう。そうすれば何とかなるだろう。」と信じ、攻め続けた結果メンを連取することのできたのです。本敷でリードを奪うことで流れをにこちらに引き寄せる事が充分できました。

第四試合日 対 新潟県警戦

二(三) 対一(二)で勝利

この試合に勝てば決勝へ進出する事ができます。いやがおうにも力が入ります。

私自身もこの試合になって緊張や迷いはなくなっていました。ただ、体の感じるまま竹刀を振り降ろすとメンを連取し大将につなげることができました。

決勝戦 対 栃木県警戦

三(四) 対一(三)

ついに立った決勝戦の大舞台。私の胸は高鳴ります。日本武道館の照明も一段と試合場を照らしあげ何とも言えない雰囲気醸し出しています。

剣道を始めて一六年。正直、こんな舞台に立つことができるとは思ってもありません。

した。私は「ここまで来たならば楽しむだけだ。今までやってきた稽古を信じてみよう。稽古は自分を裏切らない。」その言葉を胸に試合会場に整列しました。

試合は一進一退の攻防が続く、私の出番が回って来たときには

「(一) 対一(二)とリードされています。私は、自分の稽古を信じ試合に臨もうとしたのですが実際はその場の雰囲気飲まれていました。このままではいけない。」

と思いつつ、一つの発想の転換をすることにしました。「例え剣道を何年続けても一生に何度本当に熱くなれるのだろうか？舞台は全国大会決勝戦。ある意味優勝を左右するかもしれない大一番。ここで熱くならなければいつ熱くなるのか」と自分を奮いたせ試合に臨みました。

試合開始。体は動く、心は「いける！」ですが、相手も立場は同じです。試合中盤突いてきた所に合わせてメンを打ち込んだのですが、相手の突きのほうが僅かに早く、この場面では決して与えてはいけません。

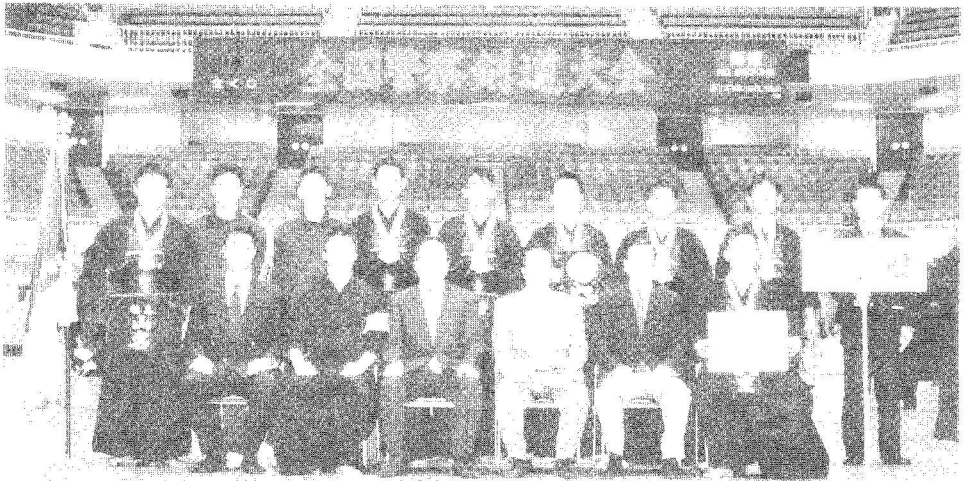
一本を先取されてしまいました。

しかし諦めの悪い私は、「時間はまたある。まだ絶対にチャンスは来る。体が動けなくなるまで動いてやる。」と気落ちする事なく攻め続けたところ終盤にコテを取り返しなんとか延長戦に持ち込みました。

延長戦に入っすぐ、またもや突いて来ましたが、その時のことはあまり覚えていません。その時がつくと大刀がメンをとらえていました。本当に最後の最後のこの場面で一年間め稽古の成果を出せた無心の一本でした。

今回この全国大会を通じたことは、「決して稽古は自分を裏切らない。また決して諦めてはいけない」ということです。例えどんな苦しい時であつても自分が信じられるものは自分が今まで積み上げてきた稽古だけだと思います。だからこそ日々の稽古を続けることが大切なのだと思えました。

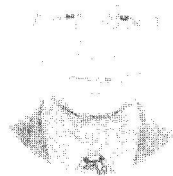
来年は、二部で戦いますが、そこでも自分に自信を持って戦えるよう一部昇格を目指し日々の稽古を積み重ねて行きたいと思えます。



第二十三回 全日本高齢者武道大会

徳島県高齢剣友会理事

南 充 美



平成十三年六月
四月(月)日
本武道館に於て、
第二十三回全日
本高齢者武道大
会が、大太鼓の

合図で華々しく開催された。

開会式典が終了し、演武の先陣を担い、
徳島県より日本剣道形を、打太刀早川・也
教士七段・仕太刀遠藤・美教士七段が、日
本武道館の検舞台で気迫と気品が漂う立派
な演武を披露された。

日本剣道形はさきに、昭和五十八年六月
の第五回大会で打太刀故清原榮教士七段と
仕太刀故中川虎雄教士七段がご披露されて、
二回目に平成七年六月の第十七回大会で打
太刀勝浦守範士七段と仕太刀西野四郎教士

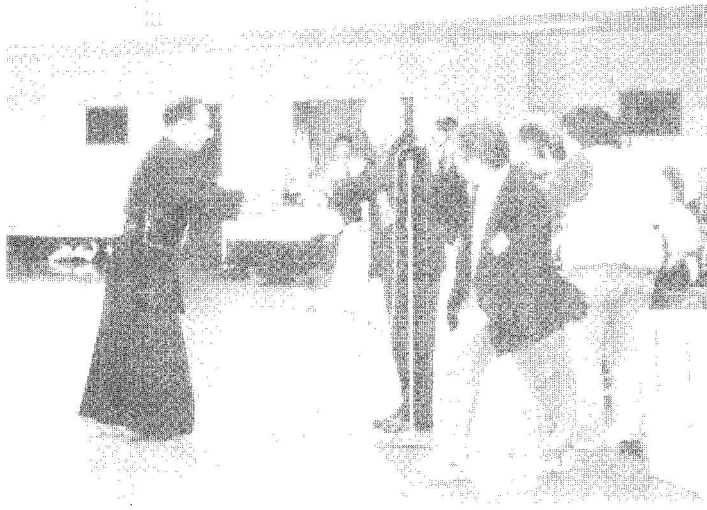
七段がご披露されてから実に三回日になり
ます。

徳島県高齢剣友会から本年の参加者は、
家事及び身体の不調で当日も欠席者があり、
次第に少なくなっている。

戦績は本年特組で遠藤・美七段が優勝さ
れました。遠藤・美七段は第十七回大会で
A組で全国制覇されてから二度目の全国制
覇であり、徳島県剣道士の名声を高めて頂
きました。

その他の戦績として、私が二回戦で昨年
敢闘賞に輝いた京都の吉田知七段と対戦、
メン二本を決め勝ちしました。対戦後吉田知
七段よりは、腕いメン二本を頂戴し、完敗
です。今後優勝目指して頑張ってください。
と励ましのお言葉を頂きました。三回戦は
遠藤・美先生と優勝戦で対した埼玉の林学
七段でコテ一本で敗れました。寿組で一村
喜佐男七段が、回戦まで進みました。寿組
は六十歳以上ですが中でも高齢であられる
先生の活躍は素晴らしいものでした。

残念ながらA組・B組・C組では十分な
成果をあげることが出来なかった。本県高



齢剣友会は過去で勝浦守七段・平岡竹雄七段・遠藤一美七段（今年で二回）が全国制覇をされたのを始め、準優勝・敢闘賞・入賞者を多数出しています。今後六十歳代の会友が増加して徳島県高齢剣士が益々活躍することを願っています。

第二十三回全日本高齢者武道大会
特組優勝 遠藤一美 教士七段
大隅信幸会長より賞状を受ける



第二十三回全日本高齢者武道大会
打太刀 早川一也 教士七段
仕太刀 遠藤一美 教士七段



特組で優勝して

徳島県議会議員

遠藤 一美

平成十三年六月四日、東京の日本武道館で開催されました第二十三回全日本高齢者武道大会、全国老人福祉助成会主催剣道の部特組にて優勝を飾ることが出来ました。

これも口頃から温かいご指導を頂いてます。高齢剣友会の皆様のご支援と強い練習を頂きましたお陰であります。

今後も少年剣道教室の巡回指導や、青少年自身が持っている素晴らしい個性や能力をどんどん伸ばしていくことこそ、これからの青少年の健全育成を図る上での重要な課題であります。

未来に希望を抱いて自立を目指す青少年が、その優れた能力や個性をいかんなく発揮して更なる活性化へと取組む少年へ環境や条件整備を図ることが重要な課題であると認識して、今後も積極的に剣道を通じて青少年自身が将来に夢を持てる社会作りへ

と汗を流して参ります。一層お力添えを頂きますようお願い申し上げます。

また平成十五年度には本県で開催されます全国健康福祉ねりんピックにつきましても全ての世代の県民一人ひとりが主役となつて全国から訪れる多くの参加者の中で温かくお迎えするとともに豊かな自然や伝統文化、人情等、本県の魅力を最大限に活かして、徳島らしさを全国に大いにアピールできる大会とすることが最も肝要であります。

地域や世代を超えた幅広い交流の輪を育み、全ての参加者にとつて参加して良かったといつまでも心に残る思い出深い大会となるよう皆様の心強いお力添えを頂きますようお願い申し上げます。



二〇〇一

ねんりんピック

広島大会に参加して

監督 早川一也

昭和六十三年から始められた全国健康福祉祭愛称「ねんりんピック」が十四回を数えて、今年平成十三年度は広島県で開催されました。徳島県からも選手団百七十名余りが参加を致しました。

十月六日、徳島県庁大会議室に於て、結団式が行われた後、直ちにバス四台に分乗して広島に向かって出発し、夕刻には岩国市に到着し、有名な錦帯橋に間近な錦帯橋温泉ホテルに宿泊しました。

翌日七日は午前十時三十分から広島広域公園陸上競技場で総合開会式が行われ参加致しました。晴れ上がった秋空の下「あなたの笑顔に会い度いけん」と言う斬新なテーマを掲げての今年の広島大会は、実に世紀の幕開けにふさわしく、さわやかで、友情の心溢れる、祭典を思わせるものでした。

また式後のアトラクションのフィールド歌劇も華やかで、感動的であり、大会参加の喜びを深く感じた次第です。

ようやく八日からは、各地に分かれての種目別交歓試合が開始となり、剣道は、天下の景勝地として知られる安芸の宮島を指呼の間に見る対岸地、廿日市市のスポーツセンターで開催されました。参加チームは、全国都道府県、及び政令指定都市併せて五十八チームの多くを数えて、試合の方法は、例年の通り、全参加チームを三または四の組み分けとして、リーグ戦を行い、その組の一位チームが決勝トーナメントに進み勝敗を決する方式でした。又出場選手の参加資格は、年齢は六十歳以上で、段位は七段以下と定められており、出場者の殆どの方は、六・七段の方々でした。何れも長年に渉り剣道に精進し、腕を鍛えた所謂「腕に覚えあり」の面々で、高齢者の試合とはいえ、真に気迫に満ちた好試合ぶりは流石だとの感を深く致しました。

徳島県の対戦相手は、地元広島県Bチームと、岩手県のチームでした。メンバー表

から見る処では、両者共に徳島県勢とは、年齢に於て六歳の差のある若いチームでしたが、試合に臨んでは、年齢的にハンデには少しも怯むことなく、気力一敗に、全力を尽くして戦いました。然し結果は一敗一引き分けとなり、残念ながら決勝戦には進むことが出来ませんでした。

大会の最終結果は例年の記録では、大方は地元チームが優勝の例が多い様ですが、本年は、少し様子が違い優勝は福岡県チーム、準優勝は東京都、三位は広島県と云う成績であったと聞いております。改めて云うまでもありませんが「ねんりんピック」の大会は、本来高齢者の福祉と健康、そして生きがいを目指す祭典であって、交流試合においても、その勝敗や優劣を主眼とするものではなく、広く高齢者の参加と交流にこそ意義のあるもので此の点全国の多くの剣友との知己を得たことは、大きな収穫でした。

開催地にあつては、多くの市民のボランティアによって大会が、支えられていると聞かされましたが、その温かい歓迎や、も

てなしには本当に頭の下がる思いが致しました。いよいよ平成十五年度には、徳島県が、開催地となることが決定されており、此の事については今から十分に準備を進め、全国から参加される方々の心に残る大会となる様、念じながら報告と致します。

ねんりんピック出場選手



左から 上段 南・張西・有賀・福井
下段 早川・遠藤

平成十三年度 高齢剣友会事業報告

事務局 有賀 秀敏

高齢剣友会、発足から早や十六年が過ぎ、高齢化が進行していますが、会員数も八十余名となりました。お互いに健康で、親睦研修を目標に精進努力してまいりました。

本年度行事も、会員のご協力のもとに盛会、有意義に終了する事が出来ました。対外的にも、土佐生涯剣友会剣道交流大会、日本高齢者剣道大会、全国健康福祉祭、等に参加健闘して居ります。

以下、主な行事と結果を報告致します。

(一) 第十六回徳島県高齢者剣道大会

日時 平成十三年四月十四日(土)

場所 徳島中央武道館

全国老人福祉助成会、県剣道連盟の御支援のもとに行われ、福祉助成会から、木下昌己事務局長様、全国高齢剣友会小田部三郎先生、徳島剣道連盟副会長大澤孝彰先生のご出席を頂き、盛大に行われました。

開会式は、遠藤県剣道連盟会長、木下福祉助成会事務局長様より励ましのご祝辞を頂き、勝浦審判長の説示、選手を代表して福井軍二選手の力強い宣誓があり、演武に移る。

(1) 日本剣道形

打太刀 南 充美

仕太刀 糸田川美千男

(2) 居合

抜刀術神伝流 近藤 康次

(3) 試合

○団体戦

優勝 阿南支部B(福井・有賀・遠藤)

準優勝 海部支部

三位 小松島支部

○個人戦

優勝 準優勝 三位

特組 早川 一也 蝦名 久作 一村喜佐男

A組 高田 豊 糸谷 文雄 岡島 茂雄

B組 遠藤 一美 川井 豊吉 南 充美

C組 滝本 博文 張西 政晴 浅野 精一

試合終了後、土佐生涯剣友会との交流試合を開始。本年は、全国高齢剣友会は地元

行事と重なり、欠席となった。土佐生涯剣友会から公文会長外八名、愛媛より藤田、西山兩名の参加を頂き、試合、合同稽古、懇親会と交流を深める事が出来ました。

終了後、第十四回全国福祉祭（広島県）に、出場する代表選手の選考が行われた。

監督権選手に早川一也、遠藤一美、南充美、張西政晴、福井軍二、有賀秀敏。以上、六名の者が選出された。

(一) 土佐生涯剣友会剣道交流大会参加

日時 平成十三年五月十七日(木)

場所 高知県立武道館

土佐生涯剣友会との剣道交流大会も十三回目の参加で、本年も全国健康福祉祭出場チームを中心に八名が参加致しました。

高知シニアスポーツ交流大会の終了後、午後より土佐生涯剣友会と立合二分二人、試合四分二試合、合同稽古と、剣を交え、共に良い汗を流す事が出来ました。試合は二試合共に小差で土佐生涯に軍配が上がり、稽古差の違いを感じさせられた。特に大將戦、山崎（高知）対、村（徳島）両氏の米寿同志の試合は、元氣旺盛な現役ぶりを



稽古会 平成13年8月29日(水)
於・阿南市スポーツ総合センター



土佐生涯剣友交流大会 平成13年5月17日(木)
於・高知県立武道館

見せていただき試合を盛り上げて下さいました。

来年は稽古を積んで、共に、良い試合が出来るよう精進したいと思います。

(二) 第八回徳島県健康福祉祭剣道交流大会

日時 平成十三年十一月二十三日(祝)

場所 徳島中央武道館

午前九時より吉野川運動場で総合開会式が行われ、剣友会から、早川一也、南充美両名が代表して出席されました。

剣道交流大会は午前十時より開始され、本年は、他の行事と重なり、出席者もいつもより少なく、三十六名の中で行われた。

高下副会長の挨拶、遠藤県剣道連盟会長より「高齢化が進行し、超高齢社会へと急速に移行している中で、高齢期を健康で生きがいを持ち、できるだけ長く剣道を続けられるように」との励ましの言葉をいただきました。

勝浦審判長より試合上の注意があり、選手宣誓はC組代表の滝本博文選手が行い、演武に移りました。

(1) 日本剣道形

打太刀 西岡 侃

仕太刀 有賀 秀敏

(2) 居合

抜刀術神伝流 近藤 康次

(3) 試合

○団体戦

優勝 阿南支部B (有賀・西岡・遠藤)

準優勝 海部支部

三位 徳島支部、小松島支部

○個人戦

優勝 三 位

特組 蝦名久作 早川一也 一村喜佐男

岡島茂雄

A組 遠藤一美 南充美 糸谷文雄

糸田川美千男

B組 有賀秀敏 張西政晴 佐藤 勇

川井豊吉

C組 滝本博文 富士原秀清 浅野精一

以上結果報告致します。

(四) その他

平成十五年度には、第十六回全国健康福祉祭徳島大会(ネンリンピキク二〇〇三)が十月十八日(土)〜十月二十一日(火)の四日間

開催されます。剣道は、阿南市スポーツ総合センターに於いて行われます。大会にそなえて新年度より幅広い会員の参加のもとに、親睦と、稽古会を計画致しております。お互いに健康に留意し、都合をつけ積極的にご参加下さい。

大会所感

第三十回記念

県下少年剣道錬成大会

(モーターボート競走会主催)

鳴門支部 寺西ひとみ



昭和四十八年三月、鳴門市立工業高校で初めて行われたモーターボート競走会主催の少年剣

道錬成大会が、平成十三年度、三十回記念大会を迎え八月十二日盛大に開催されました。三十年といえど三昔と言えるほど長い年月です。その間、会場・時・参加学年などいろいろな変わり、また社会的背景にも様々な変動がありました。

しかしその中、競走会の会長様始めスタッ

フの皆様と、光武館の指導者や保護者会が心一つにして取り組んで来た成果がこの三十周年記念大会だと考えます。

また、猛暑の中の錬成大会でありながら、一人として怪我人も、救急車で運ばれる人もなく、県下各地から(十回大会からは近県も招待)毎年毎年この大会に集まって来てくださった少年剣士の皆さんがいたからこそ大会は成功したのだと思います。改め

て各道場の監督さん、保護者の方々、そして少年剣士の皆様にお礼を申し上げます。さて、今年は格別の猛暑でありましたから、三十年来の念願であった「涼しい所で試合をさせてあげたい」という希望を実現してみました。待望のクーラーを入れました!!

快適な環境で思う存分力を発揮して戴いた結果は次の通りです。

学年 順位	4年生	5年生	6年生
優勝	湯浅翔平 至誠館	福永啓人 相生龍虎館	村井至誠館
準優勝	西池直也 十河スポ少	山口拓也 鴨島少剣教	矢野敦士 十河スポ少
三位	桑原大樹 鴨島少剣教	庄地島康太 養武館	元木龍太 相生龍虎館
	桜木舞 坂野少剣ク	上田未来 加茂名少剣教	国方友美 十河スポ少
敢闘賞	松本真生 至誠館	小西衛 和田島少剣ク	三宅光司 十河スポ少
	鈴木智也 清風館	長谷啓太 白鳥スポ少	中山大地 鴨島少剣教
	樽井秀昇 光武館	桜木鉄也 坂野少剣ク	鈴木達也 清風館
	井手麻愉 栗林スポ少	塩田有衣 藍住スポ少	平野千尋 光武館

ここまで書いて来た時、悲しい知らせが電話でもたらされたのです。

三十年続いた剣道大会を主催者のやむをえぬ事情から、中止したいとの申し出でありました。驚きと寂しい思いが胸を掠めましたが諸般の情勢を考えたら仕方無い事と諦めざるを得ません。

「長い間ありがとうございます」と心からお礼を申し上げて了承いたしました。

真夏の一つの、背骨が真つすぐなるような緊張した行事が無くなってしまう。

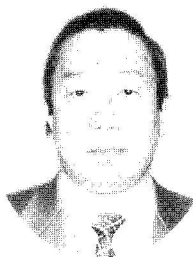
少年剣士の中にはこの大会を、練習の成果を活かせる場として、心待ちにしてください。真に残念ですが、そういう訳で平成十四年度の夏の大会はありませんので、お許しください。長い間ご協力戴きありがとうございます。

第三十回

社会人剣道大会を終えて

徳島県剣道速盟理事長

藤本辰夫



徳島県剣道連

盟三十年史をひもといてみますと、社会人剣道大会は昭和四十七年に第一回大会

が開催されて以来早くも三十回を数え、現在益々盛んになってきています。

そもそも本大会はかつて県下を南北に二分して勝敗を競う南北剣道大会を前身としているそうです。そして、その南北大会はいわば全日本東西対抗戦の県内版のようなもので、和気あいあいとしたなかにも節度のある意義深い大会でありました。しかし、

回を重ねるに従い南北の選手の片寄りや出場選手にも限りがあることから徐々に新鮮味が薄れてきたため、やがて社会人大会へ

と発展解消されたと思われまます。

社会人大会は副将四十歳以上、大将五十歳以上という年齢制限を定めることにより、あらゆる年齢層から幅広く選手が参加できるような工夫され、また、どのような団体、組織でもチーム編成が許されているオープンでたいへんユニークな性格をもつ大会です。開催日も一〇月中旬頃の日曜日となつてからは年々参加チームが増え、現在では四十チームを越え三コートを要する大会となっております。

このようにあらゆる職種から選手の剣歴にかかわらず自由に参加できるということもあって、往年の名選手の復活された姿が拝見できたり、高齢にもかかわらず大将の重責を担って果敢に戦っておられる先生方のお姿を拝見するにつけ、剣道のもつずばらしさを改めて実感できる大会です。

近年は、選手として参加される人数が増えたために相対的に審判員が不足して来ており、やむをえず多数の先生方に選手兼審判員として大会運営に力を貸して頂いていますが、これもまた社会人大会特有の風景

として慣例となりつつあり、厳しさの中にもなごやかさが感じられる、まさに本大会の主旨にふさわしい姿ではないかと思われるます。

さて、この社会人大会において今後検討すべき課題として二点挙げられます。その一点は、現在本大会は警察支部としての参加をご遠慮頂いています。それは、警察には特別練習生の制度があるために、半ばプロ化した選手でのチーム編成を認めるとあまりにも強力なチームができ、全体のバランスが崩れる恐れがあるという理由からでした。

しかし、大会本来の性格からすればあらゆる組織のチーム編成可ということですから、例えば一チームあたりの現役の特練生の数を制限するとか、何らかの方法により全体のバランスを崩さないで警察チームが参加できるように検討する必要があると思います。

もう一点は、高齢化社会を迎え剣道界においても剣道人の年齢層がずいぶん高齢化しており、従って選手の年齢制限について

もそろそろ見直す時期にきているのではないだろうかということですが。

最後になりましたが、この伝統ある社会人剣道大会が今後益々発展し、その本来の目的が達せられんことを切にご祈念申し上げます。

徳島眉山

ライオンズクラブ

少年剣道大会

会長 瀧川 正 敏



徳島県下に所在する小・中学生を対象とした団体及び個人選手権大会である『徳島眉山ライ

オンズクラブ杯』は昭和四十七年一月から発足したもので、以来今年で第三十一回を迎えることが出来ました。

本大会の主旨、きっかけとなったのはメンバー数人と、時の県警本部長らで食事と座談会の折、『青少年の健全な心身』が話題となり、これが本大会の始まりと聞いております。昭和四十七年といえは民主主義もやつと地に着き、経済の発展途上でしたが戦後の軍国主義排訴の名残で柔・剣道の組織には行政との関わりが普通であったとい

います。この為、剣道連盟会長・武市恭信（知事）、副会長・名賀石操（県教育長）、横山正夫（警察本部長）、武市一夫（徳島市長）、高島永吉（師範）、理事長・三木只雄の各氏という顔触れでした。

別紙の第一回から本年第三十一回までの受賞経歴『今までの輝かしい記録』をごらん頂ければお判りのように当初は小学校の一年生から六年生までの小学生を対象としたものが、昭和五十四年頃より低学年の生徒が著しく減った為、以降高学年のみで第二十九回（平成十一年）まで開催して参りました。

第三十回大会は当クラブ結成四十周年記念の年であったことから、大会を記念大会とすべく、この上に中学生を加えた大会としたものです。

そして本年、従来の小学生のみに限った大会実施を予定したところ、連盟並びにご父兄等の熱い要望もあって本年も再び昨年と同様の措置を取り、小・中学生の県下大会としたのであります。

この数年を振り返っての状況は、参加の

皆様もご承知のとおり、毎年出席者数は約一四〇〇名前後（父兄・審判・選手を含む）という盛会さを維持しております。そしてこの背景には剣道連盟の役員の方、審判の方、これを補佐してくれる手伝いの中学生等で、本当に感謝しているところでございます。

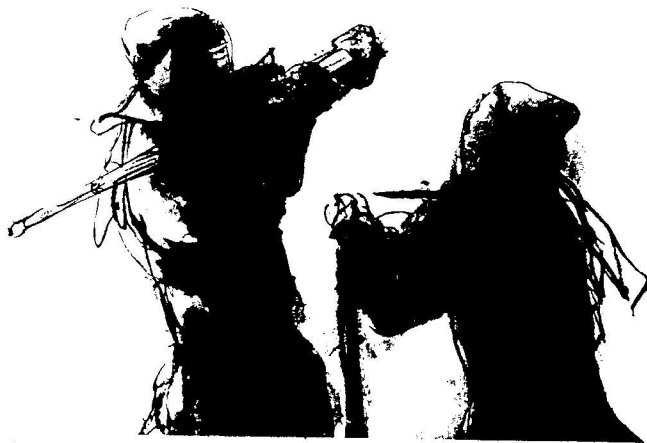
ライオンズクラブの大きな目的の一つは「地域社会に貢献すること」で、私どものクラブは「青少年の育成」と「健全な社会作り」に特に力を注いで参りました。今後ともこの大会が益々有意義なものとして、青少年の価値を少しでも向上できたら……とクラブ一同期待するところでございます。





いままでの輝かしい記録

	第1回 17.2.11	第2回 48.2.11	第3回 49.2.11	第4回 50.1.15	第5回 50.12.21	第6回 51.12.5	第7回 52.12.11	第8回 53.12.3	第9回 54.12.2	第10回 55.12.7	第11回 56.12.6
団体	竜虎館	木頭小学校	那賀川少年剣道教室	徳島練心館	鳴戸剣道クラブ少年部	那賀川少年剣道クラブ	徳島少年剣道教室	徳島練心館	高学年 徳島練心館 低学年 徳島練心館	高学年 那賀川少年剣道クラブ 低学年 徳島練心館	高学年 徳島練心館 低学年 徳島練心館
一 年 生	中村美仁 (鳴門)	咲川 孝 (池田)	岡野正史 (鳴門)	吉田茂生 (木頭)	米倉義徳 (阿波)	豊田佳男 (徳島練心)	岡山明博 (阿波)	武知 徹 (徳島練心)			
二 年 生	大西仁史 (竜虎)	岡野隆史 (鳴門)	咲川 孝 (池田)	岡野正史 (鳴門)	吉田茂生 (木頭)	和田 毅 (池田)	豊田佳男 (徳島練心)	角尾和人 (育英)			
三 年 生	本村賢二 (誠武)	榎本貴司 (徳島)	岡野隆史 (鳴門)	咲川 孝 (池田)	岡野正史 (鳴門)	吉田茂生 (木頭)	米倉義徳 (阿波)	林 美枝 (木頭)			
四 年 生	原 博幸 (練心)	田村義弘 (和田島)	平野誠司 (鳴門)	中村美仁 (鳴門)	中井英樹 (鳴門)	栗飯原泰宣 (徳島練心)	吉田茂生 (木頭)	米倉義徳 (阿波)	坂東幹也 (阿南)		
五 年 生	大西敏和 (竜虎)	西岡 寛 (練武)	井内和雄 (久武)	平野誠司 (鳴門)	中村美仁 (鳴門)	山口耕司 (那賀川)	松岡恭平 (木頭)	藤田敦良 (徳島練心)	千葉哲也 (鳴門)	豊田佳男 (徳島練心)	遠藤利生 (徳島練心)
六 年 生	中田 貢 (竜虎)	大沢俊文 (練心)	原 博幸 (練心)	新見徹朗 (誠武)	岡内隆樹 (木頭)	益井賢治 (鳴門)	川崎佳宏 (徳島)	栗飯原泰宣 (徳島練心)	豊田浩史 (徳島練心)	山川健二 (竜虎)	石田康博 (徳島練心)



	第12回 57.12.12	第13回 58.12.11	第14回 59.12.9	第15回 60.12.15	第16回 61.10.10	第17回 62.11.3	第18回 63.11.3	第19回 1.11.3
団 体	高学年 宮浜少年 剣道教室 低学年 木頭錬心館	高学年 木頭錬心館 低学年 鳴島少年 剣道教室	高学年 阿南少年 剣道教室 低学年 阿南少年 剣道教室	高学年 木頭錬心館 低学年 鳴島少年 剣道教室	高学年 徳島錬心館 低学年 那賀川少年 剣道クラブ	高学年 大野小学校 剣道部 低学年 阿南少年 剣道教室	高学年 阿南少年 剣道教室 低学年 阿南少年 剣道教室	高学年 大野小学校 剣道部 低学年 延野小学校 剣道教室
五 年	佐野 隆 紀 (那賀川)		中野 成 浩 (木頭錬心)	菅我部有司 明門寺・ 光武館	船越 龍 平 高野少年 剣道教室	野田 圭 介 (大野小)	敷田 美 紀 (那賀川)	日和田 崇 (山川)
六 年	北村 仁 志 (鴨島)		櫻木 敏 男 (徳島錬心)	浅野 晃 子 明門寺・ 光武館	元 木 宣 敏 (徳島錬心)	河内 幸 志 徳島剣道 クラブ	吉田 大 聡 (山口)	原 義 之 (延野)

	第20回 2.11.3	第21回 3.10.10	第22回 4.10.10	第23回 5.10.10	第24回 6.9.23	第25回 7.10.10	第26回 8.11.4	第27回 9.10.10	第28回 10.10.11	第29回 11.10.11
団 体	高学年 阿南少年 剣道教室 低学年 大野小学校 剣道部	高学年 阿南少年 剣道教室 低学年 鳴門市 光武館	高学年 大野小学校 剣道部 低学年 大野小学校 剣道部	高学年 大野小学校 剣道部 低学年 徳島至誠館	高学年 大野小学校 剣道部 低学年 徳島至誠館	高学年 華電館 低学年 至誠館	高学年 徳島至誠館 低学年 小松島 少剣	高学年 桑野川少剣 低学年 入田錬成会	高学年 鳴門市 光武館 低学年 鳴島少年 剣道教室	高学年 徳島至誠館 低学年 徳島至誠館
五 年	男子 福島 聡 仁 高野少年 剣道教室	男子 上 達 也 阿南少年 剣道教室	男子 源 征 治 阿南少年 剣道教室	男子 山 形 (平岐)	男子 渡 広 大 大野小	男子 武 田 元 樹 (大野小)	男子 村 雄 廉 (阿南少剣)	男子 川 田 雄 大 (光武館)	男子 水 源 潤 (大野)	男子 奥 馬 恵 太
女 子	福水 美 恵 子 (竜虎館)	女子 遠 藤 律 子 (大野小学校)	女子 坂 本 美 香 延野少年 剣道教室	女子 元 酒 さ お り (延野)	女子 壺 不 美 紀 (延野少剣)	女子 中山 雀 美 子 (至誠館)	女子 住 友 香 織 (練武館)	女子 磯 田 沙 希 (阿南少剣)	女子 星 和 生 (大野)	女子 服部 暁 日 香
六 年	男子 川 貴 司 阿南剣道 クラブ	男子 義 大 延野少年 剣道	男子 田 院 阿南少年 剣道教室	男子 田 衛 平 (光武館)	男子 山下 大 輔 (大野小)	男子 住 友 直 城 (練武館少剣)	男子 大 森 勝 善 (光武館)	男子 原 大 和 (至誠館)	男子 石 洋 史 (桑野川)	男子 長 裕 樹
女 子	尾 沙 海 阿南少年 剣道教室	女子 福 本 恵 子 (延野少年 剣道)	女子 尾 谷 海 阿南少年 剣道教室	女子 西 谷 絵 里 (桑野川)	女子 河 田 美 沙 (至誠館)	女子 岸 葉 子 (徳島錬心館)	女子 森 島 葉 香 莉 (阿南少剣)	女子 紅 森 明 香 (阿南少年 剣道)	女子 西 見 綾 阿南少年 高野教室	女子 村 瀬 聡 美

団体の部

第30回 (平成12年10月9日)

区 分	優 勝	準 優 勝	第 三 位
高 学 年	徳 島 至 誠 館	鴨 島 少 年 剣 道 教 室	那 賀 川 少 年 剣 道 ク ラ ブ 那 賀 川 B & G 剣 道 教 室
低 学 年	鴨 島 少 年 剣 道 教 室	小 松 島 少 剣 ク ラ ブ	徳 島 至 誠 館 入 田 錬 成 館
中 学 校 (男 子)	羽 ノ 浦 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校	徳 島 文 理 中 学 校 坂 野 中 学 校
中 学 校 (女 子)	阿 南 第 一 中 学 校	入 田 中 学 校	新 野 中 学 校 鴨 島 第 一 中 学 校

個人の部

区 分	優 勝	準 優 勝	第 三 位	第 三 位	
高 学 年	男 子	玉 田 越 大 (至 誠 館)	山 本 義 征 (光 武 館)	山 田 久 志 (桑 野 川)	神 元 育 己 (錬 武 館)
	女 子	福 永 悦 子 (童 虎 館)	星 野 知 世 (那 賀 川 B & G)	石 井 や よ い (小 松 島)	大 城 由 香 里 (日 和 佐)
低 学 年	男 子	松 本 凜 太 郎 (和 田 島)	湯 浅 翔 平 (至 誠 館)	小 西 貴 大 (那 賀 川 B & G)	庄 地 島 康 太 (養 武 館)
	女 子	永 浦 瞳 (阿 南)	壺 内 美 沙 希 (那 賀 川)	寺 西 珠 里 (光 武 館)	山 村 由 梨 (北 島)
中 学 校	男 子	大 石 洋 史 (阿 南 第 一 中)	川 口 了 貢 (相 生 中)	三 木 良 平 (鴨 島 第 一 中)	白 木 健 一 郎 (石 井 中)
	女 子	近 藤 三 菜 子 (鴨 島 第 一)	石 井 由 美 (入 山 中)	福 永 菜 月 (市 場 中)	磯 田 沙 希 (新 野 中)

団体の部

第31回 (平成13年10月8日)

区 分	優 勝	準 優 勝	第 三 位
高 学 年	徳 島 至 誠 館	相 生 小 龍 虎 館	小 松 島 少 剣 ク ラ ブ 入 田 錬 成 会
低 学 年	徳 島 至 誠 館	鳴 門 市 光 武 館	鴨 島 少 年 剣 道 教 室 上 八 万 剣 道 俱 楽 部
中 学 校 (男 子)	羽 ノ 浦 中 学 校	加 茂 名 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校 阿 南 中 学 校
中 学 校 (女 子)	阿 南 第 一 中 学 校	那 賀 川 中 学 校	石 井 中 学 校 相 生 中 学 校

個人の部

区 分	優 勝	準 優 勝	第 三 位	第 三 位	
高 学 年	男 子	鎌 田 憲 資	山 本 敬 太	鈴 木 紀 博	岩 佐 勇 希
	女 子	中 野 由 貴	平 野 千 尋	横 山 依 利 加	曾 根 恵
低 学 年	男 子	湯 浅 翔 平	曾 我 部 航	藤 本 稜	矢 野 優 貴
	女 子	櫻 木 舞	西 山 史 織	白 石 け い 子	山 本 菜 々 恵
中 学 校	男 子	坂 東 潤	石 井 孝 二	山 本 義 征	湯 浅 貴 浩
	女 子	河 田 紋	樫 本 彩 里	井 口 あ す か	村 瀬 聡 美

随想

国体の思い出(続)

副会長 大沢 孝 彰

五、剣道と酒



剣道家と云えば酒豪だと決めてつけている人が多いが決してそうではありません。「鬼の中倉」と

云われた故範士九段中倉先生は一滴も召し上がらなかったそうです。その他たくさん有名な先生にも下戸の方々が居られます。

ではなぜ剣道家は酒豪だと云われたか考えてみますと確かにその通りの酒豪の先生方もたくさん居られました。そして大変目立つ存在だったのだと思います。又中倉先生始め下戸の先生方も酒席には必ず参加さ

れ、上手に御交際されて場を保たれたと聞いて居ります。一般の方から見られると自分が飲まないのに何で馬鹿な交際をしているのかと思われるかも知れませんが、きびしい稽古の後、一杯を酌み交わし、剣道談義で打ち解けるのはごく自然の成り行きなのです。こんな情景を外から見ると剣道家は皆酒豪に見えるのだと思います。

私の亡父は全く酒が不得手で、私も体質的には下戸だと思えます。云いわけになるかも知れませんが、先輩の先生方から酒も飲めんようでは剣道は強くなると云われ剣道の稽古と同じくらい、酒の稽古も致しました。そして酒飲み仲間になりましたが、やはり余り強い方でなく酒に呑まれ、随分と先生や先輩の方々に迷惑をお掛けしました。故下村先生は「大沢、酒は何んぼ飲んでも旨いのう」といつもにこにこして飲んで居られ酔われるのですが、酒に呑まれる事はありませんでした。又、大変失礼ですが、堀江先生はいくらお酌しても、もういいと言われる事は無く、杯を重ねられるのもう酔われて居られると思うのです

が、平常と変わらず淡々とされ、平静さを失わず、にこやかに飲んで居られました。このお二人の先生に剣道の御指導は勿論、酒の飲み方のお手本もお示し頂きました。

試合の前に酒を飲むのは酒の効用からすれば、適度の酒は体が休まり、心がリラックスするなど色々あります。従って、個人の適量は明日の試合のエネルギーになるのです。故に酒の魔力についつい量を過ごして、悪い方向に流れないようにしたいものです。国体の試合でも、前夜に稽古の後、さあ頑張ろうと乾杯することはほんとうにチーム全員の団結と活力を与えるものです。面白くなくていや好きで酒を飲むのも無いと云う事でしょうか。

六、徳島国体が最後

平成五年に徳島で国体剣道が開催される事になり、徳島県剣道連盟一丸となってこれに立ち向かう事になりました。しかも、私は成年の部、大将で出場するよう指名されました。大将の年齢は五十五歳以上です。戦後剣道を始めた方々が、この年齢に達しているので五十五歳近くの年齢の選手が主

私の剣道

徳島支部

田村清憲

力になるはずで。私は当時六十三歳、おそらく全国でも最年長の方であつたらうと思ひます。八歳以上の年齢差がある若い選手に勝つ事が出来るだろうか。迷いもありましたが、剣道は年齢差ではない、充分練習して体調を整えれば勝負にはなると確信しました。

又、不謹慎な事かも知れませんが、妻を平成三年末になくし、心の拠り所を失い、暗中摸索していた時でしたので、国体の大将にかけよう、そうすれば不安も淋しさも消えてしまうのでは無いかとも思ひ、決心し、大将を引き受けたのでした。結果は、

張り切りすぎて私自身十二分の働きは出来ませんでした。掘江会長先生を中心としての徳島県剣道連盟全員の精励努力に神様が助けて下さり、総合優勝を果たす事が出来ました。この時点で私の国体は終わったのだ、これからは若い人の時代だと勝手に結論づけました。

ところが、平成十二年富山国体に監督として参加すると云う事で前にも書きましたとおり、一度も監督として参加してな

かつたのでお引き受けしました。そして監督の目で国体を充分観察し楽しませて頂きました。しかし今後はやはり監督は若い人で、剣道指導は勿論、選手のお世話等充分出来る人を選んで頂きたいと思つて居ります。また、私も徳島県剣道連盟の一員として県選手が活躍出来るようあらゆる意味での応援をしなければいけないと思つて居ります。それが国体に数十回も参加させて頂いた恩返しだとも思つて居ります。これらの徳島県剣道国体選手の活躍と栄光を祈念して数回に亘つて書かせて頂いた国体に関する雑文を終わりとします。

私は昭和一桁の生れ、国民学校一年生で太平洋戦争、五年生で終戦を迎えました。

剣道とは無縁の少年時代でしたが、松茂町史によると剣道は盛んな村でした。父の転勤で住吉村に転居しました。その後、徳島市内の高校に入学し、徳島市役所の議事堂で稽古をしていると話にきき、隣の旧住吉村長宅に、保管していた旧青年学校の剣道具を借り、稽古にでる準備をしている内に卒業してしまいました。

東邦レーヨンに入社後、市役所の稽古に参加させていただきました。当時の先生は、近江勇、中野清、下山信義、大沼繁太郎、浜口市郎、上原徳平、重岡正、近江嘉平らの先生方がおいでいらつしやいました。又、先輩に小西政一（当時は材木商でした）がおられ、稽古をつけていただきました。やがて、勤務が三交代制になり、稽古は遠のき、転居。同じ会社の岡田周さんに誘わ

れ、山川町の明王院の境内の庭で稽古。当時は、井上健二、明諦賢、森本康平、三木薫、三木利夫、岡田周らの先生方と、現麻植支部長・植田一夫「旧姓佐藤」さんも時々見えていました。

昭和二十九年に一級合格より、昭和三十年に初段をいただくまで剣道は休み、後で悔いの残ることになりますが、その時は知るよしもありませんでした。

昭和四十一年に会社退職。父の会社に入社すると時間があがり、旧武道館の徳島支部の稽古会に参加させてもらいました。又、昼間に時間ができると徳島県警の特錬の稽古に強引に割り込んでいく程剣道好きになっていきました。堀江先生はじめ先輩は何も云わずご指導下さいました。又堀江先生より早朝稽古の話を知ると、これにも割り込むなど「強引な押しかけ弟子」となりまして。朝稽古の時、先生と二人だけの時もあり、その時は、先生自ら打込み切返しの手本を見せて下さいました。八段受験を控えた一番だいじな時期に私との稽古に時間をとって下さいました。おかげで、私は夢に

も思わなかった七段位をいただきました。

又現在も私達のために羊人(めいじん)会と云われる会を作って指導を受けております。会員は堀江幸雄先生、高田豊先生、松村克隆先生、佐藤勇先生、田村清憲です。また、昨年亡くなられた柏原浩先生も参加されていました。

いつも先生よりは、島田虎之助の

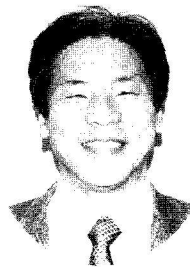
「剣は心なり 心正しからざれば 剣また正しからず 剣を学ばんと欲すれば 必ず心より学ぶべし」との教訓を受けております。

私はよい師、良い先輩に恵まれて剣道が出来る事を誇りに思っております。

打たずして 相手を退げる

徳島北高校教諭

西谷肇一



私が剣道を始めたのは小学校五年の時である。当時近所で実の兄のように慕っていた四歳年上

の川上弘成さんが剣道で活躍をしていたこともあって興味を持った。また、近くに山家雪齋先生(故人剣道範士七段)の振武館道場があつて、両親共に強く入門を進めてくれた事から始まった。振武館では週二、三回の稽古や土曜稽古・寒稽古があつたが、切り返しや打ち込み、地稽古中心でただ何となく道場へ通う時が多かつたが、打たれたら悔しく打ち返すという中で少しずつ打つことの喜びを感じて行った。

しかし、中学に入学時は特に剣道をしよ

うと思うのではなく、もともと相撲が強く腕力には自信があり、むしろ柔道部があれば入部したいと思つたぐらいであつた。だが、柔道部はなく剣道部に入部した。その時、恩師の山家先生から入部祝いに竹刀を一振り頂いた。その竹刀は通常の中学生の竹刀より倍位の重さがあつた。そしてそれが当たり前だと思つて練習に使つたことが後に私の剣道に大きく影響したように思う。竹刀が壊れて新しい竹刀を購入する段になつて始めてその重さに気がついた。そのときには通常の竹刀は軽く素早く振れる力が付いていた。その後、他の人より重い竹刀を使用するようになった。

さて、中学二年の振武館での夏の合宿のことである。当時富岡西高校教諭の松本一城先生（故人剣道範士七段）が見えておられて始めて稽古をお願いした時のことである。竹刀を振るスピードには少し自信があり思い切つて先生に懸かつて行つたのであるが、先生はびくりともせず技が全然通用せず何か大きな山にぶつかつて跳ね返されている感じで自分の非力さを痛感させられた。この感覚は、後に私が大学受験に愛媛県の新田高校に行つた時の実技試験で作道圭二先生（故人剣道範士八段・銃剣道範士九段）に稽古をお願いした時も同じであつた。

また、富岡西高校に入学し、松本先生に稽古をつけて頂く中で最初はそれ程感じていなかったが、稽古の回を重ねるに従つて自分がいつの間にか打つて行きながらも後ろへ後ろへと退げられているのがついた。また、打突部位を打つてはいるが打つたような気がしない。生徒同士と試合や稽古をするとな簡単に前に攻めることができるし、打つた手応えも感じたが、この違いは一体何かなあと思いつつ分からないまま大学へ進むことになった。当時大学は全国優勝も果たしたり、学生で全日本選手権者を排出したりする環境であり、四〇〇人の部員が居て練習量や稽古相手も豊富であつた。その中で稽古をして、自分なりに充実した気持ちで夏休みには母校に帰り、松本先生に稽古をお願いした。一年の夏は面は当たるけども先生は動じない。反対に打たされている感じがであつた。

剣道・出会い・家族

板野西支部 森本敦子



私が再び竹刀を握り始めて、数年の時間が流れました。

学校を出て、子供が剣道を習い始めるまで十余年のブランクがあり、長女が小学二年、長男が小学一年になった年に剣道を始めると同時に再開しました。現在、長女は中学生になると竹刀を置きましたが（またいつか竹刀を握ってくれればと願いつつ）、中学一年の長男、小学二年の次男と剣道を楽しんでいます。子供たちが、剣道をするといってくれなければ、再開することはな

かっただろうと思います。再び、剣道をするところがあるとはそれまで考えてもみなかつたからです。

そのきっかけを作ってくれたのは主人でした。子供たちが小学生になって何かをさせたい、と思った時に、「剣道がいい」といつてくれたのです。私は思いもよりませんでした。日常的に剣道の話などした事がなかったからです。

そして、道場を子供たちと見学させてもらった時、私の胸の奥で熱い躍るものがありました。それ以来、現在に至っています。

その後はたくさんの方との出会いがありました。

子供たちが入部した吉野少剣の故三木先生、岡島先生、そして板野西支部の高田豊先生、高田亮先生、支部の先生方には、当初から親子ともどもご指導いただいております。本当に感謝しております。まだ徳島県の剣道事情の解らない私を導いて下さいました。各大会に出れるようになってから、たくさんの方からご指導いただけるようになりました。堀江先生、遠藤先生、坂下先

生、中尾先生、近藤先生、監督をしていただいた木原先生、手塚先生、平野先生、その他たくさんの方の先生方に警察学校での強化訓練等、本当に大変なご指導をいただきました。そのご指導とご支援をいただいたにも拘わらず、先生方の期待を裏切る結果になった事もありました。

警察学校での強化訓練、そして各地遠征といういろいろありましたが、主婦としては厳しい日程、訓練、稽古ではありますが、その時々の方々の先生方と、剣道仲間との楽しい出会いと思えば私の生涯の宝物です。

また長男が五、六年と少年強化訓練に参加し、私も手伝いさせていただきました。堀金先生、松村先生、多くの先生方に教えをいただき、メンバーとして京都の大会に連れて行ってもらえたのも、長男にはいい思い出となりました。

高校、大学、ブランクを経て剣道を再開した一時期、期待に応えたいと、良い成績を残すために剣道をしていた時期がありました。

現在、私は吉野少剣の教室長、吉野中学の外部指導者として、多くの子供達と接しています。子どもたちには、試合は勝負だから、負けるより勝つ方がいい。負ければ嫌になるし、勝てればうれしい。でも勝負よりも、(試合内容はもちろんですが)大会にでる。いろんな稽古会があれば参加する。後々になれば、試合の勝負より、試合、稽古会、遠征、合宿などに参加した事や、その時々に出会った人たちの事の方が楽しい。良い思い出になるという事を言っています。機会があればいろんな先生方に教えていただく。そしてたくさんさんの剣道友だちを作る。子どもたちにはこれからの人生において、よい財産になると思います。

私も再開してから、たくさんの方々知り合うことができました。女子部長の手塚先生、竹内先生、少年強化で有松先生、事務局の長谷川先生、そして同じ主婦であり、三人の子どもの母でありながら、いつも前向きに頑張っていて、主婦として、親として、剣道家としてその姿にいつも教えられる平野悦子先生、そして全国家庭婦人大会に

緒に参加した仲間の皆さん、支部の松田先生、河野先生、まだまだ書ききれません。

いまの自分があるのは、家族、剣道仲間のおかげであり、県剣道連盟の先生方にご指導いただけるおかげであります。本当に心から感謝いたしております。ありがとうございます。今後とも益々厳しいご指導をいただけます。今後とも益々厳しいご指導をいただけるよう頑張ります。よろしくお願ひ致します。



ドイツ訪問記

鳴門教育大学大学院

三 牧

岳



大学剣道部のコンパの席で木原先生からの「ドイツに行くか?」という言葉が、

今回のスタート

でした。酔った勢いで「行きます、行きます。」と返事をしました。後日話しを聞くと、鳴門市の亀井俊明市長が、ドイツに訪問された際に、バイネという都市にもいかれ、その新聞記事を見たバイネ市在住のノバトさんが、剣道でも交流ができないだろうかと思いつかれたことから始まりました。私が知っている三つのドイツ語(グーテンターグ、グーテンモルゲン、イツヒリーベディツヒ)を武器に行くことになりました。ただ、出発前には、アメリカの同時多発テロがあり、不安を抱えながら村上君(鳴教

大一年」と出発しました。以下日記をまとめました。

(九月二十二日)

ドイツのハノーバー空港へ到着し、いよいよノバートファミリーとの対面です。どんな人だろうという期待と不安でいっぱいでした。到着ロビーで荷物待っていると窓越しに『真剣道』と書かれた青い面タオル掲げた男性(ノバートさん)と剣道衣姿の女の子一人(マリヤさん)ステイブンさんの三人を発見し、その姿に思わず後ずさりしてしまいました。その後、ノバートさんの運転で家まで行くのですが、距離で言えば恐らく徳島から愛媛の川之江ぐらいでしょうか。その距離を約一時間で行くという未知なるスピード(時速200km以上)を体験しながら家に到着しました。到着すると食事を用意してくださっていて、現地時間二十四時(日本時間朝七時)ビールで乾杯! 真つ先に胃からの違和感がこみ上げてきました。その後、英語でなんとか会話をしているのですが、冗談なのか本気なのか明日の朝は六時から稽古と言われ(次の日に冗

談と判明)、早速だなと覚悟して寝ました。

(九月二十四日)

朝六時(日本時間二十三時)起床で、ステイブンさんの勤めている養護学校に行き、一緒に授業に参加しました。自己紹介の後に様々な質問を受けました。たくさんの質問を受けたのですが、中でも「アメリカの同時多発テロについてどう思うか?」「テロリストについてどう思うか?」「日本は、どのような対応をするのか?」などを聞かれました。世界情勢への関心の大きさに大きな衝撃を受けました。そして、漢字というものに珍しいらしく、ノートに名前を書いてくれとクラス全員から頼まれ、生まれて始めて人にサインをしました。

夜は、久明館道場ブラウンシュバイクに行き稽古しました。稽古の前には、必ず剣道形を三十分ぐらい行い、それから準備運動、素振り、基本練習、懸かり稽古、稽古と続きました。この道場では、ドイツ代表選手も多くいるためレベルは高かったです。準備体操では、日本語の掛け声で「一、二、三……」としていたのにも驚きました。

(九月二十五日)

ガスレー剣道クラブに稽古に行きました。ここでも稽古の前に剣道形を一時間ぐらいやっていました。ここは、空手と剣道と柔道がひとつの道場を使っており、剣道の前は空手が稽古していました。ここでは二十人ぐらいで稽古しました。みんな体も大きく、力も強く、圧倒されそうになりました。

(九月二十六日)

今日は、バイネ市長を表敬訪問する日でした。バイネ市長舎に行き、日独協会ブラウンシュバイクのパロークさんと共に市長室にいきました。残念ながら市長の急用のため、通商誘致委員のアクスマンさんがバイネ市のこと日本とのつながり等についてお話していただきました。また、バイネ市のアルバムをいただき、貴重な体験をすることができました。

(九月二十七日)

今日は、ステイブンさんの学校で剣道を披露することとなりました。二日前に、学校の子供達から、剣道を見てみたいというリクエストがあり、急遽決定しました。

日本剣道形を始めに行い、素振りから基本、稽古と一通りを見せました。その後、子供達から実際に剣道をしてみたいというリクエストがあり、子供達を受けました。剣道衣や剣道具に凄く興味があつたみたいで写真と一緒にとりました。夜は、ノバートさんが主宰している誠剣塾で稽古でした。まだ、できて六ヶ月ということで、防具をつけている人いませんでした。ノバートさんの掛け声は、ドイツ語なのですが、すべての指示の最後は「気合」という言葉で締めくくられていました。(切り返し、気合)となく、気合という言葉だけが残っています。

結局ドイツで五回稽古しました。中でも久明館道場ブウンシュバイクでは、デイドさん(ヨーロッパ最初の六段、ヨーロッパ女子チャンピオン)ノバートさん(ドイツ代表選手)は、次の世界選手権を目指しているようで、充実した稽古ができました。今回僕達二人を受け入れてくださったノバートさんは、交通事故で足を手術して左脚が右足より短くなってしまい、靴をはいての



ノバートファミリーと共に
左から筆者、村上嘉浩、ステイーブンさん、ノバートさん、マリヤさん

剣道をされていました。また、道場まで遠く、一時間以上かけて通う人もおり、剣道に対する強いエネルギーを感じ、感慨無量でした。また、日本からきて、剣道をしているというだけで「ビール飲みに行こう。」「今日、泊まりにこないか。」などと誘っていただき、とても親切にしてもらい、剣道が続けていてよかった、たくさんの人との出会いや優しさに幸せな思いでいっぱいでした。

片言の英語でしたが、様々な話をしました。ドイツでは、武道の中でも空手や柔道が人気だそうです。剣道は、防具が高いためになかなか人気が高まらないそうです。そして、剣道人口が少ない分を道場間での交流を密にして補おうとしているそうです。

行く前には、様々な不安がありました。特に言葉のことは大きかったです。ドイツ語は、無理にしても英語ならと思っていたのですが、英語の電子辞書を持って単語を入力しても通じないことが多々ありました。今回は、ドイツ以外にもオランダ、フランス、スイスを鉄道で回りました。そ

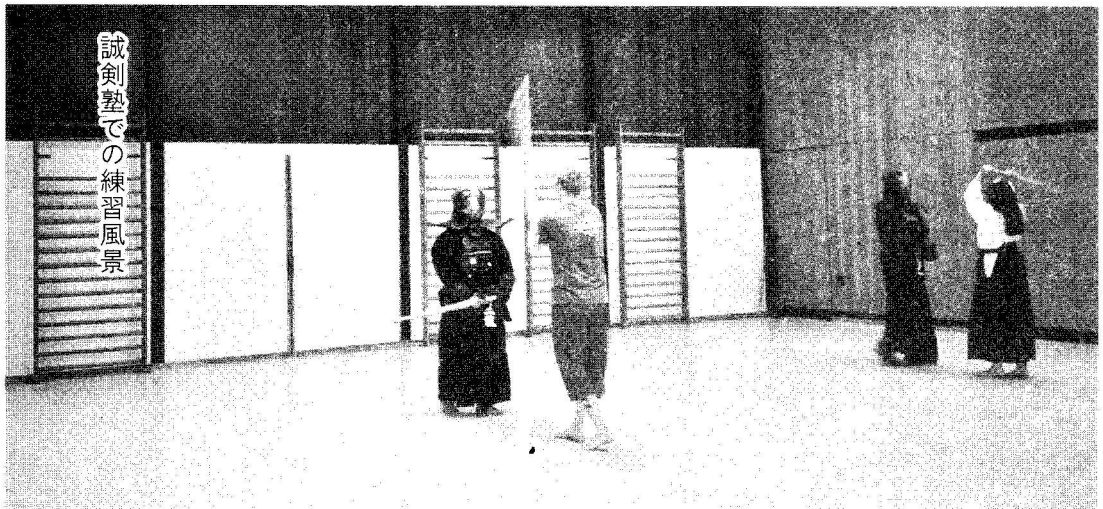
して、日本人であるからこそ日本のことをもっともっと知らなければならぬということ強く思いました。外国に行こうとすると外国のことを知ろうとしてしまうのですが、いつてみると日本の歴史や伝統等についてたくさんのことを聞かれました。また、ヨーロッパでは、武道というものに高い関心があるということもわかりました。ドイツの列車の中に竹刀を置き忘れるなど様々なミスもおかしましたが、かけがえない二十一日となりました。そして、このような機会を与えてくださった、鳴門市役所の中村誠司様、日独協会のバローク輝子様、ノバートファミリーの皆さん、木原資裕先生、多額の費用を支援してくれた両親に深く感謝し、御礼申し上げます。

ノバートさんから今後も剣道の交流を続けて行きたいので日本の皆さんに今回のことを伝えて下さいといわれました。是非、興味がある方はドイツに防具と共にいかれてみてはどうでしょうか。僕は、お別れの時に、次は新婚旅行でドイツに防具をもつていくと約束をしましたので、いつになる



ノバートさんとの稽古

かわかりませんが、それまで、しっかり稽古を積んでいきたいと思えます。



誠剣塾での練習風景

称号・段位合格者

七段に合格して

徳島支部 玉田 晋作



平成十三年五月三日、京都審査会におきまして、剣道七段に昇段することができました。ここに謹んでご報告申し上げます。

私の剣道人生は、故郷阿南の先生方に剣道の手ほどきを受けたことから始まり、今年で二十七年になります。高校時代の恩師 沢井勝之先生には剣道の専門家への道を聞いていただき、大学時代の先生方には剣道の厳しさを教えていただきました。大学を

卒業して徳島に帰ってからは東四国国体の

強化で堀江先生をはじめ剣道連盟の先生方のご指導のお陰で、国体優勝という貴重な経験をすることができました。そして、東四国国体が終わって八年が経ちました。今までのように与えられる稽古ではなく、自ら求め、研究する稽古になりましたが、剣道連盟の稽古会、至誠館での稽古、そして

教え子達との指導稽古と、幸いにも稽古相手に不足することはなく、数えきれない方々と剣を交えてきました。今こうして二十七年間を振り返ってみると、私はとても恵まれた環境の中で育てられました。多くの先生方、剣友の方々のご指導がなければ、ここまで来ることにはなかったと思います。

今までご指導いただいた皆様方に紙面をお借りして深く感謝申し上げますとともに、この感謝の気持ちを忘れることなく、より一層精進を重ねたいと思いますので、変わらぬご指導をお願い申し上げます。今後は、教員という立場から、剣道を通じて立派な青少年を一人でも多く育てる事がご恩返しであり、私に与えられた使命であると改め

てお誓い申し上げます。

さて、私のつたない文章ではありますが、近い将来六段、七段を受験しようとする若い方々を対象に、私が昇段審査を受けるにあたり、プラスになったことなど、次の三点を付け加えたいと思います。参考にしていただければ幸いです。

一、審査前の稽古

審査の数ヶ月前、剣道連盟の稽古会で大澤先生より、審査はしつかりと打ちきることが大切である、と指導をいただいた。それからは面を打ちきることだけを考えて稽古をした。相手の背中まで打ちきるには、足を使って打間に入り、その勢いで打つしかないと考えた。その際、上下動をできるだけ少なくするために、スムーズなすり足で打間に入る練習を繰り返した。また、竹刀の振りは、小さければ相手に押さえられてしまうので、左手を使った大きな振りでも、相手の頭上を捉えられるよう練習した。

二、審査当日の朝

審査ではいかに体を動かすことができるかが大きな課題である。当日は早く起床し、

三十分程かけてジョギングと入念なストレッチをして会場に入った。会場はまだ人気も少なく、私は一番乗りで審査場に降りて、素振りや打ち込みなどして充分に体を動かした。これは場慣れするという点で、とても良かったと思っている。

三、実技審査について

審査が始まり、私の頭の中にあつた事は、「たとえ出頭を乗られようが、突っ張られようが、練習してきた、足を使って打間に入り、その勢いで相手の面を打ちきる」この一点である。さいわいにも、対戦した二人とも練習してきた通りの面を決めることができた。もし、出頭面を乗られて不合格になったとしても、この面を打っていけばいつかは相手に恵まれて合格するときに来るのではないかというのが、実技審査直後の感想である。

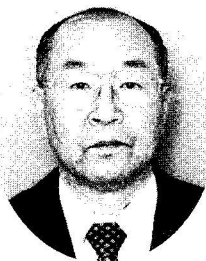
以上、ご報告致します。

剣道七段

審査合格の道程

板野西支部

岡 島 茂 雄



『この道より我を生かす道なし、この道を歩く』と云う武者小路實篤の格言があります。ひと度、人生の目標を決めた以上は、なり振りかまわず只管・日々階段を登る如く歩き続ける事が大切と自らに言いきかせて今日まで審査に臨んで参りました。

省みますと、平成四年十一月二十九日に名古屋市で六段を取得してより規定の六年間を何時しか過ごして来ました。その間、堀江範士を始め吉田租先生等のご指導を受け姫路・高知・東大阪に遠征に参加させていただきました。又、地元の吉野少年剣道教室の練習日に参加し、修練を続け今日に至っております。

平成十年十一月二十五日の日本武道館を皮切りに京都・福岡市等で、審査の回を重ねて参りました。今回は平成十三年五月三日の京都市立体育館での七度目の受験を致しました。対抗相手は、神戸市千代が丘在住の中尾正一先生等で幸い温厚な正剣の人に出逢う事が出来ました。

前年、福岡市での審査では、緊張の余り、最初の礼が十分できず、審査員より注意を受け、礼をやり直させられました。つまづいた気持ちで十分な試合運びが出来なかった苦い体験をしました。ですから、今回は着装や礼儀で減点されることが無いようにと心配りをしました。とにかく、全力を集中して当たろうと心積もりをして、立合い前の待機中に何時も自ら深呼吸をして、気持ちを落ち着けました。

私は二十年程前から修養団体であり宗教法人「成長の家」徳島県教区に所属している為、其の基本理念のうちにある「心を静めて平和ならしめる秘訣は、只ありがとうと総てのことに感謝するにあり」と称えながら、平常心で臨めるよう、緊張感をほぐ

すことに気を注ぎ、逸る気持ちを押さえていました。その際、徳島県剣道連盟女子部長の手塚先生が、私の着衣を見て、面紐をきつちり締め、励ましの声をかけてくれました。

『前後裁断・今に新生せよ』、と言う戒めがあります。前後の事象を切り捨て現在の呼吸の一刹那の今に集中して、立合いに臨みたいと思いました。しかし、審査後、反省してみますと、私は手の内の効いた冴えた打突の記憶が全くなく、ただ、正面撃に意識を集中して大振りの打ちをした時、右小手を痛い程打たれた事が鮮明に残っているだけでした。以前、先生から集中して一生懸命に試合をすると後でどのように打突したのか思い出せない事があると聞かされたことがあります、もしかして、私もそのような立合いをしたのかもしれない貴重な体験となりました。

後で、形を相手の中尾先生と立ち会った際、当人より、「あなたは私に面をうまく打たれた」と実感をもって話してくれました。私の面打ちが中尾先生の面を捉えて、打突

をしていた事を、確認する事が出来た訳であります。

今日まで、審査毎に懺悔の繰り返しをして参りましたが、今回は誠に人に語り伝えるような、優れた合格体験とは言えません。が、只集中して懸命に審査に当たったと言う、道程の体験に過ぎない試練でありました。私の剣道修行の道程を省みてみますと、これも又、他人に披露できる程の修行歴ではありませんが、少年時代の十六歳の頃、兵庫県明石市の石油店に勤めていた当時、同町内の町道場へ入門し、夜間、剣道を習い始めました。その後、大阪市内へ転職し、天王寺体育館や明星高等学校の部活で剣道をしました。昭和十八年八月一日に佐世保海兵団に入営し、整備兵として鹿児島県鹿屋市・千葉県館山市の航空教育分隊に在団しました。

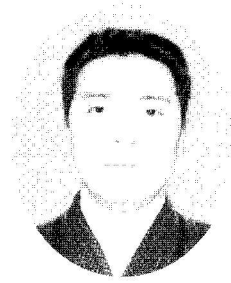
終戦後は昭和二十年八月二十五日に徳島県警察官を拝命し、鳴門・阿南・池田・川島署に勤務し、主として生活安全課の勤務が多く、勤労青少年の剣道大会の運営に参加し、不連続ながら剣道を続けて参りました。

た。

昭和五十三年頃から、地元の吉野少年剣道教室の指導に参加しました。昭和五十四年四月一日の退職後は行政書士業の傍ら剣道連盟板野西支部の支部長を二期勤める等し、現在は顧問として剣道の後継者育成に努め今日に到っております。「好きこそもの上手なれ」と言われますが、私は健康の許す限り、剣の道に奉仕する心構えで、恰も階段を踏みしめ上る如く、只管日々精進したいと自問自答する次第であります。

七段に合格して

河南支部 白木 崇



平成十三年八月、福岡にて七段の審査に合格することが出来ました。この場をお借りしまし

て、ご指導してくださった先生方に心よりお礼申し上げます。

初めて七段の審査を受けたのが五月の京都でしたが、見事、不合格。審査と言うよりは、試合の感じで、打ち焦り、空回りしたまま終わったような気がします。次回は一年ほど稽古をし直してから受けようと思っ

ていました。その後の稽古で多くの先生方から、今の気持ちで薄れないうちに受けるよう勧められ、三ヶ月後の福岡でもう一度みていただこうと稽古を続けました。しかし、打った打たれたから気持ちが離れないままの稽古が続き、調子は悪くなる一方

でした。そんなとき、先輩からのアドバイ

ス、その時の剣道を変えるきっかけとなりました。

一つは、試合などで覚えたごまかしの打ちを捨てること。もう一つは、心を崩さない入りを心がけることでした。相手への恐怖心を早打ちする事でごまかし、強引さと攻めとを混同していた自分の姿を素直に理解することができました。

しかし、審査まで後二ヶ月。課題を多く持ちすぎると心と体のバランスがとれなくなり、かえって動けなくなると思い、自分の得意技を中心に、心を崩さず、打つていくことと応じ返すことが一つとなるよう心がけました。その結果、焦ることなく自然体で相手と向き合うことができたと思えます。今回、反省し気付いたことは多くありますが、これまで恩師に教えていただいたことばかりで、「継続」という言葉の真の意味を、怠慢という心の弱さによって失っていたことに気付かされた昇段でした。

これからも、謙虚にそして地道に努力をかさね、より深い道へと精進して参ります

ので、今後ともご指導のほどよろしくお願

いいたします。

これからが正念場

徳島支部 手塚 十三子



『始め』 残

暑の熱気と両者の緊張感をさらに昇華させるかのような落ち着いた着

きのある太い声

が、審査の開始を告げる。場内のざわめきを一瞬に静止させ、大勢の目をコートの中

心へと釘付けにする。その声をゆっくりと吸い込むように蹲踞から徐々に立ち上がる

受審者。やがて、「機は將に熟した」と言わ

んばかりに、身体全体が大きな一つの塊と

なって、小手から面に食い込むように豪快

な二段打ちが繰り出された。そのスピード

と突き刺さった剣先の威力は、張りつめた

会場の空気に乗って、固唾を飲んで見守る私の脳天を直撃する。まるで審査員でも務めるかのように、「よおし」「うーん」と唸り声をあげる自分がコートの傍に立つ。(それにしても開始早々から実力を見せつけてくれる人もいるものだ)そう感じた瞬間、今日の目標が定まる。(今更ジタバタしたところでもどうにもなるものか、審査は常の稽古の発表会、あれだけ見事に打込まれたら悔いはない。今日は堂々とあの面をいただいて帰ろう)それほど瞬時に心の整理をさせてくれた見応えのある一本であった。

審査前夜のこと。ふだんの稽古を中心として、第三者には「執念」とまで呼ばしめ、通い続けた十年間の審査日誌を懐かしく振り返る。その間に先生方からご指導をいただいたずっしりと重く、奥深いお教えのお言葉の数々。何物にも代え難い私の宝物であり、心の財産である。読み進めると、あれもこれも随所で納得。しかし、現在の私には停滞どころか、閉塞した内容ばかりであった。良いわけどころか言い訳の多い事。(やっばりなあ、何事も全ては素直さから

始まるということだ。明日への展望など望めるはずもない。つまるところ、剣道は人格の為せる技。まだまだ未熟……)その話に集約される思いで、溜息まじりに狭い部屋天井に目をやる。再び、得意とする十年計画で挑戦する覚悟と、三百六十度の感謝。明日への全てを託して握りしめた竹刀とともに、神妙な反省も束の間、小さな身体は思い切りベッドの中で大の字を描いていたに違いない。

「見事に打たれる覚悟」と打突前の自分の責任を果たすための、「必ず一度攻め入ってから」という二つの戒めを胸に刻んだ二度の立ち合いは、その内容のほとんどを記憶していない。

思えば私は、六・七段の受審において、幸運にもお二人の剣道の神様と巡り会う機会を頂戴した。身に付いた多くの癖を取り除き、改善する事を示唆し、今日まで稽古を継続させてくださった六段の神様。そして審査会場から突然のように追いつき放すことよって、今後如何に剣道と向かい合っていくか、その道を自分で探求せよ

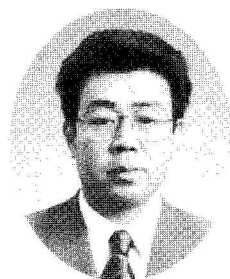
と、さらに大きな課題を与えてくださった七段の神様。今日まで、「忍」の一字の連続であった神様と、今後の精進を期待して「格段の見込み点」を授けてくださった懐の広いお二人の神様に、ただただ感謝申し上げねばならない。

解っているつもり、できているつもり、「つもり稽古」に明け暮れ、自身の実体はもとより、剣道の本質と真摯に向かう姿勢に欠けていた六段受審。お二人の相手に恵まれ引き立てていただいた結果、偶然にいただいた七段受審。幸運な昇段を自分の実力と勘違いすることなく、「ほんまもん」探しの旅をこれからも懸命に続けたい。

剣道七段に合格して

三好支部

増田和広



拝啓 徳島県
剣道連盟の皆様
方には、ますます
ご清祥のこと
とお慶び申し上
げます。

このたび、八月二十六日に九州福岡市民
体育館において七段審査を受験し、合格す
ることができました。日頃からお世話になっ
ている徳島県剣道連盟の先生方のお陰と深
く感謝申し上げます。今回の審査は、夏休
みも残り少なくなり家族サービスもかねて
家内、子供達を同行しての審査会となりま
した。しかしながらその事が幸をそうした
のか自分でも不思議なほど平常心が保たれ
たように思いました。立合いは、すばらし
い先生方でありました。私のグループ四人
中三人が、合格という結果となり対戦相手
に恵まれ、実力以上のものを引き出して

ただいたと思います。

私は、二十年ほど前、徳島市内で会社勤
めをして市内に在住していたことがありま
す。仕事に行き詰まり苦悩していた時期で
もありましたが、ある時、知り合いの勧め
で大沢孝彰先生の徳島錬心館に入門させて
頂きました。当時、錬心館には故柏原浩先
生、故小川本書先生、馬場力先生、西岡金
若先生、森川澄先生、岡崎明先生と多くの
先生方がおいでになり、ご指導いただきま
した。後にも先にもこんなに剣道をする喜
びを感じた時期はありませんでした。無心
で打ち込み汗を流していますと今まで悩ん
でいた事が、嘘のように消えていました。
自分にとって改めて剣道の必要性を認識し
た、人生で大変重要な時期でした。大沢先
生を始め錬心館の諸先生方には深く感謝し
たしております。

その後、三好町に帰郷し、会社を興し、
七年ほど自分自身の剣道の練習をする事が
難しくなりましたが、平成六年ごろから時
間の余裕もできてまいりましたので、剣道
の練習も指導しております。現在は、三好

町剣道クラブ、池田高校剣道部で練習をさ
せていただいています。

今回の審査にあたり徳島県剣道連盟の諸
先生方ならびに三好支部の高橋和宗支部長、
諸先生方、並びに今回格別ご指導賜った藤
川和秋先生にはこの場をお借りして厚く御
礼申し上げます。

これからは三好支部の剣道発展のために
日々精進し少しでもお役に立てるよう努力
してまいりたいと思っております。

連盟より原稿提出を依頼された矢先に柏
原先生の訃報を聞き大変驚きました。目標
とする先生だっただけに悲しみに耐えませ
ん。心よりご冥福をお祈り致します。最後
になりましたが、徳島の剣道界が益々ご発
展する事を心よりお祈りいたします。

稽古続けて運を待つ

徳島支部

糸田川 美千男



原常雄先生が八十八歳になられ、後継者が
ないので、やむなくの閉館でした。

私は六段受審準備の時から現在まで、錬
心館で大沢孝彰先生と馬場力先生のお世話
になっていきます。又鳴門支部の木原資裕先
生の御指導もいただきました。合格出来て、
今思うことは、

一、先生の言を素直に受け止めて稽古した
こと

二、真面目に稽古しながら運の来るのを待つ
たこと

平成十三年十一月十一日、名古屋で剣道
七段に合格しました。これも偏にご指導下
さった先生、剣友皆様のお陰と感謝してい
ます。この場をおかりして厚くお礼を申し
上げます。

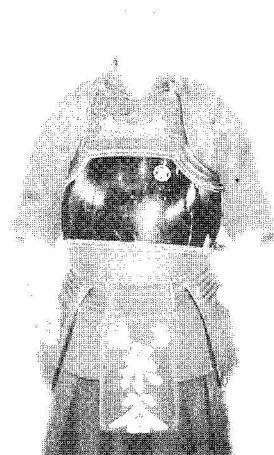
私は、国鉄を定年退職してからの剣道で
ありましたので、竹原常雄先生には言葉で
表現できない程お世話になりました。一級
合格は、昭和五十七年四月二十九日で五十
六歳の時、初段は同年九月五日で五十七歳
の時でした。親道館の閉館までずっとご指
導いただきましたが、その時の状況は、竹

徳島の剣道

七段への道のり

坂野西支部

糸谷 文雄



昭和十八年、陸軍砲兵隊に現役入隊した
際、小隊長が剣道三段の陸軍少尉でした。

初年兵の前で「この中で、剣道を習った者
はいるか。いれば、手を上げよ。」と言われ
たが、だれも手を上げる者はありませんで
した。すると、隊長は一番前列にいた私と
さらに四名を指名し、「明日より、毎晩、点
呼後、剣道をするために集合のこと。これ
は命令である。」と言渡されました。これが、
私が剣道を始めたきっかけでした。当時の
剣道の厳しさを知る人は、今はもう少なく
なっていますが、それは、厳しい稽古でし

た。

戦後復員して、家業の農業で忙しい毎日でしたので、剣道のことは忘れておりました。剣道は、私の古い軍隊での記憶のページにわずかに残っている程度でした。

昭和四十八年、近所におられた高等学校の先生でもあった出口嘉年先生が「健康のために、竹刀を振りましょう。」と勧めたため、剣道を思い出し、練習を始めました。二十八年ぶりに竹刀を握りました。

昭和五十一年に初段合格。二、三、四、五段と進み、平成六年には六段に合格することができ、稽古が面白く、楽しくてたまりませんでした。

平成七年十月、農作業中、ちよつとした私の不注意で、稲刈りのバインダーに左手を挟まれ、左手首切断という大事故を起こしてしまいました。もう二度と竹刀を握れないのかと思うと、他のことより、このことが一番つらく、精神的に苦しい日々が続きました。そんな折、入院していた中央病院へ高田豊先生が見舞いにかけて下さりました。その時、厚かましくも、最後の思い出



に年輪ピック宮崎大会に出場したいと申し出ました。高田先生は、いろいろ先生方にお願ひしてみましようとおっしゃって下さり、お陰で、宮崎大会への出場がかないました。選手の先生方には、足手まといになりましたが、思い出の多い宮崎大会となりました。もうこれで、剣道に未練はないと自分に言い聞かせました。

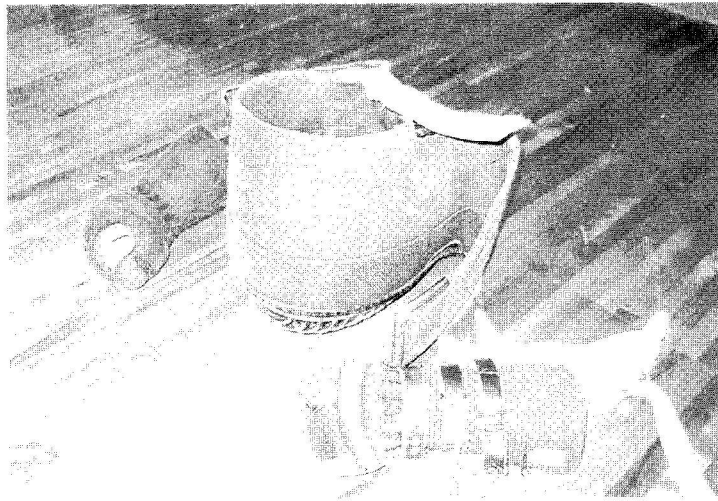
手首の傷もようやく癒え、片手で不自由ながら、農作業もできる状態になりました。しかし、いつも何かさびしい日々が続き、いつの間にか、竹刀の手入れをしたり、防具を袋から出したり、入れたりすることが多くなりました。もう一度、竹刀が握れたらと思うようになり、左手に竹刀をくくりつけ、一人で素振りをするようになりました。剣道をやめられない自分を見つけました。そんなに上手になることや強くなる剣道ではなく、健康のため、また、楽しく、面白い剣道をしようと思ひ立ち、それから、毎日のようにあちらこちらの道場を訪ねる日々が続きました。

平成十二年県下高齢者大会A組で優勝、

翌年は準優勝をすることが出来ました。また、平成十三年十一月二十七日の東京武道館での七段審査において、合格、我が目を疑う気持ちで、何度も、自分の受験番号を見直しました。「お前の剣道は、上手でもなく、強くない。ただ、障害を乗り越え、ただ一生懸命稽古したことが認められ、七段を許されたのだ。」と思います。

前土成町長の尾形先生が、私の為に記念手ぬぐいにと書いて下さった言葉は『只管稽古』でした。尾形先生はご自分も半身不随で筆が持てないのにもかかわらず、私の為に、手に筆をくくりつけて、一生懸命稽古して書いてきたと、涙が出るような書を下さいました。体が不自由でも一生懸命努力すれば、やがて実ることができると知らされ、七十半ば過ぎの努力することのありがたさを実感できました。

いろいろと御指導、御鞭撻していただいた先生方に心より、御礼申し上げますと思います。ほんとうに有り難うございました。



片手で装着できる工夫

六段に合格して

小松島支部 藤本 敏治



平成十三年五月二日、京都審査において、幸運にも六段に昇段することができました。今日

までご指導頂いた、諸先生、緒先輩の皆様方に心からお礼申し上げます。

私は、平成十三年八月、海上自衛隊を定年退職しましたが、私が剣道を始めたのも海上自衛隊に入隊してからでした。初段は、青森県で二十一歳の時でした。二段、三段は千葉県、四段は徳島県、五段は昭和六十二年二月神奈川県でした。当時からというか、これまで六段という段位は雲の上の段位という存在で、格別昇段へのこだわりはありませんでしたが、十年來の剣友でもある同じ職場の、羽ノ浦剣道教室、平正明先生から、お声をかけて頂き、昨年そして今

年と昇段審査の機会を設けて下さいました。また幸いにも、妻も剣道に対する理解があり（高校生の時は、インターハイに出場）早朝にもかかわらず徳島駅まで車で送ってくれたり、審査にはいつも気持ち良く送り出してくれました。

審査の直前まで緊張して硬くなっていました。廊下で息を止めて素振りや、突きの練習をしたり、ストレッチングをしたり、ウォータークーラーの冷水を顔にひたしたり……

一日の立会い、躊躇して立ち会った時、何故か便さが消え、適度な緊張感が残り、「氣」は充実していましたが冷静でした。相手の動きが良く見え、身体も自然と動いていました。

審査の後はこれ以上の剣道は今の自分にはできないという充実感と満足感を感じていました。相手にも恵まれたのでしよう我が身の未熟さを思うと幸運としか言いようがありません。

私は勤務先が海上自衛隊ということもあり転勤が多く、徳島剣道連盟にはあまり貢

献していません。せいぜい我が子と一緒に通った論田剣道教室で子供達と一緒に練習をしたこと、一般としては小松島支部、小松島航空隊チームの一員として、県下社会人大会に何度か出場させて頂いた位です。しかし、今後は徳島に腰を落着け微力ではありますがありますが、徳島の剣道のお役にたてればと思っています。

不器用な剣道しか出来ない私ですが、「基本を大切に」「継続は力なり」を念頭に一歩一歩、努力精進して行きたいと心に誓っています。

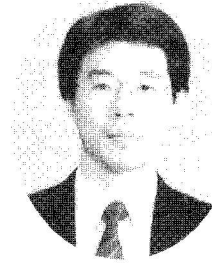
今後共、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



六段に合格して

海部支部

佐藤 和久



五月十三日の
名古屋審査にお
きまして、なん
とか六段に合格
する事ができま
した。

六段への道のりは、私にとつて、ある意味で、腰痛との闘いであつたといつてもよかつたかもしれません。腰部の激痛に襲われたのは五年前のことでした。それまでギツクリ腰は何度となく経験していたのですが、そのときは、いくら経つても改善の兆候がありませんでした。思い立って、大阪のある整形で診断を受けたところ、腰椎椎間板ヘルニアであるとの事。早速、PLDD(レーザーの手術)を受けたのですが、大して変化はなし。一時は職をやめることさえ真剣に考えました。もちろん、剣道は全くできませんでした。じつとしていても仕方が無

いので、東京、大阪などの有名な整形、整
体などをまわつてあらゆる治療を試みまし
た。それでも、目立った回復はありません
でしたが、時が経つにつれ、ほんのわずか
ずつ回復の兆しが見えてきました。剣道の
方も、少年剣道教室の方へ見学に行くこと
ができるようになり、激痛発症から二年ぐ
らいしてからやっと子供達との稽古もでき
るようになりました。

そのころから六段を一回受けたらもう剣
道にも未練は無いと思うようになり、受審
する決意をしました。無理がきかない分、
見取り稽古などにも心がけ、一年ぐらい経
過後、福岡において何とか初めての審査
を受けることができました。その時の状況
ですが、攻める事だけ心がけたところ、不
思議と何本か有効打突らしきものを打つこ
とができました。ひよつとして受かつたの
では、という期待も裏腹に、見事不合格と
いう結果をいただき、肩を落として帰つて
きました。

その後、再び欲が出て、二回目に挑戦し
たのはその年の名古屋会場でした。前回の

失敗の原因も省みないまま、そのうちいけ
るだろうぐらいのつもりで受けました。結
果はまたしても不合格。結果をしらせてく
れるハガキの判定は一番悪い判定でした。
これではいけないと、対策を立てました。「合
格に近づく道、それは、審査員(八段の先
生方)の視点を読むことである。」という結
論に至つた私は、審査員の先生方がどのよ
うな視点で審査されているのかを知るため、
審査のビデオを見たり、「八段の修行」(ス
キージャーナル)という本を購入し、くり
かえし読んでみたりしました。私にとつて、
「八段の修行」は大変参考になることがいっ
ぱい詰まっていました。受審されるは一読
の価値はあると思います。

第三回目の受審は再び名古屋でした。審
査の番がまわつてくるまでサブ道場で何人
かの方と稽古をしました。そして本番。一
人目と二人目どちらも確実に打突したとい
う記憶はありません。でも、あえて他の人
と違つていたところをあげれば、振りが大
きかつた事、足幅が広くなかつた事、左ひ
ぎの裏が伸びていた事、などでしょうか。

相手の竹刀が中心をつけてきてもそれに負けない大きな振りが相手の面をとらえていました。これらのポイントは「八段の修行」の中にかかれていた事ばかりです。実技が終わり何かすがすがしい気分でした。落ちてもかまわない。それは、大きく振りかぶっても相手に負けない打ちをしようという自分のこれからの剣道の道標が見つかった思いがしたからです。

結果発表を見に行つたとき信じられない思いがしました。自分の番号があつたので、腰痛でもう剣道ができないと考えていたときからすると、本当に剣道が続けていて良かったという思いがしました。

腰痛については、その後、TMS理論に出会い、激痛の恐怖から解放されました。興味のある方は「腰痛は怒りである」(長谷川淳史著 春秋社)をごらんください。

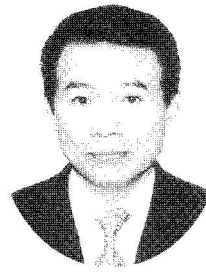
最後になりましたが、ここまでやってこれたのは、剣道教室の子供達がいて稽古の励みになったからであり、そして、海部支部の先生方の温かいご指導ご支援があったからだろうと思います。本当にありがとうございます。

ございました。紙面を借りてお礼申し上げます。



立派な先生と 良き仲間にも恵まれて

板野東支部 原 田 進



年齢も五十半ばになり、体力も減退し仕事の多忙さにかこつけて練習量も減り自分の健康管

理と称して楽な練習を続けてきました。

しかし、一緒に剣道が続けている仲間は、剣道に対する姿勢は常に真剣で、子供の指導にあたって「自分を磨いてこそ指導ができる」とする強い信念に感動し、また人生は常に目標をもって努力することが大切であると田村清憲先生の助言により、今回の六段受験に至りました。

今年に入ってから五月の名古屋審査を目標に体力づくりと基本に重点をおいた練習を始めました。

体力づくりは、毎朝2kgの鉄パイプで素

振り五十、百回。基本練習は田村清憲先生に指導をお願いし、竹刀の構え方、手の内、特に面打ちの要領などに重点を置きました。田村先生の指導は、私の高校時代の恩師である範士八段堀江幸夫先生の教をそのまま私に伝えてくれました。

田村先生から教わった内容を武田修典君をはじめ板野東支部の仲間にお願ひして、切り返し、面打ち、合ひ面打ち、小手面のみの基本練習に徹しました。これは打突の好機を捕らえた早い面打ち、力強い面打ち、美しい面打ちだけに目標を絞ったためです。支部で練習した成果を試す場として県庁剣道部の皆さんに大変お世話になりました。ここでは、県武道館で副館長をされている松村克隆先生や時折指導にこられる県剣道連盟会長遠藤一美先生の指導を仰ぐことができ、私にとつて立派な先生方とよい剣道仲間に恵まれたと感謝しています。

審査にあたっては、名古屋の会場まで昨年六段に合格し審査を十分熟知している米田利彦君に同行して頂き、審査の前日には審査会場の下見と審査方法など詳しく説明

を受け、当日迷わないように、またあからないうようにとありがたい指導を受けました。審査当日は、九時前に会場に到着し、午

前の部の受付から審査までの状況を見学しました。午前十一時に稽古着に着替え一階の道場で米田君を相手に基本練習、その後審査に来ている二名の方に練習をお願いして会場での感覚を養いました。

私は三コートの五組目のBです。頭の中では前四組の審査を参考に、出る順番を間違わないように、落ち着いて相手を攻め、先に打つ。打突は五本以内と考え、審査に望みましたが結果は散々でした。

米田君によると、「一人目は十一本、二人目は五本打った。四人の中では比較的良かったが、一人目の時は打ち過ぎである。前後の組とも関係するから微妙なところ」と言う評価でした。平常心を忘れ無我夢中で相手を追いつめ面だけを打ったことしか記憶になく、我ながら情けなく思いました。

終わった後は、観覧席に戻り次回に備えて各コートの審査状況を見学していると、各コートでは、安定感を持ち、攻め、気迫

の充実したすばらしい受験生が沢山おり、私など審査を受ける資格がないとさえ感じただけです。

合格発表では偶然にも私の受験番号が記載されていましたが、本当に自分であるか自信がなく米田君に確認をお願いしたぐら

いです。一度の審査で合格させて頂きましたことは、ご指導下さった先生方、そして練習の相手を快く引き受けて下さった板野東支部の皆様方、また審査に名古屋まで随行して頂いた米田君のおかげです。心からお礼を申し上げ、これを機に更に研鑽を重ねて行きたいと考えています。

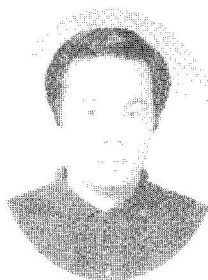
最後に十二月八日逝去されました元県剣道連盟理事長柏原浩先生には高校剣道部の先輩として特にご指導を頂いたことにお礼申し上げます。

ありがとうございます。

剣道と私

美馬東支部

中川 正



平成十三年八月二十六日、福岡市立体育館で行われた六段審査において合格することができ

ました。これも、細川昭典先生、柴田宗忠先生、他諸先生方の御指導の賜物と、心から御礼申し上げます。

私が剣道を始めたのは高校の時で、当時先生は鈴木清先生でした。今でも鋭く面を打つ若武者のお姿が目につかびます。あのお姿は私の剣道の基本となっております。卒業の時のお言葉は「剣道を一生続ける事」でした。にもかかわらず私はそれ以後十八年の空白をつくりました。空白の間は、剣道の稽古の準備をしているだけで稽古が出来る夢を、幾度見たかわかりません。心の呵責が働いたのでしょうか。稽古をして

いる時は、その様な夢は見ません。その後、五段を戴いてからも二年程稽古を休みました。その時もまた夢を見ました。なんということでしょう。私は剣道をしなくてはならない運命なのでしょう。夢の中で剣道をしたくても出来ない自分を見ることの辛さ切なさと思えば、元気で剣道が出来て、夜もぐっすり眠れる今が一番幸せなのでしょう。私はそんなに剣道は上手ではありません。不器用で運動神経が鈍くて、先生方から幾度同じことを言われてもなかなか出来ません。でも諦めず我慢強く素直に先生方のお教えを守り、そして楽しく剣道が出来たように思います。

福岡の受験は二回目でした。前回は暑くて帰りは履き物を見失い福岡剣連のスリッパをお借りして新幹線に乗りました。また今回は、出発早々財布を忘れ列車に乗り込み、つくづく福岡の印象が悪かったのですが、これもみんな自分のせい、誰もうらむことも出来ないことです。今までの四回の受験は自分なりに納得がいく動きが出来ていませんでした。今回は、本当に普段の稽



鈴木清先生を囲んで

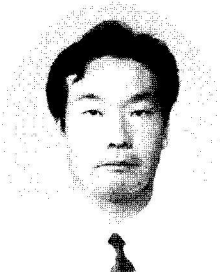
古のように動くことが出来たように思います。ですから、終わった後も悔いが残りませんでした。さばさばした気持ちで結果を待つておりました。でも、発表の時、自分の番号を見た時、自然に拳に力が入りました。本当に嬉しくていっぺんに福岡が好きになりました。

今、六段を戴いて前に増して自分の弱さ、至らなさに自分自身歯がゆくなる思いです。もつともつと稽古をして六段位に恥じないものを身につけなくてはいけないと思っております。今後とも徳島剣連の先生方には、何卒宜しく御指導のほどお願い申し上げます。

剣道六段に合格して

新世紀に挑戦

徳島支部 森岡利彰



平成十三年十一月十日名古屋審査会において、幸運にも六段位に合格することができました。

これまでにご指導とご助言を賜わった皆様
に心よりお礼を申し上げます。

私が六段を意識して稽古を始めようと思ったのは、審査資格がえられた平成二年五月頃だったと思います。当時は県立武道館で稽古をさせて頂き、審査に行かれる人も多く、私も受審をすすめられました。先生方や剣友の皆様とさらにしつかり稽古をして自信がついたら同行させて頂こうと思っていました。

しかしその年の十一月、稽古中に左足アキレス腱断裂という思いがけないけがをし

てしまいました。その後、けがは治り稽古を再開しましたが、無意識に左足をかばうようになり、思うように動けなくなりしました。仕事も忙しくなり、子供も三人と家族も増え、稽古は途切れがちで、ついに剣道から離れてしまいました。新聞などで剣道の写真や記事が目につくと思いつくこともありましたが、今の生活では、自分剣道を再開することは考えられず、もう剣道をすることはないかもしれないと思っていました。

平成十一年十月仕事の部所が変わり、以前より面識のありました矢武先生と仕事上であう機会が多くなりました。それからまもなく仕事で同行して頂いた時「剣道を一緒にやらないか」と誘って頂きました。矢武先生は火曜日と金曜日に親道館で小学生を教えており、その後八時三十分頃から大人の方が稽古をしているようでした。道場は会社の近くでもあり、金曜日だけならなんとか稽古ができるし、少しは運動をしたほうが良いと思いい剣道を再開することになりました。

それから一年半位たった頃「十一月の六段名古屋審査会に行こうか」と矢武先生に突然誘われました。驚きもしましたが、すっかり忘れていた審査。剣道を再開した私にとってはせっかくの機会であり、新世紀の始まりに六段昇段と大きな目標に挑戦するにはもってこいの時と思い、一緒に同行させて頂くことにしました。

審査が近づくにつれ、昇段を意識しての稽古となると「二足一刀の間合からの打突」、「正しい姿勢で打て」、「打ちすぎてはだめ」と実技審査の鉄則が頭の中で一杯になり、思うように技が出なく、いつもの互角稽古と違い単調な技での攻防となり、有効な打突は望めなく、ただこれは四段や五段の審査前にも感じたことで、相手も同じ考えだからしようがないと思ってみたものの、六段審査はこれでいいのか、何をどう打てばいいのかと迷ってしまいました。

審査まで後二カ月となった頃、竹原先生が、月刊全剣連「剣窓」を二冊持ってこれ「審査に参考になるから読みなさい」と、矢武先生と私に一冊づつ渡して下さいまし

た。その中に六段審査会寸評という欄があり、読んでいくと「手の内と冴え、切っ先の速さと打ち切る打突が重要で、近間から直線的な技での打ち込みの傾向が多く、これではためである……」また、「攻め合いに勝つて後の打突を重視、打突に至るまでの攻めと攻め返しが重要」「今までに身に付けた技を出していく」と、書かれていました。審査員の先生方の考えていることが初めてわかり、そしてこれはすべて試合で一本を取る秘訣をいつている様にも感じ、同時に、審査について大きく勘違いをしていたことに気がつきました。「試合のつもりで臨めばいいのだ」と、大変気持が楽になりました。

審査当日は全国審査という初めてみる光景で少々緊張はしましたが、グループの後の方であつた為、ゆっくり受審者を観察することができ、審査員の先生方がどの様に技を見られているかを確認することができました。お陰で審査は気分的にも余裕を持つて臨むことができたと思います。

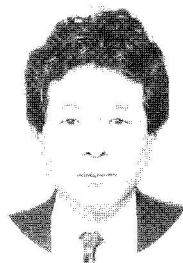
今回幸運なことに六段に昇段できましたのは、悔いが残らないようにと稽古日以外

の土曜日まで道場を使用させて頂いたり、剣道形また稽古にと、熱心にご指導を頂いた竹原館長先生、剣道再開、稽古、審査への道をつけて頂けた矢武先生のおかげと感謝しています。

そして、今まで多くの皆様に頂いたご恩を、今後少しでもお返しできればと思っております。

六段審査を受けて

親道館 矢武秀生



平成十三年十

一月二度日の挑戦。名古屋審査におきまして合格させて戴きました。名古屋商

科大学当時に剣道を始めました私にとり、様変わりしたといっても名古屋は第二の故郷でもあり、受審は名古屋でと以前から決めていました。同行したのは同じ親道館に通う森岡氏。翌日は、同じ道場の糸田川先生の七段審査も控えていました。

二度目の受審を決意した頃はいつだったか、あまり覚えていませんが、道場の鏡の前で木刀と竹刀の素振りに時間をかけました。構えから大きく踏み進め、額に左拳をつけるようにし、「一拍子に打つ」。手の内についても竹原実太郎館長先生に御指導を仰ぎました。日数が経過するにつれ、館長

先生も本腰を入れて下さるようになり、私の悪い癖なども容赦なくご指摘頂きました。お陰様で納得出来る構えからの打ち込みが次第と出来る自分を感じるようになりました。

森岡氏との稽古は、主に勝負稽古に主眼を置き、攻め、気迫からの初太刀を心がけ、出頭の小手を意識しつつ、充分踏み込んだの面を打ち切る。このことは、悪い癖であった打突後の体のねじれもなくすことにもつながったと思います。

審査当日のことは良く記憶しています。待ち時間の間、審査員の気持ちで受審者の構え、気迫、打突、技の切れなど、自分に置き換えて観察するゆとりもありました。ただ、森岡氏の相手の竹刀を制しての見事な面が決まり合格が確定したことは、えらくプレッシャーとなりました。

一人目の立会い、不思議と冷静になり、出頭の小手を狙う自分を感じました。充分踏み込んで面を打ち切る。しかし相手は首を傾げ、空を切る。しまった外れたか。今一太刀面を打たねば。腹に息を吹き込み間

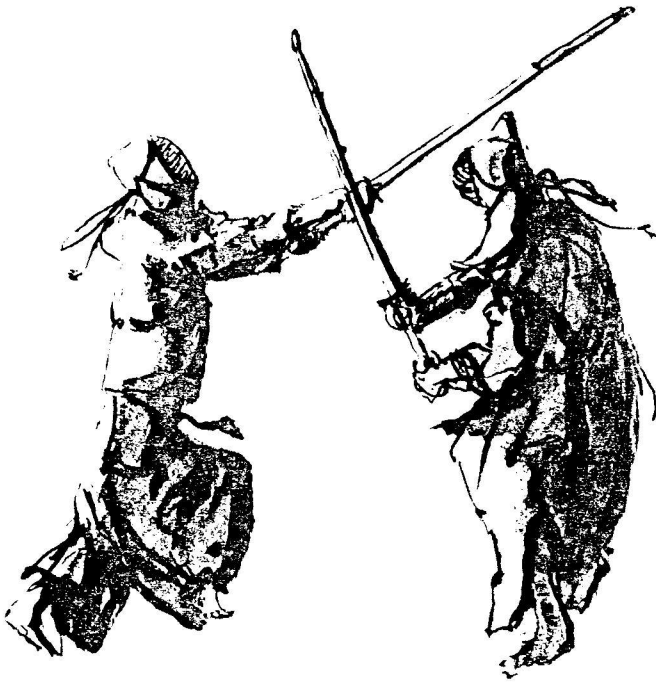
を詰め好機を狙う。面を打ち込んでくる瞬時、出頭の小手を踏み込んで打つ。これは十分に決まった。しかしまだ一本しか入っていない。相手は引き技を繰り出し動きが早くなる。好機がつかめず気持ち焦る。「やめ！」の声。こりや、いかん、だめか、もう少し打たねば、と思いつつ竹刀をおさめた。

二人目の立会い。充分な溜めから出頭の小手をとる。続けて面を打ち切れた。再び出小手が打てた。体も崩れずもう一本出小手！対戦は終わった。見ていてくれた森岡氏の言葉、一人目良かったが二人目は打ちすぎと思いますよ、とのこと。何だか納得が出来なかった。結果発表に私の番号があった。うれしくて彼の肩を抱き握手をする。二人して合格とは理想の形であった。着替えをするにも話が弾む。携帯電話で竹原館長に報告。あいにくご不在ではあったものの、奥様が大変喜んで下さった。

想えば、社会に出て十数年ブランクがあり、東内勉先生の道場にお世話になり剣道を再開させていただきました。その後、親

道館の門をくぐり、竹原常雄大先生、西野先生、勝浦先生、故石井先生、故石山先生、南先生のご指導を受けました。その間も父の死後のブランクがあり、とぎれながら現在に至ります。竹原常雄大先生は、九十歳まで館長をなされ、現在も元気です。

今後は皆様に少しでも追いつけますよう精進しつつ、親道館剣道場を盛りたてて参る所存です。



平成十三年度

称号・段位合格者一覧

― 剣道 ―

【教士】

松村明文
兵頭新平
青木茂生

【錬士】

米田利彦

【七段】

玉田晋作
岡島茂雄
臼木崇
増田和広
手塚十三子
糸田川美千雄
中尾誠
糸谷文雄

【六段】

藤本敏治
原田進
佐藤和久
中川正彰
森岡利彰
矢武秀生

【五段】

五月二十日
山名信行
鏑形智也
福井正勝
岩川正毅
九月九日
谷喜史
鈴江俊和
十一月二十五日
船城明
谷口順二

【四段】

五月二十日
岩朝洋平
松浦史芳
高橋大和
田中靖彦
寺西裕稔
九月九日
岡崎洋明
安丸孝生
佐藤光太郎
竈土恵子
坪井さくら
喜浦理砂子
十一月二十五日
河村知志
大場博史
大内敏行
湯浅俊章
森野喜代重
福井則夫
稲生哲也
谷博

岡本恭子
平成十四年
二月十七日
岡村健司
勝野晴孝
山下敏雄
山下貴大
美馬裕徳
曾我部あゆみ
寺井あゆみ
北川希依
河田美紗
美馬真奈美
前田恵利子
今井亜美
桑田亜希
杉浦良子

【三段】

五月二十日
松本真治
北川成仁
九月九日
平田慎太郎
六條勝仁
山下貴大
美馬裕徳
曾我部あゆみ
寺井あゆみ
北川希依
河田美紗
美馬真奈美
前田恵利子
今井亜美
桑田亜希
杉浦良子
十一月二十五日
昇葉子
池添葉月
安原麻美
吉田あゆみ

平成十四年
二月十七日

國吉將幸	井口照太	岩脇有軌	神元駿一	平成十四年 二月十七日	松本裕善	桑原啓治	芦田裕彦	近久寛斗	犬伏勇博	荻山直敏	富山直啓	守山一啓	岡山幸輔	九連松	田中裕也	松島正樹	折坂祐一	香川正憲	星野宜哉	西本和輝	松本栄一郎	的場健祐	佐川恭平
------	------	------	------	----------------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

播磨良幸	福永晃久	峰本裕也	市原裕之	道下真樹	西宇真之	川口雄大	藤田進弘	須見政弘	真名野学俊	近藤雅也	西條正晃	黒下晃光	竹内真理	坂東真伍	尾田俊弘	川口了意	笠井優才	武市芳力	田中健輔	松田伸吾	加地純一	岩田純一	五月二十日	【二段】
------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------

藤本恵実子	武原ひとみ	村山晴美	山下真智香	島尾美智子	三井美穂	斎藤えりか	叶井香澄	井東伊美	森由伊美	石井みゆき	米倉綾	新居見綾	谷澤鮎美	北野雄一郎	竹内真志	鈴木有太	細川航志	咲川元太郎	田中將人	近藤健一郎	白木幸資	田尾臨太郎	檜本臨太郎
-------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	------	-------	-----	------	------	-------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	-------

藤原アキラ	湯浅和俊	三木直健	大井達也	藤井浩彦	曾木良平	三村崇司	吉野大介	野中洋介	佐川裕太	清水亮佑	林石史	大木裕哲	山本義哲	吉本慎士	原田拓也	金岡和貴	遠藤大博	新居敬博	浅井宏亮	佐藤宏亮	九月九日	小坂哲也	岡崎文彦	六月十七日
-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------

高熊陽子	佐野優子	高木宏未	竹治宏奈	北村浩織	榊菜美	後藤聖菓	喜田早紀	吉村涼子	原藤三菜子	近岡美菜子	吉川由貴	藤田沙希	磯田裕	児玉守	篠原哲二	田村尚嗣	福永淳太	瀧上真也	北野康祐	橋本優也	大木信彦	斎藤孝典	福島智也	福川智也
------	------	------	------	------	-----	------	------	------	-------	-------	------	------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

小林一平	玉田康朗	的場大和	京小晋平	本田章訓	株宮克仁	大木一祥	三木祥一	岩本航也	小平西達	中村文平	貝塚和人	坂本真司	山崎春樹	立岩将史	西浦祐希	花房喜雄	大西啓介	三好啓拓	橋本拓	十一月二十五日	正田玉恵	福田美知子	今井麻由
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	---------	------	-------	------

佐藤友子 朝百合子 榎本倫子 団一瑛子 昇里紗織 白井佳綾美 長江悠紀 中島悠紀 吉岡のどか 宮崎真理 武知明彦 細井徹 小笠原直人 古波公二郎 稲井公二郎 佐藤潤一 板東祐輔 島田佳弘 山本弘峰 長地峰行 三木浩太 折坂千秋 古波政人 坪内哲郎 湯浅哲郎 加藤真吾

市原典子 黒田景子 平成十四年 二月十七日 魚里晋平 万代達也 三好和紀 小山田裕也 戎橋敬太郎 二ツ橋裕喜 和田朋之 佐藤雅紀 葉坂祐太郎 中川浩幸 梶川剛三

藤井晃 柿下拓也 石立康一 津川慎一郎 寺野和也 大野祐資 新野敏央 松本健太 小林敬治 太田宏生 安福明典 石井孝二 石村昌史 川野元樹 真名野元規 近藤雅哲 岸野哲也 新居見航 後藤裕二 北村大樹 鶴江範彦 藤澤慶典 鎌田崇佐 吉川知宏 四月三十日

【初段】

若木主税 坂東万潤 本田直里 大久雄記 金山見祐 岩見恭輔 篠原司吾 繁田晋志 森友哉 尾形直成 宮内康成 岸賢一 三木広介 森亮介 山ノ井亮介 新田陽介 湯浅貴浩 上笹尚哉 小島拓也 岩沙佑樹 清水源明 阿部裕也 株田薫 峰本博 森本隆彰 大西佑大 森本大 弥

竹原征士郎 尾山裕貴 山市孝也 折橋孝昌 森拓紀 宮田昌樹 長江智浩 武田諒 麻植太朗 東谷文弥 森一也 小坂拓也 長江陽介 村上征史 岡田大資 富本剛一 佐藤貴大 阿部高次 久米勘四郎 下村佑介 西保智司 久田光司 吉田良佑 石田太哉 黒田上哉

竹部真知 井口あすか 村瀬聡美 黒田あゆみ 西條のぞみ 樋口直美 島田和佳 榎木彩里 西村直美 田尾望光 児玉アユミ 泉木晴愛 櫻上由加理 賀井由遥 白井由美 乘原遥 井東萌 清水桃代 藤本次朗 フトウリニイプ 近松亮平 住友莊司 原和司 柴田賢大 中川将亮 柴田賢亮

阿部祐子 鶴本和善 中山善江 大石公美 竹澤優香 武内恵 川野美梢 川村美梨 北野由梨 岡村味佳 中山麻衣 齋藤里美 藤井祐加 掛田淳子 伊藤三和子 江富三子 米田井里 酒井友里 三木佳奈 市原佳奈 山田知子 岡本久愛 近藤久代 竹部久代

徳島の列選

松原佑介	小河朝陽	古住直弘	米田正人	片岡明貴	宮本貴仁	廣永稔一	小角陽一	丸岡佑太朗	新田大也	山田秀治	田淵友浩	岩本達也	米澤弘朗	黒田昇太郎	宮本健太郎	松村翔太	奥山健太	稲岡裕介	石川賀史	河西直也	生杉直介	四宮雄介	佐古賢太		
吉川結絢	前川友理	國友典子	新川翔子	姫野寛恵	竹下純子	山内上恵里子	堂上早智子	渡部一	宮田仁貴	朝風哲一	岡田多智彦	喜賀昭光	雜賀平真也	金本俊介	上野玉置	小野紳裕	松本榮見	山崎藤麻	佐藤麻由子	西野和香	酒井里美	檜田彩	和田扶美子	大城あいみ	播田
南郷能弘	前山明彦	瀬部克好	林勇作	打田健太	多田孝宏	津山孝徳	森沢直斗	広長祐樹	生永健司	松木翔太	正々直人	佐々木慎介	壺内勇希	清水勇	八 月 二 十 六 日	山本真寿美	高尾山	津山みゆき	西野文浩	越前稔一郎	宮武雄也	根来竜圭	古田良也	谷内泰仁	中野雄太
田中秀典	森口温	十月二十八日	宮本和美	坂東美智子	尾崎美佳	田中妙雪	塩田かおる	森本なつみ	寺井千鶴	逢坂千鶴	森踊那子	横山佳那	横山永愛	山田里奈	高尾山	栗林秀綾	松末陽介	笠井了恭	丸橋了恭	佐藤了恭	住真一	江川侑太	田中雄太	坪井翔太	鳥海俊孝
新井智存	富士田	佐藤進一	泉本祥徹	栗喜元浩	安阪直晴	小河井大輔	竹谷幸司	篠原伸司	岡田皓司	富永秀一	濱本和紘	椋本達也	井筒陽典	山内昇太郎	三石洋行	高橋直貴	岡田修司	山川修司	板東修司	井内直新	三原直起	田邨一成	一月二十七日	十四年	

六月十七日

八月二十六日

一月二十七日

奥森悦子
根上千春
松本由利
矢和田智子

									岸田光博	【教士】	— 居合道 —
									新見和彦	十一月四日	【五段】
									戸村淳一	五月二十日	【四段】
									藤井貴正	五月二十日	【三段】
									大村猛夫	十一月四日	
									新居弘行	五月二十日	【二段】
									近藤三菜子	十一月四日	
									小川智		
									白井陽祐		
									日下智博	十一月四日	
									島津新		
									斐リッpus居円		
									鴻野浩一郎	五月二十日	【初段】
									榎原遥		

がんばろう徳島

徳島清風館道場は

こうして生まれ

前進する！

館長 久保隆司



徳島の剣道

私が剣道を始めたのは、昭和四十四年四月、神山町立下分中学校へ入学した時、初めて体育館が建てられ、同時に新任教頭で着任された錬士六段の多田三美先生より、手ほどきを受けました。その後、県立徳農神山分校へ進み、教士七段高下正義先生よ

りご指導を受け、高校三年生の冬、二段に合格しました。

昭和五十年に社会人となり、名西支部の美馬先生、重井先生を、始め徳島県剣道連盟の諸先生方に暖かいご指導を受け、昭和五十二年四月四段、昭和五十六年七月五段を戴きました。

平成三年五月、九回目の六段受験に失敗し、瞑想状態の時、来代真治先生に導かれ、香川県観音寺市の(財)玄武道場に七月一日入門し、心の師、初代理事長、剣道・居合道範士八段森川竜一先生と出会え、九月十七日の六段審査に合格しました。以来約十一年毎週水曜日剣兄である佐藤吉邦先生、吉永明彦先生、青木茂生先生たちと共に自宅から往復200kmの道のりを、稽古に通っております。

その森川先生より、「清風館」の命名を戴き、平成八年四月十三日、徳島清風館道場を徳島市国府町中に開館致しました。しかしながら、私自身初めて道場を開いた訳ではありません、昭和五十六年十一月三日より、当時の徳島県剣道連盟会長三木只雄先

生の勧めで神山町下分で「神山錬成館」という、剣道教室を開き、故郷神山山下分で平成十年五月八日閉会するまで、約十七年間

青少年の剣道指導をしてまいりました。徳島清風館道場開館後二年間は、神山町と国府町を往復しながら指導しましたが神山町の急激な超過疎化と少年の激減により、神山錬成会を閉会しました。それより後は、これまでの経験を生かし後援会(保護者)と共に少年の躰、子育て「親の目の目」礼儀、等に重視し「正しく、楽しく、仲良く」の精神で名誉館長(森川竜一先生)の教えを忠実に守り、剣道の楽しさ、厳しき、喜びを助教の寒川博文先生、鑄形智也先生、岡田武治先生、喜浦理砂子先生、来島ひろみ先生と共に、心一つにして「よく見る、よく聞く、よくやる(行動、言動)」を合言葉に、週二回の短い時間を集中して稽古に励んでおります。お陰様で平成九年岡田先生四段、十年私が七段・十一年教士号、十二年林舞子さん三段、十三年鑄形先生五段、喜浦先生四段、犬伏勇斗君三段にと高段者の仲間入りする若い指導者が増えました。

また少年達は、平成十三年八月香川県詫間町主権の浦島太郎杯で低学年、高学年共に初優勝を飾り、十四年二月徳島市スポーツ少年団剣道大会で低学年優勝、又個人戦では、数多くの優勝、準優勝、三位と入賞者が生まれました。

練習量では、他の道場、教室に比べて小時間であると思いますが、優秀な若い指導者と素晴らしいサポーター（後援会）そして、道場全員が一丸となって研究と努力の積み重ねていることが、少しずつ結果に現れてきているように思います。今、小学生十一人、中学生四人、大人七人と人数も少ないですが、一人一人の能力に合わせた個人指導を実践しております。一人でも多くの入門者が増えることを期待しております。小さな小さな道場ですが、出稽古、遠征等にも積極的に参加して「一期一会」できるだけ多くの出会いを求め、それぞれが自己の錬磨と幅広い友情を深めるように、交剣智愛の精神で心身共に成長してもらいたいと思います。次代を担う若い指導者（後継者）作りにも尽力し、剣道って本当に素晴

清風館

清風館は（財）玄武道場初代理事長 剣道、居合道範士八段 森川竜一先生より私、剣道教士七段（当時、錬士六段）久保隆司が道場開館に際し命名書き看板に書いていただいた書である。

平成八年四月十三日（日）徳島清風館道場開館記念として看板と同じ書を手ぬぐいとしたのである。

弟子である私たちは、師匠森川竜一先生の玄武（一刀流）の教えを守り継承し修行して行くものである。

徳島清風館道場 館長 剣道教士七段 久保隆司



らしい”と感じて欲しいと思います。微力ですが剣道界の底辺拡大に、少しでもお役に立てばと思います。生意気な若輩者ですが、徳島県剣道連盟名誉会長堀江幸

夫先生、会長遠藤一美先生をはじめ先輩の先生方、又ともに励む指導者の皆様、道友の皆様これからも暖かいご指導アドバイスをよろしくお願いいたします。

合掌

続けていて 良かった剣道

清風館道場

鈴木 達也



ぼくは、剣道が大好きです。

最初始めた時は、正座のしかたや、すり足ばかりの基本練習で、

おもしろいとは思いませんでした。とてもいやになった時期もありました。それに先生は、基本にとっても厳しい指導者です。

でも、小学一年生の時、藤花旗杯で準優勝、徳農剣友会で優勝と、デビュー戦で頑張れたことは先生のお陰です。それくらいから剣道がおもしろくなった様な気がします。稽古では、何回も涙を流しました。先生が夢の中にまで出てきた事もあります。でも、剣道が好きだから、マンガとか、ビデオも見て研究もしました。そんな時は、ずっと試合の結果も良かったです。ところ

が、現実には厳しくて、小学四年の途中から試合に行ってもぜんぜん残れなくなりました。体が思うように動かないし、変なくせはつくし、稽古のたびに、怒られてばかりだし、気持ちが落ち込むばかりでした。剣道をしていて、いっちょも楽しい事が無い！そう思った時期もありました。きっとやる気がなかったと思います。

でも、小学四年の時、阿波ライオンズの試合で決勝まで上がれました。その時の相手が、今友達の林君でした。ぼくは負けてしまったけど、久しぶりの準優勝でとてもうれしかったです。でも、先生はほめてはくれませんでした。その時、久保先生が「お前も、やる気があるんだったら、週二回の稽古以外に、自分で求めていかなあかんぞ。」と言いました。ちよつとやる気も出てきて、行ける時には名西高校に稽古に行くようになりました。

すると、あの時の林君がいました。ヤツパリみんな頑張っているんだなあ、と思いました。名西高校では、いろんな友達ができました。少年の強化でも、他の道場の子

といろんな話ができ、剣道を通して、いっぱい友達ができ、とても楽しくなりました。剣道の稽古よりも、友達に会えるのが楽しみになってきて、続けていて良かったと思えるようになりました。それからぼくは、友達に負けないう様に少し頑張れるようになったと思います。剣道は、なかなか上手にならないけど、竹刀を振っている時が好きです。

小学六年生になって、団体戦で大将の役をするようになりました。大将として、適切な判断をする様に言われました。責任重大です。

平成十三年八月十九日に、香川県で行われた浦島太郎杯という試合に参加しました。ここでは知らない子ばかりで、少し不安でした。全部で五十六チームが参加していました。ぼくは高学年の大将をしました。団体戦しかないのです、先生は低学年にかけていたみたいでした。ぼくは、すごくくやしくてたまりませんでした。「優勝旗は、ぼく達がもらおう。」と思いました。

一回戦は、丸亀剣道連盟とあたりました。



先鋒が二本取られた時は、あせりました。でも、ぼくが取りかえさなあかん！その時は、頭の中が真っ白で、やるしかないと思いました。そして、二本取りかえす事ができました。

三回戦に進んだ時は、岡山県の勝山道場A、このチームに勝てば、上まで行けると思いました。引き分けて押さえる様に前の子に言いました。頼むぞー。心の中でずっと祈りました。思いがかなって、ぼくの番です。ぼくは、全身気合いを入れて数秒の攻め合いで面を二本取りました。この調子で、決勝まで行きました。皆で頑張りました。

そして、決勝はまた勝山道場Bでした。

Aチームを倒したので勝てると思いましたが、体が熱くなってきました。ぼくは、この時すごく自信がありました。前の子がずっと引き分けてくれて良かったです。ぼくの番になった時、始めの技で、コテぬきメンが決まりました。やったー。と思いました。初めて団体戦で優勝できて、とてもうれしかったです。

そして、ぼくは最優秀選手賞をもらう事ができました。いろいろ苦しい事いっぱいあったけど、友達もいっぱいできたし、剣道が続けていて本当に良かったと思いました。

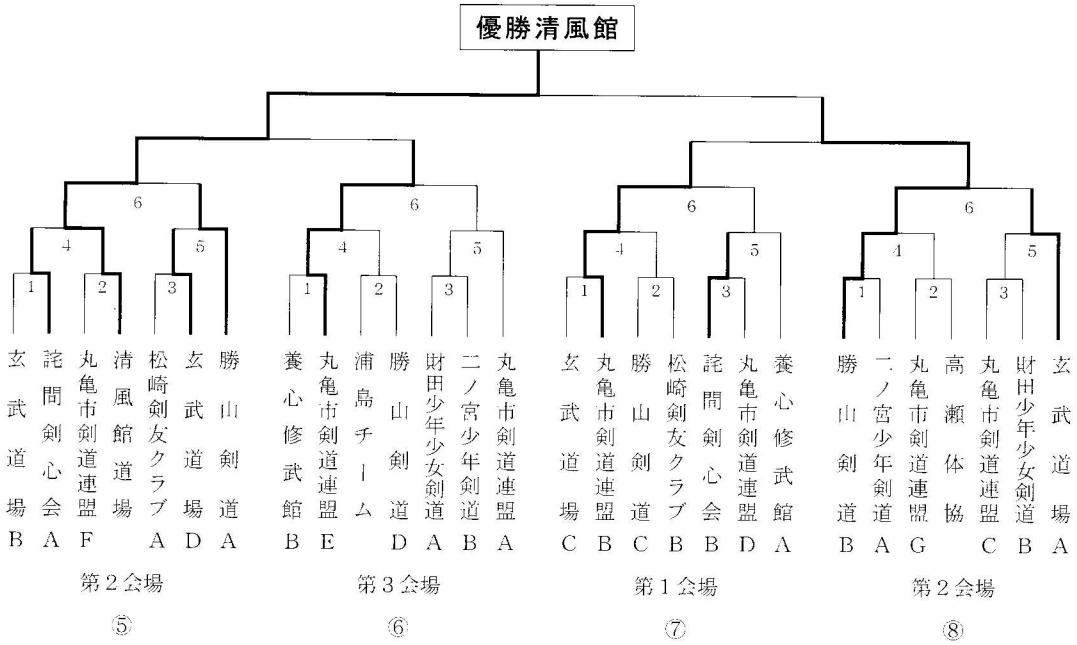
これは、久保先生のお陰です。ぼくに助けて、先生がくれた小学最後のプレゼントです。

久保先生、それから名西支部でぼくに稽古をつけてくれた先生方、本当にありがとうございます。六年最後の良い思い出になりました。ぼくは、まだまだ下手ですが、これからもいっぱい稽古をして大好きな剣道をずっと続けていきたいです。

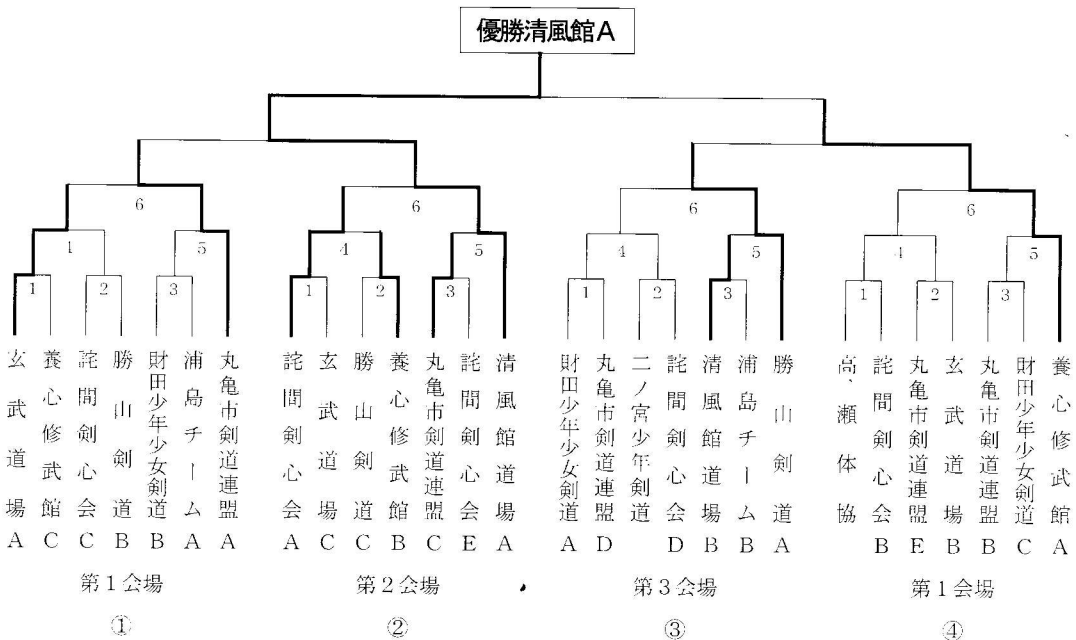


第15回 浦島太郎旗争奪少年少女スポーツ大会（剣道の部）

（高学年の部）



（低学年の部）



道場だより

徳島春風館道場

館長 青木茂生

剣道の普及発展のために各教室・各道場の先生方に於かれましては、青少年の育成のために稽古に奮起されている事と推察致します。

私も、二十一世紀の日本の未来を託す子供達を、一人でも多く清く・正しく育ていきたいと衷心から念願する一人でありませぬ。

さて、徳島春風館道場が開設されて今年で十四年目を迎えます。当時は、自分自身の居合道の稽古場として私費を投じて、自宅敷地に立て完成した折には、県剣道連盟より現在名誉会長堀江幸夫会長様をはじめ三十数名の方々の出席のもと、道場開きを行いました。

道場づくりは、私の唯一の念願であったし、自分の腕をさらに磨こうと思って建築したわけであり、剣道もやっていたので地

域の子供達に練習場として開放してもよいと考えておりました。その当時は、我が子と共に剣道の稽古をやっておりました。あの先生の紹介で、引き続き剣道を習いたいという子供さんがいて頼まれ、初めての稽古生としてわが道場に来ることになり、本当に嬉しく感じました。

二・三人で始めた剣道も年を重ねるうちに剣道ほど素晴らしいものはないと思つたのか、段々と稽古生が増え今では、幼稚園から一般人まで二十余名の稽古生を抱えるほどになりました。手狭な道場ではありますが、皆さんの熱心な稽古ぶりに額に汗をかきながら「剣道即人生」の哲理を胸に持つて、日々修練しております。

現在では、各種大会にも参加させてもらい素晴らしい成績をおさめる所までになりました。

これからも、益々精進し上位を目指していきたいと願っております。

少子化が進み、剣道人口も減少しつつある現在、一人でも多くの剣士を育てていくのが、本当に難しい時代に直面しております。

す。それは、各教室・各道場の皆さんも苦心している事だと思ひます。

今後は、保護者の方と連携を図りながら、剣道の底辺拡大に努め日本古来の伝統文化である「剣道」を発展させていこうと思つていきます。

最後になりましたが、県剣連の諸先生方の御指導と御助言を心から感謝の微意を表すと共に、徳島県剣道連盟のさらなるご発展を衷心から願っております。



開設当時の徳島新聞記事

完成した居合道場で、見事な太刀さばきを披露する青木さん一穴吹町舞中島



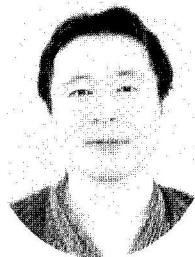
平成十二年度
鳴門教育大学大学院修士論文概要

剣道における
競技性と教育性
に関する研究

―試合・審判規則等の変遷と
その背景を通して―

城北高校教諭

福 多 雅 英



平成十一年度

より二年間にわたり鳴門教育大学大学院での研修の機会に恵まれ、この度終了

いたしました。大学院での二年間は木原資裕先生に懇切丁寧な御指導をいただき、また、研究活動を通して多くの方々より御指導・ご鞭撻をいただきまして様々な角度から剣道に取り組むことができました。また、各種研究会や、剣道実技講習会・各種剣道

大会への参加を通して剣道の知見を広め、自分自身の教育観や剣道観の再構築を図ることができました。この貴重な体験を生かし、今後の教育実践、剣道修行に全力で取り組んでいく所存であります。

さて、お恥ずかしい限りではありますが誌面をお借りして修士論文の概要を掲載させていただきます。結果報告とお礼の意とさせていただきます。なにぶん浅学無知の私の初めての論文であり、研究方法のまづさや理解不足の面等多々あるうかと存じますが、ご校閲いただけましたら幸甚です。

一、はじめに

剣道は戦場における生死を賭けた真剣勝負の術として発生し、無数の実践を経て技術が体系化された。十七世紀の初めには儒教や禅の思想的影響を受けながら武士社会における武士の修養とし、また、武士の表芸として重要視されるようになってきた。つまり剣の術理の修練は、人間形成の道として捉えられてきたのである。

やがて十八世紀の中頃に竹刀や剣道具が発明され、現在の剣道のように打ち合う竹

刀打ち込み稽古がはじまり、試合が盛んに行われるようになると、武士階級をも超えた我が国最初の大衆的な競技スポーツとして各層に広がり始めた。したがって、この時点で現在の形態に近い試合も始まり、剣道の競技性と教育性における二重構造が芽生え、また、「竹刀を真剣（刀）」と考える」とする精神性と竹刀操作法による二重構造も生まれたのである。ただ、この当時には明文化された統一的な規則はなく、各流派の『規範』いわば慣習的規則や約束事によって試合が行われ、試合規則を規定しなくても、「正々堂々」、「勇猛果敢」、「潔さ」、を尊び、「道義にもとる行為」、「廉痴」、「卑劣」を恥じる武士道精神により、その曖昧な規則は補完されていたと考えられる。その後、明治・大正・昭和と激動の時代の流れの中で剣道は、その時代背景や政治経済、世相といった社会的背景の影響を受けながら、発展してきた。

争における警視庁抜刀隊の活躍による警察剣道の採用は、近代剣道の発展に貢献した。国粹主義と富国強兵政策を背景にして設立された大日本武徳会は、「武徳の養成」を目的として全国的・統一的発展を遂げていく。しかし、大正期から昭和初期にかけて大日本武徳会の意図とは裏腹に、学生剣道を中心として試合剣道が隆盛を誇るようになり、はじめて条文化された試合審判規定が制定される。その後、剣道は軍国主義の国策の中、戦局の拡大・愚化により戦技化を余儀なくされ、戦技剣道へと変質していく。戦後の剣道禁止期を経て、民主的な新しい競技として誕生した撓競技は、剣道の運動形式を基礎とし、スポーツ化を進め、その競技性・スポーツ性は、復活した剣道に多大な影響を与える。ある意味では剣道の現代化に役立ったといえる。

その後、競技化された剣道は、全日本剣道連盟により試合場の規定や時間制と本数性を同時に持ち込んだ試合方法など、合理化された試合・審判規則を導入していく。また、競技化された剣道は勝利至上主義に

より規則を都合よく解釈し、試合で悪用する風潮が現れ、剣道の技術やモラルの面でその本質を離れるという問題が表面化した。全日本剣道連盟は「剣道の理念」を制定し、その精神を具現化するため試合・審判規則の改正を行った。その後も、競技性と教育性の両ぎ合いの中で試合・審判規則の改正を繰り返して現在に至っている。

本研究は、剣道が発展してきた過程における、試合・審判規則の変遷と、その社会的背景を把握しつつ競技性と教育性について知見を得ようとするものである。

二、研究の方法

本研究は、以下の資料における条文や規則を構成している各要素である。『試合場』、『用具』、『試合の種類及び方法、試合時間』、『有功打突』、『反則事項・禁止事項と罰則』について比較検討した。また、時代背景や社会的背景を把握しながら、試合の実態をも含めて考察を試みた。

(1) 江戸時代末期の徳島県下における神全熟武田家関口流の野試合における慣習的規則

則

(2) 明治初期の撃剣興行の「概略仕法」

(3) 大日本武徳会試合審判規定

(4) 戦技剣道関連連試合審判規定（文部省通牒等）

(5) 撓競技規則

(6) 全日本剣道連盟試合・審判規則及び細則

(7) 警察剣道試合及び審判規則

(8) 全国高体連剣道部申し合わせ事項及び、
全国高体連剣道部努力目標

三、結果と考察

(1) 試合場の変遷

① 戦後の剣道復活まで試合場について規定はされなかった。このことは、試合規則の中で試合場を規定しなくても合規則の中で競技者が持っていたであろう常識的に競技者が持っていたであろう道徳的規範意識つまり、「敵に背を向けて逃げる」などの行為を恥とする武士道精神や、お互いに正々堂々と試合をしようとするモラルによって規則は補充され、試合場を規定し、場外・場内の概念を持ち込む必要がなかったと推測される。また、当時の「竹刀を真剣（刀）と考える」とする。実践を想定

した思想性・精神性からすると、試合場を限定すること自体、剣道の武術性を損ない、競技的傾向になると考えられていたのではないかと推測される。

② 戦後の剣道禁止期にあつて、剣道の

技術的特性を残しながらも、新しい競技スポーツとして創出されたのが撓競技であり、場外での打突を有功としな
いことや、場外に出た場合は反則として罰則を科すなど、スポーツ化を図り、
安全性が確保された場所、平等・公

正な試合場を設定して、競技を行っていたことから、新しいスポーツとしての民主的な競技を目指していたことが、
試合場を規定したことから考えられる。
こうした場外・場内の概念は、その後
復活する剣道にも引き継がれていくこ
ととなる。昭和二十七年に競技スポー
ツとして復活した剣道における試合場
は、撓競技の精神を引き継ぎ、スポー
ツとして確立を目指したものであった。

(2) 用具の変遷

① 十八世紀、竹刀・剣道具の登場によ

り、竹刀打ち込み稽古が可能となり、
従来の形中心の稽古法の欠陥が補完さ
れ、剣道は実戦化され競技化し、多く
の人々を夢中にさせ発展して行くこと
になる。また、打ち込み稽古により一
斉指導が可能となり、師匠から同時に
多くの弟子が学べたり、弟子同士が互
いに打ち合うことで学び合い、より一
層剣道の持つ教育的効果が拡がりを見
せた。

② 剣道において竹刀・剣道具を規定す

る基準となる最大の条件は、安全性で
あるといえる。発育発達の段階や性差
に応じた適正な竹刀を規定することや、
剣道具の安全性・耐久性を追求して行
くことが、生涯を通じて健康で安全に
剣道に親しむためにも重要なことであ
り、安全性が保証される中ではじめて
剣道の持つ教育性と競技性が成り立っ
ている。

(3) 試合の種別及び方法、試合時間の変遷

① 「剣道らしさの喪失」とされる、本
数性と時間制を同時に持ち込んだ現在

の試合方法は、剣道が近代化し、合理化され、競技化されていく中で生まれられたものである。しかし、競技化されることにより、次の相矛盾する内容を包含しなければならなくなる。一つは積極的な技の応酬や、見応えのある白熱した攻防、熟練した技能などで勝敗を決するまでの過程の重要性を試合に求めながら、勝利を得ることが最大の評価となる競技スポーツとしての存在であること。ふたつめは、竹刀打ち込み稽古誕生以来の課題である。「竹刀を真剣（刀）と考える」としながら、実際には刀法とかけ離れた竹刀操作法の技術追求がなされている二重構造的解釈が存在していることである。

(4) 有功打突の変遷

① 「象徴的集約点」として固定化されてきた打突部位は、象徴的なところであるので、実際の急所からかけ離れた部位であっても、「象徴」としての打突部位」が決まったことに大きな意味を持っていたと考えられる。竹刀打ち込み稽

古による剣術は、教育の手段として発展してきたものであるから、打突部位についても危険性の少ない、しかも打突の難しい部位を設定した。それは、修練を更に厳しくすると共に技の精度を高めるための打突目標であったと考えられる。

② 有功打突の条件は各流派の知恵として生まれ、永年にわたる研鑽により発達し、その術理は儒教や禅、あるいは芸道の影響を受けて思想性や精神性を持ち、単に「打った・打たれた」「切った・切られた」とする現象面にとどまらず、質的向上をはかり、「心を打った・打たれた」とする精神文化へと昇華してきた。したがって有功打突は、「充実した氣勢」「適法(適正)なる姿勢」、「刃筋正しい打突」、「残心」とする条件は、抽象的で曖昧な基準ではあるが、剣道が竹刀打ち込み稽古として生まれ発達してきた過程の中で引き継がれてきた、「竹刀を真剣(刀)と考える」とする操作技術と精神性によるものである。

単に「打った・打たれた」だけでなく、その「技前」から「残心」までの一連の動作や理合いまでも総合的に判定し、有功打突としているところに剣道の伝統的な教育性を見ることができると。

③ 試合者が有功打突をめくり、正々堂々と試合をすることで、剣道精神が発揮され、また、剣道精神が養成されて行く。かつて剣道の試合においては、審判と言わずに「検証」といわれた時代があった。試合規則に照らして判定するというより、技能に熟練した先達者が、試合者の技能を人間性と一体として総合的に評価するといったものであったり、あるいは「無検証」といって勝敗は試合者自らが判定するという心構えが良しとされた。そこにお互いの尊重、技に対する自覚、といった精神や態度などの剣道精神とされるモラルが重視されていた。

(5) 反則事項・禁止事項と罰則の変遷

① 剣道が時代的・社会的背景による剣道観の変遷にともない、競技化し、ス

ポーツ化されたきた過程の中で、剣道の特性を活かすために最小限の制約が考慮されてきた。それが試合・審判規則であり、剣道の特性を保護するため、反則事項や禁止事項である。これは、試合資格を失い退場せしめるような審判員や相手に対する非礼な言動や暴力的な行為、又は試合中自然に起こりうる行為、及び試合を有利に展開させようとして起こす行為から、公正・平等の見地から規制することにより成立している。また、こうした反則事項や禁止事項に対応した罰則を用いて、剣道の変質を防ぎ、伝統的な剣道の技術と精神を創造し、伝承しようとしてきたのである。このことから反則事項や禁止事項と罰則は、剣道における一つの教育的手段であると考えられる。

② 剣道における試合・審判規則は、主に普遍性、統一性、安全性及び教育性に配慮されて作られたものである。従って試合者に求められることは、反則の許容範囲を最大限利用することではな

く、罰則の境界線より中へ中へ試合する態度であり、言いかえれば、勝負する中で互いに見事な一本を創出しようとする道徳的な試合態度を、日常生活に転移させようとするのが武道の教育的特性であると考えられる。それゆえに剣道の試合にあつては、規則の悪用や反則事項、禁止事項のすれすれの行為などは、剣道精神に反する行為として問題視されるのである。

四、まとめ

本研究では、試合・審判規則などの規則を構成している各要素である。「試合場」、「用具」、「試合の種別及び方法、試合時間」、「有功打突」、「反則事項、禁止事項と罰則」の変遷について比較検討し、社会的背景から、剣道における競技性と教育性について考察してきた。

剣道における競技性と教育性の問題は、「竹刀を真剣（刀）と考えて」とする竹刀操作法と武術的な精神性を同時に持ち込んで始まった竹刀打ち込み稽古からすでに発生していた問題であり、剣術・撃剣から剣道へ

と変遷してきた長い歴史の中で、我が国固有の文化のもとに培われてきた剣道の本質的問題であるといえる。

勝利至上主義の台頭で、勝敗に拘泥することによっておこる技術の変質が問題視され、「伝統的な剣道」の喪失が叫ばれている今日の剣道においては、精神主義による単なるモラルの押しつけではなく、脆弱で曖昧な試合規則を補完しうるモラルの育成と、明確な技術課題としての規則改正が必要であると考えられる。

本研究では、剣道が競技性と教育性の関ぎ合いの中で発展してきた過程を、試合・審判規則等の変遷を通して、概観することには一応の成果を見ることはできたが、それぞれの課題を深化させ剣道における思想性や文化性について考察するまでには至らなかった。今後は更に剣道への見識を高め、競技者、審判員、そして指導者としての実践を通して、学校体育における教科指導や、部活指導を深めたいと考えている。

徳島県における 剣道段級審査の動向

鳴門教育大学大学院

三 牧 岳

私は、他のスポーツにない武道独特の評価方法である称号・段位制度に興味を持ち、現代剣道における称号・段位制度の構造と展開と題して、修士論文を作成しました。

ここに、徳島県剣道連盟に関する初段から五段までの審査と五級から一級までの審査実態の概略について報告いたします。

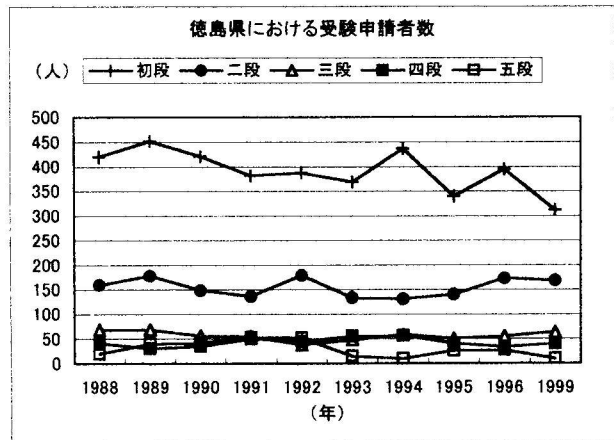
段位審査

各年度の段位審査における、受験申請者数、合格率は以下の通りである。

受験申請者数

これによれば、初段が他の段位より圧倒的に多いことがわかる。二段は、初段のおよそ三分の一となり、三段はさらにそこから三分の一となっている。三段と四段と五段は、交差を繰り返しているが、全体的にみると五段が一番低い。申請者においては、

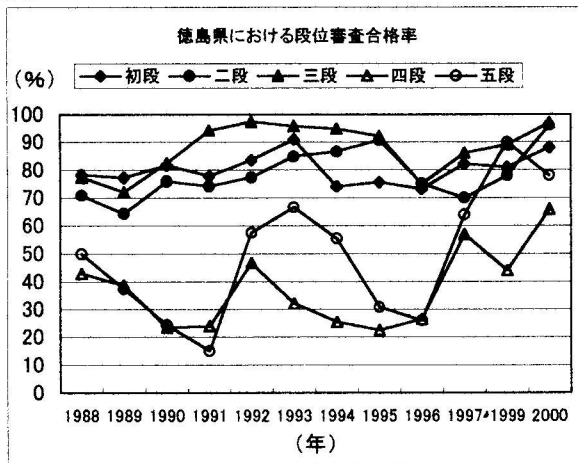
図 1



初段から三段までは均等に著しく減少し、三段、四段、五段は、七十をしまわり、特に五段は十〜二十人まで落ち込んでいることがわかる。

受験資格の修業年限として二段は初段から一年、二段から三段の間は二年、三段から四段は三年、四段から五段は四年、それぞれ必要である。この年限の間に剣道から離れてしまうことが、受験申請者の減少の

図 2



要因があると考えられる。また、剣道を始めたからには初段まで取得したという、初段に対する意識の高さも関係もあると思われる。

次に合格率のグラフによれば、これによれば、各段位に明らかな違いをみることはできない。ただ、初段・二段・三段と四段・五段は、合格率によりわけることができる。初段・二段・三段においては、合格率がほ

ぼ七〇%〜九〇%幅で安直しているが、四段・五段については、変動が激しいことがわかる。これは、四段・五段申請者が少ないことにより、受審者の技量によって合格率が決まってくるからであるといえる。

以上のことから全剣連の加盟団体である徳島県剣道連盟の段位審査の特徴としては、初段の申請者が段位の中で一番多く、段位があがるにつれて減少している。そのことは、木原らの研究において剣道を習い始めた者だれもが生涯、その実践を継続することができないものではなく何らかの阻害要因がその実践過程の中で生じ、途中で中断あるいは、継続を断念している者が多いのが現実であるとの指摘を段位審査のレベルから裏付ける結果となっている。

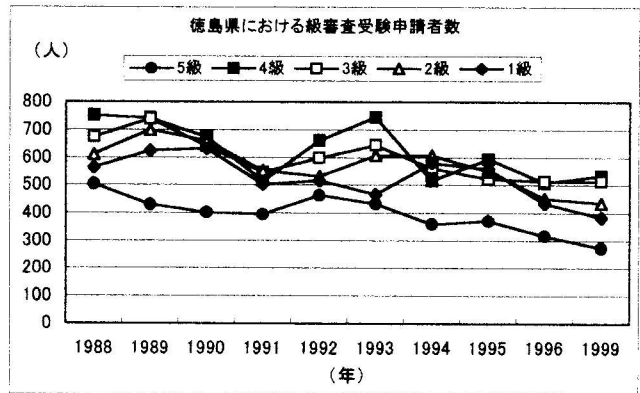
級審査

徳島県剣道連盟は、五級から一級まで県下三地区わかれて五回ずつ計十五回審査を実施している。級審査における、受審申請者、合格率は以下の通りである。

受審申請者

これによれば、五級が少ないことがよく

図3



わかる。四級から一級までは大きな差はな
いが、ほとんどの場合四級から一級へと減
少している。また、すべての級において、
一九八八年から一九九九年に至るまでに減
少していることがわかる。

五級が少ない要因としては、中学生は四
級から高校生は三級から等の資格があり、
小学生のみで五級審査が行なわれているこ
とが挙げられる。ただ、すべての級におけ

る現象は、徳島県の剣道人口の減少が直接
要因であるといえる。

次に、級審査合格率のグラフでは、五級
がほぼ総ての年で合格率が高いことがわか
る。合格率においては、申請者でみること
ができた、四級から一級への減少はない。
受審者の技量によって合格率が変わってい
といえる。

合格率

一級の合格率が数年七〇%台であったこ
とや、年によって合格率が若干変化してい
るものの、全体として合格率は八〇%以上
の年がほとんどであり、多くの合格者を出
すように配慮されていることが推察できる。

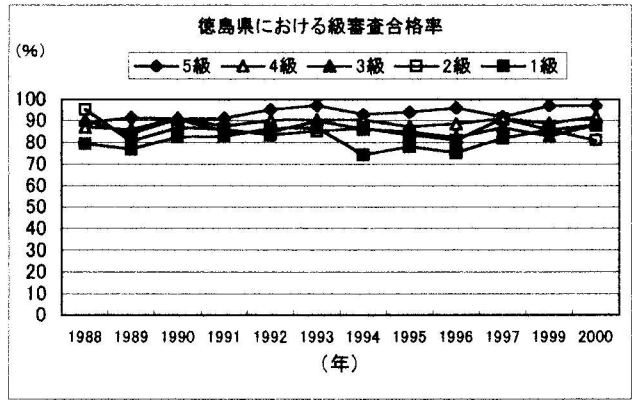
まとめ

徳島県剣道連盟では、初段から五段への
段が上がるにつれて受験申請者の減少がみ
られた。それに伴い合格者も減少していた。
剣道を始めた者が様々な阻害要因により剣
道から離れている実態を段位審査からみる
ことができた。級審査は、各加盟団体が、
実施するものであり、徳島県剣道連盟でも
県下三地区に分かれ、五回ずつ計十五回実

以上、徳島県剣道連盟から提供していただいた資料をもとにまとめました。貴重な資料を提供していただき誠にありがとうございます。また、徳島県剣道連盟の諸先

施されていた。五級から一級まで合格率は、ほぼ八〇%以上であり、級を剣道の奨励手段として多くの合格者を出すよう配慮されている。

図 4



生方の御指導・御支援により、大学院での二年間は充実したものとなりました。重ねて深く感謝し御礼申し上げます。



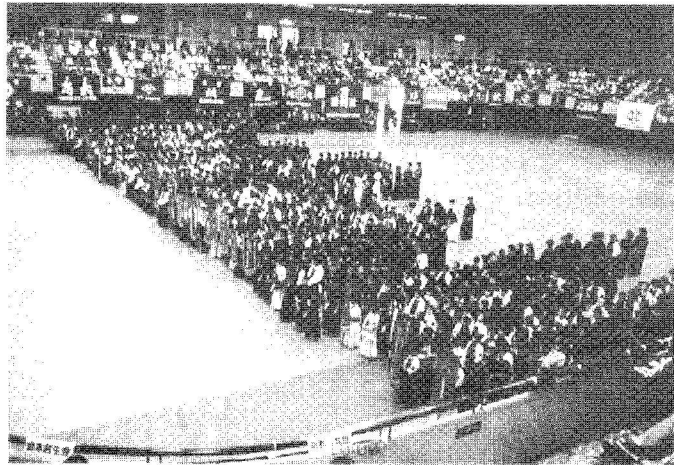
少年強化遠征

京都へ行けて

小松島少剣クラブ

暮 石 貴 之

京都のえんせい試合では、体をじゆうぶ
ん、動かせないまま終わってしまい、とて
もくやしかったです。去年以上になんぼろ
うと思ったが、力はいってしまい、うご
けませんでした。まだまだ自分の実力がみ
じゆくだとわかりました。いろいろ勉強に
なりました。京都に行けてよかったですと思
います。



京都での試合

藍住剣道スポーツ少年団

浜 航 介

ぼくは、京都の試合に行くことに選ばれたからには試合で勝たなければいけないと思ひ、たくさん練習しました。しかし、本番になると体が、カチカチになってしまったので試合をするときにちよつときつかったです。でも、京都の剣道をしている人達と戦えてよかったです、と思いました。

また、いろいろな所で試合をしたいと思いました。いっしょに行った、人達と友達になれて、楽しかったです。お世話をして下さった、先生方、ありがとうございます。

剣道連盟選抜 チームに選ばれて

鴨島少年剣道教室

新居 春 菜

六年生の四月から強化訓練に参加して、月一回、他の道場の人たちとけいこをしました。ふだんは試合しか顔を合わせない人達と一緒にけいこをしました。私は、強化訓練生にすい薦してもらった時から、京都の大会に選ばれるように一生けん命がんばりました。十二月のけいこの後に、京都行きの発表があり、私の名前が呼ばれました。内心少し不安だったので、すぐくうれしかったです。それからは、京都に出発するまでの二ヶ月間、いろいろな事を考えました。京都の方は、強い道場がたくさんあると聞いていたし、どんな選手がいるのか、自分がどれくらいやれるのか、とか考えました。でも、自分の力を精一杯出して、試合をしようと思いました。試合当日、一回戦、二回戦は自分のペースで試合が出来

徳島の剣道

ました。でも、三回戦の相手は、私が相手のペースにつられてしまつて負けてしまいました。思っていた以上に京都のチームは強かったです。でも、強い相手と試合が出来て、見習う所がたくさんありました。この経験を生かして、これからも、もつとけいこをがんばっていこうと思いました。それと、一緒に京都に行った選抜チームの子たちと仲良くなれた事も、いい思い出になりました。

一年間、私を指導してくださった先生方、ありがとうございます。

京都大会に参加して

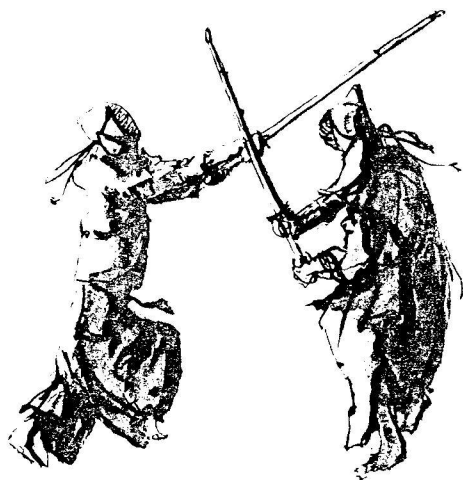
鴨島少年剣道教室

中山 大地

二月二十四日に京都で行われた京都竹夕会剣道大会に参加しました。徳島からは強化錬成の中から十二人出場しました。京都についた時、一番に試合場が日にとびこんできました。ぼくの剣道が京都でどこまで通用するだろうという不安と、やってやるという自信にみちあふれていました。

他の子の試合を見るととても身体も大きく強い子たちばかりでした。一回戦は不戦勝で二回戦から三回戦は順調に勝ち進みました。

コート決勝で積という子とあたりました。積君はとてもスピードがあり技もはるかにぼくより上でした。結果はあっさり負けとしまいました。力の差をみせつけられたと思いました。けれどいろんな道場の子の試合も見れたし、とてもいい勉強になりました。



この経験を生かしてもっともっと強くなれるように練習にはげみたいです。

三位入賞

先武館 山本敬太

ぼくは、京都大会の会場でいろいろなタイプの選手と対戦できて楽しかったです。最後に戦った筒井君も中学生のように大きくて、力強く、スピードのある剣道をするので「すごいなあ」と思いました。でも、一番楽しかったのは、昇龍館の松井君と戦った時でした。さすが、去年準優勝しただけあって、すきが無く、決めがするどく気がぬけませんでした。ぼくも、一番集中していたので、忘れられません。良い思い出ができました。こんなすばらしい大会に参加させて頂き、本当にありがとうございます。

少年強化訓練京都遠征

阿南少年剣道教室
藤倉純

ぼくは、少年強化訓練の中から、京都竹友会少年剣道大会に選ばれた時すごくおどろき、「本当にぼくなんか大会に出場していいのだろうか。」と思いました。ぼくは剣道を始めてまだ三年もたっていません。それに「試合をやってもあまり強くない。」と思っていたので、京都に行っても一回も勝てる自信がありませんでした。でも「選ばれたからには思い切りやってみよう。」と自分にしよう。」とすぐに思い、練習に今まで以上に気合を入れがんばりました。そして試合の日の前日、なんと不運なことに三十八度の高熱を出してしまい、その日の練習に参加できず、家で寝ていました。ぼくは「明日の試合までに治さなくては。」という気持ちでいっぱいでした。するとそんな時に、一人の先輩から電話がかかってきて「明日の試合がんばれよ。」と言ってく

れて、「明日は熱が下がらなくても試合に行つてやる。」と言う気持ちに変わりました。

そして試合の日、熱はすっかり下がり、結果はベストエイトという結果で自分でも信じられませんでした。試合をする前は「負けてもいいのでただ思いつき。」と思っていて、負けた試合以外は全て二本勝ちという記録で、今までのどんな試合よりもうれしく、また信じられませんでした。試合で勝ったことも負けたことも、友達と遊んだこともとてもよかったと思っています。これも少年強化訓練の先生方、阿南少年剣道教室の先生方、そのほかに教えて下さった先生方、それに先輩のおかげです。もうすぐ中学生になります。中学生になっても剣道を続け、今まで先生方に教えて下さったことを忘れずに剣道をやっていきたいと思っています。先生方、今までありがとうございます。

三位に入賞して

光武館 平野千尋

今回十二名の選手が、県の代表として京都の大会に出場しました。

県内では、道場別での試合なのでなかなか話す機会ありませんが、今回はいろいろな話もでき、楽しく試合ができました。

結果として三位に入賞出来、他の道場の友達もでき、小学校のしめくりとして良い思い出ができました。

中学生になっても続けてがんばっていきたいと思います。



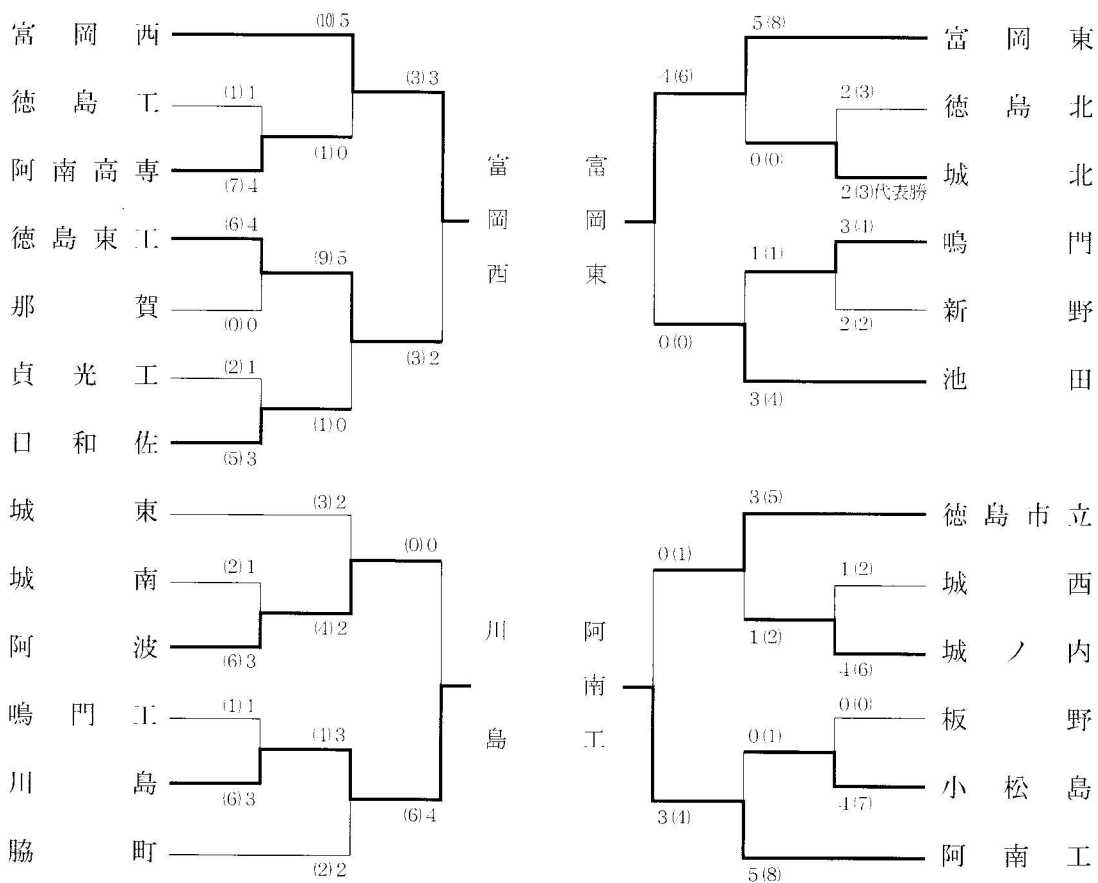
平成13年度 大会記録

第41回 徳島県高等学校総合体育大会

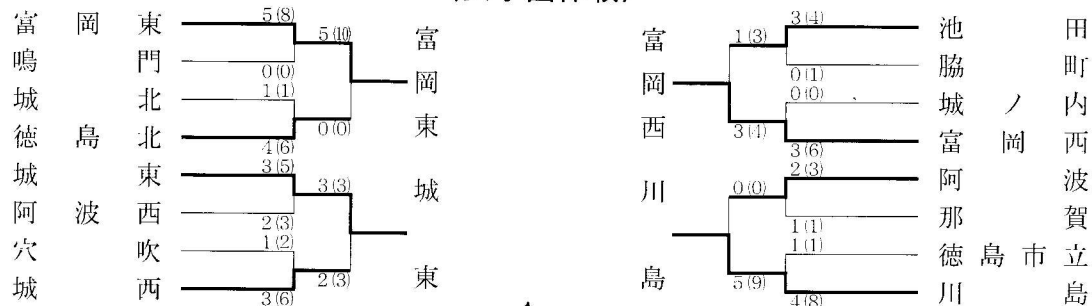
日時 平成13年6月2日～4日

会場 徳島県立城西高等学校体育館

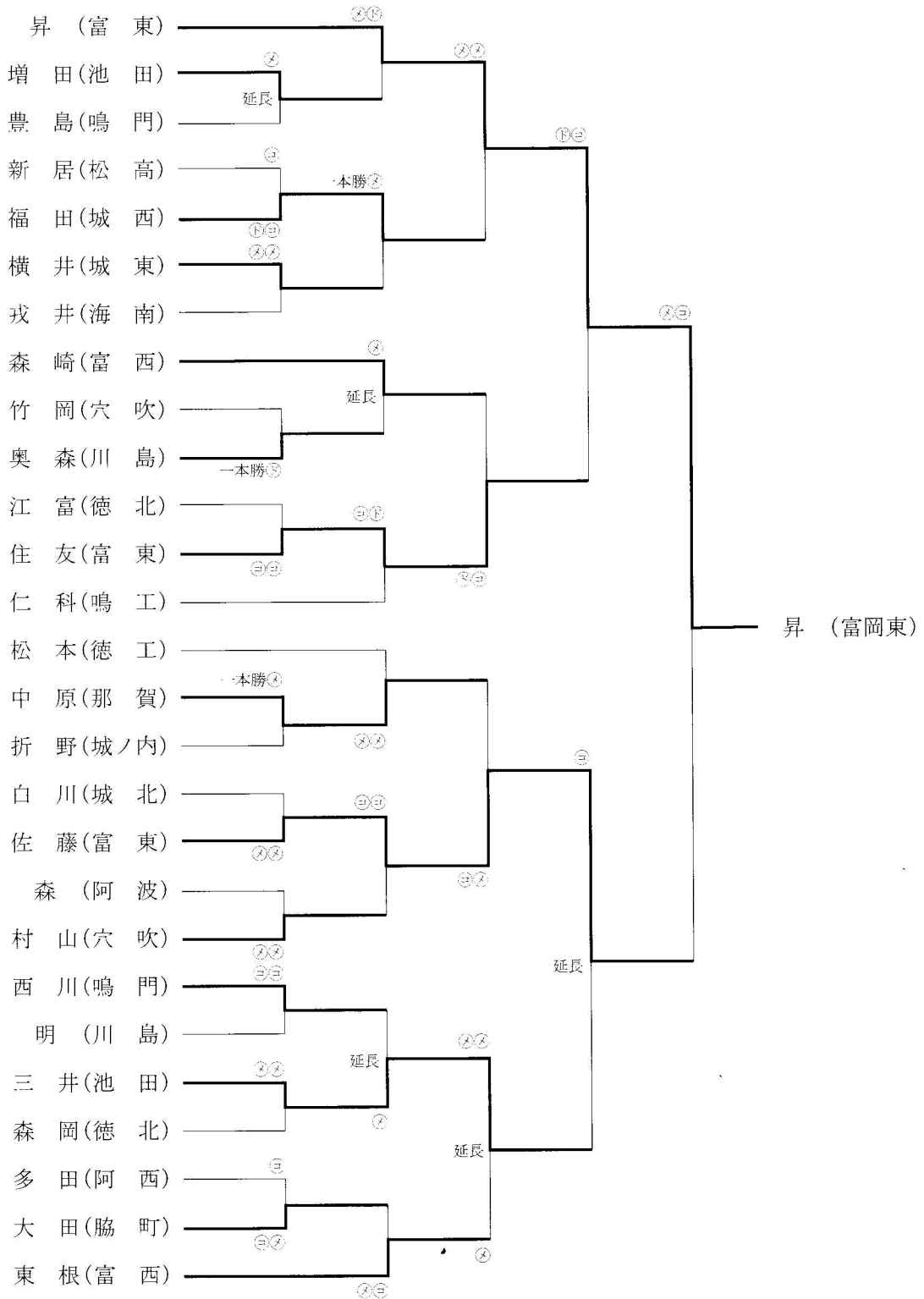
〈男子団体戦〉



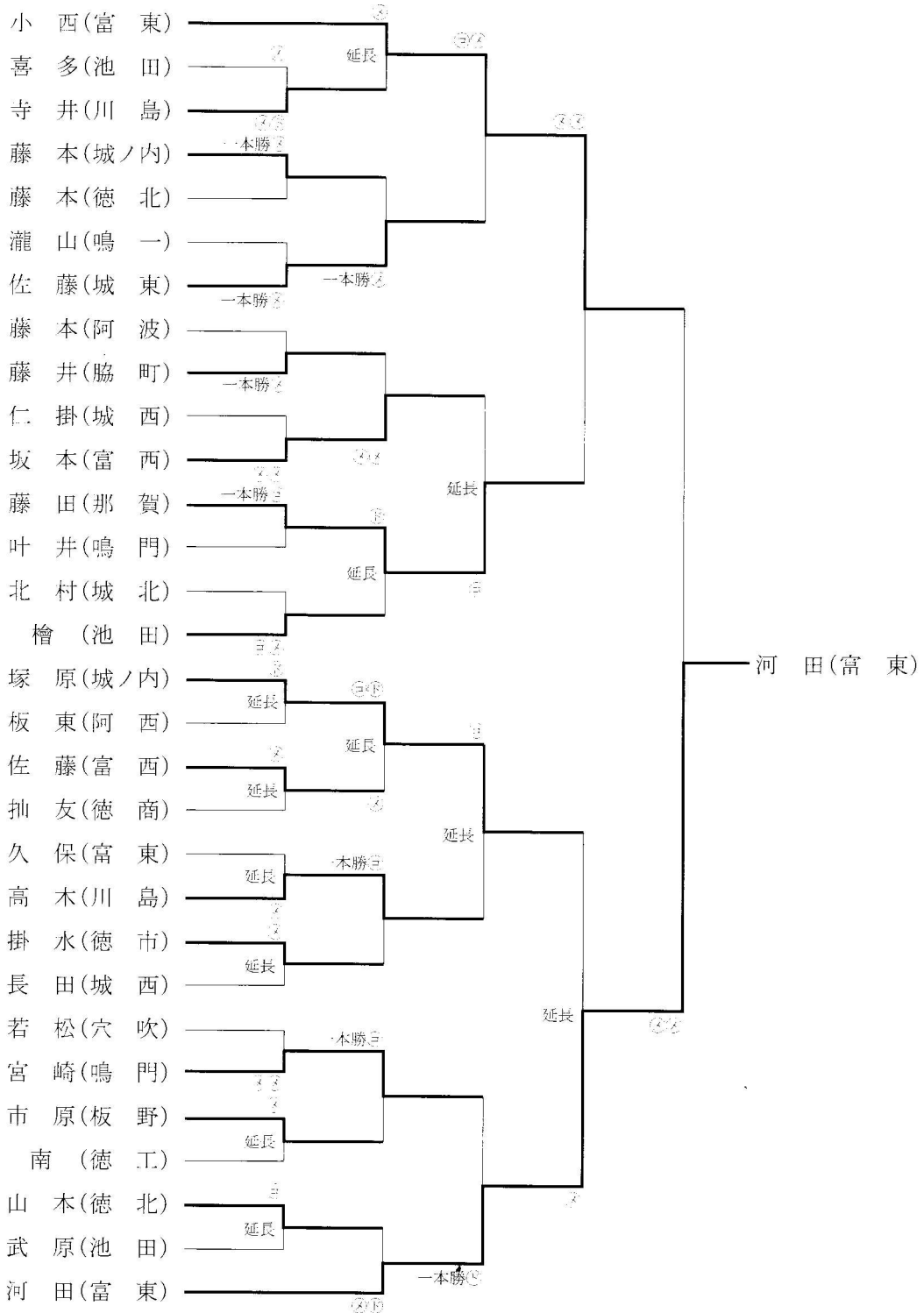
〈女子団体戦〉



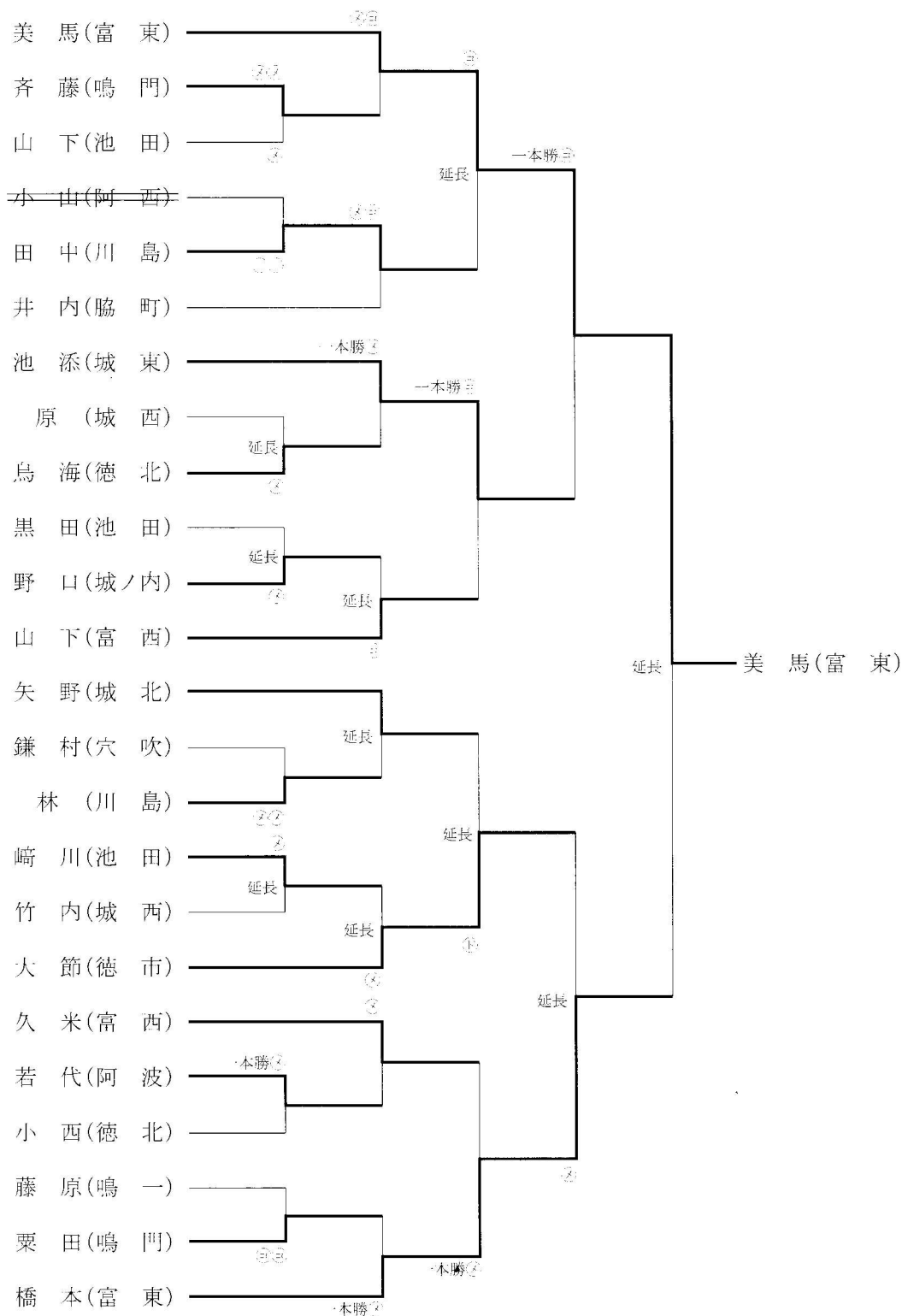
〈女子個人1組〉



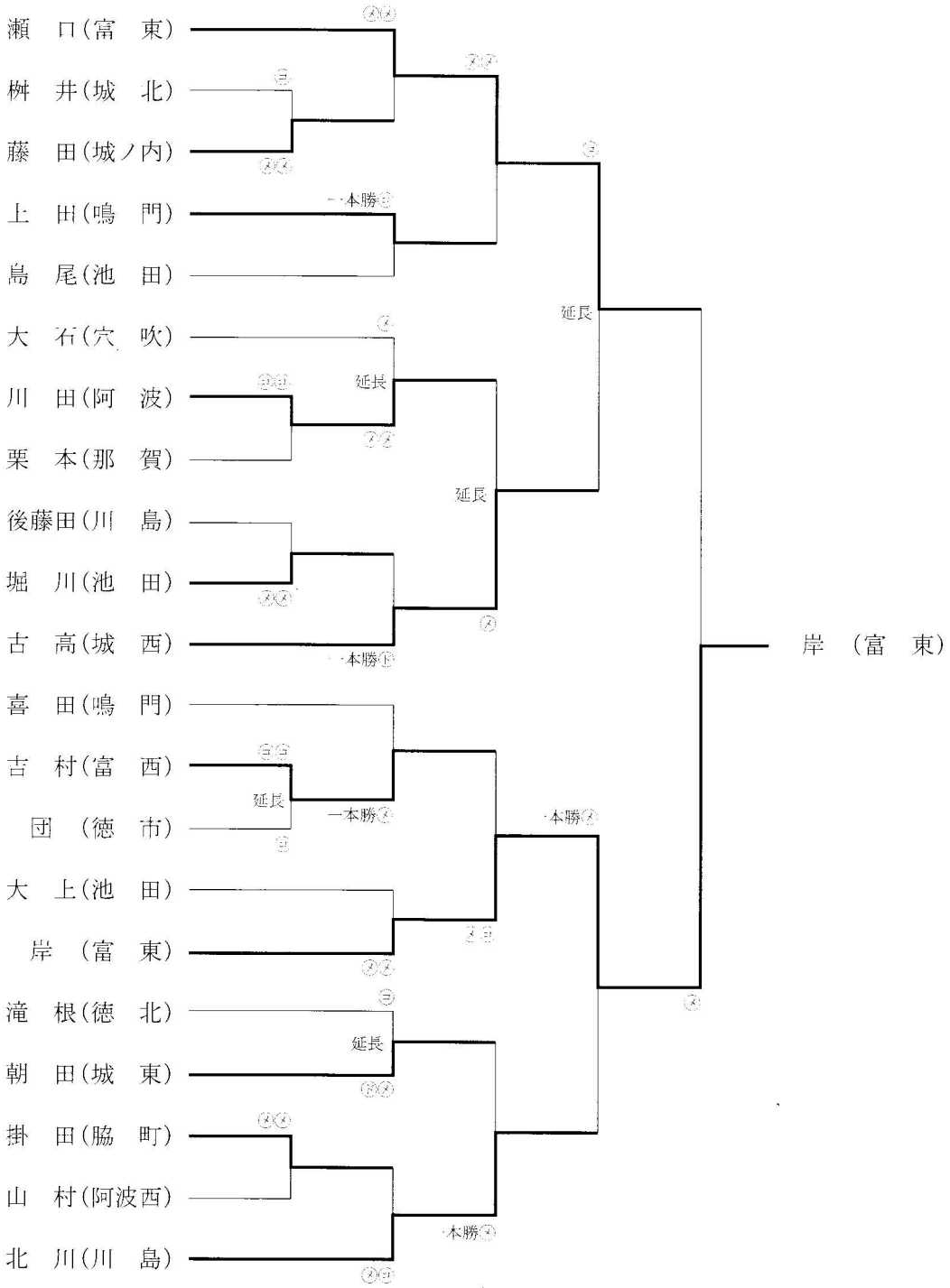
〈女子個人2組〉



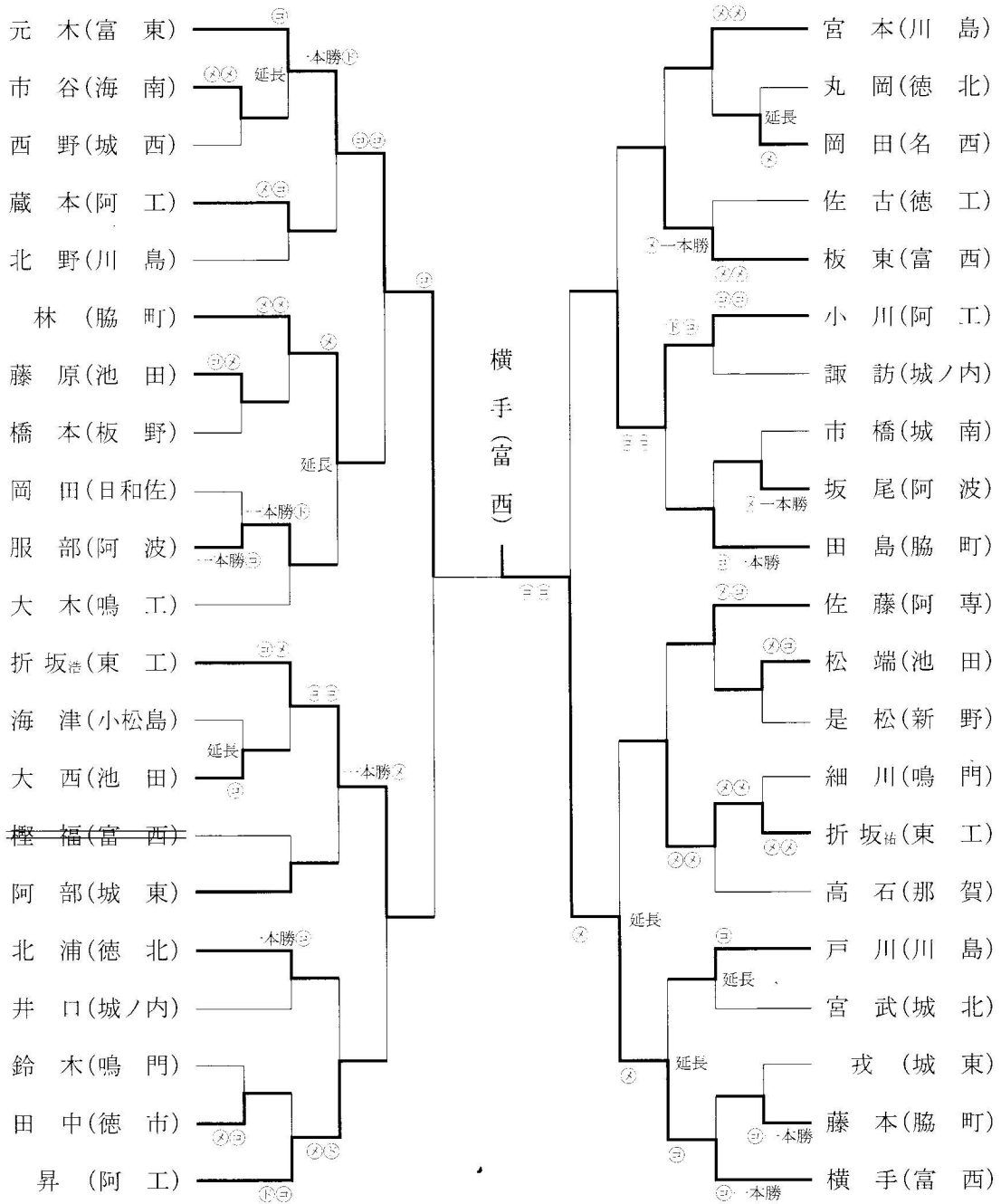
〈女子個人3組〉



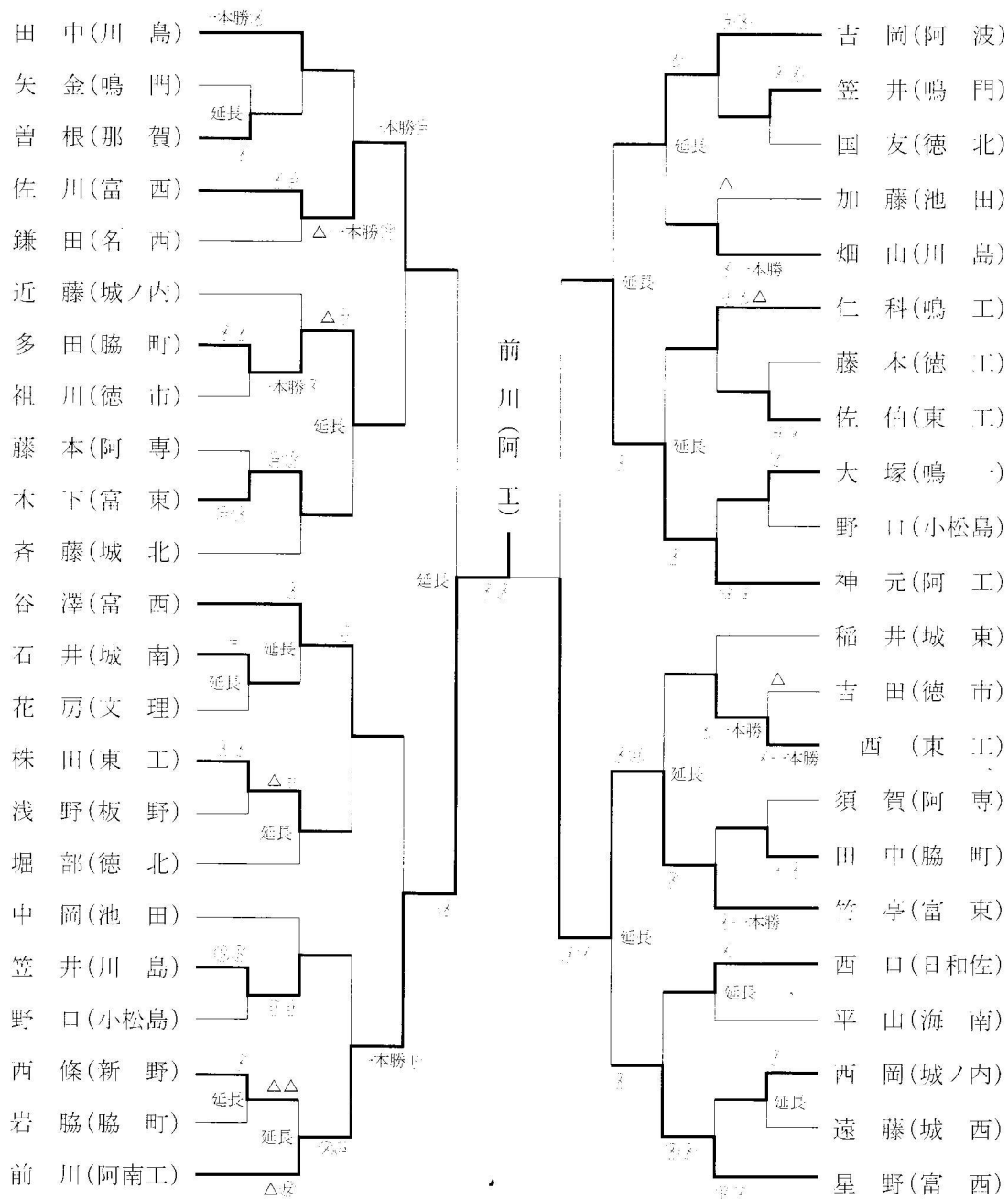
〈女子個人4組〉



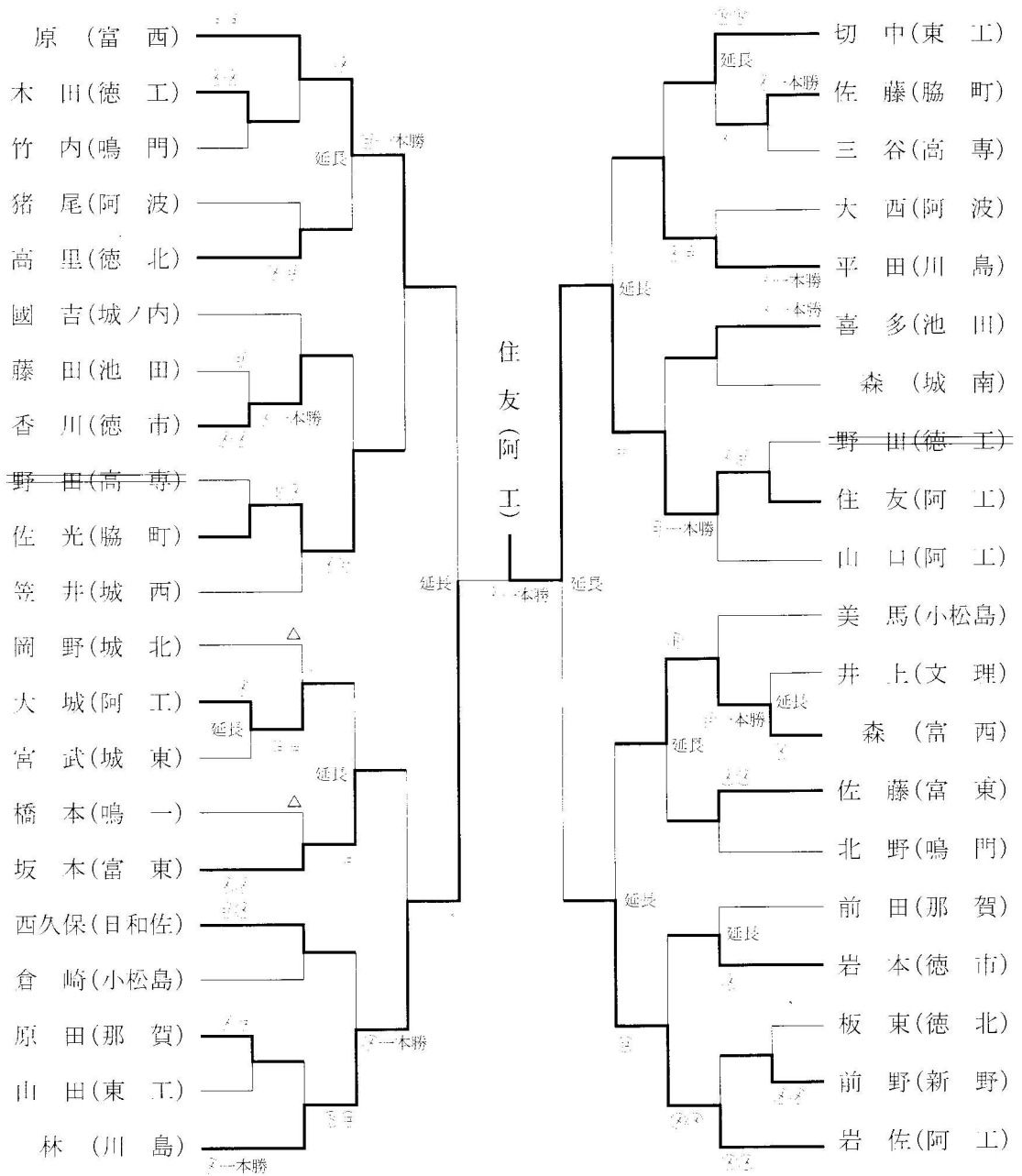
〈男子個人1組〉



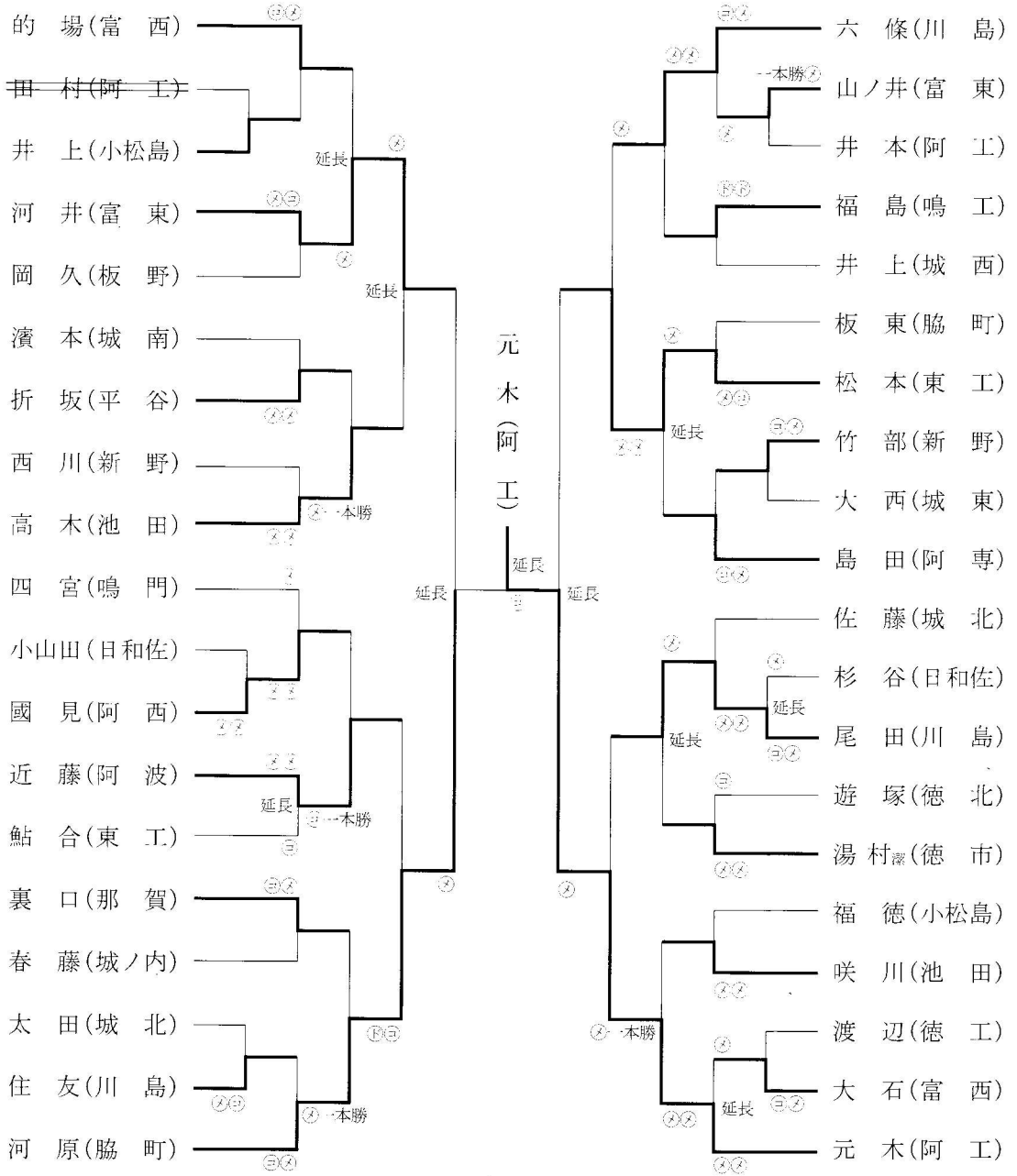
〈男子個人2組〉



〈男子個人3組〉



〈男子個人4組〉



決勝リーグ

(男子団体)

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡	原	横手	的場	樫福	星野	4 2
西	延長	延長	延長	延長	延長	
川						0 0
島	田中	林	宮本	平田	六條	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡	山ノ井	竹亭	河井	坂本	元木	0 0
東	延長	延長	延長	延長	延長	
阿南						0 0
工	前川	井本	住友	岩佐	昇	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡	原	横手	的場	樫福	星野	1 1
西	延長	延長	延長△	延長	本勝	
富岡						1 1
東	山ノ井	竹亭	河井	坂本	元木	

校名	先	次	中	副	大	得点
川	田中	林	宮本	平田	六條	3 3
島	一本勝	延長	延長	本勝	本勝	
阿南						1 1
工	前川	井本	住友	岩佐	昇	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡	原	横手	的場	大石	星野	4 2
西	延長	延長	延長	延長	一本勝	
阿南						3 2
工	前川	井本	住友	元木	昇	

校名	先	次	中	副	大	得点
川	田中	林	宮本	平田	六條	1 1
島	延長	延長	延長	延長	本勝	
富岡						2 2
東	山ノ井	竹亭	河井	坂本	元木	

(女子団体)

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東城	岸	瀬口	昇	橋本	美馬	9 5
	⊗ ⊗	○ ○	⊗ ⊗	⊗ ⊗	延長 ⊗	
富岡東	佐藤		朝田	横井	池添	0 0

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡西川	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	0 0
	△	△		△		
富岡島	後藤田	田中	高木	寺井	北川	2 2
	延長	延長	延長 ⊗	本勝 ⊗	延長	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	岸	瀬口	昇	橋本	美馬	7 4
	⊗ ⊗	⊗ ⊗	⊗ ⊗	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗	
富岡西	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	2 1
			⊗			

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	佐藤		朝田	横井	池添	0 0
富岡島	後藤田	田中	高木	寺井	北川	9 5
	本勝 ⊗	○ ○	⊗ ⊗	⊗ ⊗	⊗ ⊗	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	岸	瀬口	昇	橋本	美馬	2 1
	延長	延長	⊗ ⊗	延長	一本勝 ⊗	
富岡島	後藤田	田中	高木	寺井	北川	1 1
	△					

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	佐藤		朝田	横井	池添	1 0
	一本勝 ⊗		延長	延長 ⊗	延長	
富岡西	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	6 4
	⊗ ⊗	○ ○	⊗	⊗ ⊗		

決勝リーグ

(男子団体)

	富 西	川 島	富 東	阿 工	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
富 西		$\textcircled{\frac{4}{2}}$	$\boxed{\frac{1}{1}}$	$\textcircled{\frac{4}{2}}$	2.5	5	9	1
川 島	$\triangle\frac{0}{0}$			$\textcircled{\frac{3}{3}}$	1	4	4	3
富 東	$\boxed{\frac{1}{1}}$			$\boxed{\frac{0}{0}}$	2	3	3	2
阿 工	$\triangle\frac{3}{2}$	$\triangle\frac{1}{1}$	$\boxed{\frac{0}{0}}$		0.5	3	4	4

(女子団体)

	富 東	城 東	富 西	川 島	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
富 東		$\textcircled{\frac{9}{5}}$	$\textcircled{\frac{7}{4}}$	$\textcircled{\frac{2}{1}}$	3	10	18	1
城 東	$\triangle\frac{0}{0}$		$\triangle\frac{1}{0}$	$\triangle\frac{0}{0}$	0	0	1	4
富 西	$\triangle\frac{2}{1}$	$\textcircled{\frac{6}{4}}$		$\triangle\frac{0}{0}$	1	5	8	3
川 島	$\triangle\frac{1}{1}$	$\textcircled{\frac{9}{5}}$	$\textcircled{\frac{2}{2}}$		2	8	12	2

決勝リーグ

(男子個人)

	横手	前川	住友	元木	勝数	勝本数	得失点	順位
横手		△	⊗本勝	△延長	1	1	1	2
前川	⊗本勝		⊗下	⊗	3	5	3	1
住友	△	△		⊗本勝	1	1	1	3
元木	⊗延長本勝	△	△		1	1	1	4

	選手名		選手名
1	住友	一本勝⊗	元木
2	横手		一本勝⊗△前川
3	前川	⊗	元木
4	横手	一本勝⊗	住友
5	前川	⊗	住友
6	横手	延長⊗	元木
7	住友	一本勝⊗	元木

	選手名		選手名
1	美馬	延長⊗	岸
2	昇	延長	河田
3	河田	延長⊗	岸
4	昇	一本勝	美馬
5	河田		一本勝⊗美馬
6	昇	延長	岸

男子最優秀選手 (前川 剛志)

女子最優秀選手 (昇 葉子)

三位決定戦
住友⊗—元木

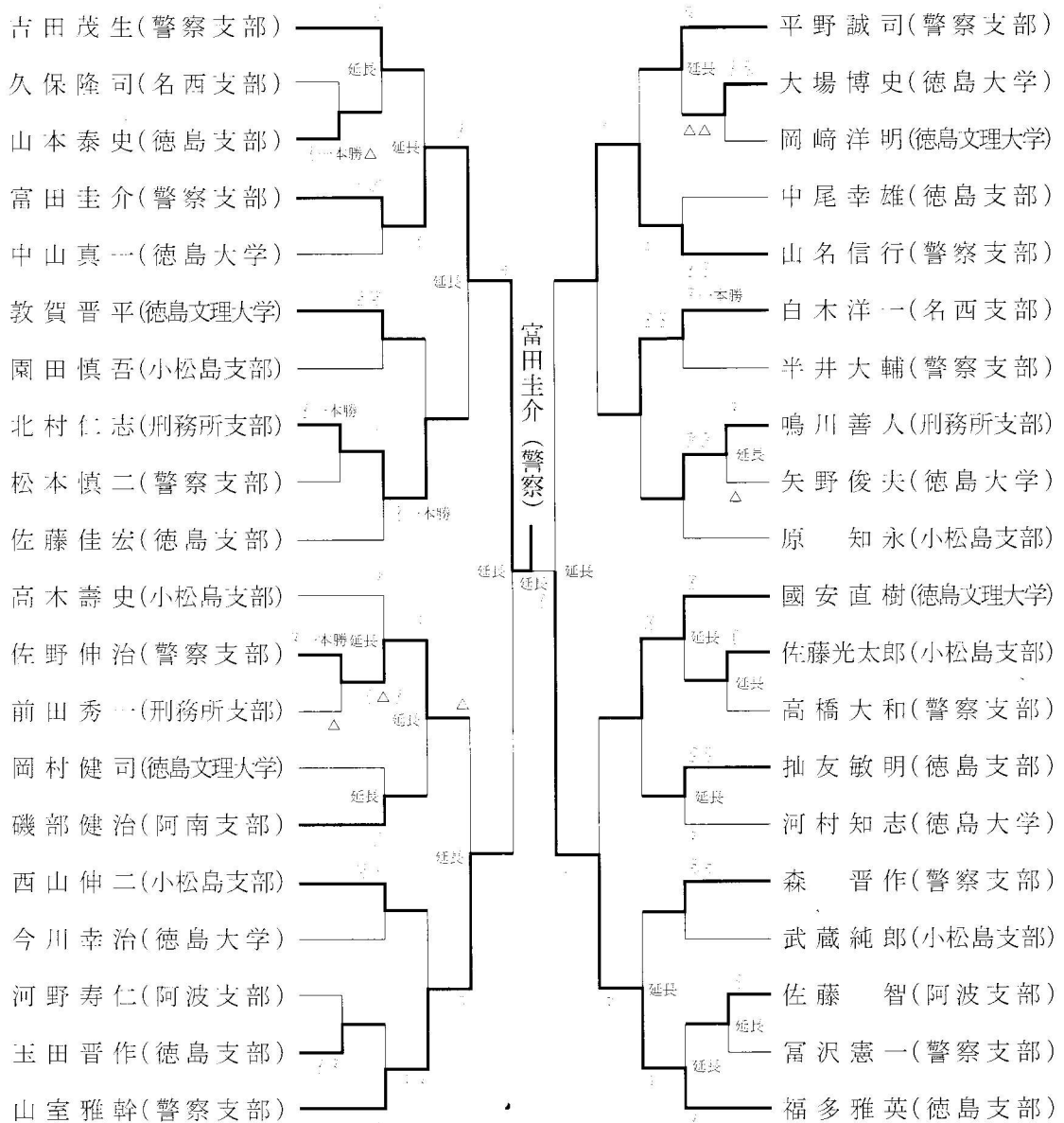
(女子個人)

	昇	河田	美馬	岸	勝数	勝本数	得失点	順位
昇		⊗延長	⊗一本勝	⊗延長	3	3	3	1
河田	△延長		△	△延長	0	0	0	4
美馬	△	⊗一本勝		△延長	1	1	1	3
岸	△延長	⊗延長	⊗延長		2	2	2	2

第13回 徳島県剣道選手権大会兼全日本剣道選手権大会予選会

優勝 富田圭介 (警察支部)
 準優勝 福多雅英 (徳島支部)
 第三位 山室雅幹 (警察支部)
 第三位 山名信行 (警察支部)

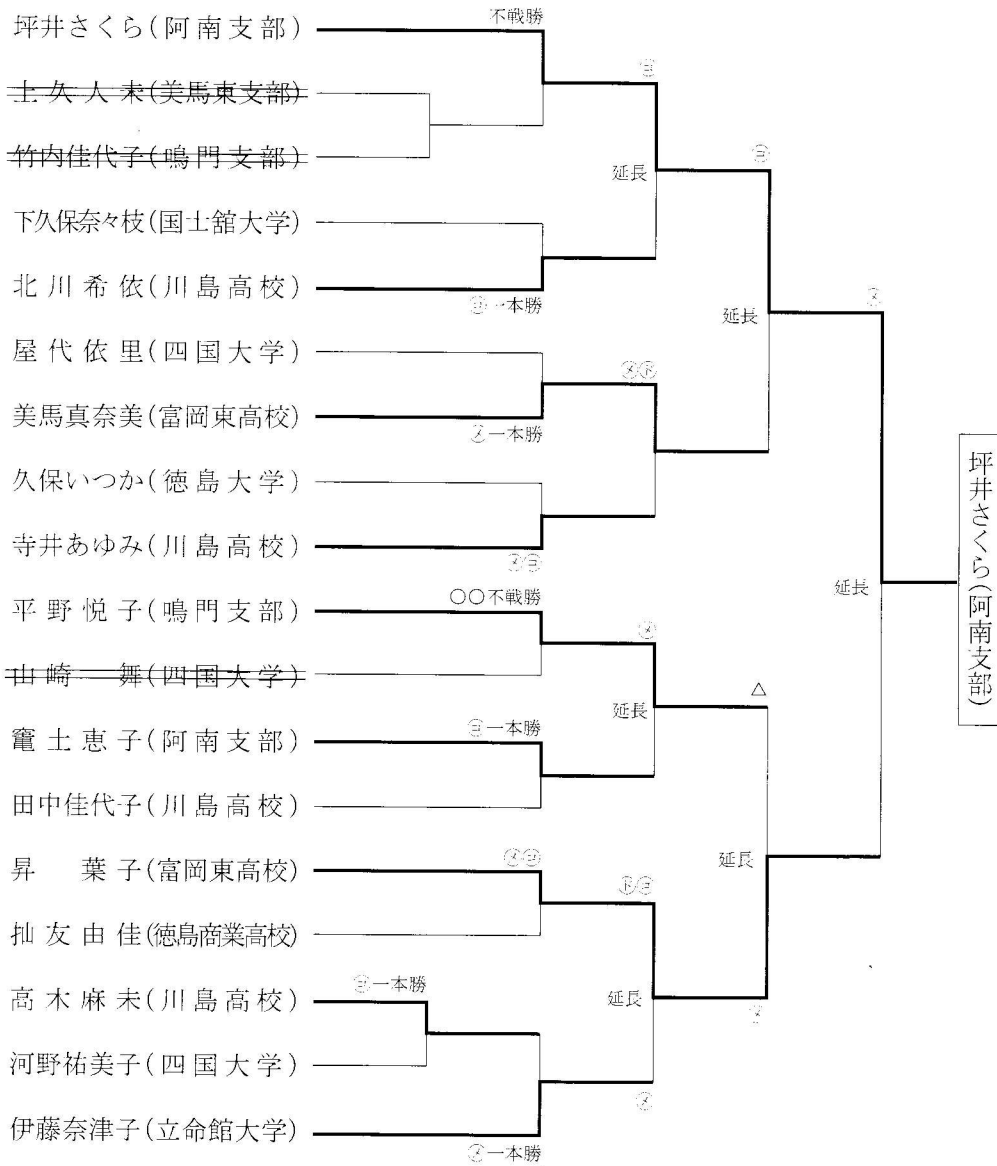
日時 平成13年7月1日(日)午前9時
 場所 鳴門武道館



第4回 徳島県女子選手権大会

優勝 坪井 さくら (阿南支部)
 準優勝 昇 葉子 (富岡東高校)
 第三位 美馬 真奈美 (富岡東高校)
 第三位 平野 悦子 (鳴門支部)

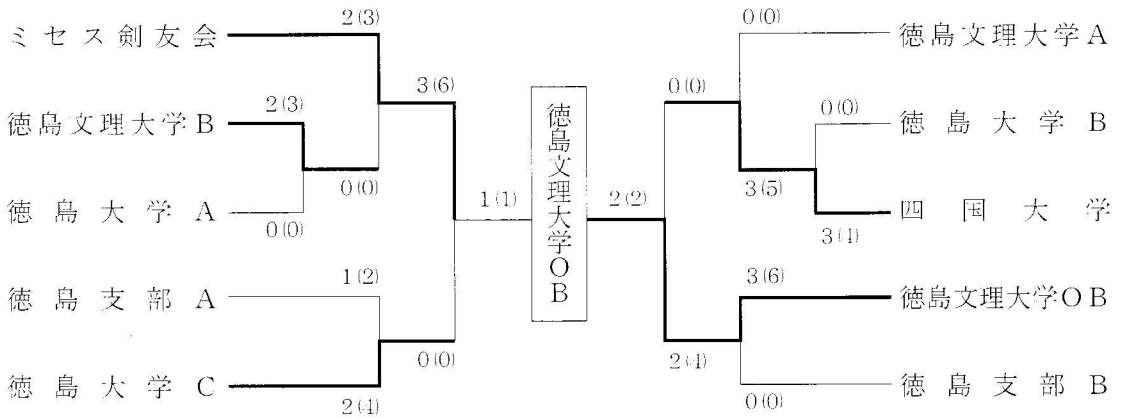
日時 平成13年7月1日(日)午前9時
 場所 鳴門武道館



第22回 徳島県女子剣道大会

〈団体戦〉

日時 平成13年6月24日(日)午前9時
場所 徳島県立中央武道館



決勝戦

	先鋒	中堅	大将	代表	
ミセス剣友会	平野	竹内	森本	平野	1/1
	一本勝		一本勝	延長	
徳島文理大学OB	佐々木	西村	井若	西村	2/2

準決勝

	先鋒	中堅	大将	
ミセス剣友会	平野	竹内	森本	6/3
	一本勝	一本勝	一本勝	
徳島大学C	高熊	酒井	阿部	0/0

準決勝

	先鋒	中堅	大将	
徳島文理大学OB	佐々木	西村	井若	4/2
		一本勝	一本勝	
四国大学	屋代	小川	河野	0/0

〈個人戦〉

〈二段以下の部〉



〈個人戦〉

〈三段以上の部〉



第 55 回 徳島県中学校夏季総合体育大会

日 時 平成 13 年 7 月 22 日(日)午前 9 時
場 所 鳴 門 武 道 館

① 団体戦

	男 子	女 子
優 勝	徳 島 文 理 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校
準優勝	相 生 中 学 校	相 生 中 学 校
第 3 位	坂 野 中 学 校	那 賀 川 中 学 校
第 3 位	石 井 中 学 校	鴨 島 第 一 中 学 校

[男子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	代表戦	勝敗
徳 島 文 理 中	玉 田 越	鎌 田	中 村	花 房	玉 田 康	玉田康	1 代表勝
	⊖ ⊕ 延長		⊖ 一本勝	⊖ ⊕ 延長		⊗	
相 生 中	⊗ ⊖ 延長		⊖ 一本勝	△	⊖ ⊕ 延長		1
	福 永	岩 沙	新 田	樫 本	川 口	川口	

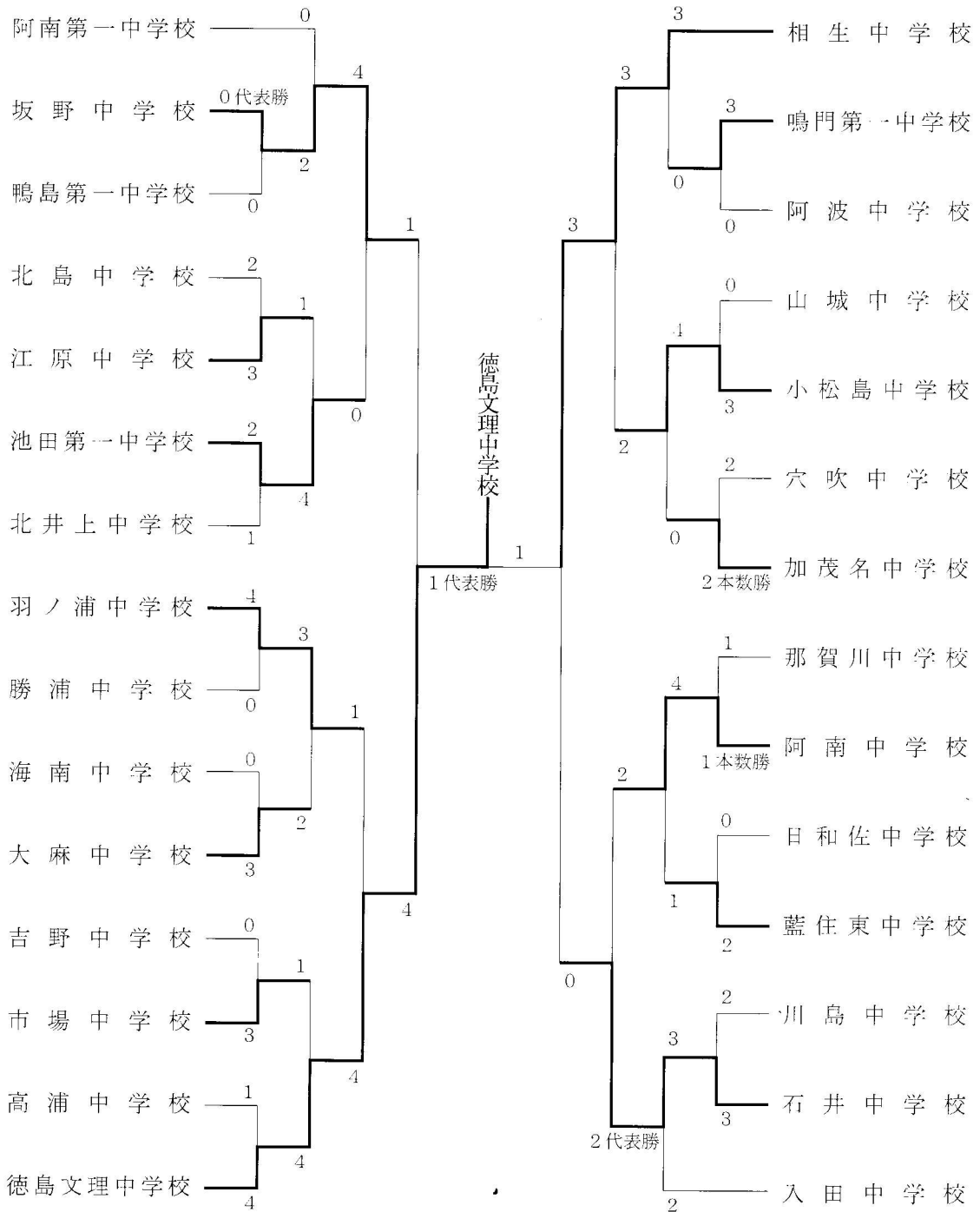
[女子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
阿 南 一 中	宮 崎	賀 上	島 田	近 藤	吉 岡	2
	⊖ ⊕ 延長		⊗ 一本勝	⊖ ⊕ 延長		
相 生 中	⊖ ⊕ 延長		⊖ 一本勝	⊖ ⊕ 延長		1
	前 川	福 永	谷 澤	井 東	樫 本	

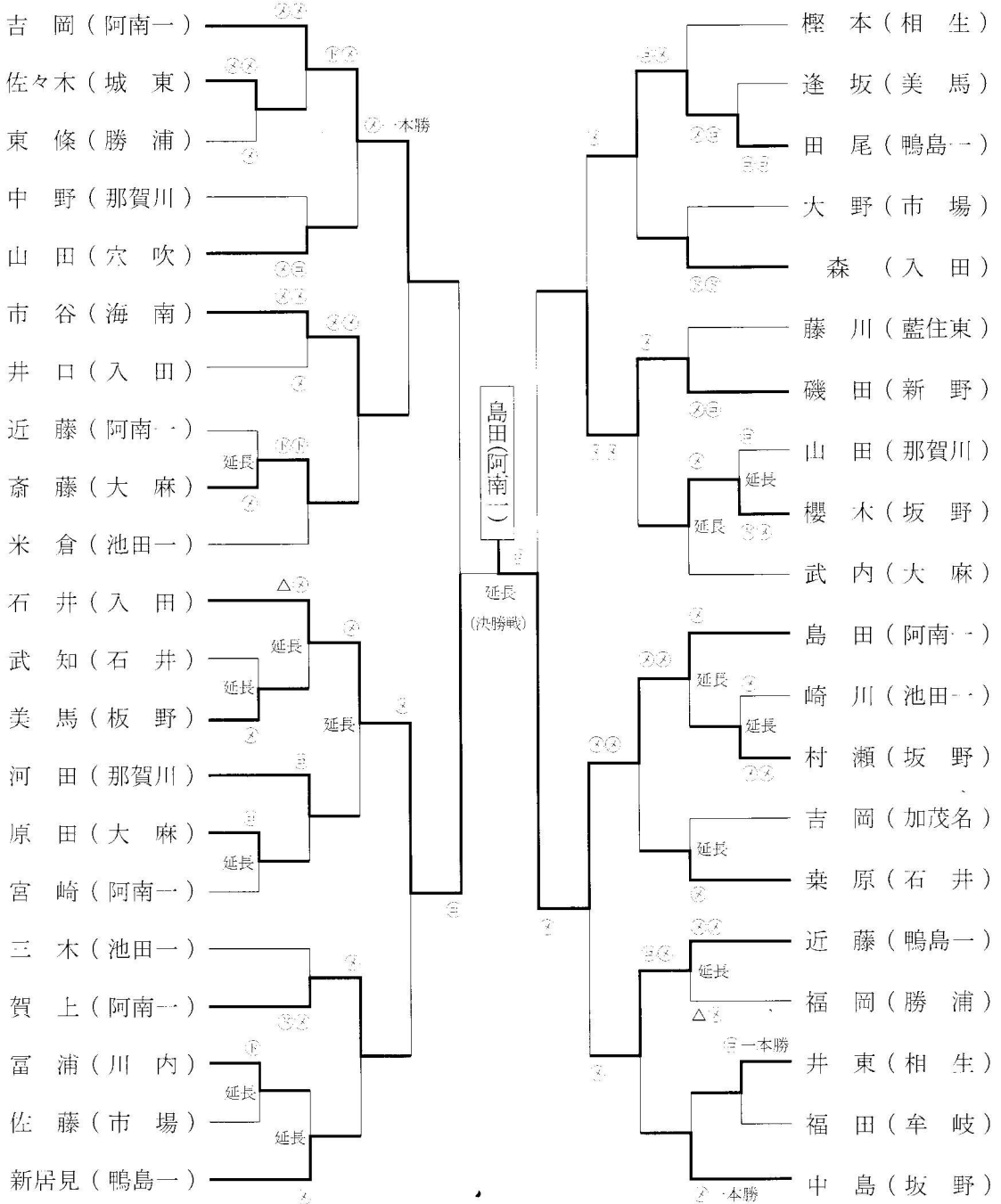
② 個人戦

順位	男 子	学 校 名	順位	女 子	学 校 名
優 勝	大 石 洋 史	阿南第二	優 勝	島 田 和 佳	阿南第一
準優勝	中 村 文 人	徳島文理	準優勝	石 井 由 美	入 田
第3位	山 本 義 裕	鳴門第一	第3位	吉 岡 穰	阿南第一
第3位	玉 田 康 朗	徳島文理	第3位	磯 田 沙 希	新 野

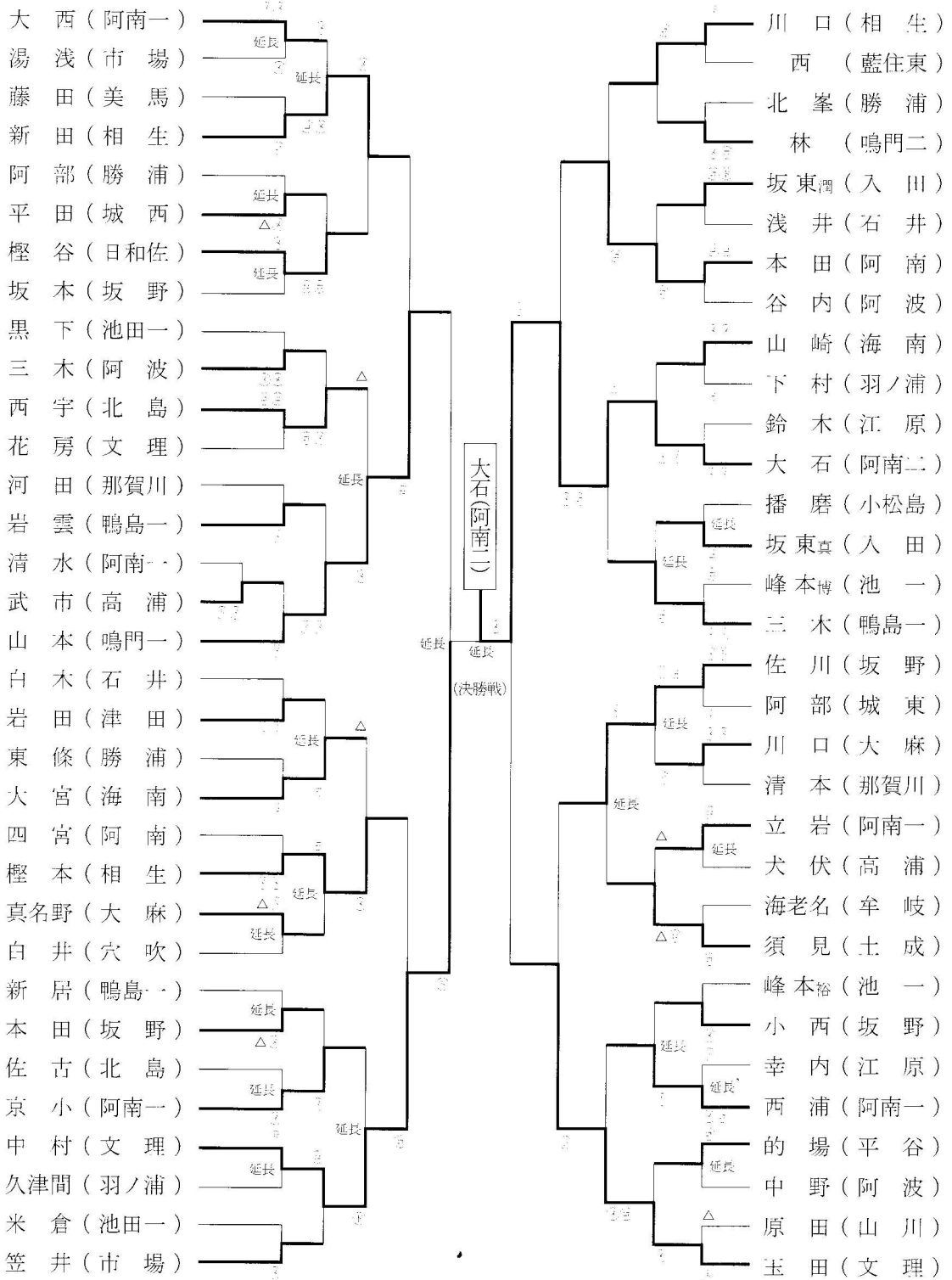
『男子組み合わせ』



『女子個人組み合わせ』



『男子個人組み合せ』



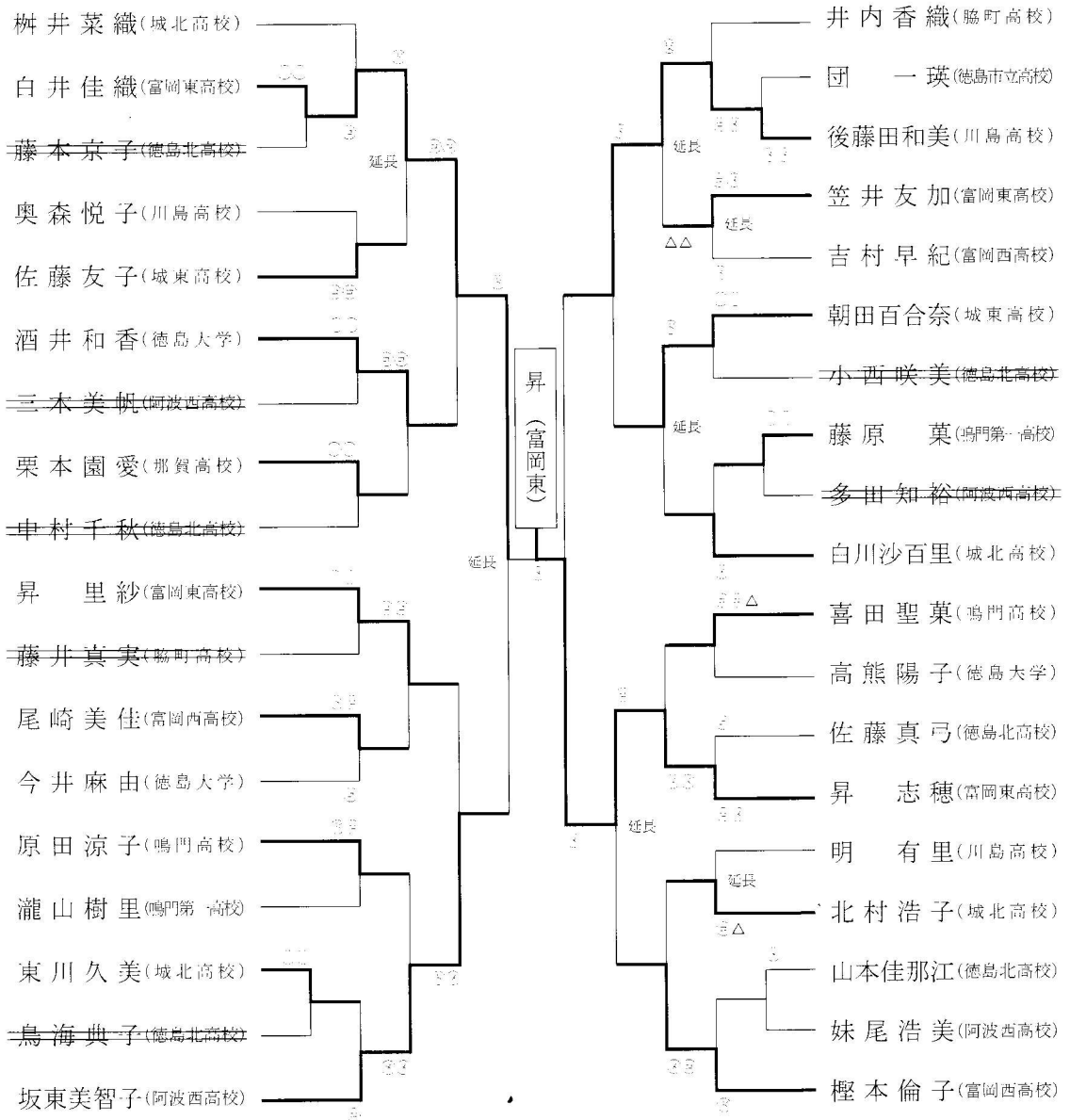
第 25 回 徳島県剣道段別選手権大会

日 時 平成 13 年 9 月 2 日(日)午前 9 時
場 所 鳴 門 武 道 館

初段の部 (女子)

優 勝 昇 志穂 (富岡東高)

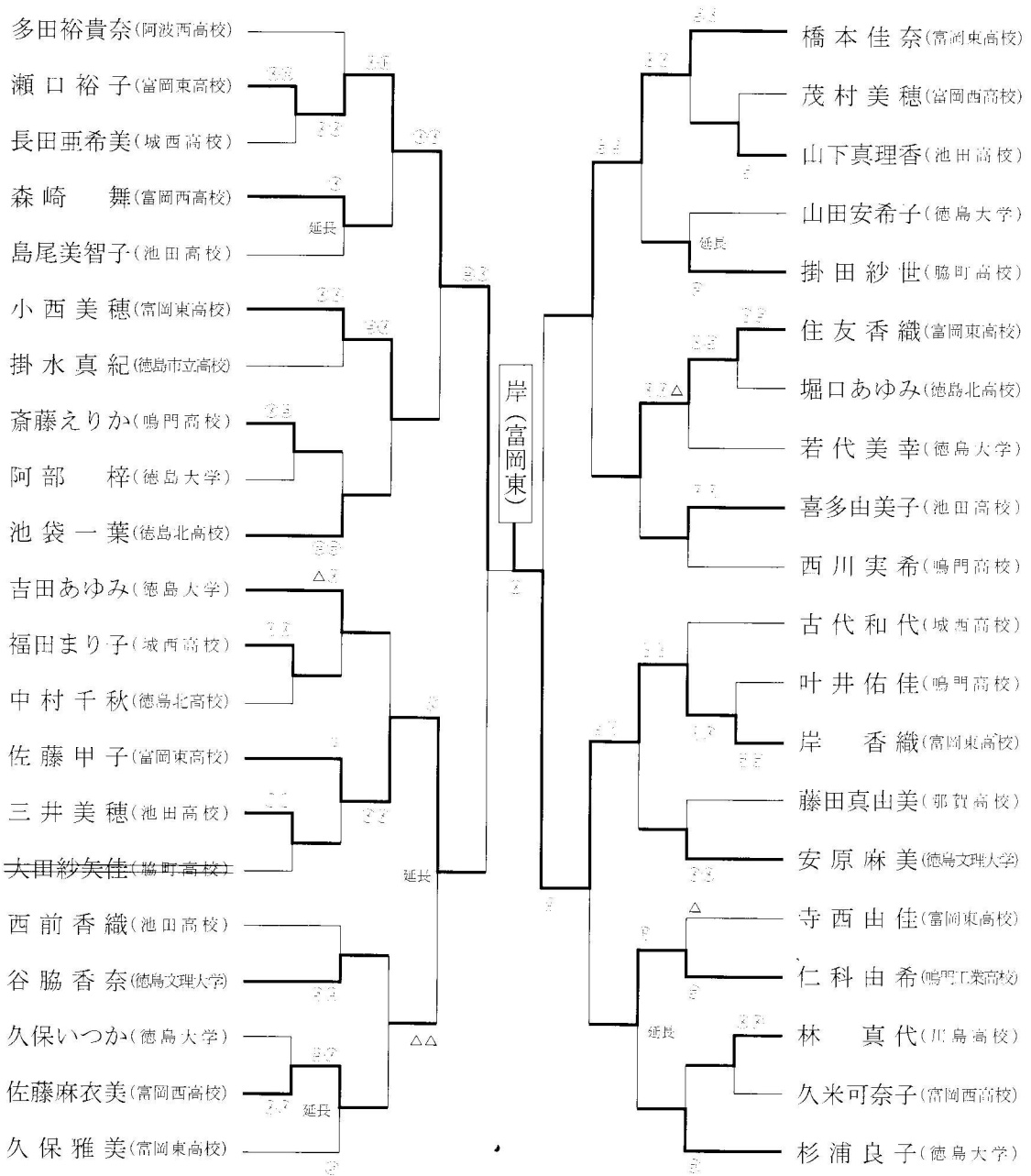
準優勝 白井佳織 (富岡東高)



二段の部（女子）

優勝 岸 香織（富岡東）

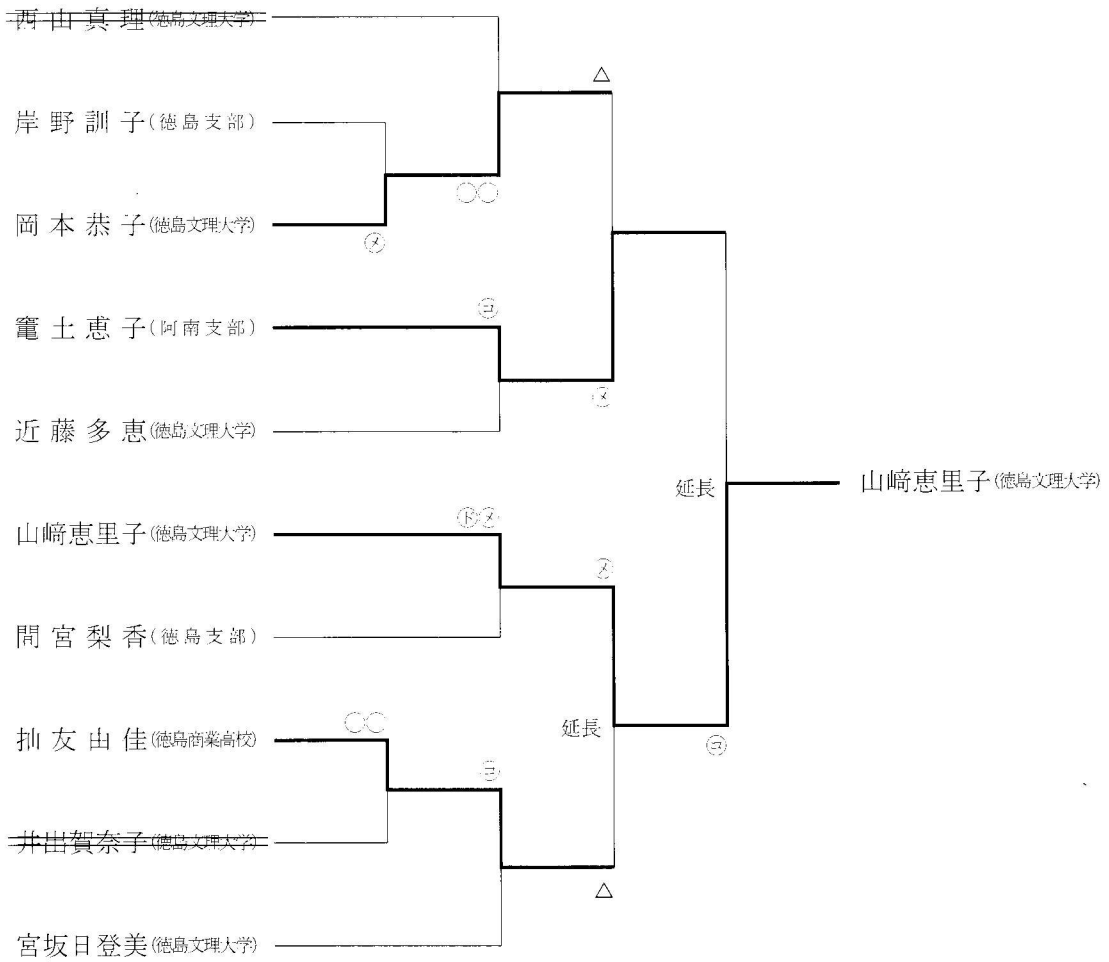
準優勝 瀬口裕子（富岡東）



三段の部（女子）

優勝 山崎恵里子（徳島文理大学）

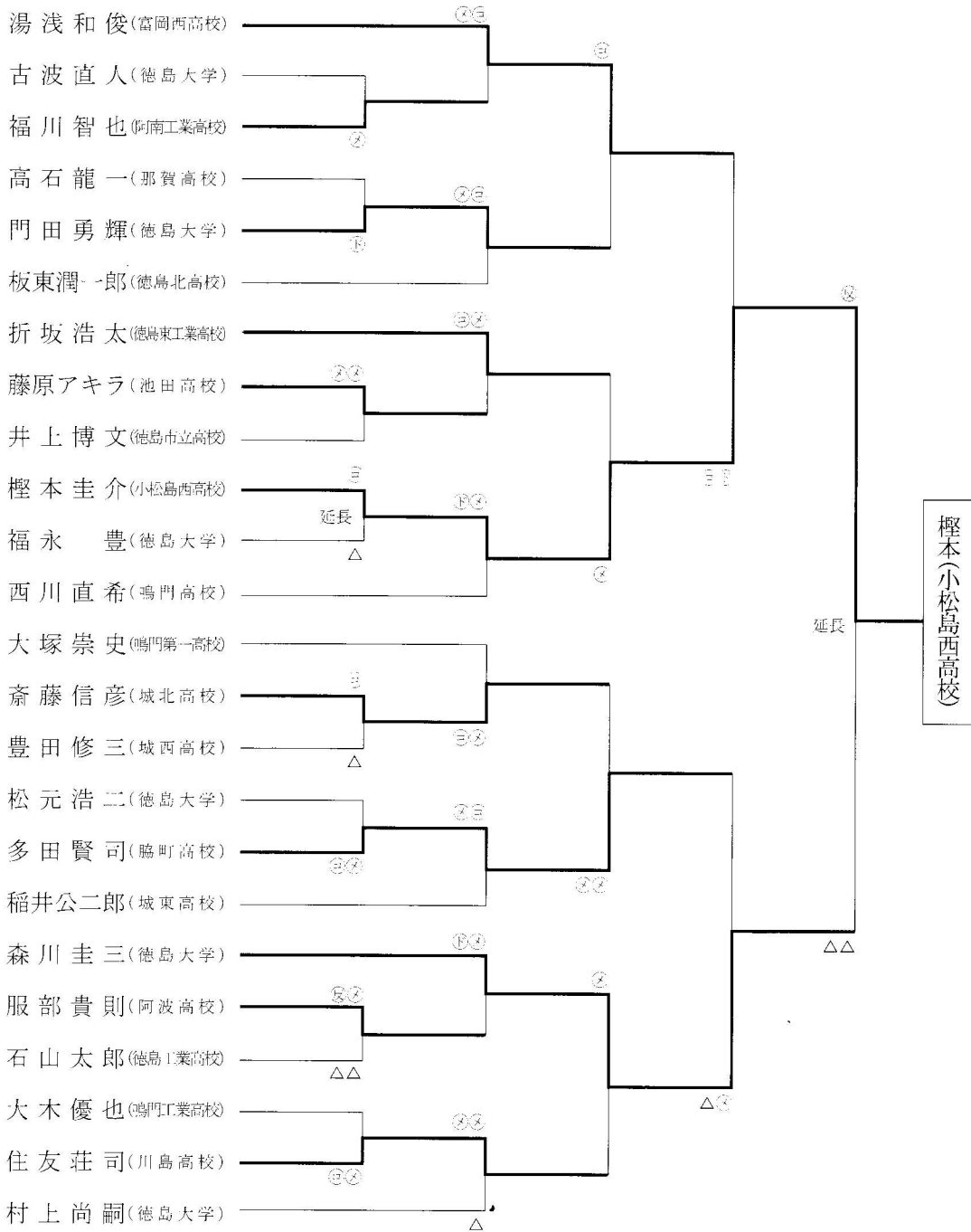
準優勝 竈土恵子（阿南支部）



初段の部（男子）

優勝 **樫本圭介**（小松島西高校）

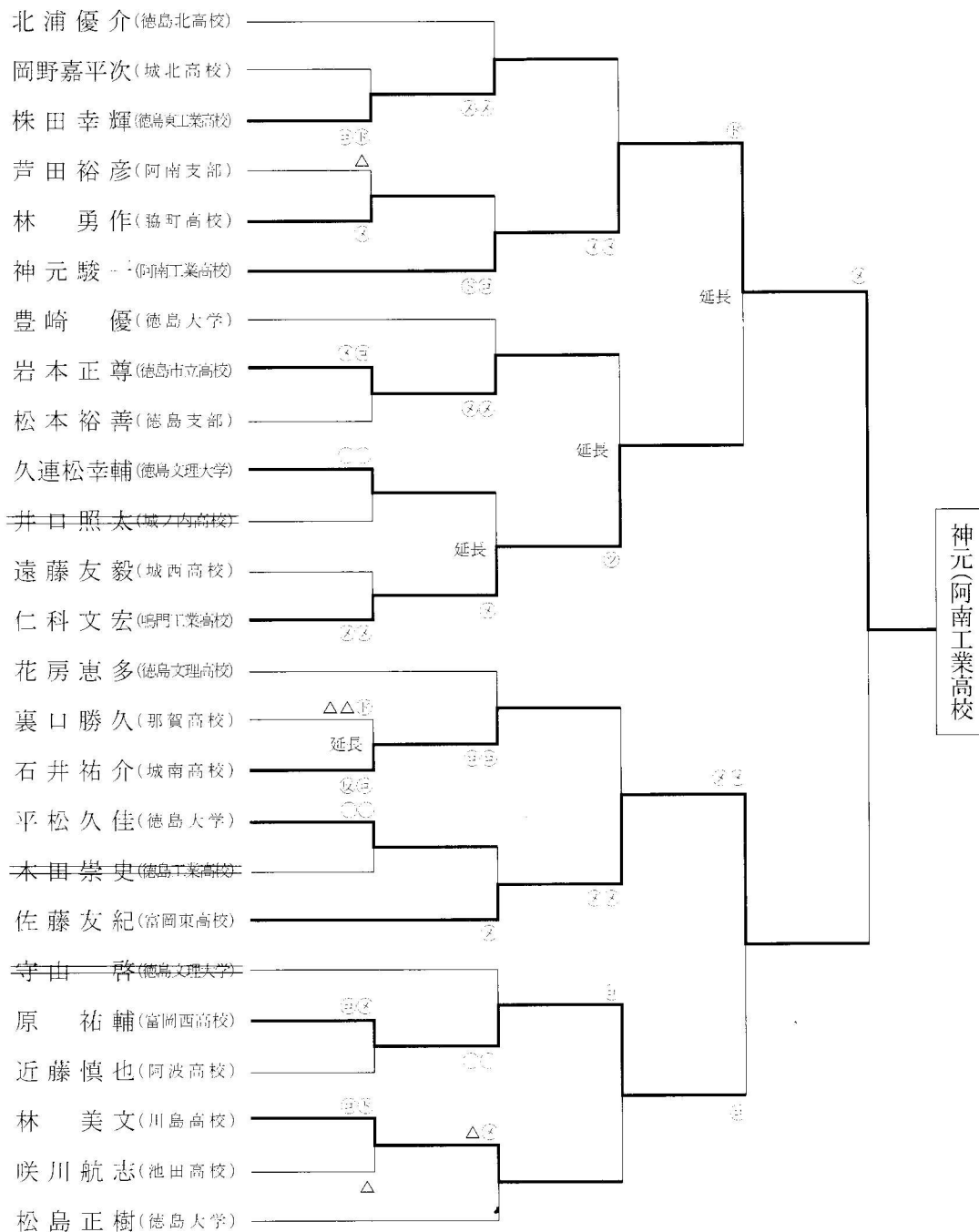
準優勝 **森川圭三**（徳島大学）



二段の部（男子）

優勝 神元駿一（阿南工業高校）

準優勝 佐藤友紀（富岡東高校）



三段の部（男子）

優勝 矢野俊夫（徳島大学）

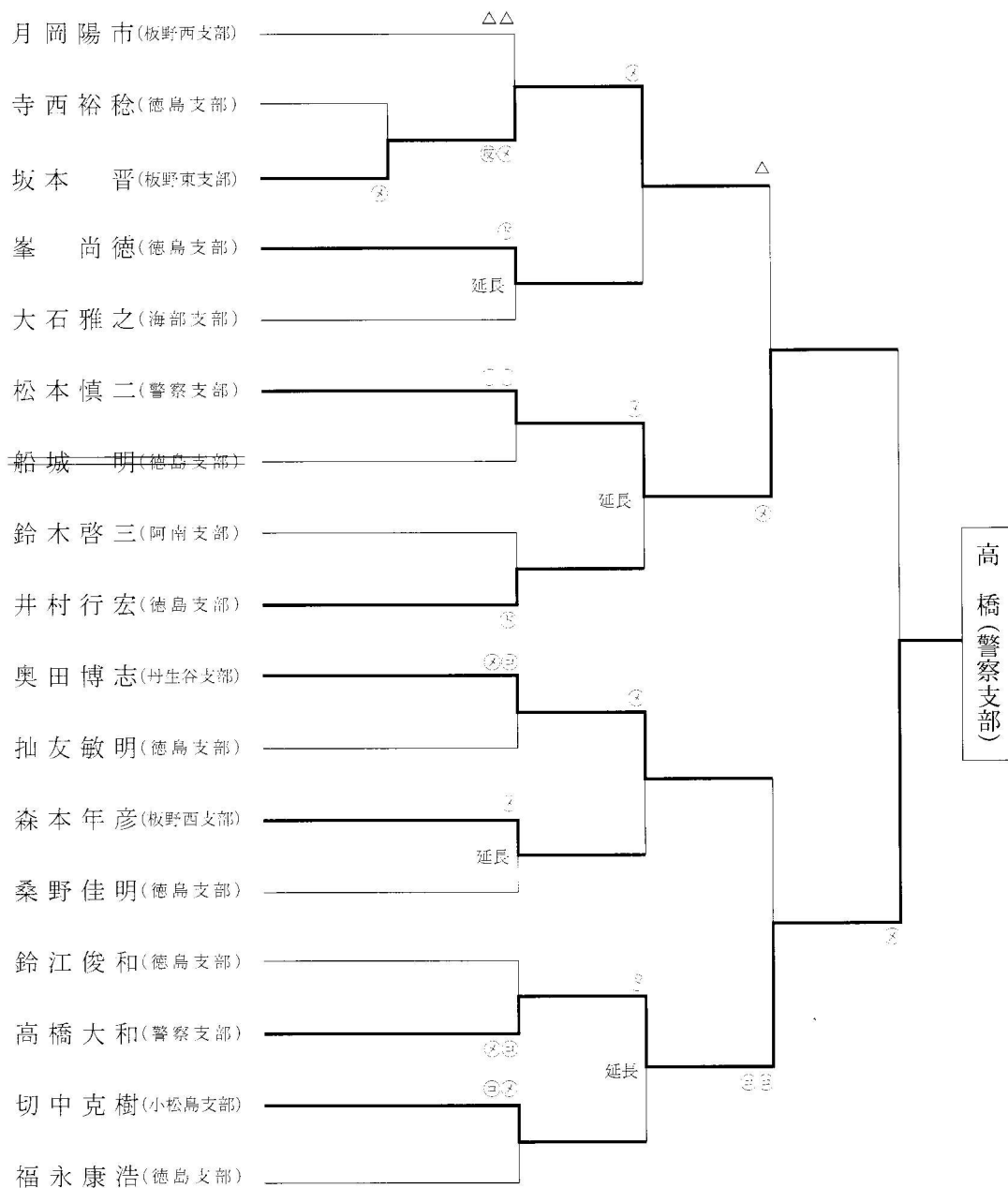
準優勝 住友直城（阿南工業高校）



四段の部（男子）

優勝 高橋大和（警察支部）

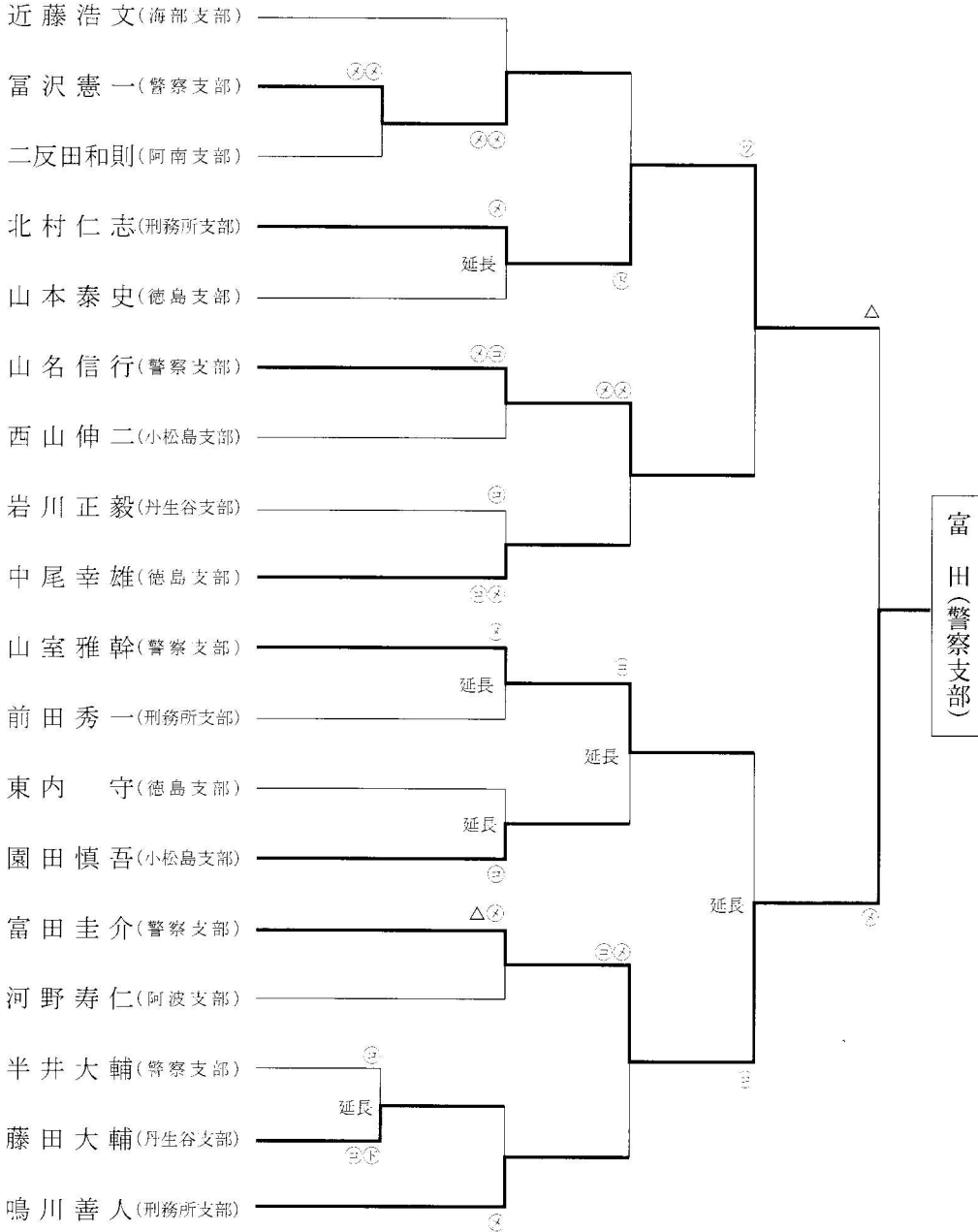
準優勝 松本慎二（警察支部）



五段の部（男子）

優勝 富田圭介（警察支部）

準優勝 北村仁志（刑務所支部）



六段の部（男子）

リーグ戦

	山 田	生 田	佐 藤		順 位
山 田		⊖	△	$\frac{1}{1}$	2
生 田	△		△	$\frac{0}{0}$	3
佐 藤	⊗	⊗		$\frac{2}{2}$	1

①	山田	⊖	<u>延長</u>	生田
②	生田		<u>延長</u>	⊗ 佐藤
③	山田		<u>延長</u>	⊗ 佐藤

優勝 佐藤 佳 広 (徳島支部)

準優勝 山田 浩 史 (徳島支部)

第 30 回 徳島県社会人剣道大会

日 時 平成 13 年 10 月 21 日(日) 午前 9 時
場 所 鳴 門 武 道 館

A	徳島至誠館	岫雲館	木頭錬心館	勝者数	勝本数	順位	
徳島至誠館		10 5	6 3	2	8	16	1
岫雲館	△ 0		△ 0	0	0	0	3
木頭錬心館	△ 1	6 3		1	4	8	2

C	阿南支部 D	美馬西支部 A	板野西支部 A	勝者数	勝本数	順位	
阿南支部 D		3 2	1 2	0	4	7	3
美馬西支部 A	3 2		5 3	1	5	8	1
板野西支部 A	1 2	△ 2		0	4	8	2

E	徳島錬心館	美馬剣友会	阿南支部大野	勝者数	勝本数	順位	
徳島錬心館		1 2	1 2	1	4	8	1
美馬剣友会	△ 1		4 2	1	3	6	2
阿南支部大野	1 2	△ 1		0	3	7	3

G	阿波支部 B	徳島刑務所 B	阿南支部 E	勝者数	勝本数	順位	
阿波支部 B		5 3	4 3	2	6	9	1
徳島刑務所 B	△ 2		2 1	1	5	10	2
阿南支部 E	△ 0	△ 1		0	1	2	3

B	阿波支部 A	名月会	徳島支部 A	勝者数	勝本数	順位	
阿波支部 A		8 1	6 3	2	7	14	1
名月会	△ 0		△ 1	0	1	3	3
徳島支部 A	△ 0	8 1		1	4	9	2

D	小松島支部(竹)	板野東支部	海部支部 C	勝者数	勝本数	順位	
小松島支部(竹)		7 3	1 1	1	4	8	2
板野東支部	△ 1		5 3	1	4	8	1
海部支部 C	1 1	△ 2		0	3	4	3

F	小松島支部(梅)	加茂名剣道	三好(圃)	勝者数	勝本数	順位	
小松島支部(梅)		△ 1	3 2	1	3	5	2
加茂名剣道	2 2		△ 1	1	3	4	3
三好(圃)	△ 1	5 2		1	3	7	1

H	名西支部	海部支部 A	阿波支部 C	勝者数	勝本数	順位	
名西支部		5 3	9 2	2	5	10	1
海部支部 A	△ 0		△ 1	0	1	3	3
阿波支部 C	△ 2	3 1		1	3	6	2

予選リーグ

代表戦

I	美馬東支部 B	阿南支部 A	入田錬成会	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
美馬東支部 B		$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{2}$	0	2	6	3
阿南支部 A	$\frac{8}{5}$		$\frac{8}{4}$	2	9	16	1
入田錬成会	$\frac{5}{2}$	$\frac{\Delta}{1}$		1	3	6	2

K	海部支部 B	阿南支部 C	徳島支部 B	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
海部支部 B		$\frac{5}{2}$	$\frac{6}{3}$	1	5	11	1
阿南支部 C	$\frac{5}{2}$		$\frac{1}{1}$	1	3	9	2
徳島支部 B	$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{\Delta}{1}$		0	2	4	3

M	三好(林)	蔵本剣道クラブ	鳴門支部	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
三好(林)		$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{\Delta}{0}$	0	1	4	3
蔵本剣道クラブ	$\frac{4}{2}$		$\frac{\Delta}{0}$	1	2	4	2
鳴門支部	$\frac{7}{4}$	$\frac{6}{3}$		2	8	13	1

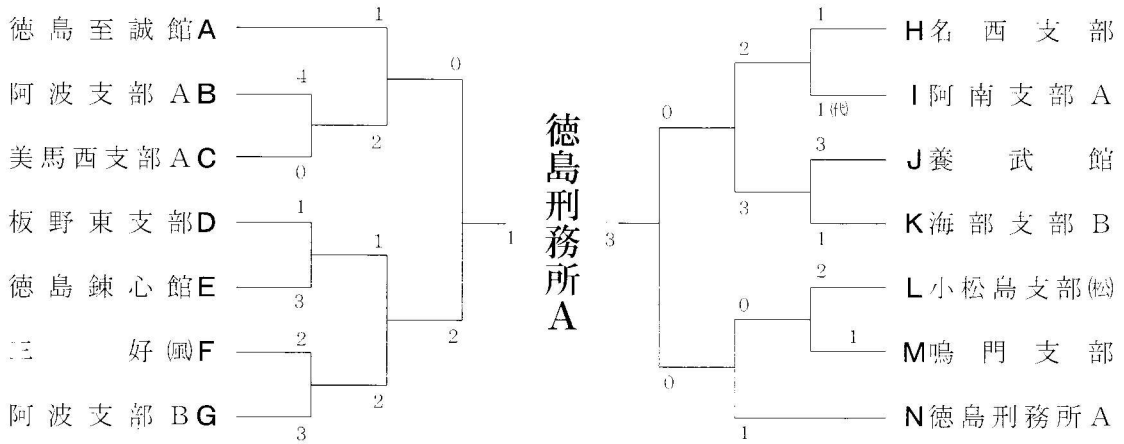
予選リーグ

J	板野西支部 B	養武館	美馬西支部 B	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
板野西支部 B		$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{10}{5}$	1	5	11	2
養武館	$\frac{6}{3}$		$\frac{10}{5}$	2	8	16	1
美馬西支部 B	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{0}$		0	0	0	3

L	小松島支部(松)	丹生谷支部	阿南支部 B	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
小松島支部(松)		$\frac{1}{1}$	$\frac{9}{5}$	1	6	10	1
丹生谷支部	$\frac{1}{1}$		$\frac{\Delta}{1}$	0	2	5	3
阿南支部 B	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{5}{3}$		1	3	6	2

N	徳島刑務所 A	振武館	美馬東支部 A	勝	勝	勝	順
				者	者	本	位
				者数	者数	本数	位
徳島刑務所 A		$\frac{5}{2}$	$\frac{6}{1}$	2	6	11	1
振武館	$\frac{\Delta}{2}$		$\frac{6}{1}$	1	6	10	2
美馬東支部 A	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{1}$		0	1	2	3

決勝トーナメント



準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
阿波 A	佐藤	長井	河野	佐藤	塩田	0
阿波 B	金野	篠原	兼松	藤井	中尾	2

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
養武館	大内	山田	熊沢	米倉	儀宝	0
刑務所 A	前田	北村	鳴川	片山	中村	2

決勝戦

- 優勝 刑務所支部 A
- 準優勝 阿波支部 B
- 第3位 阿波支部 A
- 第3位 養武館

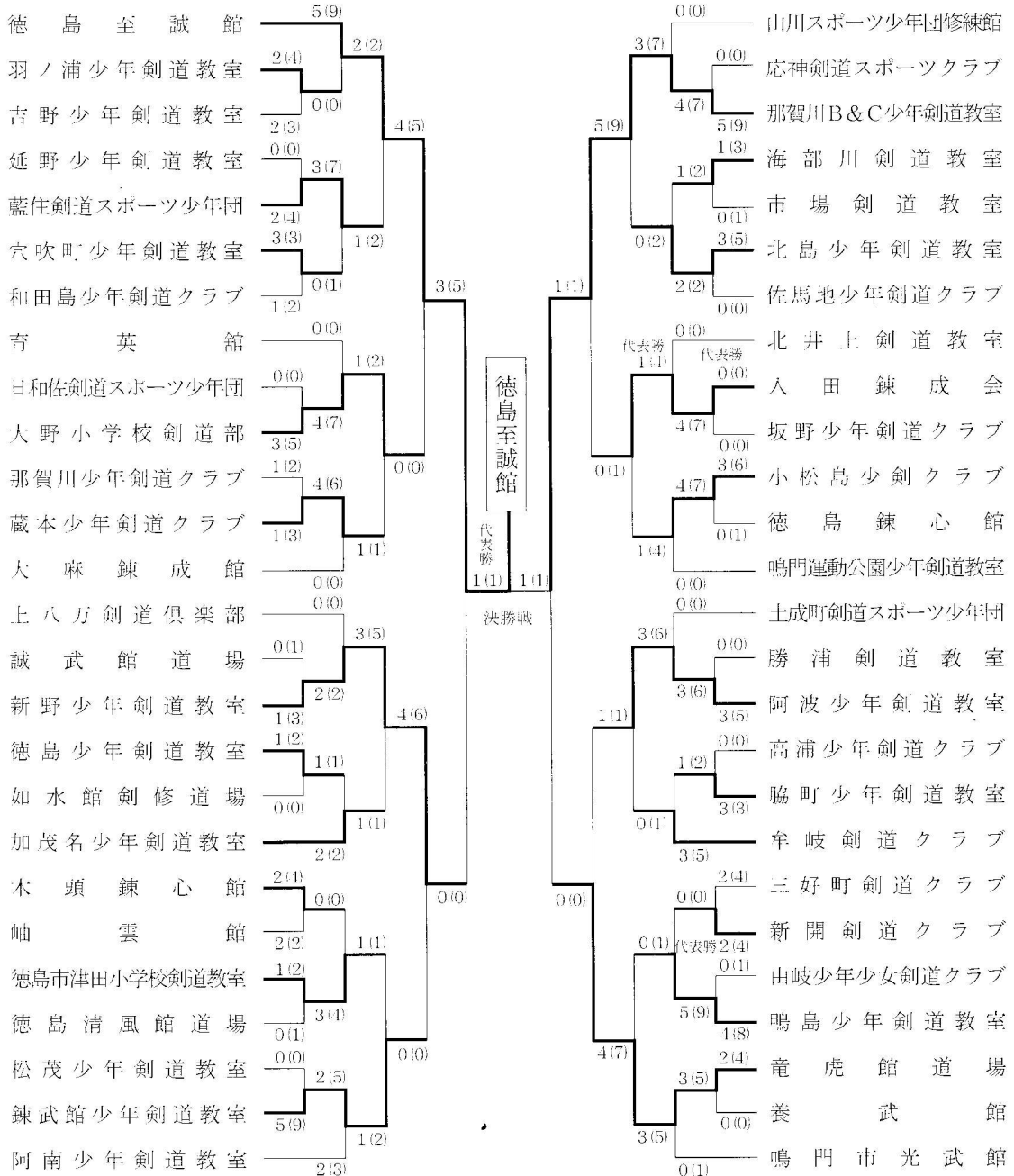
チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
阿波支部 B	金野	篠原	兼松	藤井	中尾	1
刑務所 A	前田	北村	鳴川	片山	中村	3

第12回 徳島県小・中学校剣道強化練成大会

少年の部 (52 チーム)

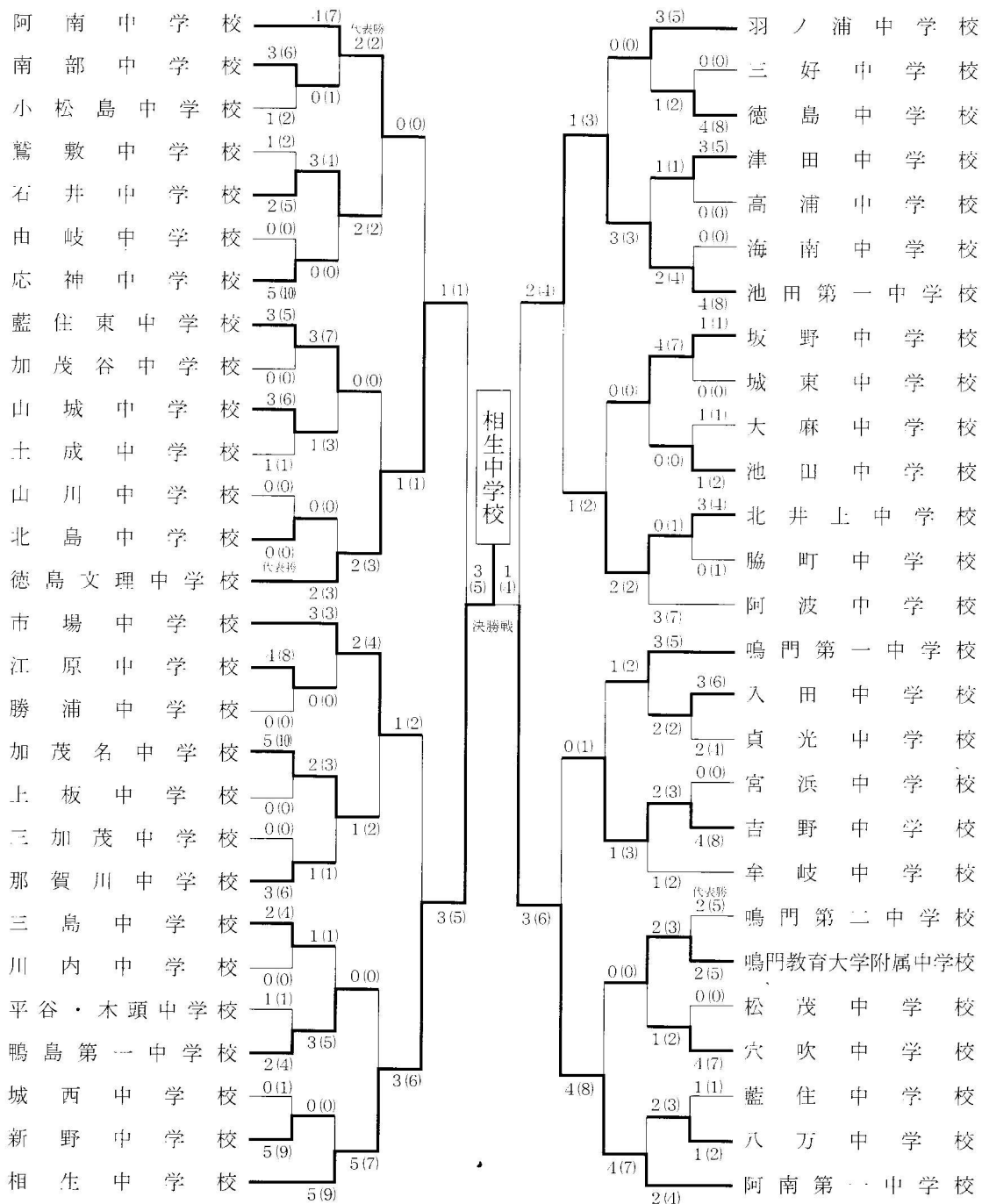
日時 平成14年1月20日(日)午前9時
場所 鳴門県民体育館

優勝 徳島至誠館
準優勝 那賀川B&C少年剣道教室わかあひ会
第3位 新野少年剣道教室
第3位 竜虎館道場



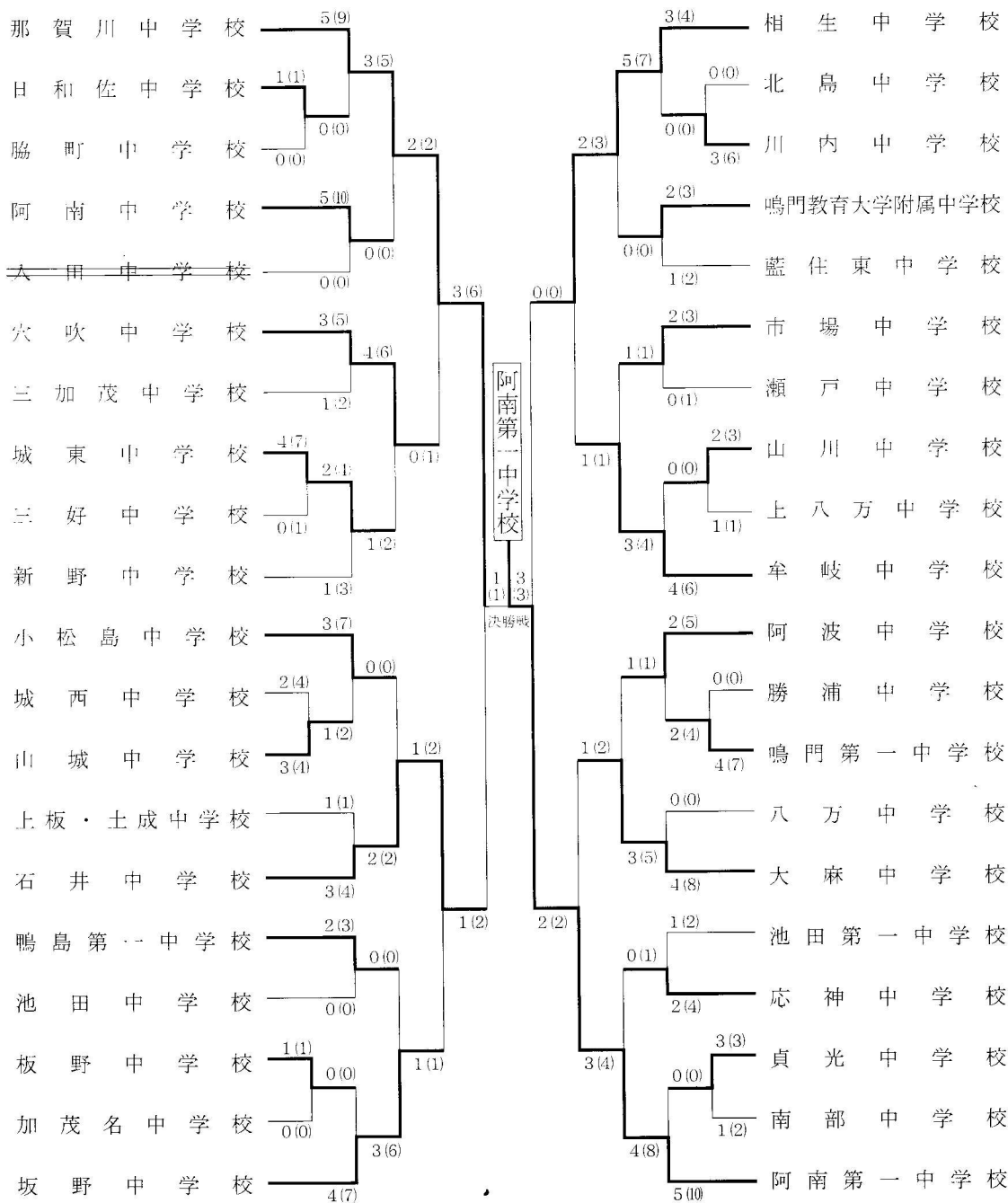
中学校男子(55チーム)

優勝 相生中学校
 準優勝 南島田第
 第3位 阿徳池
 第3位 生第
 中一理一
 中中
 学学
 校校
 校校



中学校女子(40チーム)

優勝 阿南第一中学校
 準優勝 那賀川中学校
 第3位 石井中学校
 第3位 相生中学校



準決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
徳島至誠館	鎌田	湯浅	松本	曾根	村井	
	一本勝	一本勝	△	△	△	5 3
新野少年剣道教室			△	△		△ 0 0
	河井	樋口	森崎	木村	久田	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
那賀川B&G剣道教室	星野	伊勢	中野	那佐	谷口	
	△	△	一本勝	△	△	1 1
竜虎館			△	△		△ 0 0
	福川	前川	福永	西田	元木	

準決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
那賀川中学校	長地	横山	河田	中野	横山佳	
	△	△	△	△	△	6 3
石井中学校	△		△			△ 2 1
	隅田	白木	姫野	渡部	乗原	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
相生中学校	福永	西本	井東	前川	檉本	
	△	△	△	△	△	△ 0 0
阿南第一中学校			一本勝	一本勝		2 2
	賀上	近藤	細川	坂本	島田	

準決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
徳島文理中学校	西岡	片山	鎌田	津川	玉田	
			△	△	一本勝	△ 1 1
相生中学校	一本勝	△	△	△		5 3
	松本	森	岩沙	福永	新田	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
池田第一中学校	大西	米倉	寺野	喜多	峰本	
	△	△	△	△	△	△ 4 2
阿南第一中学校	一本勝		一本勝	一本勝		6 3
	神元	片田	津山	高井	山ノ井	

決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	鎌田	湯浅	松本	曾根	村井	
					一本勝	① ①
那賀川B&G 剣道教室 わかあゆ会		一本勝				① ①
	星野	伊勢	中野	那佐	谷口	

決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
那賀川中学校	長地	横山	河田	中野	横山建	
				一本勝		① ①
阿南第一中学校	一本勝	一本勝			一本勝	③ ③
	賀上	近藤	細川	坂本	島田	

決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
相生中学校	松本	森	岩沙	福永	新田	
	一本勝					⑤ ③
阿南第一中学校						④ ①
	神元	片田	津山	高井	山ノ井	

阿南少年教室が団体V 大野大会



◆第24回大野剣道大会
(2月18日・大野小学校
体育館)

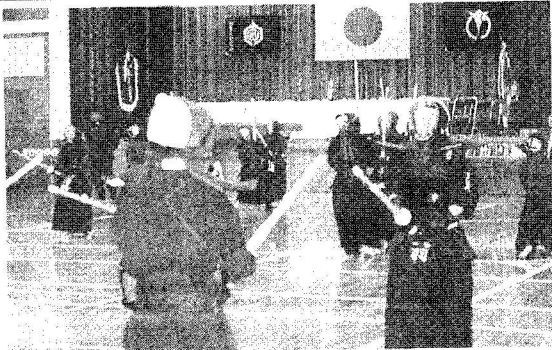
【団体】①阿南少年剣

- 出浜太(B&G) ③西堂
- 裕秋(鳴門)▽同4年①
- 櫻木鉄也(坂野) ②松本
- 瀧太郎(和田島) ③實上
- 由里奈(鎌武館) ③湯浅
- 彰義(至誠館)▽同5年
- ①稲岡哲平(香英館) ②
- 島田晃郎(大野) ③曾根
- 恵(至誠館) ③松不明真
- (至誠館)▽同6年①安
- 部聡志(阿南) ②鶴岡由
- 貴(和田島) ③原中綾女
- (光武館) ③櫻木雄一郎
- (坂野)

鳴島少年教室 団体の優勝

◆第7回藤花旗争奪少年剣道大会(2月25日・石井中学校屋内運動場)

【団体】①鳴島少年剣道教室②高浦少年剣道



小学生剣士が個人、団体の優勝を争った大野剣道大会。阿南市の大野小体育館

③山川スポーツ少年
④徳島清風館

3月14日

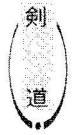
2月28日

- (基本の部) ①阿南宣孝
徳島清風館道場 ②原
田佳樹(徳島清風館道
場) ③山下景一(徳島清
風館道場)▽3年生①桑
原大樹(鳴島少年剣道教
室) ②原悠介(蔵本少年
剣道クラブ) ③岡田純平
(徳島清風館道場)▽4
年生①岩雲祥吾(鳴島少
年剣道教室) ②森田大介
(入田錬成会) ③人塚亮
太郎(上八万剣道倶楽
部)▽5年生①鈴木達也
(徳島清風館道場) ②新
居春菜(鳴島少年剣道教
室) ③鈴木紀博(加茂名
少年剣道教室)▽6年生
①若菜大樹(鳴島少年剣
道教室) ②森達裕(高浦
少年剣道クラブ) ③片山
尊志(鳴島少年剣道教

県西部大会

鳴島少年剣道教室V

小中学生370人 日ごろの成果披露



◆第26回県西部地区少年

剣道大会(1日・阿波中
学校体育館)
徳島市以西の各郡小
・中学生44チーム計370
人が参加。団体、個人戦で



練習の成果を出し合う少年剣士。阿波中學校体育館

日ごろの成果を披露した結
果、小中学校団体は鳴島少年
剣道教室、中学男子は市場
A、同女子は鳴島第一が最
大の活躍をした。阿波ライ
オンクラブ主催。

【団体】小学生の部①鳴島
少年剣道教室②高浦少年剣
道クラブ③阿波少年剣道教
室④高野少年剣道教室⑤中
学生男子の部①市場A②高
浦③鳴島第一▽同女子の部
①鳴島第二②吹③市場A
④蔵本智也⑤不亮⑥酒
袋奈風⑦梶原▽同5年生の
部①新居春菜②中山大地
③志生麻由④松浦一恵▽同
6年生の部①森本龍毅②酒
袋了③桑野千尋④脚谷美
沙▽中学生男子の部①美
陽浅貴浩②佐古麗太③藤本
博彰▽同1年生女子の部①
山田佳奈②山尾望③白井田
加理▽同2年生男子の部①
三木良平②白木健一郎③黒
下光▽同2年生女子の部①
近藤三葉子②中山麻衣③新
居良鏡

◆第6回徳島市スポーツ
少年剣道交流大会(12日
・徳島市立体育館)

【団体】①養武館A②蔵
本少年剣道クラブA③入田
錬成会

【個人】小学1・2年①
栗、小松校団体の鳴島少年
木下裕貴(入田錬成会)②
堀洋昌(加茂名少年剣道教
室)③川上晃(養武館)④
福水次郎(養武館)▽小学3
年①原悠介(蔵本少年剣
道教室)②曾我部航(上八万
剣道倶楽部)③増田壮志
(上八万剣道倶楽部)④山
西彩輝(蔵本少年剣道)⑤
▽小学4年①橋本健理(上
八万剣道倶楽部)②森田大
介(入田錬成会)③東上裕
矢(津田剣道教室)④原田
学人(上八万剣道倶楽部)
▽小学5・6年生①高松
直妻子(応神剣道スポーツ
クラブ)②木下紗央里(入田錬
成会)③堀田夏紀(蔵本少
年剣道教室)④宮内理恵(上
八万剣道倶楽部)▽小学5
・6年生男子①長谷直輝(津
田剣道教室)②松浦一真
(入田錬成会)③湯村裕尚
(蔵本少年剣道)④拙友
勝也(上八万剣道倶楽部)
▽中学生女子①井口あずか
(入田錬成会)②清水栞代
(養武館)③井田由美(入
田錬成会)④高尾真奈
坂東真由(入田錬成会)⑤
金岡拓也(蔵本少年剣道
教室)⑥岩田純一(津田剣道
教室)⑦佐藤一貴(入田錬
成会)

団体は相生勢が制す

小学 竜虎館 中学 相生中



熱戦を繰り広げる丹生谷地域の小、中学生選手。B&G海洋センター体育館

剣道

◆第22回丹生谷ライオンズ少年剣道大会(2月18日・竜敷町B&G海洋センター体育館)
那智郡丹生谷地域の各町村から小学校の部に6チーム73人、中学校の部に5チーム25人が出場。学年別での団体、個人で戦い、団体では小学校の部で竜虎館、中学校の部で相生中と、相生勢が優勝を飾った。

- 【個人】小学1・2年
 ①福井美咲(竜虎館) ②西村亮司(竜虎館) ③藤本健(竜虎館) ④同3年 ⑤藤本健(竜虎館) ⑥久保真実(竹友館) ⑦同4年 ⑧福田淳史(竹友館) ⑨西田奈火(竜虎館) ⑩同5年 ⑪元木龍太(竜虎館) ⑫西田義太(竜虎館) ⑬延清正博(振武館) ⑭同6年 ⑮福永竜(竜虎館) ⑯松本和起(延野小) ⑰同1年 ⑱新田裕(相生) ⑲岩沙佑樹(相生) ⑳森友志(相生) ㉑同2年 ㉒株田巧(平谷) ㉓福永寛久(相生) ㉔川了(相生)

3月7日

富岡西、2敗し落選

女子 富岡東も決勝T逃す

剣道

剣道の第10回全国高校選抜大会は、十七日、男女各48校が参加して愛知県春日井市総合体育館で開幕。16組に分かれての予選リーグを行い、各校が2試合ずつ戦った。男子下組に入った富岡西は高志野(千葉)、酒田西(山形)に敗れ、敗者復活戦で高朋(富山)に快勝したものの、強豪・修徳(東京)に惜敗し、1勝1敗で決勝トーナメント進出を逃した。

富岡西	高志野	酒田西	高朋	修徳
富岡東	高朋	修徳	富岡西	高志野
富岡東	高志野	酒田西	高朋	修徳
富岡西	高志野	酒田西	高朋	修徳

3月28日

富岡西は落選。富岡東は落選。富岡西は予選リーグ1組(女子)予選リーグ1組(男子)予選リーグ2組(女子)予選リーグ2組(男子)に所属する。富岡西は予選リーグ2組(女子)予選リーグ2組(男子)に所属する。富岡東は予選リーグ1組(女子)予選リーグ1組(男子)に所属する。富岡西は予選リーグ2組(女子)予選リーグ2組(男子)に所属する。富岡東は予選リーグ1組(女子)予選リーグ1組(男子)に所属する。



中高生が熱戦を展開した山家旗県剣道大会=B&G 鷲敷海洋センター

◆第26回山家旗県剣道大会(4月29日・B&G 鷲敷海洋センター体育館)
県内各地から中学校の部に30校175人、高校男子に16校128人、高校女子に9校58人が参加。勝ち抜き方式の団体戦で、予選リーグと決勝トーナメント(高校女子は決勝リーグ)で熱戦を繰り広げ、中学校の部は徳島文理が優勝、高校男子は富岡東Bがそれぞれ栄冠に輝いた。

山家旗県大会

徳島文理(中学)の部に栄冠

高校男子 阿南工業 A
女子は富岡東 B

剣道

- 【中学校】1回戦 羽浦2-0石井、鴨島第一2-0那智川▽2回戦 坂野1(代表戦)勝ち1羽浦、相生3-1市場、阿南第一3-0阿波、文理2-1鴨島第一▽準決勝 相生0(代表戦)勝ち 0坂野、文理2-1阿南第一▽3位決定戦 阿南第一2-0坂野▽決勝 文理2(代表戦)勝ち 2相生
- 【高校】男子1回戦 富岡東2-1川島B、川島A1-0那智▽準決勝 富岡西A2-1富岡東、阿南工業A5-0川島A▽3位決定戦 富岡東4-3川島A▽決勝 阿南工業A4-0富岡西
- ▽女子決勝リーグ①富岡東B②富岡東A③富岡西A

5月9日

徳島2位

西国四県剣道 剣道の第五十二回西国四県大会が十三日、香川県立高松武道館であり、各県十人(女子五人、十六歳の年代別男子十一人)の団体リーグ戦で争った。この結果、連覇を目指した徳島県(女子日坪共、山内、手塚、男子日佐藤、山名、北村、玉田、白木、白木、富浦、福多、志津、北條、福井)は、愛媛県に5-1で勝ったものの、香川、高知両県に敗れ、1勝2敗で2位に終わった。

▽リーグ戦 徳島5-1愛媛、香川5-0高知、香川4-1徳島、愛媛3(代表勝ち)3高知、高知6-14徳島、香川6-1愛媛

▽順位①香川勝②徳島1勝2敗③高知1勝2敗④愛媛1勝2敗⑤1-4位は勝者数による。

5月14日

- 富岡東B②富岡東A③富岡西A
- 【個人賞(5人以上勝ち抜き)】5人抜きII神元駿一、元木高志(以上阿南工業) 木下力哉、美馬真奈美、岸香織(以上富岡東高) 森貴雄(富岡西高)▽8人抜きII前川剛志(阿南工業) 星野宣哉(富岡西高)▽9人抜きII昇葉子(富岡東高)▽11人抜きII六條勝仁(川島高)

川口君(大森)▽

剣道

中学校男子

- ◆13年度鳴門市剣道錬成大会 追悼少年剣道錬成大会(12日・鳴門市光武館道場)
- 【小学校低学年の部】①小倉大典(光武館)②川邊裕樹(同)③宮浦昌平(同)④樽井秀昇(同)
- 【小学校高学年の部】①山本敬太(光武館)②平野千尋(同)③藤本健登(同)④白髪陽介(運動公園剣道教室)
- 【中学校女子の部】①山下純子(鳴門第一中)②齋藤梓(大森中)③原田彩子(同)④筒井美帆(同)
- 【中学校男子の部】①川口雄大(大森中)②佐藤宏亮(鳴門第一中)③山本義裕(同)④山本義征(同)

5月23日

富岡東惜敗 女子 連覇逃す

剣道

【男子部】予選1ヶ月前
高知3勝富岡東2勝1敗高松山
北1分1勝高知1分1勝高松山
北1分1勝高知1分1勝高松山
北1分1勝高知1分1勝高松山



富岡東対土佐塾 1本勝ちをしたたけの瀬口(富岡東) 土佐大町土佐
西南大規模公園体育館

▽決勝 高知3山岡
1敗富岡東1勝1分け1敗高知
小津3敗山岡2、3位は勝者数によ
る▽組別決勝富岡東3勝高松山
2勝1敗高知2勝1敗高松山
1敗3敗山岡1勝1分け1敗高松山
1敗3敗山岡1勝1分け1敗高松山
1敗3敗山岡1勝1分け1敗高松山
1敗3敗山岡1勝1分け1敗高松山

▽決勝
土佐塾 1本勝
本教勝 富岡東
山岡 1本勝
山岡 1本勝
小谷 1本勝
秋山 1本勝
土佐は初優勝

6月18日

富田(警察支部)初の栄冠

女子 坪井(河内支部)は2年連続

全日本剣道選手権の予選
9月2日、名古屋市中区
に開催された第10回選手権
を兼ねた第10回選手権
第4回女子選手権は40
日、観門武道館に男子40
人、女子15人が出場して行
われた。結果は富田(警
察支部)が初優勝。決勝
は富田(警察支部)と河内
(河内支部)が2年連続3
度目の優勝を飾った。優勝
坪井は地力の差をみせ決

7月2日



全日本剣道選手権への出場を決めた男子の富田
(警察支部)と女子の坪井(河内支部) 観門
武道館

▽決勝
富田(警察支部) 30歳の成長
は、うれしそうに汗をぬ
ぐった。
2回戦で先輩の吉田(警
察支部)を破ると、決勝で
は小松島時代の恩師・福
多(徳島支部)と対決
「挑戦者つもりで思い切
っていった」と相手打ち
込んでいき、突きを突いて
鮮やかな突きを奪った。福
多は「数えど対戦で来た
ことはあるが、全日本
選手権にもこれは応援に
行きたかった」と喜びも満
ちだった。
前にも「ここに迷い
ない」と決意を述べた。
全日本選手権には、まだ白
旗を立てる段階はない。何
より、まず精神的に前
出る剣道ができるようにした

県議の遠藤さん
6年ぶり日本一
高齢者武道大会剣道の部



全日本高齢者武道大会で優勝した遠藤さん。阿南市下人野町の自宅

徳島県剣道連盟会長で、74歳の部で優勝した。県議の遠藤一夫さん(左)は、全国各地からトップクラスの選手が集まり、高齢者の大会として最も権威ある大会とされている。遠藤さんは毎年出場していて、今年成を行い、社会に奉仕したいと話している。遠藤さんが本格的に剣道始めたのは二十八歳の時。その後、阿南市内各地に剣道教室を開き、剣道の普及に努めてきた。生涯現役の遠藤さんは「今後も剣道を通じて、子供たちの健全育成を行い、社会に奉仕したい」と話している。

7月12日

剣道 昇 葉子

(富岡東)



富岡東 昇

インターハイの期待の星
②
一番で勝負強さ

昨年の富岡東では、少年女子の部で先鋒を務めた。5位入賞に貢献した。インターハイを兼ねて、県体の例年では連覇を達成した。県内では敵なしといわれた。しかし、全国大会では、四回戦での敗退が続き、今年も、一回の定期練習に加え、別の日も練習するなど例年以上の練習量と意気込みで臨んだ。

富岡東では、インターハイの期待の星として、県内では敵なしといわれた。しかし、全国大会では、四回戦での敗退が続き、今年も、一回の定期練習に加え、別の日も練習するなど例年以上の練習量と意気込みで臨んだ。

主力としてチームを引っ張る昇

7月25日

県高校総体写真コンクール

21世紀最初の高校生のスポーツの祭典・県高校総体が6月2日から6日まで繰り広げられた。その青春の躍動と感動の瞬間を高校生が目でとらえた「第28回県高等学校総合体育大会写真コンクール」(県高校体育連盟・県

上位入賞 8点紹介

高校文化連盟主催、徳島新聞社後援)の入賞作品18点が、このほど決まった。応募数212点の中から選ばれただけに、どの作品も若々しい活力に満ちあふれている。最優秀、特選、準特選の8作品を紹介する。

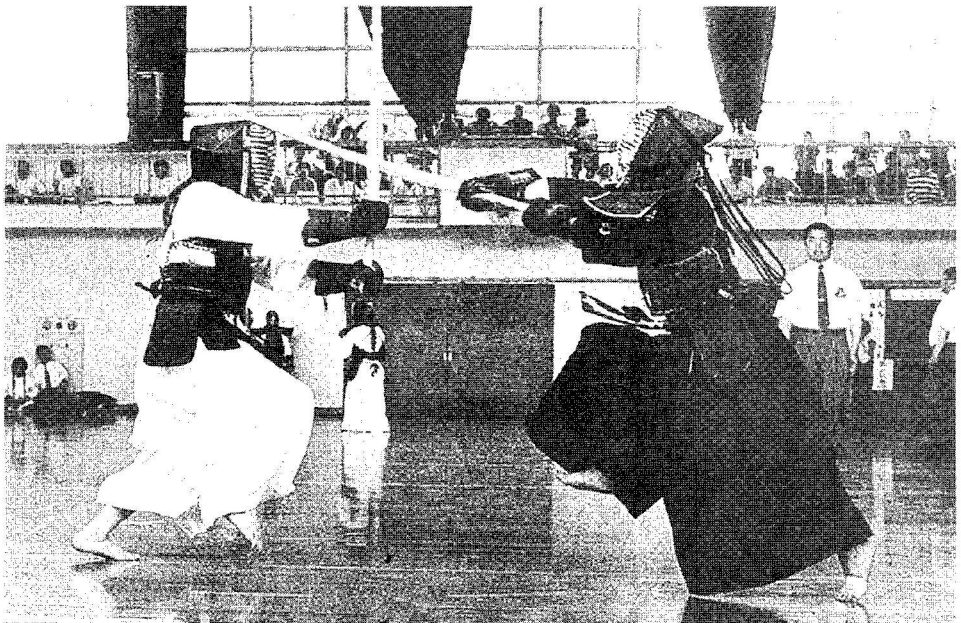
青春の躍動 切り取る

7月27日

特選

「メノー本」

徳島東工3年 河野 能允



【男子】団体予選リーグのフロ

剣道

男子

富岡西、1勝1敗
予選突破ならず

富岡西 3-0 大石	徳島 3-0 高松	横手 3-0 宇野	的場 3-0 高松	榎福 3-0 佐藤	電野 3-0 藤
東 4-0 富岡西	佐藤 3-0 横手	渡辺 3-0 横手	山本 3-0 的場	嘉山 3-0 榎福	山本 3-0 星野

富岡西は落選。
【女子】個人予選

神那麻 早築子	大分 徳島	三車 富岡東	大坂 早織
---------	-------	--------	-------

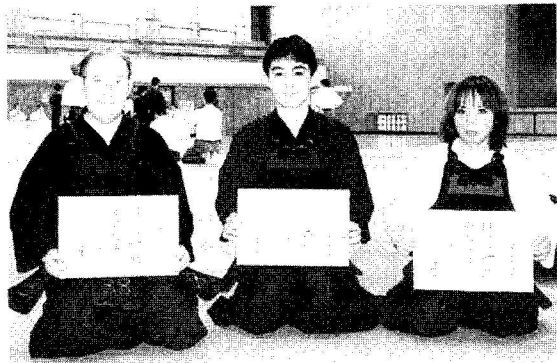
8月4日

県内で剣道学ぶマルチネスさん親子

1・2級、仲良く合格

猛練習実る「来年も挑戦」

夏休みの休暇を利用し、徳島市内の妻の実家に滞在して剣道を学んでいるスペイン人の親子三



合格証書を手し、大喜びのマルチネスさん親子。徳島市武部道館

人が二十六日、鳴門市武部バス停地方に住むホセ・イクナシオ・マルチネス・テ・アルブロさんが合格した。同国北東(画)ピトリア州立美術

大学を卒業し、妻のツネコ

・ホンゲ・マルチネスさん正副大教授、日本名

・本由(子)と長男のア

レハンドロ・ピロヒト君

の親子が、昨年の二

級、二級に達していたの合

格。親子は二猛練習の成

果が実った。来年は一つ

上の初段を目指したい

と喜んでいる。

三人が初めて竹刀をに

ぎったのは、一年前。ツネ

さんの妻、徳島市大

道二に所属した際、以

前から剣道に興味を持っ

ていたホセさんが二人を

誘い、近所の新道館道場

「竹原英太郎館下」の門

をたいた。翌年にはホ

今回はホセさん夫妻が

一級、アレハンドロ君は

二級を受験。七月末に来

県し、連日約三時間の特

訓を重ねてきた。

試験は二人が実戦形式

で各三十秒間剣を交え、

基本的な打ち方、構え、

声の出し方などが審査さ

れた。三人は会場の雰囲気

に緊張気味だったもの

の、見事合格を果たし

た。

夏が過ぎて三日前から休

調を崩していたというア

レハンドロ君は一本番で

最高の方が出せた」と笑

顔。目標を果たした一家

は自信を胸に、三十一日

8月29日

村井君6年 福永君5年 湯浅君4年 栄冠

剣道

◆第30回記念大会県少年剣道練成大会(12日・鴨門県民体育館)
 ① 小龍虎館 ② 山口拓也 ③ 鴨島少年 ④ 庄地高康太 ⑤ 加茂名少 ⑥ 上田未来 ⑦ 西衛、和田 ⑧ 長谷啓太 ⑨ 白鳥剣道スポーツ ⑩ 櫻木鉄也 ⑪ 坂野少 ⑫ 堀田 ⑬ 有衣加、藍 ⑭ 住剣道スポーツ ⑮ 松本真生徳 ⑯ 敢闘賞 ⑰ 鈴木智也(徳島全誠館) ⑱ 櫻井秀昇(鴨島清風館) ⑲ 樽井秀真(鴨島清風館) ⑳ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉑ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉒ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉓ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉔ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉕ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉖ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉗ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉘ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉙ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉚ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉛ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉜ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉝ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉞ 樽井秀真(鴨島清風館) ㉟ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊱ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊲ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊳ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊴ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊵ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊶ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊷ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊸ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊹ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊺ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊻ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊼ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊽ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊾ 樽井秀真(鴨島清風館) ㊿ 樽井秀真(鴨島清風館)



熱戦を繰り広げる豆剣士たち
 鴨門県民体育館

▽4年生①湯浅翔平(徳島全誠館)②西池直也(十河剣道スポーツ)③坂野少(堀田)④有衣加、藍(住剣道スポーツ)⑤松本真生徳(敢闘賞)⑥鈴木智也(徳島全誠館)⑦櫻井秀昇(鴨島清風館)⑧樽井秀真(鴨島清風館)⑨樽井秀真(鴨島清風館)⑩樽井秀真(鴨島清風館)⑪樽井秀真(鴨島清風館)⑫樽井秀真(鴨島清風館)⑬樽井秀真(鴨島清風館)⑭樽井秀真(鴨島清風館)⑮樽井秀真(鴨島清風館)⑯樽井秀真(鴨島清風館)⑰樽井秀真(鴨島清風館)⑱樽井秀真(鴨島清風館)⑲樽井秀真(鴨島清風館)⑳樽井秀真(鴨島清風館)㉑樽井秀真(鴨島清風館)㉒樽井秀真(鴨島清風館)㉓樽井秀真(鴨島清風館)㉔樽井秀真(鴨島清風館)㉕樽井秀真(鴨島清風館)㉖樽井秀真(鴨島清風館)㉗樽井秀真(鴨島清風館)㉘樽井秀真(鴨島清風館)㉙樽井秀真(鴨島清風館)㉚樽井秀真(鴨島清風館)㉛樽井秀真(鴨島清風館)㉜樽井秀真(鴨島清風館)㉝樽井秀真(鴨島清風館)㉞樽井秀真(鴨島清風館)㉟樽井秀真(鴨島清風館)㊱樽井秀真(鴨島清風館)㊲樽井秀真(鴨島清風館)㊳樽井秀真(鴨島清風館)㊴樽井秀真(鴨島清風館)㊵樽井秀真(鴨島清風館)㊶樽井秀真(鴨島清風館)㊷樽井秀真(鴨島清風館)㊸樽井秀真(鴨島清風館)㊹樽井秀真(鴨島清風館)㊺樽井秀真(鴨島清風館)㊻樽井秀真(鴨島清風館)㊼樽井秀真(鴨島清風館)㊽樽井秀真(鴨島清風館)㊾樽井秀真(鴨島清風館)㊿樽井秀真(鴨島清風館)

堀口が初優勝

女子選手権
 日本選抜
 全日選抜
 全日選抜



決勝で有馬佳代(右)を攻める堀口恭子一名古屋市中村スポーツセンター

剣道の第40回全日本女子選手権は2日、名古屋市中村スポーツセンターで6連覇した。堀口は初めて決勝へ進み、有馬佳代四段(鹿原体大助手)と対戦。両者決

9月3日

手を欠き、延長戦へ入ったが、開始直後堀口が鮮やかに面を奪った。有馬の2位は3度目。3連覇を狙った朝比奈静香五段(警視庁)は3回戦で敗退した。

▽準決勝
 堀口① 有馬②
 有馬③ 堀口④
 堀口⑤ 有馬⑥
 有馬⑦ 堀口⑧
 堀口⑨ 有馬⑩

剣道

◆第47回県南剣道練成大会(8月5日・日和佐総合体育館)

【小学校】団体①那賀川B&G剣道教室②坂野少年剣道クラブ③徳島至誠館A
 【中学校】男子団体①羽浦中学校A②徳島文理中学校③阿南第一中学校
 ▽女子団体①那賀川中学校②坂野中学校③新野中学校

9月12日

9月19日

その他

◆第24回海部郡中学校防犯スポーツ大会8月24、25日・牟岐中学校

【剣道】団体男子①牟岐B②海南▽同女子①牟岐A②日和佐
 ▽個人男子①田中雄大(牟岐)②中川和樹(海南)③美馬憲太(牟岐) 岩本浩希(日和佐)▽同女子①福田沙也(牟岐)②山下亜也(日和佐)③高橋彩加、白木晴佳(牟岐)

四国管区柔・剣道
 県警が同時優勝
 二〇〇一年度の四国管区
 区内警察柔道・剣道大会
 (四国管区警察局長主催)
 が十一日、松山市内の愛

媛県武道館であり、徳島県警が団体戦柔道、剣道ともに優勝した。両種目での同時優勝は一九九一年以来十年ぶりの快挙。また、県警機動隊の島津宏基巡查長(モ)と都築正樹巡查長(キ)が柔道で、山名信行巡查長(ニ)が剣道で、それぞれ全勝賞を

9月12日

獲得した。成績は次の通り。
 【柔道】①徳島②香川③愛媛④高知【剣道】①徳島②愛媛③香川④高知



2連覇を果たした徳島至誠館チーム
 二善通寺市民体育館

剣道

徳島至誠館(高学)2連覇

善通寺近県少年大会

第20回善通寺近県少年剣道大会は8月26日、香川県善通寺市民体育館で

開かれた。四国4県と兵庫、岡山両県から56チームが参加。高学年の部で、徳島至誠館(羽ノ浦町)と鎌田憲賢、湯浅彰義、松本明真、曾根恵、村井僚二が昨年に続いて優勝し2連覇を果たした。
 20チームによる予選トーナメントでは、準決勝で強豪の福田道場(岡山)、決勝で愛媛武揚会(愛媛)を破り決勝リーグに進出。予選を勝ち抜いた3チームによる決勝リーグでは、朝日剣道スポーツ(岡山)を4-0、十河剣道スポーツ(香川)を本教勝ちで破って2勝し、栄冠を手にした。

9月19日

中学団体男子羽浦、女子阿南第一

剣道

◆徳島県山ライオンズクラブ第31回小中学生剣道大会(8日・徳島市立体育館)

団体は中学校男子が羽浦、同女子は阿南第一がそれぞれ頂点に立った。

【団体】小学校高学年

- ①徳島至誠館②相生小龍虎館③小松高少剣クラブ、入田練成会▽同低学年①徳島至誠館②鳴門市光武館③鳴門少年剣道教室、上八万剣道倶楽部▽中学校男子①羽浦②加茂名③阿南第一、阿南▽同女子①阿南第一②那賀川③石井、相生
- 【個人】小学校高学年男子①鎌田憲資(至誠館)②山本敬太(光武館)③鈴木紀博(加茂名少年剣道)、岩佐勇希(練武館少年剣道)▽同女子①中野由貴(那賀川わかあゆ会)②平野千尋(光武館)③横山依利加(那賀川少年剣道)、曾根恵(至誠館)▽小学校低学年男子①湯浅翔平(至誠館)②曾我部航(上八万剣道)③藤本稜(延野少年剣道)、天野優貴(誠武館)▽同女子①榎木舞(坂野少年剣道)②西山史織(小松高少剣)③白石けい子(誠武館)、山本奈々恵(徳島少年剣道)▽中学校男子①坂東潤(入田)②石井孝二(小松高)③山本義征(鳴門第一)湯浅貴浩(市場)▽同女子①河田紋(那賀川)②榎本彩里(相生)③井口あすか(入田)村瀬聡美(坂野)

10月31日

11月4日

岩佐が初制覇

◆全日本剣道選手権 第4回全日本剣道選手権は3日、東京・日武道館で64選手が参加し、岩佐勇希が、決勝で金子剛に引き小手を決め、5回戦を五段(高城、出陣)を下し、初優勝を果たした。第4回大会で3位となった岩佐は苦戦が続いたが、前に出る姿勢と鋭い小手がきえて決勝進出。苦しい足からの攻撃で勝ち上がった。2度目の出場で頂点に立った。連覇を狙った栗本勇六段(北海道警)、過去最多の優勝6度ある高橋正裕七段(神奈川警察)は、いずれも2回戦で敗れた。

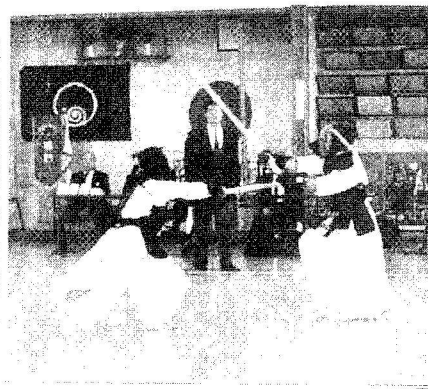
中学男子 米澤君(鳴門)栄冠 女子は原田さん(大麻)

剣道

◆13年度鳴門市民体育祭剣道競技(10月13日・鳴門市光武館道場) 小中学生約80人が参加。中学校男子は米澤弘朗君(鳴門)、同女子は原田彩子さん(大麻)が優勝した。

【小学校】低学年①川邊祐樹(光武館)②平野哲司(光武館)③齋田悟志(光武館)④宮浦昌平(光武館)▽高学年①山本敬太(光武館)②樫健太(運動公園)③藤本健登(光武館)④平野千尋(光武館)

【中学校】男子①米澤弘朗(鳴門)②米田正人(鳴門)③栗橋正幸(鳴門)④梅本実命(鳴門)▽女子①原田彩子(大麻)



10月31日の練習の成果を競う少年剣士たち 鳴門市民体育祭の光武館道場

光武館 白髪陽介(運動公園) 松本真由美(大麻) 練成会 豊島出美(鳴門) 一 森博樹、折目拓紀(以上大麻)

大麻 ②山下純子(鳴門) ③大黒未来美(大麻) 香川ゆかり(大麻) ④努力賞 小出素、笠井大地、西川友久(以上)

徳島県剣道連盟事務分掌表

平成十四年四月一日現在



編集後記

この「徳島の剣道」の編集に携わるようになってから、いろいろな雑誌や本のレイアウトや見出し等々の編集の具合が、気にかかります。誤字脱字などあれば、担当編集者の怠慢であり、他の人から、誤字脱字を指摘された時の青ざめた顔が目には浮かびます。かく言う私も、編集作業が終わり、印刷された「徳島の剣道」に誤字脱字や一年前の資料が誤って添付されたことが判った時の失望感、全身の力が抜けるような思いです。しかし、巻頭言にありますように、「腹」のできた、「腰」のすわった対応がもつと事前のできる自分にならなくてはと思います。編集作業は「段取りする力」です。そこには、剣道でいう「先」の取りが必要で、将に、生活則剣道であるように思います。

この「徳島の剣道」が恋人からのラブレターや恩師からの激励文を読むような皆様に大事に扱われる存在に成長していきますよう更なる御指導・御鞭撻をお願い申し上げます。

『徳島の剣道』第十八号

編集委員会

編集顧問

堀	木	中	福	高	美	武
江	原	村	多	尾	馬	岡
幸	資	稔	雅	和	義	美
夫	裕	裕	英	茂	智	智

『徳島の剣道』第十八号

平成14年6月1日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤一美

☎ 772-0853 徳島市中徳島町2丁目96

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360